

滝沢村文化財調査報告書第2集

湯舟沢遺跡

(第1分冊)

昭和61年9月

滝沢村教育委員会
協 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター
トーマン住宅開発株式会社

滝沢村文化財調査報告書第2集

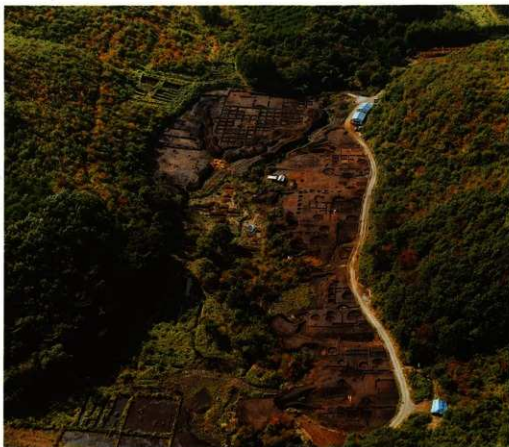
湯舟沢遺跡

(第1分冊)

昭和61年9月

滝沢村教育委員会
財 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター
トーマン住宅開発株式会社

題 字
滝沢村教育長 高 濱 善太郎



湯舟沢遺跡航空写真（東方上空より撮影）



航空写真
北西上空より撮影



航空写真
真上より撮影



足型付土製品（縄文時代後期）



弥生式土器
(3区・VII Ia 竪穴住居址出土)

発刊のことば



滝沢村には、1万年以上も昔の旧石器時代から各時代にわたっての多くの遺跡があることは周知のとおりであります。これら遺跡は、豊かな自然と、長い伝統の中で培われ育まれて来た大いなる遺産でもあります。このような貴重な先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えることは、現代に生きる私達の大きな責務と考えます。

近年、当村は県都盛岡市に隣接する地理的要因から、急激な都市化現象を迎え、文化財の保護と開発の調和が村政のなかで重要な位置を占めるに至っております。先人達があらゆる苦難を克服しつつ、營々と築き上げて来た歴史・文化を最大限に生かしてこそ「明るく豊かで住みよい村」づくりを達成することが可能となり、新しい未来の創造発展の基盤となるものと信ずるものです。

この調査に寄せられました皆様の御厚意と御協力に対し心から感謝申し上げますとともに、本書が広く文化財の資料として活用されることを願うものであります。

昭和61年 9月

滝沢村長 青森文雅

序

滝沢村には先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しています。とくに埋蔵文化財包蔵地は、昭和60年度の遺跡台帳によれば100カ所を越える数となっています。近年、当村は、本県中央部に位置し県都盛岡市に隣接する地理的要因から急激な開発と都市化の進行が著しく、現代社会の必然的な要請であり、欠くことのできない開発事業と文化財の保護・保存との均衡が、直面する重要な課題となっています。

郷土の歴史を語る文化遺産を後世に伝え、将来における文化の向上の基礎としてその活用をはかることは、現代社会に生きる私たちの重要な責務であり、それらが止むなく失われるような場合であっても出来得る限りの方法・手段を講じて対処して行かなければならないものと考えます。

本報告書は、大規模宅地造成計画に伴う湯舟沢遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果本遺跡は、縄文時代早期から平安時代の各時代にわたる複合遺跡であることが判明いたしました。なかでも、幼児の足形付土製品(縄文時代後期)は全国でも五例目の発見であり、付近に広がる配石遺構とあいまって、当時の精神文化の解明にひとつの示唆を与えるものと思われれます。また、弥生時代の竪穴住居址群とその出土遺物は、従来不明な点が多かった本県の弥生時代の解明に寄与する画期的な発見であり、県内の稲作農耕起源を探る第一級の資料となっております。

最後に、本書が今後の文化財保護の資料として活用され、郷土の文化財保存と研究のために多少なりとも寄与でき得ることを願うものであります。

昭和61年 9月

滝沢村教育委員会

教育長 高濱善太郎

例 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡滝沢村大字滝沢第10地割宇湯舟沢地内に所在する湯舟沢（ゆぶねざわ）遺跡の大規模宅地開発工事に伴う緊急発掘調査の報告である。
2. 調査は、滝沢村教育委員会が主体となり、調査対象面積の半分を(財)岩手県埋蔵文化財センター(昭和60年4月1日財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに組織改正)に委託した。
3. 本遺跡の野外調査・整理作業について次の方々、機関から御指導、御助言を賜わった。記して感謝の意を表したい。(敬称略・順不同)

岩手県教育委員会事務局文化課、(財)岩手県埋蔵文化財センター、岩手県立博物館、一関市教育委員会、水沢市教育委員会、八戸市立博物館、伊藤信雄(東北大学名誉教授)、村越潔(弘前大学教授)、須藤隆(東北大学助教授)、菊地郁雄・相原康二(岩手県教育委員会事務局文化課)、佐々木勝(岩手県立埋蔵文化財センター)、嶋千秋・近藤宗光・名須川益男・国生尚・高橋興右衛門・工藤利幸((財)岩手県埋蔵文化財センター)、高橋信雄・小田野哲憲・熊谷常正(岩手県立博物館)、高田和徳(一戸町教育委員会)、八木光則・千田和文(盛岡市教育委員会)、中村良幸(大迫町教育委員会)、目黒吉明・鈴鹿良一(福島県文化センター)、鈴木重美(いわき市教育委員会)、櫻村友延((財)いわき市教育文化事業団)、加藤道雄・菊地淳一(宮城県文化財保護課)、小井川和夫・岡村道雄(東北歴史資料館)、佐藤信行(日本考古学協会会員)、木村鉄次郎(青森県立郷土館)、三浦圭介・北林八州晴・岡田康博・島山昇(青森県埋蔵文化財調査センター)、加藤和夫(ゼロ写真工房)

4. 本遺跡出土遺物・資料鑑定・分析について次の方々、機関から御教示又、執筆を賜わった。(敬称略・順不同)

○足形付土製品の鑑定・執筆

放送大学教授 平沢彌一郎

○楞底土器の鑑定・執筆

国分寺市文化財審議会委員 佐藤敏也

○弥生式土器(3区)執筆

岩手県立博物館 小田野哲憲

○足形付土製品執筆

岩手県立博物館 熊谷常正

○炭化材・自然木の鑑定・執筆

元興寺文化財研究所 松田隆嗣

○プラントオパール分析・執筆

岩手県立盛岡第四高等学校 佐瀬隆

○花粉分析・執筆

宮城県農業短期大学 日比野紘一郎

○放射性炭素年代測定

学習院大学教授 木越邦彦

- 火山灰の蛍光X線分析・執筆
奈良教育大学教授 三辻利一
- 土器の蛍光X線分析・顔料分析・執筆
岩手県立博物館 赤沼英男
- 石質鑑定
岩手県立種市高等学校 種市進
佐藤地質工学研究所 佐藤二郎
- 種子鑑定
東北農業試験場
- 放射性炭素年代測定
社団法人 日本アイソトープ協会
- 胎土分析
岩手県立盛岡南高等学校 照井一明
- 土壌分析
岩手県工業試験場
- 種子鑑定
林業試験場東北支場 柳谷新一

5. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1地形図、岩手県発行の国土基本図盛岡広域都市計画1万分の1、2千5百分の1を使用した。
6. 遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山・竹原編著「新版、標準土色帖」日本色研事業(株)を使用した。
7. 遺跡地内の基準点測量は、アジア航測(株)に移託し、平面直角座標第10系により、次のような結果が得られている。

基点-1	X = -24,560.00m、	Y = +22,960.00m、	H = 203.62m
基点-2	X = -24,640.00m、	Y = +23,120.00m、	H = 192.24m
基点-3	X = -24,640.00m、	Y = +23,200.00m、	H = 191.91m
基点-4	X = -24,640.00m、	Y = +23,320.00m、	H = 188.90m
基点-5	X = -24,720.00m、	Y = +23,080.00m、	H = 192.59m
基点-6	X = -24,760.00m、	Y = +23,120.00m、	H = 192.69m
基点-7	X = -24,720.00m、	Y = +23,320.00m、	H = 185.02m
基点-8	X = -24,720.00m、	Y = +23,360.00m、	H = 183.74m
基点-9	X = -24,880.00m、	Y = +23,560.00m、	H = 184.20m
基点-10	X = -24,880.00m、	Y = +23,600.00m、	H = 182.54m
基点-11	X = -25,000.00m、	Y = +23,520.00m、	H = 183.48m
基点-12	X = -25,040.00m、	Y = +23,520.00m、	H = 183.40m

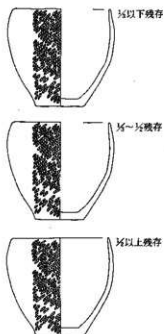
8. 遺物・写真・実測図等の調査に係る全資料は、滝沢村教育委員会において保管している。
9. 本遺跡の発掘調査では、中間報告として現地説明会資料や各種雑誌に概略を公表しているが、本報告書の記載事項と喰い違いがある場合は、本報告書を正しいものとする。
10. 本書に掲載している図の凡例は、次頁の通りである。

S…礫 P(又はP₀)…土器

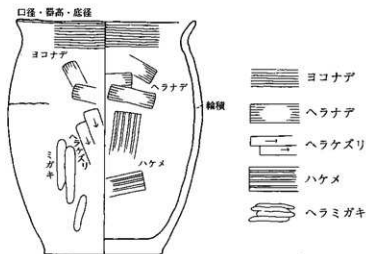
P₁・P₂…P_n…柱穴又は床面のビット



凡例1 使用アルファベット・スクリーン・トーン



凡例2 土器の残存程度



凡例3 調整技法・法量

総 目 次

(第1分冊)

発刊のことば	
序	
例言	
調査に至る経過と調査要項	21
調査の方法	24
村内の遺跡	33
地形・地質	35
2 区	39
3 区	97
4 区	503

(第2分冊)

5 区	25
6 区	275
7 区	439
8 区	475
9 区	705
10 N 区	727
10 S 区	763
鑑定・分析	807

2 区本文目次

I. 地形と地質	42	V D/ 集石遺構	57
1. 地形	42	4. ビット	59
2. 基本層序	42	V Dd ビット	59
II. 発見された遺構と遺物	43	V Ei ビット	59
1. 竪穴住居址	43	V Ea ビット 1・2	59
V Ei - 1 竪穴住居址	43	V Ee ビット	60
V Ei - 2 竪穴住居址	46	5. 焼土遺構・炉址	60
V Em 竪穴住居址	46	V Ea 焼土遺構	60
V Dp 竪穴住居址	49	V Em 石囲炉	60
VI Ea 竪穴住居址	52	6. 遺物包含層	61
2. 配石土壌	54	7. 遺構外出土遺物	62
V Em 配石土壌群	54	III. まとめ	74
3. 集石遺構	57	1. 遺構	74
V Dd 集石遺構	57	2. 遺物	75
V Ea 集石遺構	57		

2 区表目次

第 1 表 V Ei - 1 竪穴住居址柱穴計測値一 覧	43	第 5 表 VI Ea 竪穴住居址柱穴計測値一 覧	49
第 2 表 V Ei - 2 竪穴住居址柱穴計測値一 覧	46		54
第 3 表 V Em 竪穴住居址柱穴計測値一 覧	48	第 6 表 V Em 配石土壌群土壌規模一 覧	56
第 4 表 V Dp 竪穴住居址柱穴計測値一 覧		第 7 表 V Ea ビット規模一 覧	59
		第 8 表 石器観察表	66

2 区図版目次

第1図 遺構配置図……………41	第13図 ビット・焼土遺構……………59
第2図 2区基本層序……………42	第14図 V Em 石囲炉・出土遺物 ……61
第3図 V Ei - 1・V Ei - 2 竪穴住居址 ……………44	第15図 V Ef 遺物包含層 ……62
第4図 V Ei - 1 竪穴住居址出土遺物 ……45	第16図 遺構外出土遺物(土器)……………67
第5図 V Em 竪穴住居址 ……47	第17図 遺構外出土遺物(土器)……………68
第6図 V Em 竪穴住居址出土遺物 ……49	第18図 遺構外出土遺物(土器)……………69
第7図 V Dp 竪穴住居址……………50	第19図 包含層出土遺物(土器)……………70
第8図 V Dp 竪穴住居址出土遺物……………51	第20図 遺構外出土遺物(土器・石器)・包含 層出土遺物(土器)……………71
第9図 VI Ea 竪穴住居址・出土遺物 ……53	第21図 遺構外出土遺物(石器)・包含層出土 遺物(石器)……………72
第10図 V Em 配石土壌群 ……55	第22図 遺構外出土遺物(石器)・包含層出土 遺物(石器)……………73
第11図 ビット・集石遺構……………58	
第12図 V Ei ビット ……59	

2 区写真図版目次

写真図版1 2区航空写真……………79	……………89
写真図版2 全景・表土除去作業・深掘…80	写真図版12 V Dp 竪穴住居址出土遺物…90
写真図版3 V Ei - 1 竪穴住居址 ……81	写真図版13 1～3 VI Ea 竪穴住居址出土遺 物……………91
V Ei - 2 竪穴住居址 ……81	4～6 V Em 石囲炉出土遺物 ……………91
写真図版4 V Em 竪穴住居址 ……82	写真図版14 遺構外出土遺物(土器)……………92
V Dp 竪穴住居址……………82	写真図版15 遺構外出土遺物(土器)……………93
写真図版5 VI Ea 竪穴住居址……………83	写真図版16 遺構外出土遺物(土器)・包含層 出土遺物(土器)……………94
石囲炉・焼土……………83	写真図版17 遺構外出土遺物(土器)・包含層 出土遺物(土器)……………95
写真図版6 V Em 配石土壌群 ……84	写真図版18 遺構外出土遺物(石器)・包含層 出土遺物(石器)……………96
写真図版7 V Em 配石土壌群 ……85	
写真図版8 ビット・集石……………86	
写真図版9 V Ef 遺物包含層出土状況 ……87	
写真図版10 V Ei - 1 竪穴住居址出土遺物 ……………88	
写真図版11 V Em 竪穴住居址出土遺物	

3 区本文目次

I. 地形と地質	101	5. 配石遺構	271
1. 地形	101	6. 遺物包含層	274
2. 地質	101	7. 遺構外出土遺物	306
II. 発見された遺構と遺物	104	III. まとめ	342
1. 竪穴住居址	104	1. 遺構	342
2. 竪穴状遺構	252	2. 出土遺物	352
3. 炉址・焼土	253	3. 竪穴住居址について	384
4. ビット	263	湯舟沢遺跡3区の弥生式土器	391

3 区表目次

第1表 VII Ia 竪穴住居址ビット計測値一覧	104	一覽	149
第2表 VII Ia 竪穴住居址出土土器計測値一覧	108	第10表 VII Ja-2 竪穴住居址ビット計測値一覧	155
第3表 VII Ib 竪穴住居址ビット計測値一覧	115	第11表 VII Jc 竪穴住居址ビット計測値一覧	159
第4表 VII Ic 竪穴住居址ビット計測値一覧	120	第12表 VII Jc 竪穴住居址出土土器計測値一覧	160
第5表 VII If 竪穴住居址ビット計測値一覧	126	第13表 VII Je-2 竪穴住居址ビット計測値一覧	170
第6表 VII If 竪穴住居址出土土器計測値一覧	127	第14表 VII Jf-1 竪穴住居址ビット計測値一覧	172
第7表 VII Ij 竪穴住居址ビット計測値一覧	138	第15表 VII Jf-2 竪穴住居址ビット計測値一覧	182
第8表 VII Ij 竪穴住居址出土石器接合資料	146	第16表 VII Jg-2 竪穴住居址ビット計測値一覧	187
第9表 VII Ja-1 竪穴住居址ビット計測値		第17表 VII Ji 竪穴住居址ビット計測値一覧	195

第18表	VII Ji 竪穴住居址出土土器計測値一 覧	197	第36表	高坏形土器 時期別法量一覽	357
第19表	VII Jk - 1 竪穴住居址ビット計測値 一覽	205	第37表	壺形土器 形態・文様・法量一覽	361
第20表	VII Jk - 2 竪穴住居址ビット計測値 一覽	208	第38表	壺形土器 時期別形態・文様一覽	361
第21表	VII Jl 竪穴住居址ビット計測値一覽	213	第39表	壺形土器 時期別法量一覽	361
第22表	VII Jl 竪穴住居址出土土器計測値一 覧	215	第40表	浅鉢形土器 形態・文様・法量一覽	363
第23表	VII Jm 竪穴住居址ビット計測値一覽	223	第41表	浅鉢形土器 時期別形態・文様一覽	363
第24表	VII Jn - 2 竪穴住居址ビット計測値 一覽	231	第42表	浅鉢形土器 時期別法量一覽	363
第25表	VII Jn - 3 竪穴住居址ビット計測値 一覽	233	第43表	壺形土器 形態・文様・法量一覽	366
第26表	VII Jo 竪穴住居址ビット計測値一覽	233	第44表	壺形土器 時期別形態・文様一覽	367
第27表	VII Jp - 1 竪穴住居址ビット計測値 一覽	238	第45表	壺形土器 時期別法量一覽	367
第28表	VII Jp - 2 竪穴住居址ビット計測値 一覽	242	第46表	蓋形土器 形態・文様・法量一覽	369
第29表	VII Jp - 3 竪穴住居址ビット計測値 一覽	244	第47表	蓋形土器 時期別形態・文様一覽	369
第30表	VII Ki 竪穴住居址ビット計測値一覽	247	第48表	弥生時代竪穴住居址出土朱塗り土器 点数一覽	371
第31表	3区出土古銭計測値一覽	342	第49表	弥生時代竪穴住居址出土朱塗り土器 時期別点数一覽	372
第32表	縄文時代竪穴住居址一覽	344	第50表	弥生時代竪穴住居址出土石器器種別 点数一覽	376
第33表	弥生時代竪穴住居址一覽	351	第51表	弥生時代竪穴住居址出土石器器種別 法量一覽	377
第34表	高坏形土器 形態・文様・法量一覽	357	第52表	弥生時代竪穴住居址出土石器器種別 石質一覽	378
第35表	高坏形土器 時期別形態・文様一覽	357	第53表	3区出土土器一覽	380

3 区図版目次

第1図	3区遺構配置図	99	第29図	VII Ij 竪穴住居址出土遺物(3)石器接合資料	143
第2図	3区基本層序	103	第30図	VII Ja-1 竪穴住居址	147
第3図	VII Ia 竪穴住居址	105	第31図	VII Ja-1 竪穴住居址出土遺物(1)	151
第4図	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(1)	109	第32図	VII Ja-1 竪穴住居址出土遺物(2)	152
第5図	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(2)	110	第33図	VII Ja-1 竪穴住居址出土遺物(3)	153
第6図	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(3)	111	第34図	VII Ja-2 竪穴住居址	154
第7図	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(4)	112	第35図	VII Ja-2 竪穴住居址出土遺物	156
第8図	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(5)	113	第36図	VII Jc 竪穴住居址	157
第9図	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(6)	114	第37図	VII Jc 竪穴住居址出土遺物(1)	161
第10図	VII Ib 竪穴住居址	116	第38図	VII Jc 竪穴住居址出土遺物(2)	162
第11図	VII Ib 竪穴住居址出土遺物(1)	117	第39図	VII Jc 竪穴住居址出土遺物(3)	163
第12図	VII Ib 竪穴住居址出土遺物(2)	118	第40図	VII Jc 竪穴住居址出土遺物(4)	164
第13図	VII Ic 竪穴住居址	119	第41図	VII Jc 竪穴住居址出土遺物(5)	165
第14図	VII Ic 竪穴住居址出土遺物(1)	122	第42図	VII Jc 竪穴住居址出土遺物(6)	166
第15図	VII Ic 竪穴住居址出土遺物(2)	123	第43図	VII Je-1 竪穴住居址出土遺物	168
第16図	VII Ic 竪穴住居址出土遺物(3)	124	第44図	VII Je-2 竪穴住居址出土遺物	171
第17図	VII If 竪穴住居址	125	第45図	VII Je-1・2, VII Jf-1・2 竪穴住居址	173
第18図	VII If 竪穴住居址出土遺物(1)	130	第46図	VII Je-1・2, VII Jf-1・2 竪穴住居址	175
第19図	VII If 竪穴住居址出土遺物(2)	131	第47図	VII Jf-1 竪穴住居址出土遺物(1)	178
第20図	VII If 竪穴住居址出土遺物(3)	132	第48図	VII Jf-1 竪穴住居址出土遺物(2)	
第21図	VII If 竪穴住居址出土遺物(4)	133			
第22図	VII If 竪穴住居址出土遺物(5)	134			
第23図	VII If 竪穴住居址出土遺物(6)	135			
第24図	VII If 竪穴住居址出土遺物(7)	136			
第25図	VII If 竪穴住居址出土遺物(8)	137			
第26図	VII Ij 竪穴住居址	139			
第27図	VII Ij 竪穴住居址出土遺物(1)	141			
第28図	VII Ij 竪穴住居址出土遺物(2)	142			

.....179211
第49圖 VII Jf — 1 豎穴住居址出土遺物(3)	第71圖 VII Jk — 2 豎穴住居址出土遺物(3)
.....180212
第50圖 VII Jf — 2 豎穴住居址出土遺物(1)	第72圖 VII J/ 豎穴住居址.....214
.....183	第73圖 VII J/ 豎穴住居址出土遺物(1).....216
第51圖 VII Jf — 2 豎穴住居址出土遺物(2)	第74圖 VII J/ 豎穴住居址出土遺物(2).....217
.....184	第75圖 VII J/ 豎穴住居址出土遺物(3).....218
第52圖 VII Jg — 1 豎穴住居址.....185	第76圖 VII J/ 豎穴住居址出土遺物(4).....219
第53圖 VII Jg — 1 豎穴住居址出土遺物	第77圖 VII J/ 豎穴住居址出土遺物(5).....220
.....186	第78圖 VII J/ 豎穴住居址出土遺物(6).....221
第54圖 VII Jg — 2 豎穴住居址.....188	第79圖 VII J/ 豎穴住居址出土遺物(7).....222
第55圖 VII Jg — 2 豎穴住居址出土遺物	第80圖 VII Jm 豎穴住居址.....224
.....189	第81圖 VII Jm 豎穴住居址出土遺物.....225
第56圖 VII Jg — 3 豎穴住居址.....191	第82圖 VII Jn — 1 豎穴住居址.....227
第57圖 VII Jg — 3 豎穴住居址出土遺物	第83圖 VII Jn — 1 豎穴住居址出土遺物
.....192228
第58圖 VII Ji 豎穴住居址.....193	第84圖 VII Jn — 2 豎穴住居址.....229
第59圖 VII Ji 豎穴住居址出土遺物(1).....198	第85圖 VII Jn — 2 豎穴住居址出土遺物(1)
第60圖 VII Ji 豎穴住居址出土遺物(2).....199230
第61圖 VII Ji 豎穴住居址出土遺物(3).....200	第86圖 VII Jn — 2 豎穴住居址出土遺物(2)
第62圖 VII Ji 豎穴住居址出土遺物(4).....201231
第63圖 VII Ji 豎穴住居址出土遺物(5).....202	第87圖 VII Jn — 3 豎穴住居址.....232
第64圖 VII Ji 豎穴住居址出土遺物(6).....203	第88圖 VII Jo 豎穴住居址.....234
第65圖 VII Jk — 1 豎穴住居址.....204	第89圖 VII Jo 豎穴住居址出土遺物(1).....235
第66圖 VII Jk — 1 豎穴住居址出土遺物(1)	第90圖 VII Jo 豎穴住居址出土遺物(2).....236
.....206	第91圖 VII Jp — 1 豎穴住居址.....237
第67圖 VII Jk — 1 豎穴住居址出土遺物(2)	第92圖 VII Jp — 1 豎穴住居址出土遺物(1)
.....207239
第68圖 VII Jk — 2 豎穴住居址.....208	第93圖 VII Jp — 1 豎穴住居址出土遺物(2)
第69圖 VII Jk — 2 豎穴住居址出土遺物(1)240
.....210	第94圖 VII Jp — 2 豎穴住居址.....241
第70圖 VII Jk — 2 豎穴住居址出土遺物(2)	第95圖 VII Jp — 2 豎穴住居址出土遺物

.....	243	第120図	遺物包含層Kブロック出土遺物(2)	
第96図	VII Jp - 3 竪穴住居址	土器	288
第97図	VII Ki 竪穴住居址	第121図	遺物包含層Kブロック出土遺物(3)	
第98図	VII Ki 竪穴住居址出土遺物(1)	土器	289
第99図	VII Ki 竪穴住居址出土遺物(2)	第122図	遺物包含層Kブロック出土遺物(4)	
第100図	VII Ki 竪穴住居址出土遺物(3)	土器	290
第101図	VII Jh 竪穴状遺構	第123図	遺物包含層Kブロック出土遺物(5)	
第102図	炉址	土器	291
第103図	焼土遺構(1)	第124図	遺物包含層Kブロック出土遺物(6)	
第104図	焼土遺構(2)	土器	292
第105図	焼土遺構出土遺物	第125図	遺物包含層Kブロック出土遺物(7)	
第106図	ピット	土器	293
第107図	ピット出土遺物(1)	第126図	遺物包含層Kブロック出土遺物(8)	
第108図	ピット出土遺物(2)	土器	294
第109図	ピット出土遺物(3)	第127図	遺物包含層Kブロック出土遺物(9)	
第110図	ピット出土遺物(4)	土器	295
第111図	VII J/ 配石遺構・出土遺物	第128図	遺物包含層Kブロック出土遺物00	
第112図	遺物包含層位置と層序	土器	296
第113図	遺物包含層Jブロック出土遺物(1)	第129図	遺物包含層Kブロック出土遺物01	
土器	土器	297
第114図	遺物包含層Jブロック出土遺物(2)	第130図	遺物包含層Kブロック出土遺物02	
土器	土器	298
第115図	遺物包含層Jブロック出土遺物(3)	第131図	遺物包含層Kブロック出土遺物03	
土器	土器	299
第116図	遺物包含層Jブロック出土遺物(4)	第132図	遺物包含層Kブロック出土遺物04	
土器	土器	300
第117図	遺物包含層Jブロック出土遺物(5)	第133図	遺物包含層Kブロック出土遺物05	
石器	土器	301
第118図	遺物包含層Jブロック出土遺物(6)	第134図	遺物包含層Kブロック出土遺物06	
石器	土器	302
第119図	遺物包含層Kブロック出土遺物(1)	第135図	遺物包含層Kブロック出土遺物07	
土器	石器	303

第136図	遺物包含層Kブロック出土遺物⑩ 石器……………	304	第159図	遺物包含層遺構外出土遺物⑫土製 品……………	334
第137図	遺構外出土遺物(1)縄文土器……………	309	第160図	遺構外出土遺物⑬石器……………	338
第138図	遺構外出土遺物(2)縄文土器……………	310	第161図	遺構外出土遺物⑭石器……………	339
第139図	遺構外出土遺物(3)縄文土器……………	311	第162図	遺構外出土遺物⑮石器……………	340
第140図	遺構外出土遺物(4)縄文土器……………	312	第163図	遺構外出土遺物⑯石器……………	341
第141図	遺構外出土遺物(5)縄文土器……………	313	第164図	縄文時代竪穴住居址主軸方位……………	343
第142図	遺構外出土遺物(6)縄文土器……………	314	第165図	弥生時代竪穴住居址の規模……………	346
第143図	遺構外出土遺物(7)縄文土器……………	315	第166図	弥生時代竪穴住居址主軸方位……………	346
第144図	遺構外出土遺物(8)縄文土器……………	316	第167図	弥生時代炉址主軸方位……………	349
第145図	遺構外出土遺物(9)縄文土器……………	317	第168図	弥生時代竪穴住居址・炉址主軸方位 ……………	349
第146図	遺構外出土遺物⑰弥生土器……………	321	第169図	高環形土器分類基準……………	356
第147図	遺構外出土遺物⑱弥生土器……………	322	第170図	壺形土器分類基準……………	364
第148図	遺構外出土遺物⑲弥生土器……………	323	第171図	浅鉢形土器分類基準……………	362
第149図	遺構外出土遺物⑳弥生土器……………	324	第172図	甕形土器分類基準……………	365
第150図	遺構外出土遺物㉑弥生土器……………	325	第173図	蓋形土器分類基準……………	368
第151図	遺構外出土遺物㉒弥生土器……………	326	第174図	弥生時代竪穴住居址時期区分図 ……………	389
第152図	遺構外出土遺物㉓弥生土器……………	327	第175図	湯舟沢Ⅰ類土器……………	413
第153図	遺構外出土遺物㉔弥生土器……………	328	第176図	湯舟沢Ⅱ類土器……………	415
第154図	遺構外出土遺物㉕弥生土器……………	329	第177図	湯舟沢Ⅲ類土器……………	417
第155図	遺構外出土遺物㉖弥生土器……………	330	第178図	湯舟沢遺構外出土土器……………	419
第156図	後北式土器拓影図(遺構外出土) ……………	331			
第157図	遺構外出土遺物㉗土師器……………	333			
第158図	遺構外出土遺物㉘土師器・古銭 ……………	334			

3 区写真図版目次

写真図版 1	3区航空写真……………	425	写真図版 5	VII Ij 竪穴住居址……………	429
写真図版 2	VII Ia 竪穴住居址……………	426	写真図版 6	VII Ja - 1・2 竪穴住居址 ……………	430
写真図版 3	VII Ib・VII Ic 竪穴住居址……………	427	写真図版 7	VII Jc 竪穴住居址……………	431
写真図版 4	VII If 竪穴住居址……………	428			

写真図版 8	VII Je-1・2, VII Jf-1・2 竪穴住居址	……………432	写真図版 29	VII Ja-2 竪穴住居址出土遺物	……………453
写真図版 9	VII Je-1・2, VII Jf-1・2 竪穴住居址	……………433	写真図版 30	VII Jc 竪穴住居址出土遺物	……………454
写真図版 10	VII Jg-1・2・3 竪穴住居址	……………434	写真図版 31	VII Je-1 竪穴住居址・VII Je-2 竪穴住居址出土遺物	……………455
写真図版 11	VII Ji 竪穴住居址	……………435	写真図版 2	VII Jf-1 竪穴住居址出土遺物	……………456
写真図版 12	VII Jk-1 竪穴住居址	……………436	写真図版 33	VII Jf-2 竪穴住居址・VII Jg-1 竪穴住居址出土遺物	……………457
写真図版 13	VII Jk-2, VII Jl, VII Jo 竪穴住居址	……………437	写真図版 34	VII Jg-2 竪穴住居址・VII Jg-3 竪穴住居址出土遺物	……………458
写真図版 14	VII Jm 竪穴住居址	……………438	写真図版 35	VII Ji 竪穴住居址出土遺物(1)	……………459
写真図版 15	VII Jn-1・2・3 竪穴住居址	……………439	写真図版 36	VII Ji 竪穴住居址出土遺物(2)	……………460
写真図版 16	VII Jp-1・2・3 竪穴住居址	……………440	写真図版 37	VII Jk-1 竪穴住居址出土遺物	……………461
写真図版 17	VII Ki 竪穴住居址	……………441	写真図版 38	VII Jk-2 竪穴住居址出土遺物	……………462
写真図版 18	配石遺構・炉址	……………442	写真図版 39	VII Jl 竪穴住居址出土遺物(1)	……………463
写真図版 19	ピット	……………443	写真図版 40	VII Jl 竪穴住居址出土遺物(2)	……………464
写真図版 20	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(1)	……………444	写真図版 41	VII Jl 竪穴住居址出土遺物(3)	……………465
写真図版 21	VII Ia 竪穴住居址出土遺物(2)	……………445	写真図版 42	VII Jm 竪穴住居址出土遺物	……………466
写真図版 22	VII Ib 竪穴住居址出土遺物	……………446	写真図版 43	VII Jn-1 竪穴住居址・VII Jn-2 竪穴住居址出土遺物	……………467
写真図版 23	VII Ic 竪穴住居址出土遺物	……………447	写真図版 44	VII Jo 竪穴住居址出土遺物	……………468
写真図版 24	VII If 竪穴住居址出土遺物(1)	……………448			
写真図版 25	VII If 竪穴住居址出土遺物(2)	……………449			
写真図版 26	VII If 竪穴住居址出土遺物(3)	……………450			
写真図版 27	VII Ij 竪穴住居址出土遺物	……………451			
写真図版 28	VII Ja-1 竪穴住居址出土遺物	……………452			

4 区本文目次

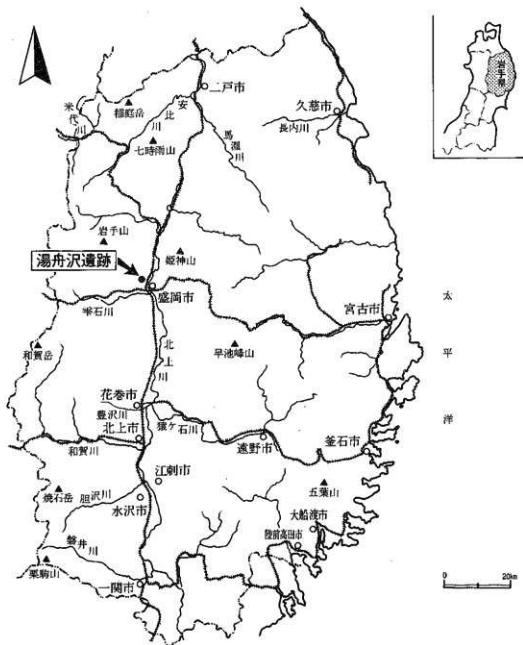
I 地形と地質	506
1. 地形概観	506
2. 基本層序	506
II 検出された遺構と遺物	507
1. 遺構	507
2. 遺物	507
III まとめ	511

4 区図版目次

第1図 4区グリッド配置図	505
第2図 4区基本層序	506
第3図 4区出土遺物(1)	508
第4図 4区出土遺物(2)	509
第5図 4区出土遺物(3)	510

4 区写真図版目次

写真図版1 航空写真・基本層序・調査風景	515
写真図版2 4区出土遺物(1)	516
写真図版3 4区出土遺物(2)	517



岩手県全体図

調査に至る経過と調査要項

調査に至る経過

湯舟沢遺跡埋蔵文化財発掘調査事業は、昭和49年にトーメン住宅開発株式会社より発表された当該地区の46万5千㎡に達する大規模宅地開発構想に端を発する。開発構想を受けた岩手県教育委員会事務局文化課は、昭和50・51年にわたり分布調査・試掘調査を実施した。その結果、縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代の約10万㎡に及ぶ広大な遺跡群が確認されたことから、岩手県教育委員会事務局文化課・滝沢村教育委員会・トーメン住宅開発株式会社の三者間で協議が重ねられるところとなった。昭和56年開発者の正式な申請により、文化財保護法第57条に基づき、委託を受けた滝沢村教育委員会が緊急発掘事業として開始することになり、調査対象面積5万5千9百㎡の半分を(財)岩手県埋蔵文化財センターに委託し、昭和57・58年にわたり、調査を実施したものである。

調査要項

1. 調査目的

大規模宅地開発に伴い、消滅する遺跡を工事に先立ち発掘調査を実施して、記録保存をはかると共に、地域社会の埋蔵文化財の活用に資する。

2. 遺跡の所在地

岩手県岩手郡滝沢村大字滝沢第10地割字湯舟沢218-2、266、268-1、268-2、268-6、268-8、269-3、321-3、324-5、325-1、325-2、325-3、325-4、325-5、325-6、325-7、326-1、326-2、326-2-イ、326-3、326-3-イ、326-4、326-5、326-5-イ、327-7、328-34、460-5、460-6、464-3、466-1、468-3、484-2、486-2、487-4、488-2、489-2、491-2、492-2、494-2、622

3. 調査面積

55,900㎡

4. 調査依頼者

トーメン住宅開発株式会社

5. 調査主体

滝沢村教育委員会社会教育課

6. 調査委託

(財)岩手県埋蔵文化財センター

7. 調査協力機関

岩手県教育委員会事務局文化課

8. 調査員

○滝沢村教育委員会

桐生正一・桜井芳彦・高橋裕子

○(財)岩手県埋蔵文化財センター

村上達夫・菊池利和・田鎖寿夫・種市進・佐々木清文・朝野孝二・高橋義介

9. 調査期間

○滝沢村教育委員会

野外 昭和57年4月26日～11月10日

昭和58年4月18日～11月18日

室内 昭和57年11月15日～昭和58年3月31日

昭和58年11月18日～昭和61年6月30日

○(財)岩手県埋蔵文化財センター

野外 昭和57年5月6日～10月30日

昭和58年4月11日～10月28日

室内 昭和57年11月1日～昭和58年3月31日

昭和58年10月29日～昭和59年3月31日

昭和59年7月2日～昭和60年1月31日

10. 調査参加者 (順不同)

昭和57年度野外調査

井上正治、武田勝信、井上一造、三上善三郎、佐藤一郎、太野千太郎、井上栄松、井上勝己、管原金治郎、田中安三郎、加藤藤五郎、菊田ミイ、小島勝子、佐藤ヨシ、木村イツ、駿河リエ、三上ミキ、菅原小萩、高橋サト、井上エツ、井上テツ子、角掛ツネ、加藤サキ、谷藤ミキ、井上ミキ、小野スエ、井上カチ子、井上カツエ、関村チエ子、太野君代、井上ハツエ、井上イト、佐藤敬枝、平野忠子、佐藤智子、佐藤幸子、大畑美津江、小野和子、佐々木ウメ、岡部ヒデ、杉村タケ、井上君代、中川イテ、多田フミ、斉藤ツマ、太野サメ子、斉藤トメ、佐々木イマ、杉村ユミ、井上則子、佐藤和枝、野瀬正子、渡辺トモ子、木下春江、佐々木洋子、千葉美千代、鈴木怜子、板山由紀子、扇田かほる、井上マツエ、佐々木茂子、大沢美根子、米沢由紀子、門脇ミヤ子、(滝沢村教育委員会)

工藤定吉、角野喜三郎、高橋国雄、佐々木彦斗、武田健治、大森市蔵、佐々木己儀、三上弘太郎、工藤ヨシ、工藤ミツ、長内イマ、工藤ヨシ、高橋キエ、高橋リヨ、高田クメ、西村スエ、大川キクエ、工藤ヨシエ、三上ヨシ、梅村ヨウ、藤村イツ、藤倉サメ、有馬テル、斉藤ヤエ、工藤ハナ、谷藤トミエ、野々田テル、大宮キワ、三上トシ子、大坪裕子、相浦フジエ、三上チエ子、三上恵美子、西村栄子、大坪マサ子、佐々木てる、高田サヨ、渡辺節子、稲部

千代、手束友子、榎本ノリ子、藤倉キミ、藤村ミエ、三上ミヤ、三上トキ子、佐藤イチエ、三上アツ子、三上昭子、三上文子、大島ミツエ、藤田シゲ、斉藤トキ、赤石チヨ、斉藤シゲ、野々田リヤ、((財)岩手県埋蔵文化財センター)

昭和57年度室内整理作業

武田勝信、菅原金治郎、田中安三郎、小島勝子、井上テツ子、関村チエ子、佐藤敬枝、平野忠子、佐藤智子、佐藤幸子、大畑美津江、小野和子、岡部ヒデ、中川イテ、杉村マユミ、三上アツ子、三上ミヤ、藤倉キミ、三上文子、三上昭子、(滝沢村教育委員会)

長瀬キヌ、鈴木スズ子、藤村愛子、浅沼恵美子、村上幹子、川村洋子、((財)岩手県埋蔵文化財センター)

昭和58年度野外調査

武田勝信、太田元蔵、中上幸二郎、菅原金治郎、田中安三郎、大坪四郎、川原忠蔵、太野千太郎、三上善三郎、柳村明、丸山正雄、佐藤一郎、井上正治、井上一造、井上栄松、佐々木洋子、小野和子、岡部ヒデ、井上テツ子、太野サメ子、平野忠子、日向美智子、中川イテ、佐藤智子、上野との子、大谷地勢津子、大畑美津江、佐藤敬枝、井上カツエ、井上カヅ子、井上マツエ、小野スエ、杉村マユミ、関村チエ子、佐藤キミエ、佐藤照子、佐藤幸子、山本千枝、井上アサ、井上イト、井上君代、菅原小萩、駿河トミ、駿河リエ、加藤サキ、加藤芳子、木村イツ、斉藤ツマ、斉藤トメ、佐々木イマ、佐々木ウメ、佐藤ヨシ、下村節子、相浦フジエ、井上ミキ、井上ミサ、谷藤ミキ、角掛ツネ、山本静子、三上ミキ、高橋サト、多田フミ、三上アサ子、小島勝子、(滝沢村教育委員会)

工藤定吉、高橋国雄、佐々木彦斗、角野喜三郎、工藤健次郎、佐々木己儀、大森市蔵、三上弘太郎、工藤ミツ、工藤ヨシ、有馬テル、佐々木てる、佐藤イチエ、工藤ヨシ、工藤ハナ、藤村イツ、藤村ミエ、西村スエ、工藤ヨシエ、大宮キワ、梅村ヨウ、三上トキ子、三上昭子、三上ヨシ、藤倉キミ、三上アツ子、三上ミヤ、高田クメ、藤倉サト、斉藤ヤエ、三上トシ子、高田サヨ、野々田テル、野々田リヤ、榎本ノリ子、稲部千代、手束友子、斉藤静子、斉藤良子、長瀬キヌ、佐々木美耶子、高橋ヒデ、田中征子、三上弘子、三上ヤエ子、笹沢克子、塚合ツキ、菊池由紀子、((財)岩手県埋蔵文化財センター)

昭和58年度室内整理作業

武田勝信、小野和子、大畑美津江、岡部ヒデ、中川イテ、佐々木洋子、佐藤智子、平野忠子、佐藤敬枝、太野サメ子、日向美智子、上野との子、井上テツ子、大谷地勢津子、三上アサ子、三上ミヤ、三上アツ子、(滝沢村教育委員会)

高橋サキ、鈴木スズ子、小西エイ子、熊谷和子、長沢トメ、村上幹子、佐藤ヒデ子、藤沢淳子、菅原久美子、中村美樹子、月館美智子、((財)岩手県埋蔵文化財センター)

昭和59年度室内整理作業

大畑美津江、佐藤智子、平野忠子、佐藤敬枝、太野サメ子、日向美智子、上野との子、井上テツ子、大谷地勢津子、三上アツ子、(滝沢村教育委員会)

小西エイ子、村上幹子、菅原久美子、晴山なるみ、吉田智子、中村美樹子、((財)岩手県埋蔵文化財センター)

昭和60・61年度室内整理作業

大畑美津江、平野忠子、佐藤敬枝、上野との子、大谷地勢津子、佐藤照子、佐藤智子、太野サメ子、日向美智子、(滝沢村教育委員会)

調査の方法

野外調査

1. 調査区の設定と遺構の命名

発掘はグリッド法を採用し、東西南北の折目を遺跡全面に張り巡らした。グリッド軸線の間隔は東西・南北ともに40mの大グリッドを基本とし、10m四方に区画した中グリッド、更に5m四方に区画した小グリッドを設定した。軸線の呼称は、大グリッドを東西は東よりアルファベットでA～Uまで符し、南北は北よりローマ数字でI～XVIIIまでとした。中グリッドは、北側の西から東へアルファベットでa～d、e～h、i～l、m～pまでとし、小グリッドは同様に1～2、3～4を符した。グリッドの呼称名は、以上の組合せによって呼称され、北西の交点名を用いる事とした。(例…VII Ia、VIII Gn 4)

遺構名の呼称は、グリッド名と遺構の種別を組み合わせて、VII Ia 住居・VII Ia ビット・VII Ia 焼土・VII Ia 溝と命名し、所在する位置と遺構の種別が同時に判るようにした。1グリッド内に同種の遺構が複数ある場合は、遺構名の次にアラビア数字を加えて、VII Ia - 1 住居・VII Ia - 2 住居というように命名し、区別した。

尚、ビット・焼土等の遺構について、整理の都合上、第1号・第2号と遺構名を変更して報告する調査区もある。

2. 粗掘りと遺構検出

本遺跡の調査対象面積は55,900㎡と広大であり、試掘調査の結果大規模な遺跡であろうことが予想されたことから、遺構数・性格等を早急に把握する必要があるものと考え、粗掘りは重機を利用することとした。重機を稼働させる際には、常時調査員が立ち会い、試掘時の

トレンチによって土層の確認や遺構検出面の確認を行ない、極力表土層で止めることに努めた。最終的には粗掘りの可能な範囲のほぼ全面に亘って実施し、遺構検出を行なった。粗掘り中に出土した遺物は原位置を保っていないものと判断し、地点と層位を確認の上、グリッドごとに一括して取り上げた。遺構検出時の遺物で明確に遺構に伴うと判断された遺物は、遺構埋土の最上層として取り上げた。その他の遺物は地点と層位を確認の上、グリッドごと一括して取り上げた。完形土器や土偶等の遺物の際には、実測・写真撮影処置を講じた。

3. 遺構精査

遺構の掘り上げは、住居址は4分法・ピットは2分法を原則とした。重複時には必要に応じて随時土層観察用の畦を設定した。

4. 記録

実測図は平面図・断面図ともに1/20縮尺を原則としたが、場合によっては1/10や平板測量も併用した。実測図の作成は作業員の中から実測班を編成し、グリッド軸線に沿って地面に1m×1mの水糸を張って実施した。写真撮影は6cm×7cm版1台(モノクローム)と35mm版2台(モノクローム・カラーリバーサル)を一組にし、状況に応じて使用した。撮影は、各遺構の調査工程を中心に行なった。

5. 遺物整理

出土遺物の洗浄・ラベル記入は、降雨時に現場にて実施した。ラベルの記入項目は、遺跡略号「YH」、調査年次「82・83」、グリッド名・遺構名・層位である。

6. 調査区の分担

岩手県内における発掘調査史上初の地元教育委員会と(財)岩手県埋蔵文化財センターとの二機関による調査となった事から、岩手県教育委員会事務局文化課の御指導により、次のように調査区を分担した。

滝沢村教育委員会……………2区・3区・4区・8区・10N区
(財)岩手県埋蔵文化財センター……………5区・6区・7区・9区・10S区

7. 定例打合せ会

二機関による発掘調査・予算規模の大型化等の理由により、調査上の諸問題・作業の進捗状況・今後の進め方・予算等を主題として岩手県教育委員会事務局文化課の御指導のもとに、隔月及び調査の節目ごとに打合せ会を開催した。会には調査依頼者にも参加して頂き、発掘調査現場運営に係る全ての事項について協議を行なった。又、調査員レベルの打合せ会は、定例打合せ会とは別に随時開催した。

8. 広報普及活動

埋蔵文化財保護活動推進の為、通常の現地説明会とは別に、村内各機関・団体・一般村民

を対象に調査中の状況を積極的に公開する広報活動を展開した。最終的な見学者総数は、1,064名であった。

室内整理

1. 作業基準

室内整理作業は、滝沢村教育委員会と(財)岩手県埋蔵文化財センターとが、個別に進めることで開始され、報告書の刊行に際しては、当村教育委員会がとりまとめて実施することとした。

尚、整理作業の開始に先立ち、統一した作業基準・報告書執筆基準等を作成し、極力同一表現や同一図示となるよう努力したが、作業の進展に伴い細部に互って統一することが困難な為、それぞれの担当区内で統一する方向で整理を進めた。以上のことから、本書に掲載した各種図版・文章等に不統一箇所のあることをお断りしたい。

2. 担当調査員

滝沢村教育委員会 桐生正一・桜井芳彦・高橋裕子

※当村教育委員会の整理作業は、桐生・桜井が増加する緊急発掘調査に対応する関係から、既述期間内に規模の縮小・拡大・一時中断等の過程があり、昭和59年度以降は高橋裕子が整理専従で事業を推進した。

(財)岩手県埋蔵文化財センター

昭和57年度 村上達夫・菊池利和・種市進・田鎖寿夫・佐々木清文

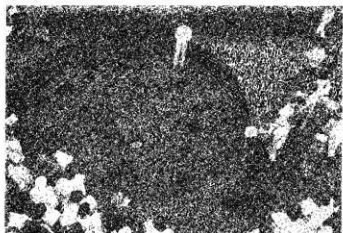
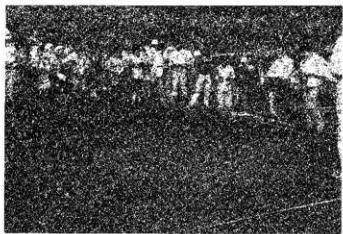
昭和58年度 菊池利和・朝野孝二・高橋義介

昭和59年度 菊池利和・高橋義介

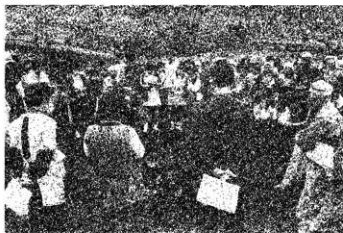
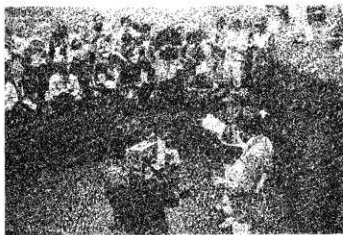
尚、(財)岩手県埋蔵文化財センターの整理完了に伴い、昭和59年度末に全ての図面・写真・遺物が滝沢村教育委員会に一括返還されている。

3. 執筆分担

執筆分担は報告書全般に係るものと、担当区分に分けて分担を協議した。尚、担当区分については、調査機関内部の協議により分担を決めることとした。分担は次表の通りである。



現地説明会



現地説明会

滝沢村教育委員会		(財)岩手県埋蔵文化財センター		
	○調査に至る経過と調査要項 ○調査の方法 ○村内の遺跡	桐生正一 桐生正一 坂井芳彦	○地形と周囲の環境 ○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 ・焼土・ビット ○遺構外出土遺物 ・石器 ・土器・土製品 ○小まとも	菊池利和 菊池利和 菊池利和・朝野孝二・高橋義介 菊池利和 菊池利和 菊池利和 菊池利和
	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 高橋裕子・坂井芳彦 坂井芳彦 坂井芳彦	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・住居址状遺構 ・焼土 ・ビット ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ・土器 ・石器 ・土製品 ○小まとも ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・その他の遺構 ・遺物	菊池利和 菊池利和 佐々木清文・植市進・菊池利和 佐々木清文・菊池利和・高橋義介 朝野孝二・高橋義介 高橋義介 菊池利和・高橋義介 朝野孝二 菊池利和 菊池利和・高橋義介 菊池利和
2区	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 高橋裕子・坂井芳彦 坂井芳彦 坂井芳彦	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・住居址状遺構 ・焼土 ・ビット ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ・土器 ・石器 ・土製品 ○小まとも ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・その他の遺構 ・遺物	菊池利和 菊池利和 佐々木清文・植市進・菊池利和 佐々木清文・菊池利和・高橋義介 朝野孝二・高橋義介 高橋義介 菊池利和・高橋義介 朝野孝二 菊池利和 菊池利和・高橋義介 菊池利和
	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも ・遺構 ・遺物 { 土器 石器 ・陥穴住居址について	坂井芳彦 桐生正一・高橋裕子 坂井芳彦 桐生正一 坂井芳彦・高橋裕子 高橋裕子 桐生正一	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・住居址状遺構 ・焼土 ・ビット ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ・土器 ・石器 ・土製品 ○小まとも ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・その他の遺構 ・遺物	菊池利和 菊池利和 佐々木清文・植市進・菊池利和 佐々木清文・菊池利和・高橋義介 朝野孝二・高橋義介 高橋義介 菊池利和・高橋義介 朝野孝二 菊池利和 菊池利和・高橋義介 菊池利和
3区	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 桐生正一・高橋裕子 坂井芳彦 坂井芳彦	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・住居址状遺構 ・焼土 ・ビット ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ・土器 ・石器 ・土製品 ○小まとも ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・その他の遺構 ・遺物	菊池利和 菊池利和 佐々木清文・植市進・菊池利和 佐々木清文・菊池利和・高橋義介 朝野孝二・高橋義介 高橋義介 菊池利和・高橋義介 朝野孝二 菊池利和 菊池利和・高橋義介 菊池利和
	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 桐生正一 桐生正一	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・住居址状遺構 ・焼土 ・ビット ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ・土器 ・石器 ・土製品 ○小まとも ・住居址 { 縄文時代 平安時代 ・その他の遺構 ・遺物	菊池利和 菊池利和 朝野孝二 菊池利和 菊池利和・高橋義介 菊池利和
4区	○地形・地質 ○出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 桐生正一 桐生正一	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 ・ビット ○遺構外出土遺物 ・土器 ・石器 ○小まとも	菊池利和 菊池利和 朝野孝二 菊池利和 菊池利和・高橋義介 菊池利和
	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも ・遺構 ・遺物 { 土器 石器	坂井芳彦 坂井芳彦 桐生正一 坂井芳彦 桐生正一 坂井芳彦	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 ・ビット ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	菊池利和 菊池利和 佐々木清文 菊池利和 植市進 菊池利和 菊池利和
8区	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 坂井芳彦 桐生正一 坂井芳彦	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 ・住居址状遺構・焼土 ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	菊池利和 菊池利和 佐々木清文 菊池利和 植市進 菊池利和 菊池利和
	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 高橋裕子 高橋裕子 高橋裕子	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 ・住居址状遺構・焼土 ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	菊池利和 菊池利和 植市進 菊池利和 菊池利和 菊池利和
10区北側	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	坂井芳彦 高橋裕子 高橋裕子 高橋裕子	○地形・地質 ○検出された遺構・遺物 ・住居址 ・住居址状遺構・焼土 ・陥し穴状遺構 ○遺構外出土遺物 ○小まとも	菊池利和 菊池利和 植市進 菊池利和 菊池利和 菊池利和

内、滝沢村教育委員会担当区の本文・表中に用いた〔 〕は現存値、
()は推定値を表わす。また、遺物写真図版は縮尺が不同である。

村内遺跡一覽表

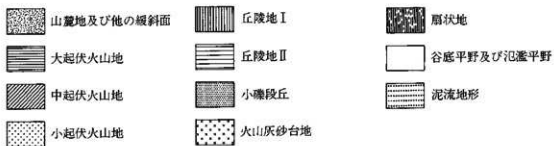
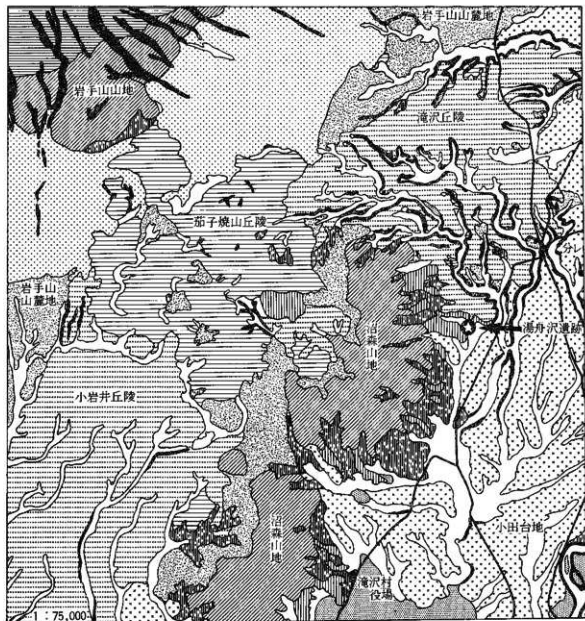
番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	平の沢	散布地	48	室小路1	敷布地(縄文)
2	生出頭コ	〃	49	〃2	〃(〃)
3	留ヶ森	一里塚(露角街道)	50	〃II	〃(〃)
4	川前	散布地(縄文)	51	〃3	〃(上師)
5	大峽	〃(〃)	52	〃4	〃(縄文)
6	野沢	〃(〃)	53	〃5	〃(〃)
7	桜橋1	〃(〃)	54	〃6	〃(〃)
8	〃II	〃(〃)	55	〃7	〃(〃)
9	〃III	〃(〃)	56	〃I	〃(〃)
10	〃IV	〃(〃)	57	白石	〃(〃)
11	葉の木沢I	集落(土師)	58	大瀬	〃(縄文・土師)
12	〃II	散布地(縄文)	59	滝沢笹	〃(縄文)
13	〃III	〃(上師)	60	別当森	〃(〃)
14	松原敷	〃(縄文)	61	笹森	〃(縄文・土師)
15	砂子	〃(〃)	62	高御	〃(〃)
16	果石	碑	63	外久保	〃(〃)
17	貝がら谷地	塚	64	大畑	〃(縄文)
18	木賊川	散布地(縄文)	65	三明神社	〃
19	卯通坂	集落(縄文)	66	上社	〃(縄文)
20	湯舟沢	〃(縄文)	67	師飯屋山館	館跡
21	〃IX	散布地(縄文・土師)	68	八人打	散布地(縄文)
22	〃X	〃(縄文)	69	碓前堰	堰跡
23	〃XI	〃(〃)	70	大沢館	館跡
24	〃XII	集落(上師)	71	榎木エゾ館	館跡・散布地(縄文)
25	〃XIII	散布地(縄文)	72	上藤木	散布地(縄文)
26	根掘坂	〃(〃)	73	エゾ館	〃(〃)
27	けや木の平	集落(縄文・土師)	74	榎木田村古墳	塚
28	外山I	〃(〃・土師)	75	寺林	館跡
29	〃II	散布地(土師)	76	夢郷森	〃
30	〃III	〃(縄文)	77	細屋	散布地(縄文)
31	勘助館	館跡	78	白山	〃(〃)
32	中村	散布地(上師)	79	大釜館	館跡
33	二沢	〃(縄文)	80	八幡館	〃
34	焼畑	〃(〃)	81	八幡宮古墳	塚
35	長者館	散布地(縄文)	82	塩ノ森I	散布地(縄文)
36	鬼越	〃(〃)	83	〃II	〃(〃)
37	仏沢I	〃(〃)	84	仁沢南IV	集落
38	〃II	〃(〃)	85	〃III	〃
39	仏沢観音堂	集落・古墳・墓	86	〃II	〃
40	狐河山	散布地(縄文・土師)	87	〃I	〃
41	清水岸	散在	88	大釜	〃
42	高屋敷	散布地(縄文・土師)	89	風林	〃
43	高岡敷III	〃(縄文)	90	高森	ピット群(縄文)
44	〃II	〃(〃)	91	日向一里塚	一里塚(露角街道)
45	〃I	〃(〃)	92	岩塚	〃(露角街道)
46	耳取	〃(〃)	93	仏沢田	配石群(縄文)
47	大久保	ピット群(〃)			

圖說河成部分河圖



村 内 の 遺 跡

滝沢村の周知の遺跡は、前掲図のように分布する。遺跡の集中が顕著なのは、葉ノ木沢（7～14、主として縄文時代遺物の散布地が多い）、湯舟沢（17～29、縄文・弥生・土師の各時期の集落が分布する）、平蔵沢（37～42、湯舟沢に同じ）、室小路～高柳（43～62、縄文時代の集落・ピット群、奈良・平安時代の集落）、鶴飼～大釜（67～81、中世館跡・他）、大釜（82～90、縄文時代各期の集落）となっている。村内では、組織的な埋蔵文化財の分布調査は未だ実施されておらず、図に示した遺跡は、ほんの一部の偶然発見されたものにすぎない。よって、開発の多い地区に集中するなど、本来の遺跡多寡とは異なった様相を示すものであろう。しかしながらおおよその傾向は見とり得る。遺跡の立地は、ほとんどが、200m前後、もしくは140m前後の標高に集中する。200m前後のものは、北西の丘陵に入りこむ小さな沢沿いに分布するものであり、140m前後のものはその丘陵と踏葛川・鞆石川に挟まれた、せまい丘陵性台地（滝沢台地）上に分布するものである。なお、鶴飼～大釜地区には鞆石川の河岸低地が分布し、自然堤防・旧河道も多く、この地区の館跡群は標高にはあまり関係なく、独自の立地のしかたを示す。時期別に見た場合、古墳時代以後の土師の遺跡は、丘陵の沢と台地とでのちがいはよくわからないが、ともに集落跡がほとんどである。縄文時代の遺跡の場合は、やはり集落跡が多いことは同様であるが、それにともなって丘陵近くの沢沿いの段丘上には、葬送又は祭祠的な性格を持つと思われる配石群・土壇群が多く分布する。それとは異なり、低い台地上には陥し穴と思われる土壇群が多く散布し、当時の生産活動の場と考えられる。現時点での少ない分布調査例・発掘調査例からは、遺跡の分布傾向を的確に把える事は難しいが、縄文時代の特異な祭祠跡と見られる遺構・弥生時代各期の集落跡・古墳時代前葉の土器・奈良時代以前の集落跡など、県内では類例の少ないもの、はじめてのものが見つかっている。急テンポで進行する開発に遅れる事なく、広範囲な分布調査の実施など、埋蔵文化財保護の為の基本的な体制の確立が急務である。



遺跡周辺地形区分図

地 形 ・ 地 質

滝沢村の地形・地質

滝沢村は岩手県のほぼ中央部に位置し、東西14km・南北20km・面積約181km²、人口3万の村である。隣接する市町村としては、北に西根町、東に北上川を境に玉山村、南東～南には諸葛川・琴石川を境に県都盛岡市、西に琴石町がある。盛岡市に隣接しているため宅地造成やその他の土地開発が顕著である。

滝沢村の土地条件としては、北西部に本県最高峰の岩手山(2,041m)が聳え、その東部及び南部には、岩手山の山麓が広がっている。岩手山の火山本体の最下部は標高600m位であり、この山麓や、外縁部の台地は火山灰層が厚く堆積している。これらの山麓や台地は畑・牧草地として使用されている。村の東端では北上川が北上山地西縁部の丘陵地を蛇行しながら南流している。また、南側では琴石川が東流し、やがて盛岡市の南東部で北上川に合流する。両河川の両岸には低地または河岸段丘が分布する。村の中央部から南には、南北8kmにおよぶ沼森山地・篠木山地が連なっている。この山地の東側には小河川が東流または南流し琴石川に注いでいるが、この小河川の流域には谷底平野が分布し、田畑などの耕地として利用されている。

滝沢村の地形は大別して、山地・丘陵地・台地・河岸低地などからなる。

山地 村の中央部から南に連なる沼森山地・篠木山地(新第三系)、北西部の岩手山地・鞍掛山地(第四紀岩手火山岩)がある。沼森山地では東縁の起伏は大きい、西縁は岩手山起源の火砕流によって埋積され、起伏は小さい。本遺跡は、この沼森山地の東麓部に位置している。篠木山地は新第三系中新世の集塊岩及び両輝石安山岩よりなり、標高はほとんどの地域で500m以下であるが、谷が多く入りくみ、谷の傾斜も大きく山麓部には扇状地が発達している。岩手山地及び岩手山麓地は、岩手火山の山体部と山麓部を構成する。岩手山地の大起伏山地(400m以上)は薬師岳熔岩におおわれ、中起伏山地(400～200m)は薬師熔岩とその火山砕屑物等でおおわれている。大起伏山地からは中起伏山地にかけては、侵食が進行し崩壊跡に至る箇所で見られる。岩手山麓地は緩傾斜であり、下流から侵食しつつある浅い谷によって開析されている。鞍掛山地も第四紀火山岩よりなる。火山岩の噴出期は新岩手火山の活動以前のものであるが、火山活動の時期と性格は明らかでない。

丘陵地 村北西部の茄子焼山丘陵、東部の四十四田丘陵がある。茄子焼山丘陵は、岩手火山の活動に伴う火山砕流におおわれて形成された。この火砕流は一部で東方の沼森山地を越えて盛岡低地に流下している。四十四田丘陵の基盤岩は古生層から成る。この丘陵は浅い谷によ

る開析や水河作用による侵食により低平化している。この地域は宅地造成等によって人工改変地も多い。

台地 滝沢台地と小岩井台地とに区別され、岩手火山を給源とする火砕流堆積物・火山灰層から成る。滝沢台地は新岩手山形成以前に噴出したスコリア質火砕流堆積物（大石渡火山角礫岩）によって台地の原形を形成した。火砕流堆積物は層厚10m前後の火山灰層におおわれるが、火山灰層の層厚は必ずしも一様ではない。小岩井台地は、新岩手山形成期に噴出した火砕流（小岩井泥流）堆積物によって形成された。火砕流堆積物は層厚3m前後の火山灰層におおわれる。

低地 四十四田低地・零石低地があり、両低地とも段丘化している部分が広い。

河岸段丘 三段認められる。上位より洪民火山灰層以上を載せる段丘、分火山灰層を載せる段丘、下位は沖積段丘である。本遺跡の大部分は分火山灰を載せる段丘に立地している。

遺跡地形概観

本遺跡は滝沢村役場から北2.5km、国鉄東北線滝沢駅から西5kmに位置しており、沼森山地北側の東麓部にあたる。遺跡は諸葛川支流の市兵衛川によって開析された兩岸の低位な段丘面及び低平化した山地の緩斜面に立地している。市兵衛川との比高は段丘縁辺部では1～2m程である。段丘面の背後の北側及び南～西側には、沼森山地東縁の低平化した山地（標高220～230m）が遺跡を「く」字状にとり囲んでいて、南東方向に開けた地形景観を呈している。市兵衛川は下流では蛇行し広い湿地帯を形成している。

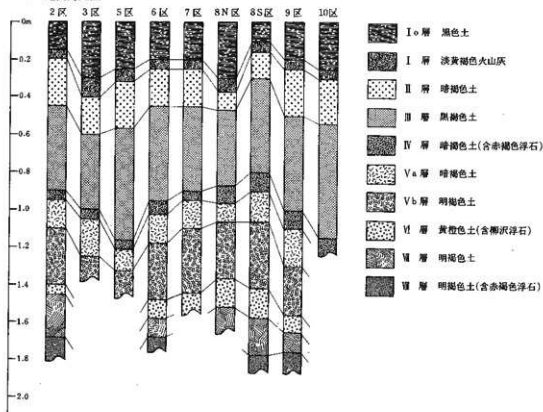
湯舟沢遺跡は1～11区に分けられているが、今回の調査対象は東西670m×南北620mの範囲にある2～10区の9区画（遺跡）であり、総面積は55,900㎡に及ぶ。各区の位置は市兵衛川の左岸上流から2区・3区・4区・5区・7区、右岸上流から8区・10区・9区である。（地形図参照）調査区の標高は180～205mである。2区・8区（8区の南側地区）は、山地の斜面上にあり、他に比して標高が高い。5区以西の上流域では、谷頭部にあたる8区を除けば、段丘面の発達はさ程顕著ではない。5区より南東の下流域では、広い湿地帯の形成と共に段丘面の広がりがやや大きくなっている。

調査区域の現況は6区が採草地、他は植林地及び原野である。

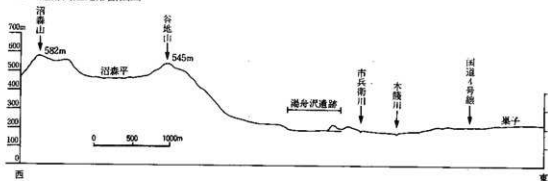
基本層序 本遺跡周辺の基盤は、新第三系中新統飯岡層の基性～中性安山岩である。その上部を岩手山・八幡平系の火山および秋田駒ヶ岳を噴出源とする火山砕せつ物が厚く堆積している。

表層を構成しているものは、当村北部の分付近を模式地とする分火山灰である。

a 地質對比圖



b 遺跡周辺地形断面圖



地質對比圖・遺跡周辺地形断面圖

以下に遺跡調査区内の地質層序を上位から順に記す。()内は層厚を示す。

- I o層：黒色土層(20~30cm) 表土 黒色~黒褐色を呈す。木根などが密生しており、柔らかく締りない。数mmの橙色浮石を多く含む。
- I層：淡黄褐色細粒浮石層(5~15cm) 灰白色~にぶい黄褐色を呈する火山灰層である。平坦面では、自然堆積として観察されることが少なく、平安住居址の埋土下部、縄文晩期~弥生住居址の埋土上部及び凹地などに堆積層として認められる。
- II層：暗褐色土層(20~30cm) 暗褐色~褐色を呈し、火山灰起源の砂質土で構成され、粘性は少なく締っている。斜面下位では、より暗色となりIII層土と混在する。遺物を包含する層である。
- III層：黒褐色土層(40~60cm) 黒褐色~黒色を呈するシルト質土で構成され、堅く締っている。粒径数mmの橙~赤褐色浮石が僅か含まれる。遺物を包含する層である。
- IV層：赤褐色浮石層(2~5cm) 粒径2~3mmの赤褐色浮石の単層である。地域によって単層として観察されずVa層と混在、若しくは小ブロック状に認められる。分火山灰中の早坂浮石層に相当すると思われる。
- Va層：暗褐色土層(15~20cm) 暗褐色~にぶい黄褐色を呈し、堅く締ったシルト質土によって構成されている。粒径1cm前後の黄褐色浮石を含む。この層は、下位のVb層へ漸移していることから、Vb層の風化帯に相当すると思われる。
- Vb層：明褐色土層(20~30cm) 明褐色を呈するシルト質土で構成されている。Vaより堅く締っている。粒径1~2cmの黄褐色浮石を含む。
- VI層：黄褐色浮石層(5~10cm) 粒径1~2cm程の黄褐色~明褐色を呈する浮石の単層である。浮石は脆く砕ける。地域によっては単層として観察されず、Vb層土と混在する。層上位面に多量の粒径1~2mmの砂粒が観察される地域もある。本層(この浮石層)は、分火山灰下位の柳沢浮石層に相当すると思われる。
- VII層：明褐色土層(10~20cm) 明褐色~黄褐色を呈し、堅く締ったシルト質土で構成されている。粒径1cm前後の赤褐色浮石を僅かに含む。陥し穴状遺構の底部は、本層中にあ
るものが多い。
- VIII層：明褐色土層(5~10cm) 明褐色シルト質土に粒径0.5~1cm程の赤褐色浮石が多量に混入する。この層は、分火山灰最下位層の小岩井浮石層に相当すると思われる。

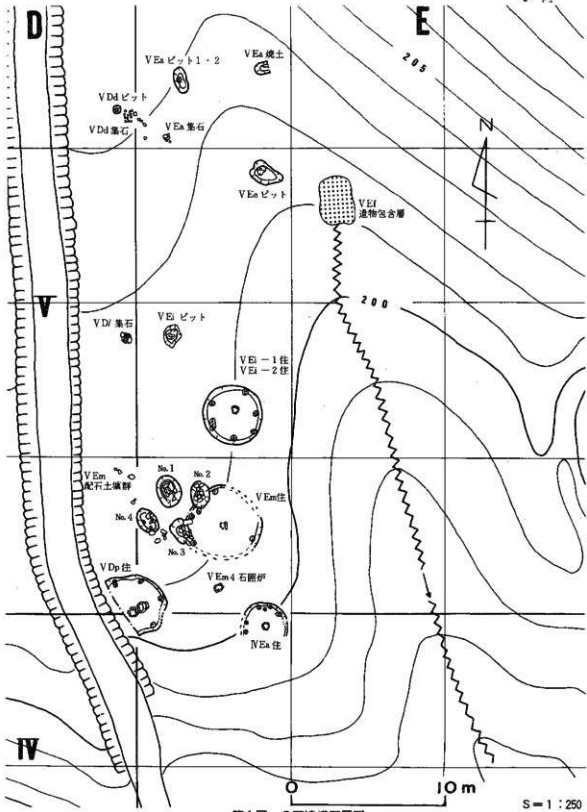
(尚、I層の細粒浮石は分析の結果によると十和田a火山灰と鑑定されている。)

2 区

略 号 Y H 2

調査面積 1,750㎡

調査機関 滝沢村教育委員会



第1図 2区遺構配置図

S=1:250

I 地形と地質

1. 地形

湯舟沢遺跡北側は丘陵が東西に伸び、その西端の小沢に沿って南に広がる緩斜面の東半分、本区の遺構群が入る。斜面は東側の沢と中央の林道で区切られ、林道から西は工事予定地外であり、調査対象とはならない。3区西端から西北西に110m、8区北端から北西に90mに位置する。標高は195~203mを記し、南北60m、東西30mの1,750㎡の範囲である。

2. 基本層序

本区の基本層序は、以下の通りである。

	I層	7.5YR2/2	黒褐色土	砂粒・粉状バミスを若干含む。
	II層	7.5YR3/2	黒褐色土	橙色バミスを含む。III層へ漸移する。
	III層	7.5YR3/4	暗褐色土	砂粒・橙色バミスを若干含む。
	IV層	5 YR1.7/1	黒色土	橙色バミスを微量含む。
	V層	7.5YR3/2	黒褐色土	粒径の不揃いな橙色バミスを多く含む。
	VI層	7.5YR4/6	褐色土	V層と同じ橙色バミス、および砂粒を少量含む。
	VII層	7.5YR4/4	褐色土	川砂が多く入り込んでいる。
	VIII層	2.5YR3/4	暗赤褐色土	VII層の酸化層。

第2図 基本層序

なお、斜面下位の急傾斜部に行くに従い、I~IV層は薄くなり時には消滅し、VI層以下には人頭大の安山岩質の礫が、非常に多く入り込んでいる。

II 発見された遺構と遺物

1. 竪穴住居址

V Ei-1 竪穴住居址 (第3図1・第4図、写真図版3・10)

位置：調査区の中央東寄りの斜面上に位置する。V Ei-2 住の中にすっぽり入っている。

検出：基本層序II層面において、炭化粒子の分布域として検出された。焼失家屋。

形態・規模：長軸3.2m×短軸3.1mの、やや東西に長い円形を呈す。炉は住居のほぼ中央に、立石をともなう地床炉を持つ。

埋土：大別すると3層にわかれ、自然堆積を示す。1層に黒色土、2・3層に暗褐色土を持ち、4～7層に炭化材・焼土粒子が多く混入する。

壁：床面からゆるやかに傾斜して立ち上がっている。壁高は北西にて55cm、南東にて18cmであり、南東側埋土の混乱からみて、多少沢の流れによって削り取られたものと思われる。北側ごく一部のみV Ei-2 住と同じ壁であるが、他はV Ei-2 住の埋土を掘り込んで構築しており、壁面は全体に柔らかい。

床：斜面の傾きに沿って南東側が幾分下がっているが、ほぼ平らである。床面は全体に幾分しまっている。中央の炉の周辺にても、特に日立つ差異はない。

柱穴：壁に沿って5基の柱穴がめぐる。P₃をのぞき、いずれも皿状に浅い柱穴であり、平面規模も20cm前後と小さい。埋土はいずれも同様の暗褐色土である。

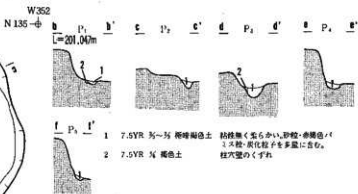
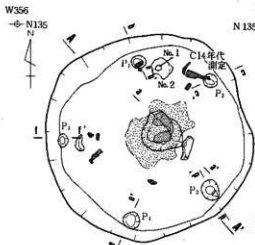
炉：住居の中央やや北東寄りに位置 第1表 V Ei-1 竪穴住居址柱穴計測値一覧

する地床炉がある。直下にV Ei-2 住の炉がある。焼土の中心から東南東へ55cmに立石をともなう。石は40cm×40cmのほぼ円形を呈し、炉に面する側が火熱を受け赤化しており、又、石の掘り込みセクションが、炉のそれと連続するなど、炉と同時に構築されたと推される。

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
上端(cm)	23×20	22×21	34×28	27×27	22×16
深さ(cm)	6	10	19	9	4

出土遺物

土器が、床面から小片5点、埋土下位より注口土器1点、壺形土器1点、石器は床面から石筥、台石、敲石が出土している。注口土器(5)は口径9.2cm、器高7.4cmと小振りで、口縁の大きく開く台付鉢に注口部を付けた形をしている。口縁部外傾し、口唇部が角張り、口縁上端



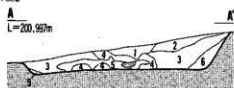
- 1 7.5YR 5/2 暗褐色土 粘性無く柔らかい、砂粒・赤褐色パリス粒・炭化粒子を多量に含む。
- 2 7.5YR 5/4 褐色土 柱穴壁のくずれ

No.1 すり石
No.2 石皿



N131
W352

W356
N131



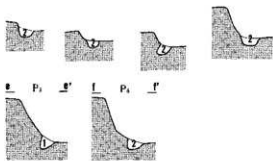
- 1 7.5YR 5/黒色土
- 2 7.5YR 5/褐色土
- 3 7.5YR 5/暗褐色土
- 4 10YR 5/暗褐色土
- 5 5YR 5/暗赤褐色土
- 6 7.5YR 5/黒褐色土

炭化材・炭化粒子の層
柔らかく、砂粒多い。
粘性多少あり、炭化粒子多く含む。
柔らかく締まりなし。炭化粒子・焼土粒子・炭化材を多量に含む。
粘性多少あり硬く締まって強い。焼土粒を多量、炭化粒子少量含む。

粘性や中なり、柔らかい。炭化粒子を多量、黄褐色パリス・褐色パリスを含む。粘性弱く硬い。褐色パリス・ガラス質微粒子を散在と黄褐色パリスを含む。全体に炭化粒子を含む。
粘性や中なり柔らかい。黄褐色・褐色パリスを含む。全体に炭化粒子を含む。一部材も見られる。
粘性や中なり柔らかい。炭化粒子を多量に含む。多量に黄褐色・褐色パリスを含む。
粘性や中なり、硬く締まっている。炭化粒子・焼土粒子を多量に含む。
粘性や中なり、黄褐色・褐色パリスを含む。炭化粒子微量を含む。

第3図 1 VEi-1 壁穴住居址

a P1 a' b P2 b' c P3 c' d P4 d' e P5 e'
L=201.04m

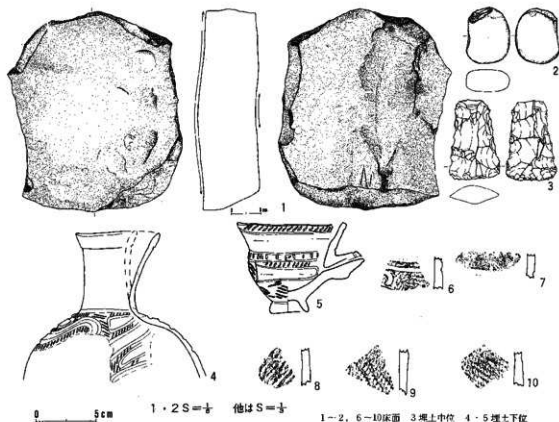


- 1 7.5YR 5/ 黒褐色土 柔らかい、炭化粒子多量に含む。
- 2 7.5YR 5/ 暗褐色土 粘性無く柔らかい。炭化粒子多量に含む。



0 1 2m

第3図 2 VEi-2 壁穴住居址



第4図 VEI-1 壁穴住居址出土遺物

5 mm の巾で沈線をめぐらし、その下頸部沈線まで1.7cmほどの無文帯を成す。頸部には沈線に挟まれた、棒状工具による刻目列を有し、胴から底部にかけてはLR原体を転がした後沈線で区画し磨り消した無文帯を有す。台部・注口部とも付け根に1本沈線をめぐらす他は無文、但し注口部先端にはもう1本沈線がめぐる。器内面に炭化物が付着していた。床面出土土器片は、縄文と沈線による施文のもの(6)、縄文のみのもの(8・9・10)、無文のもの(7)がある。壺形上器(4)は6cmほどの高さの頸部を有し、上端が平らな口縁部は1cmほどの巾の複合口縁であり、先端が欠損して不明瞭であるが、片口状になっていたと思われる。頸部は全体にていねいになでであり、下端に一条の沈線をめぐらせて体部と区切っている。体部より下はほとんど欠損のため不明だが、比較的細かいLR原体縦回転による施文の後、三角形と平行沈線による文様を入れその中を磨り消している。文様の全体パターンは不明だが、3回繰り返す流れるような文様である。内面は口縁部横なで、頸部縦なで、体部は粗い横なでとなっている。胎土は粗く、石英粒や長石粒を多く含むが焼成は良く、しっかりした造りである。石筥(3)は

炉端より60cm西壁寄りから出土したものであり、敲石（2）を上に乗せて出土している。台石（1）は両面に磨面と、敲打による剝離が見られる。敲石は両端部に打痕が見られ、一端は欠損している。両面の一部と録片部片側には、擦痕も認められる。

出土遺物から、縄文後期中葉の竪穴住居址と思われる。

V Ei - 2 竪穴住居址（第3図2、写真図版3）

位置：V Ei - 1 住と重複関係にある。

検出：V Ei - 1 住を検出したII層面にては、本住居址の存在を把握できず、V Ei - 1 住を相当程度掘り進んだ時点で重複が推定された。

形態・規模：ほぼ円形で北西～南東にやや長く、長軸方向で4m、短軸で3.7mを測る。

埋土：暗褐色土が壁際から床面に残っていたが、中央はV Ei - 1 住に切られている。

壁：ゆるやかに傾斜して立ち上がる。全体に硬くしまっている。

床：平坦であり、硬くしまっている。北側柱穴P₁・P₆間が特に硬い。

柱穴：壁に沿って6基の柱穴がめぐる。いずれも壁に向けてわずかに斜めに穿たれている。

柱穴間は1.5m前後の間隔を持つが、前述P₁・P₆間は2.3mと幾分広くなっている。埋土は、いずれも住居址埋土とおなじ暗褐色土であり、部分的に固まる様を呈す。

炉：住居址中央やや北寄りに地床炉を持つが、上半はV Ei - 1 住の炉の構築の際に削られている。

第2表 V Ei - 2 竪穴住居址柱穴計測値一覧

出土遺物

V Ei - 1 竪穴住居址が直上に乗るため、本竪穴の埋土はほとんど残っておらず、そ

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
上端(cm)	24×20	21×20	20×18	28×26	56×20	22×20
深さ(cm)	9	12	16	14	22	15

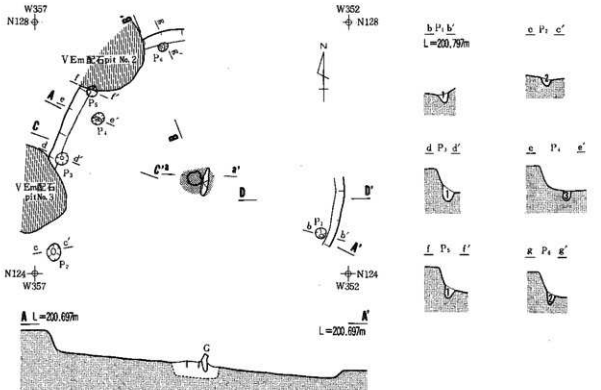
のわずかな埋土および焼土中からは、まったく遺物は発見されなかった。よって本住居址がV Ei - 1 竪穴住居址より古いどの時期に属するかは不明である。

V Em 竪穴住居址（第5・6図、写真図版4・11）

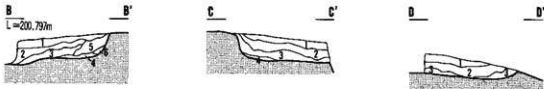
位置：調査区のほぼ中央にあり、南流する小沢に面した東向き斜面のへりに位置する。又、V Em 配石土墳群と隣接し、特にNo 2・3とは重複関係にあつて本住居址が切られている。

検出：III層まで下げてのちの検出となつたが、残ったセクションからはII層からの掘り込みであることが観察される。

形態・規模：壁の残存部分や柱穴の位置から推定すると、径4.7m前後のほぼ円形を呈する。



- | | | |
|---|----------------|---------------------------------------|
| 1 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 粘性無く柔らかい。褐色パミス多量。白色炭粒7・砂粒少量。炭化粒子微量含む。 |
| 2 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 1層と地山の混土。粘性無く柔らかい。 |
| 3 | 暗褐色土 | 2層と同様だが地山が若干少なく、炭化粒子を多く含む。 |



- | | | |
|---|--------------------|--|
| 1 | 7.5YR 5/6-5/4 暗褐色土 | 粘性無く柔らかい。褐色パミス・砂粒混分混入。 |
| 2 | 7.5YR 5/6 黄褐色土 | 1層より硬く締まるが粘性欠く。上記パミス多量混入。 |
| 3 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 粘性强く柔らかく、やや締まる。上記パミスと若干の小石・少量の炭化粒子を含む。 |
| 4 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 硬く締まる。パミス及び小石を多く含む。地山混れか? |
| 5 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 2層と同様であるが若干パミスが少ない。 |
| 6 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 4層と5層の混土。粘性なく柔らかい。炭礫土か? |



- | | | |
|---|--------------------|---------------------------|
| 1 | 5 YR 5/6 暗赤褐色成土 | 硬く締り、砂粒・炭化粒子少量混入。 |
| 2 | 7.5YR 5/6 黄褐色土 | 粘性無く柔らかい。硬土粒子・炭化粒子多量に含む。 |
| 3 | 7.5YR 5/6-5/4 暗褐色土 | 粘性無く柔らかい。褐色パミス・炭化粒子多量に含む。 |
| 4 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 2層が硬く締まった部分。混入物少量。 |
| 5 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 3層が硬く締まった部分。パミス倍大くなる。 |
| 6 | 7.5YR 5/6 暗褐色土 | 地山。 |



第5図 VE m 竪穴住居址

埋土：大別3層であり、自然堆積の様相を呈す。全体に橙色バミス等が混入し、比較的柔らかである。尚、南北セクションの壁際では、壁の崩壊土が観察された。

壁：北西及び東の一部のみが検出されたが、北西側に於いてはV Em 配石土壇No 2・3に依って切られている。立ち上がりは緩やかで若干外傾しているが、東壁ではより緩やかになっている。壁高は本住居址が東向き斜面に位置することから東側が侵食を受けており、西側で40cm・東側で15cmとかなりの差異がある。

床：基本層序IV層の地山面を若干掘り込んで床面としており、しまりも良い。全体に東へ向かって傾斜した平坦面であるが、北側で軽い段を持つ。床面構築の際の掘り方、貼床等は見られない。

第3表 V Em 壁穴住居址柱穴計測値一覧

柱穴：検出したピットは合計6ヶで、何れも柱穴と考えられる。P₄を除いて総て壁際にあり、壁に突き刺

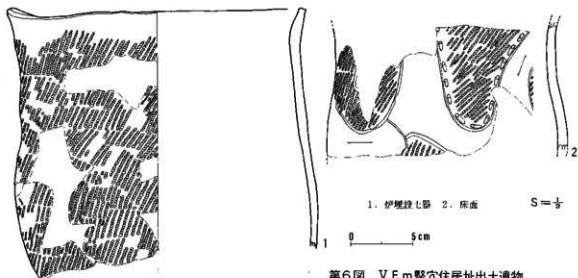
	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
上端(cm)	16×17	26×24	20×20	20×20	18×17	14×12
深さ(cm)	15	9	18	17	15	16

す様に斜めに作られている。埋土は、住居内埋土3層土と同じ、もしくは3層土と地山土との混土が入っており、若干の炭化粒子も見受けられるが、特にP₄のみ炭化粒子が多く混入する。

炉：住居のほぼ中央に位置するものと推定される。深鉢の口縁へ体上半部を倒立させて用いた土器埋設炉で、およそ25×22cm径の規模であり、その東に接する様に立石を伴う。炉の周辺には焼土が分布し一部硬くしまった部分も見受けられること、埋設炉内に詰まった焼土や火熱を受けて赤化・艶化した土器、及び内面が若干赤化した立石の状況などからかなり使い込まれた炉であることが窺える。構築方法は、掘り込みに立石及び土器を同時に配して埋め込んだものと思われる。尚立石は34×45×7cmの偏平な石をやや外傾させて立てたもので、全体の半分近くを埋めている。

出土遺物

埋土中からの遺物の出土は無かったが、炉周辺の床面から深鉢の体部(2)、そして炉に埋設されて用いられていた深鉢(1)が出土している。埋設土器は、口縁部外反ぎみの平口縁で口唇部は丸みを帯び、胴部が膨らむ形をしている。施文は、口縁部2cm程なでて無文となし、その下は全体にRL縦回転の斜行縄文を施している。底部形態は欠損の為不明。全体に二次加熱を受けており、器内面の剝離が激しい。床面出土の深鉢は胴部のみ残存しているが、その持つ曲線は埋設土器に極く近似する。文様のパターンは把握できないが、手法は、RL縦回転の縄文を施し、沈線で区画したのちすり消して、そのあと鋸状突起をつまみ出している。また、場所により、沈線を引いた後縄文の側に沈線に沿って刺突列を施している。



第6図 VEm 竪穴住居址出土遺物

出土遺物から、縄文中期末葉の竪穴住居址と推定される。

V Dp 竪穴住居址 (第7・8図、写真図版4・12)

位置：調査区の西南端に位置するが、遺構の一部は西側を通る林道で既に破壊されている。
 検出：II層面にて検出。

形態・規模：柱穴を各隅に配した六角形を呈すと思われる。規模は、残存する対角線上にて4.5mを測る。

埋土：大別4層の自然堆積である。各層共に橙色バミスを含む。1～3層は柔らかく、2・3層では炭化粒子が目立つ。4層は、壁際で厚く床上で薄く被っており、他層よりやや硬くしまりも良い。また、壁際には一部崩壊土も見られる(5層)。

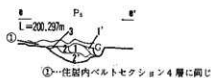
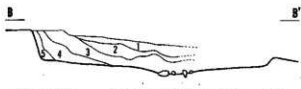
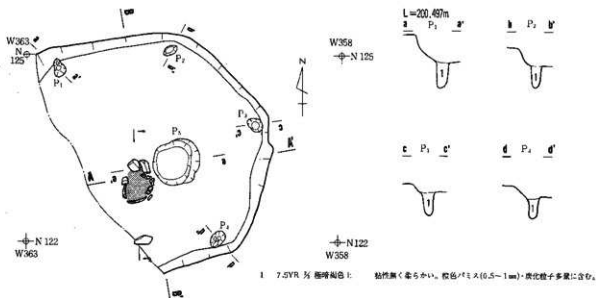
壁：床面からの立ち上がりは、直線的でやや外傾している。壁高は、北側で40cm・東側で25cm・南側で15cmを測るが、南側及び東側一部では検出時に下げ過ぎたため、本来より浅い壁となってしまう。壁面は割合しまっており、特に下位の地山層部分に於いては良くしまつて硬くなっている。

床：地山(IV層)を若干掘り込んだ平坦な面を使用しており、床面そのものは良くしまつて一部非常に硬い部分も見受けられる。また、中央やや南寄りに石囲炉が構築されているが、この部分は若干窪んだ様に低くなっている。その他床面に伴うものとしては、南西隅に埋め込まれた立石が挙げられる。

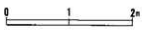
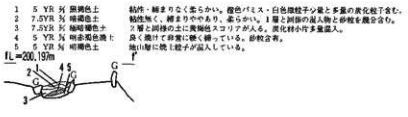
柱穴：P₁～P₄の4ヶを検出。何れも住居

第4表 V Dp 竪穴住居址柱穴計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
上端(cm)	31×20	25×14	27×20	30×20
深さ(cm)	37	35	40	34



- | | | | |
|---|------------|--|---------------------|
| 1 | 7.5YR 弱褐色土 | 柔らかくて締まりなくバヤバヤ。褐色バミス・砂粒含む。 | 硬い。 |
| 2 | 7.5YR 暗褐色土 | 粘性無く柔らかく炭分多量あり。上記炭人物と炭化粒子少量含む。 | 1層と同様であるが、比較的柔らかい。 |
| 3 | 7.5YR 灰褐色土 | やや大きめの褐色バミス(1-5mm)・砂粒含む。炭化粒子多量含む。 | 非常に硬い。 |
| 4 | 7.5YR 暗褐色土 | 粘性無く強く比較的硬い。地山をブロック状に含む所あり。褐色バミス多量に含む。 | 2層と同様であるが比較的柔らかくない。 |
| 5 | 4層+地山。崩壊土。 | | 非常に硬い。 |

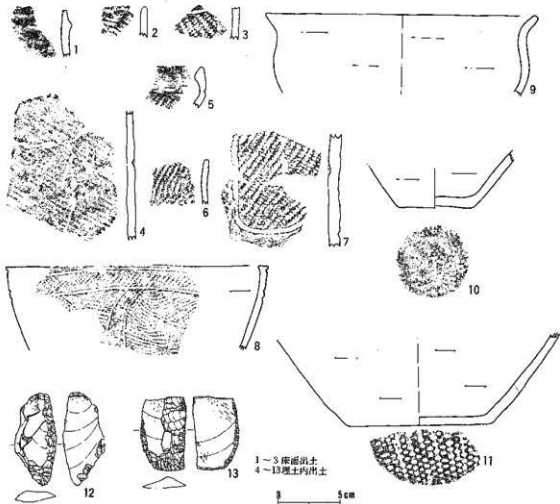


第7図 V D p 竪穴住居址

の各隅にそれぞれ穿たれており、深い。また、他のV Ei・V Em・VI Ea 住の柱穴は壁に向かって斜めに穿たれているのに比べ、本住居では垂直に穿たれており、柱穴の壁もしっかりしていて残りも良い。埋土は何れも柔らかく、橙色パミスおよび炭化粒子が混入している。単層。

炉：中央やや南寄りに石囲炉がある。歪んだ楕円形のプランを呈し、偏平な石を立てて用いている他、人頭大から拳大位の石を埋め込んで構築している。炉のセクションに見る1・2層は住居内埋土3・4層に相当すると思われ、炭化材小片や土器片の散在する3層上面が実際の使用面に相当すると考えられる。また、下位焼土4層の焼きしまりから、この炉の使用頻度の高かったことが窺える。

尚、本炉址の南60cmに立石があるが、V Ei-2住・V Em 住に見られた炉にともなう立石とは、石の位置や火熱を受けていない等差異があり、同種のものとは見出し難い。又、炉の東に



第8図 V Dp 壁穴住居址出土遺物

隣接して、床面下に規模80×70cm・深さ25cmの皿状のピットが検出されたが、埋土の状況から見て住居址にともなわない古いピットと判断された。このピットからの遺物の出土は無かった。

出土遺物

石囲炉の3層より4片、埋土中より多数の土器片および石器2点が出土している。炉出土のものは丸い口唇部を持ち、口縁部1cm程すり消して無文とし、LR原体を縦に転がした縄文を持つ口縁片(2)、横方向に1本鐮状の隆起帯を持つ無文の頭部片(1)、RL横回転の縄文に沈線とすり消しを持つ体部片(3)、RL横回転の縄文を持つ体部片(4)である。埋土中からは、なで・横位刺突列・RL縦回転縄文を施文してある口唇部の肥厚した内湾する口縁片(5)、RL縦回転の施文を持つ外反ぎみの口縁片(6)、RL縦回転の縄文を沈線で区画し、外側をすり消している体部片(7)、口唇部を平坦になでた内湾した口縁部を持ち、LR縄文と沈線区画によるすり消し文様の土器片(8)、外反した平口縁を持ち、全面をなでて無文とし、底部に網代痕を有する鉢形土器数点(9~11)などがある。石器は埋土1層中より、石匙、不定形石器が出土している。石匙(13)は刃部片側のみ両面調整されている縦形石匙である。つまみ部が欠損している。不定形石器(12)は片面に剝離面を残し、片面縁辺部の片側のみ調整された刃部を持つものもある。

出土遺物から、縄文時代中期後半から末頃の竪穴住居址と推定される。

VI Ea 竪穴住居址 (第9図、写真図版5・13)

位置：調査区南端で、沢に面した西側斜面に位置するが、住居の東側及び南側で侵食を受け、特に南側は全く流出していた。

検出：II層面にて検出。

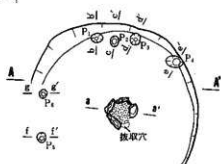
形態・規模：石囲炉を中央に配し壁際に柱穴を穿った住居址。平面形は残存部分から推定して径2.85mの円形を呈すると思われる。

埋土：1・2層共に暗褐色土層で混入物も類似するが、前者が比較的柔らかで混入物が少量であるのに比べ、後者は硬くしまっており、パミスや炭化粒子の混入が増える。自然堆積。

壁：西から南側にかけての半分近くが流出しており、東側も侵食されてかなり壁が低くなっている。残存している西及び北壁は、やや外傾した直線的な立ち上がりを見せ壁高も55cmを測るが、東では壁高2~10cmしか残っていない。また、壁自体は下位において地山層であるため硬くしまりも良いが、上位ではしまりが弱い。

床：床面は殆ど凹凸が無く平坦で硬いが、南東に向かって若干傾斜している。貼床等は見られず、地山面を掘り込んでそのまま用いている。

W353
N 121

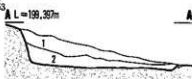


W349

N 121



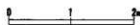
N117
W353



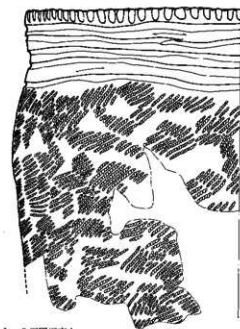
N117
W349

- 1 7.SYR 瓦 暗褐色土
- 2 7.SYR 瓦 暗褐色土

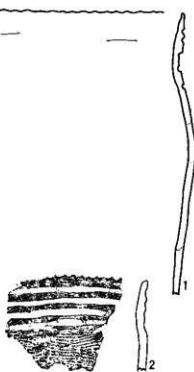
粘性無く柔らかい。褐色パミス少量、炭化粒子多量を含む。
粘性あり柔らかい。小石・褐色パミス・炭化粒子少量含む。



- 1 7.SYR 瓦 暗褐色土 粘性無く柔らかい。白色炭粒子・褐色パミス・炭化粒子少量含む。
- 2 7.SYR 瓦 暗褐色土 1層と似るが、褐色パミス・炭化粒子多量に入り、硬く脆る。



1~3 石器伊直上



第9図 IV E a 竪穴住居址・出土遺物

柱穴：6ヶの検出。P₁・

第5表 VI Ea 竪穴住居址柱穴計測値一覧

P₂・P₃は何れも壁際に穿たれており、P₄・P₅についても壁際に存していたと推

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
上端(cm)	15×18	16×15	18×16	28×20	15×16	14×12
深さ(cm)	10	9	8	12	7	8

される。また、各ピットとも壁に向かって斜めに穿たれており、規模形態ともP₄を除いて殆ど同様である。埋土は何れも単層で、総て住居内埋土2層が入り込んでいた。

炉：住居址中央やや東寄りに石囲炉がある。南東部分に石は見えないが、抜取穴があることから、六角形に近いプランを呈するものと考えられる。炉の構築は、掘り込み（2層部分）が見られることから、掘り込んだ後に石を竪に配して埋め戻す方法を取った様である。尚、炉内埋土1層上面より、土器片が出土している。

出土遺物

石囲炉の直上から、粗製の深鉢片2点（1・2）、体部片1点（3）、埋土からは体部片2点の出土を見た。深鉢は、いずれも口唇部に棒状工具による刻目又は指による圧痕を持ち、頸部に4本及び5本の沈線めぐるし、胴部にLR原体による縄文を施す。他の土器片は、炉出土のものがLR原体、埋土のものがRL原体による縄文を有するものである。

炉直上出土の遺物から、縄文時代晩期中葉の竪穴住居址と推定される。

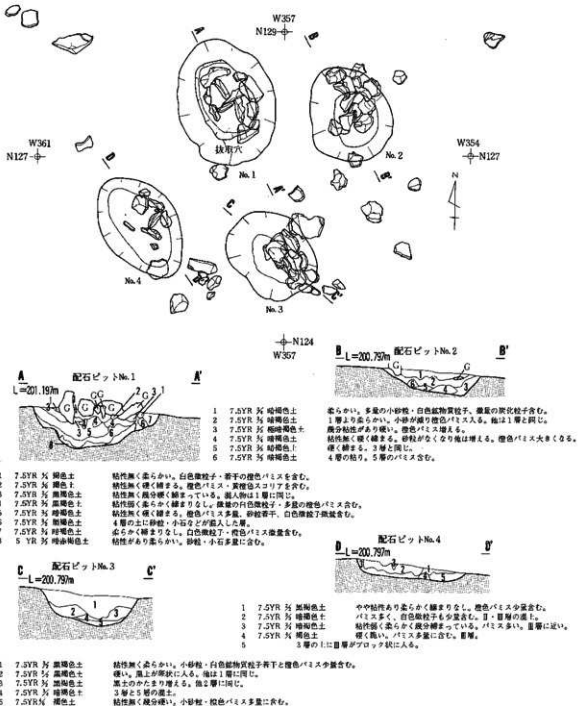
2. 配石土墳

V Em 配石土墳群（第10図、写真図版6・7）

位置：沢の西側緩斜面に位置し、No 1～4が菱形に並ぶ。周辺にはV Ei 住・V Em 住・V Em 石囲炉・V Dp 住があるが、特にV Em 住とはNo 2及びNo 3が重複関係にあり、何れも本遺構の方が新しく、V Em 住を切っている。

検出：I層面で既に配石の一部は認められたが、全体を検出したのはII層面である。また、この面では下位の土壌プランは全く検出できず、No 1～4の何れも小トレンチのセクションに依って初めて土壌の存在が確認されたものである。尚これら配石土墳群の他にも周辺に同種の石が散在していたが、何れも単位としてのまとまりを欠き、セクションの観察からも全く土壌等を伴わないところから、遺構としては敢えて取り上げない。

形態・規模：上部配石の保存状態が最も良いのはNo 1であり、他のNo 2～4についても本来的にはNo 1と同様の形態であったと考えられるものの、何れも崩れたり流されて石が散在した



第10図 VEm配石土坑群

第6表 V Em 配石土壌群 土壌規模一覧

	平面形	上端(cm)	下端(cm)	深さ(cm)	長軸方向	
No 1	楕円形	204.5×158.5	119.0×73.4	63.0	N17° W	底面に大きく方形の掘り込みあり。
No 2	やや不整な楕円形	161.0×134.0	85.5×63.0	35.0	N31° W	
No 3	やや不整な楕円形	156.0×120.5	96.0×55.5	51.0	N41° W	底面に一部窪み
No 4	楕円形	186.0×121.5	148.0×72.5	20.0	N33° W	

りしている。また、配石下に構築されている土壌は、何れも楕円形のプランを呈し、その長軸方向も真北より西へ25～40°前後の範囲で北西を向いている。壁及び底面はしっかりしており、しまりも良く硬い。壁の立ち上がりは、緩やかに外傾するものが殆どであり、底面もNo.1を除いて、No.3に若干の窪みがあるものの緩やかな皿状を呈している。

埋土：何れの土壌も人為堆積であり、基本層序のII層土・III層土あるいは地山土などが雑多に埋め戻されたもので、基本的には各土壌において用いられた土に変化は無いものと考えられる。また、断割セクションから見る構築方法は、まず楕円形の土壌を掘った後に直ぐ埋め戻したもので、その際直上に石を立てて埋め込み配置したものと推される。

配石土壌 No.1 (第10図1、写真図版6)

No.1は、上部配石の保存状態が最も良好であるだけでなく、下部の土壌の規模も最大であり、下面に方形の掘り込みを持つ。配石は大きめの石を立てて全体を楕円形にまとめ、更に中央部にも十字を切った様に配して構築してあるが、一部抜き取り穴だけが認められ、石が残っていない部分もある。下に造られている土壌は、配石よりも若干大きく、底の方形掘り込みは上端128×87cm・下端119×73cm・壁高30cmの規模で、床面は平坦である。また、埋土セクションからは、上端から下端まで一時に埋め戻したものであることが観察できる。遺物の出土は無かった。

配石土壌 No.2 (第10図2、写真図版7)

上部構造(配石)は、No.1と同様の形状を呈していたと思われるが、東寄りに崩壊した形で検出された。また、下部構造(土壌)においても若干浅めではあるものの、特徴的なことは認められず、遺物も出土していない。

配石土壌 No.3 (第10図3、写真図版7)

上部構造はかなり崩れてはいるが、まだ単位的に捉えられる状態であった。下部構造にては、

底面に若干の窪みが認められるが、No 1 に見る方形の掘り込みの如く整然とはしておらず、意図的な窪みであるかどうかは定かでない。また、出土遺物は、土壌上面からの炭化した木の実若干と、東壁際上部からの土器片 1 点が挙げられる。

配石土壌 No.4 (第10図4、写真図版7)

配石は殆ど崩れて散在してしまっている為、下部土壌は長いトレンチを以って確認した。他の土壌に較べて浅く、遺物の出土も見ない。

3. 集石遺構

V Dd 集石遺構 (第11図2、写真図版8)

位置・検出：調査区北側の V Dd ビット・V Ea の集石に隣接。検出面は II 層。

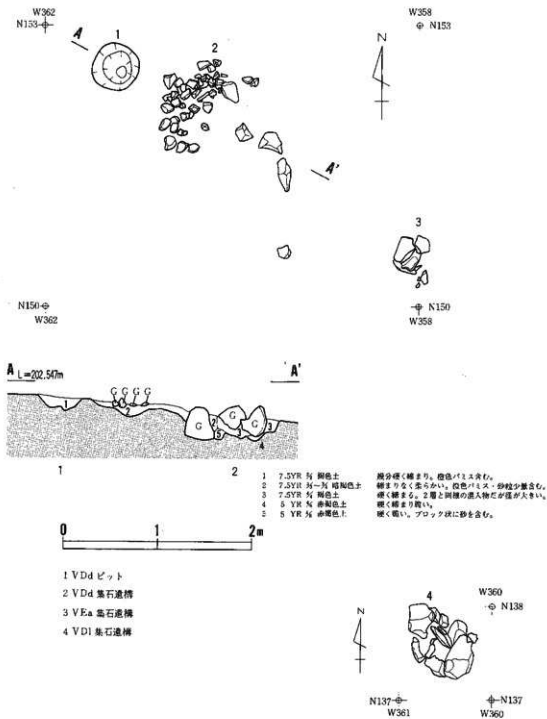
形態・規模：拳大程の小さめの石を多く用いて半月から楕円の形状に配しており、更に大きめの石を、東の V Ea 集石遺構の方へ延びる様に配置している。セクションの観察からは、石を埋め込む為の極く浅い掘り込みが見られる程度で、下にビット等は伴っていない。また、V Dd ビットと本遺構は、前者が自然堆積、後者が人為堆積であり、埋土にも差異があることから、関連性は見出し得ない。V Ea 集石遺構とは、石の配し方に差異があるものの、本遺構の石が延びているという事から、何らかの関連性も考えられる。

V Ea 集石遺構 (第11図3、写真図版8)

II 層面の検出。全体的なプランは50×30cm程の台形状を呈しており、構築は薄手の石を平に並べているもので、全く掘り込み等は見られない。また、遺物等は出土していない。

V D/ 集石遺構 (第11図4、写真図版8)

大きめの石 (25~50cm) を楕円形に配しており、その形状からは V Em 配石土壌群との類似性も窺えるが、断割セクションからは微かな掘り込みが見られる程度で、下面にビット等は看取し得なかった。遺物は出ていない。II 層面での検出。



第11図 ビット・集石遺構

4. ビット

V Dd ビット (第11図1)

V Dd 集石遺構の直ぐ西側に位置するビットで、径48.0×48.0cm・深さ約13cm(一部窪んで18cmとなる)を測るほぼ円形のプランを呈している。断面形は楕円状を呈し、埋土はバミス類を若干含んだ単層の自然堆積である。尚、遺物は、底面より石片が1点出土している。II層面の検出。

V Ei ビット (第12図、写真図版8)

平面形は南方向で若干張り出したやや不整形な形をしており、上端で134.5×111.0cm・深さ約20cmを測る。南側では軽い段となっており、8cm位と浅い。断面形は、東西方向で浅い楕円状を呈する。埋土は3層から成る自然堆積である。遺物は、1層及び床面壁際から土器片が1点づつ出土している。検出面は、II層下面。



第12図 V Ei ビット

V Ea ビット 1・2 (第13図1、写真図版8)

当区の最北に検出されたビットで、ビット1底面下にビット2が納まった様に重複している。新旧関係は、ビット1が2を切っており、ビット1が新しい。

形態・規模は右表の如くであるが、ビット2の深さはビット1の底面からの計測であり、壁際での切り合い部分から観察すると、少なくとも実際には20cm以上はあったものと思われる。

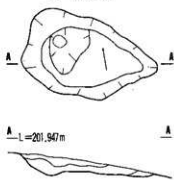
第7表 V Ea ビット規模一覧

	平面形	上端(cm)	深さ(cm)	断面形
ビット1	楕円形	167.0×87.0	33.0	楕円形
ビット2	ほぼ円形	45.0×40.0	(残存値) 10.0	楕円形

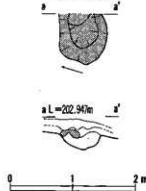
1. V Ea ビット 1・2



2. V Ee ビット



3. V Ea 焼土



第13図 ビット

ピット1埋土は顕著な自然堆積で、6層から成り、1・2層には粉状バミスが混入している。ピット2は、黒褐色土の中に黄褐色土が若干斑状に入ることから、或いは人為堆積とも考えられるが、判然としない。尚、遺物等は出ていない。II層面の検出。

V Ee ピット (第13図2、写真図版8)

炭化粒子を多く含むピットで、2.14×1.30mの不整形を呈する。沢沿いの東向き斜面に位置するため、検出面からの深さは西側で36cm、東側で10cmとかなりの差異がある。埋土は、3層から成る自然堆積で、各層共に炭化粒子を混入している。遺物は、1層から土器片が出ているのみである。

5. 焼土遺構・炉址

V Ea 焼土遺構 (第13図3、写真図版5)

調査区の北側東端にあり、V Ea ピットの5m東に位置するが、東側は調査範囲外である為、一部欠いたプランとなっている。焼土そのものは薄く、全体に炭化粒子が入っているものの、短期間の使用であったと思われる。II層面における検出。遺物等は出ていない。

V Em 石囲炉 (第14図、写真図版5)

位置・検出：本遺構は、V Em 住・VI Ea 住の中間に位置する。地山面(IV層)での検出。
形態・規模：50×48cmの方形を呈し、石はすべて立ててあったが、掘り込みは確認できなかった。石の深さは、検出面より20cmを測る。尚、中軸線は、真北から26°西に傾く。

埋土：3層からなる。1層は石囲炉内に堆積した覆土で、炉に伴う層は2・3層である。2層は良く焼けた焼土で、中央に窪みがあり、1層土及び土器片が入っている。3層は、2層の焼土粒子と共に若干の炭化粒子が混入している。尚、本石囲炉は、本来的には竪穴住居に伴うものと考えられたが、柱穴・壁何れも検出されなかった。

出土遺物

炉の中より土器片が多数出土、接合して深鉢(1)となる。深鉢は、口縁部外反ぎみの平口縁で口唇部は丸味を帯び、体部が口縁部より微かに膨らむ形をしている。底部形態は欠損の為不明。施文は、口縁部1～2cm程なでて無文と成し、その下は結節を伴うLR原体縦回転の斜行縄文を全体に施す。内面は丁寧に横方向になでである。他に小片が2点、丸い口唇を持つ無文の口縁部片(2)、LR原体縦回転の縄文を施した体部片(3)が出土している。

出土遺物から、縄文時代中期末葉の遺構と考えられる。

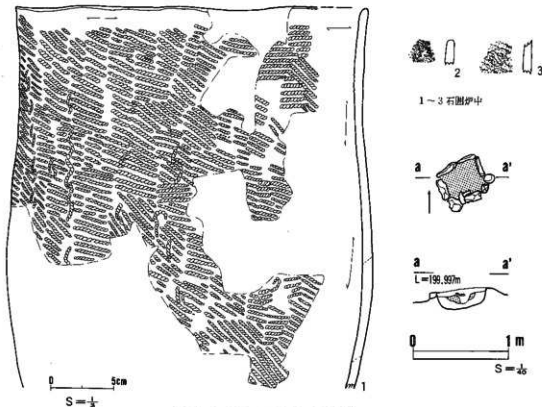
6. 遺物包含層

V Ef 遺物包含層 (第15・19・21図、写真図版9)

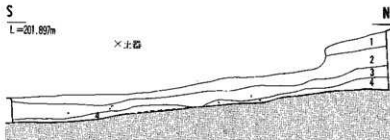
本区中央を流れる沢の涌口付近に於いて、III層下位面より多量の土器片が検出された。遺物は、涌口付近に流れ込む様な形で西・北・東側斜面に広がっており、セクションに於いては基本層序II層(セクション図3～4層)に最も顕著に観察できた。尚、涌口以南の下流に於いては、殆ど遺物等は発見されなかった。

出土遺物

3・4層(基本層序II層)より、多量の土器小片及び磨石等が出土している。出土土器片はいずれも小さく、磨滅しているものも多く、ほとんど復元は不能であった。それらは、口縁部に突起を持ち、沈線を用いた文様を有する土器がほとんどである。口縁部は、山形突起以外には、平口縁で口唇部に縄文を転がすもの(64)その他がある。山形突起にはシンプルな形のもの(67)と、頂部に2～3の刻目を持つもの(57・62)とがある。文様はその下端を1・2本の沈線で

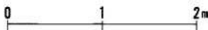


第14図 V E m 石磨伊中・出土遺物



○土器包含は3層下位から4層部分

- | | | |
|---|----------------|-----------------------------------|
| 1 | 7.5YR 7/4 赤褐色土 | 粘性強く塊いが強く締まる。小砂粒・塵色パイスが少量含む。 |
| 2 | 7.5YR 6/4 褐色土 | 粘性より柔らかく締まりあり。粉砂パイス少量、白濁質物質が少量混入。 |
| 3 | 7.5YR 6/4 褐色土 | 粘性強く塊りが締まるが脆い。土人物は2層に同じ。 |
| 4 | 7.5YR 7/4 赤褐色土 | 粘性強く柔らかい。塵色パイスが少量含む。 |



第15図 V E f 遺物包含層

区切っており、胴部は斜行縄文を施すのみだが、57は胴部にもボタン状の貼付けと沈線による文様を持つ。文様では沈線による蛇行懸垂文(61・66)が多い。又、竹管文をともなうもの(58・59)、羽状縄文を施すもの(63)などがみられる。

石器は、縁片部のみにも磨痕のみられる一部欠損した槽円形の磨石(第21図10)、両面に磨面と凹みがある凹石(14)の2点が出土している。14は一面は凹みが浅く、端部には顕著に敲打痕が形成されており、縁片部にも打痕がみられる。

7. 遺構外出土遺物

第I群土器 (第16図1～第17図23、写真図版14)

I群1類(第16図1)：深鉢が1点出土している。器形は、口縁部がわずかに外反する平口縁、口唇部外面は軽く削られる形に先端が細まっている。胴部は屈曲が見られず、底部は欠損している。文様は、口縁部に巾3mm、長さ2.5～3cmの縦位の深い沈線がめぐっている。その文様の下、胴部上位に13～14条の横位平行沈線がめぐり、その下は斜位の条痕文が施されている。以下は欠損の為不明である。器内面は丁寧に横なで。焼成は良い。

I群2類(第16図2~19)：爪形刺突文、貝殻腹縁圧痕文、および貝殻条痕文を有する土器群。平口縁。尖底深鉢。すべて小片もしくは欠損部の多いものであり、器形が完全に判断できるものは無い。但し、平口縁以外、尖底以外の例は無い。胴上部に軽く屈曲のあると思われるものが一例のみ(8)ある。口縁部は、内湾ぎみにつまみ出されているもの(4・6・10・11)と、外反ぎみのもの(2・5)とがあるが、すべて外傾している。口唇部はほとんど外削ぎの形に成形されており、その外向きの口唇面に、棒状工具によると思われる刻目を持つもの(2)、貝殻腹縁圧痕文を持つもの(4・6・10・11)がある。口唇部無文のものは、外削ぎの形になっていない一例のみである(5)。口縁部から体部にかけての文様は、爪形刺突文、貝殻腹縁圧痕文があり、無文その他は無い。斜位の爪形刺突を二列にめぐらすもの(2・3・5・7)、横位の爪形刺突を二列めぐらし、その下を貝殻腹縁圧痕で施文するもの(4・6)、胴屈曲部に斜位の爪形刺突文を一列めぐらし、その上に貝殻腹縁圧痕が横走するもの(8)、斜めに走る貝殻腹縁圧痕のみのもの(10・11)とがある。底部付近は貝殻腹縁圧痕文、もしくは無文である(13~19)。図9の土器のみ、はじめ、厚5~7mmの土器内面を外面と同じ横走擦痕で調整のうち、1~4mm厚に化粧粘土を重ね貼りして縦になでている(12)。すべて焼成は良く、繊維は含まない。

I群3類(第17図20)：一個体みの破片が出土。器形は、口縁部が内湾し胴部との接合部で屈曲している。突起数4~5と推定される波状口縁を成す。胴部以下は欠損しており不明。文様は口縁部内側上端に連続刺突文一条、外側に波状沈線を一条めぐらす。口縁部は上下に向い合う三角形の区画で構成される。三角形は、外側の大三角形が並行する二本の沈線で描かれ、その沈線間(巾1.5~2.5mm)RL原体による縄文を転がしている。大三角形の内側に2つの小三角形が1本もしくは2本の沈線で描かれ、最内側は、貝殻腹縁圧痕による小波状文で描かれている。各三角形の頂点の内側もしくは外側には小さな突起が施され、又はボタン状の貼付けが見られる。胴部との接点の屈曲にも、沈線、回転縄文、貝殻腹縁圧痕文による区画を施している。焼成は良く、胎土中に雲母、石英、角閃石等を含む。繊維は含まない。

I群4類(第17図21~23)：V E i 竪穴住居址の埋土上部から出土したものであるが、ここで述べる。小片が3ヶのみであり、胎土・焼成等から同一個体の破片と思われる。器面にみみずばれ様の微隆起線を、斜めおよび横に施す。焼成は良く、繊維は含まず、石英粒を多く含む。

第II群土器 (第17図24～第18図52、写真図版15・16)

前期の土器は各種の文様を持つ小片多数の出土を見た。

第17図24～27：口縁部の小片のみ4点、同一個体の破片と思われる。口縁部断面は内削ぎの形を成し、内湾ぎみ。口唇より1cm前後下にL R 燃糸圧痕を2条めぐらす。その上下に棒状工具による斜めの刻目をめぐらす。場所により上下とも向きを変えている。焼成は良く、胎土に繊維を含む。石英粒、角閃石粒含む。

第17図28～30：全体形は不明。口縁部外反ぎみで緩い山形を成し、口唇部を軽くなでである。0段多条の斜行縄文を施すが、その後同一原体を用いて、口縁部近くに2cm程の巾の横走縄文を施す。焼成は良い。胎土に繊維を含む。石英、角閃石粒を含む。

第17図31～33：器形は不明だが外反ぎみの平口縁と思われる。左燃りの0段多条原体を横回転させたもの(31・32)は焼成が良くない。右燃りの0段多条原体を縦回転させたもの(33)は、施文後口唇部を平坦になでており、焼きしまっている。

第17図34～36：全体器形は不明。1点のみある口縁片(35)は内削ぎの形をとる。R L と L R の原体を並行して横回転させて羽状と成す。いずれも繊維と石英粒を含み、角閃石を含むものもある。

第17図37～39：器形不明。R L と L R の原体による結束のある羽状縄文を施す。いずれも焼成は良く、胎土に繊維、石英粒を含む。39に穿孔あり。

第17図40：体部小片1点のみで器形不明。結束をとまなうL R 原体による斜行縄文を施す。焼成は良く、胎土に繊維、石英粒を含む。

第17図41：口縁部片が1点のみ出土。直立した平口縁の口唇部をなでて平坦にしてある。口縁部横並行3段にL R 原体のループ文をめぐらす。その下はL R 原体横回転による斜行縄文を施す。焼成は良く、胎土に繊維を含む。石英、斜長石、角閃石を含む。

第17図42～43：口縁部・体部と2点出土しているが、同一個体と思われ、屈曲の無い深鉢形と推定される。口縁部は直立し、口唇部に押圧による小波状を呈する。施文は器外面全体に、L R の1段多条と思われる原体を横回転している。焼成は良く、胎土に繊維を含む。石英・斜長石・雲母を含む。

第18図44：全体の器形は不明。口縁部は直立し、口唇部に半門状の押圧痕がめぐる。その為口唇部が厚みを増している。体部全体に複節の縄文(L R L)を施す。焼成は良く、繊維を含む。

第18図45：外反する口縁を有する甕形土器。口唇部に斜めに縄文(原体不明)を押圧して波状にしている。外面口唇直下に4～5条の縄文(原体不明)を横走させ、その上に口縁部に沿って波状をとりながら、巾5mm前後、厚さ1～2mmの隆帯を、横走縄文にかおせて貼り付けて

いる。そのあと隆帯も含めて全体に、直前段反燃り(RR I)の原体横回転による縄文を施している。又、内面には口縁部の外反する部分(口唇下4~5cmまで)に、外面と同じ斜行縄文を有す。胎土は粗いが焼成は良い。繊維、石英、斜長石、角閃石等を含む。

第18図46~48:口縁部上端で外反ぎみもしくは内湾ぎみとなるほぼ直立した平口縁を持ち、RL原体を縦もしくは横に回転させた斜行縄文を有する。

第18図49~52:底部付近の土器片は丸底を思わせるものが多い。種々の縄文を施しており、すべて繊維を含む。

第III群土器 (第18図53~55、写真図版16)

内湾する口縁部に1本沈線がめぐり無文の土器(53)、V Dp 竪穴住居址の埋土より出土したものと同一形態の土器片(54)、台付鉢の無文の台部(55)が出土している。いずれもV Dp グリッドからの出土であり、V Dp 竪穴住居址と関連を持つ遺物と思われる。

第IV群土器 (第18図56、写真図版16)

折返しの平口縁を持つ鉢形土器が出土している。体部に屈曲を持ち、直線的に外反するが、体下半以下は欠損しており、全体形は不明、径32cm(推定値)と大型である。口唇部及び体部に、LR原体による斜行縄文が施文される。

第V群土器 (第20図71、写真図版17)

台付鉢の底部から台部にかけての無文の土器片が出土している。

土 偶 (第20図73、写真図版17)

腕と思われる土器片1点の出土のみである。首から肩に当たると思われる部分に3本、手首に当たる部分に2本、すべて外側に沈線が横に入る。手先は平たくつまみ出している。

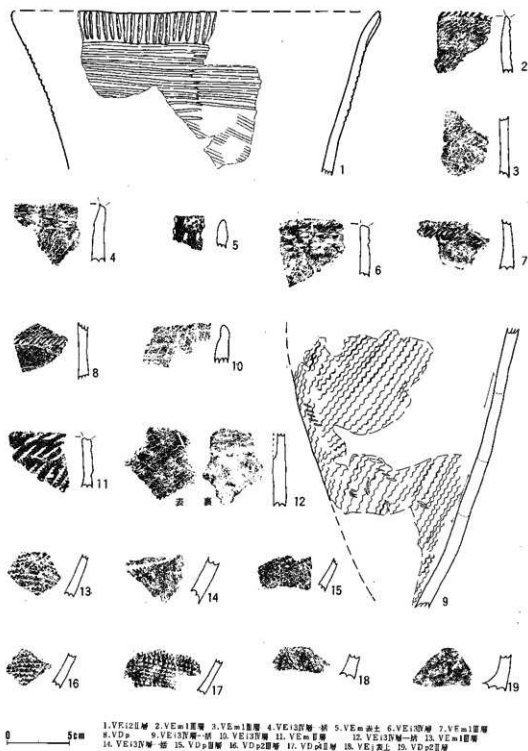
石器 (第20～22図、写真図版18)

石器は13点出土している。剥片石器、石斧、磨石、敲石、凹石などで、剥片石器は石筥・石匙・石鏃、石斧は磨製石斧である。石筥(4～7)は、粗い加工のもの(5・6)、丁寧な調整が見られるもの(4・7)がある。4は弓形を呈する縦長の剥片を素材とし、舟形の側面を尾する。5・6は一面に自然面を残し、刃部に粗い調整が見られる。石匙(1・2)は縦形のもので、刃部は片面から調整されている。1は片側のみ丁寧な調整が見られ未製品である。石斧(15)は両刃の定角式磨製石斧で基端部と刃部の一部が欠損している。石鏃(3)は無茎の基部が直線的なもので先端部が欠損している。磨石(8・9・11)は、磨痕が両面と縁辺部に見られるもの(9・11)、縁辺部だけのもの(8)がある。9・11は端部に打痕も見られる。8は磨面が帯状を呈する。敲石(12・13)は断面が三角形を呈し、稜部に磨痕も見られる。いずれも欠損している。

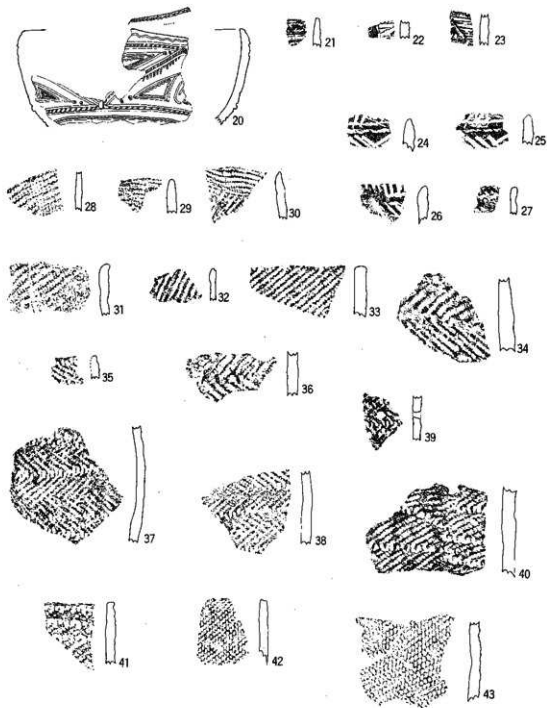
第8表 石器観察表

() 残存値

№	名称	出土地点	大きさ(cm)			重量(g)	石質	特徴	図番号
			長さ	幅	厚さ				
1	石匙	V D J 日層	6.6	2.3	0.7	12.7		刃部片側のみ調整、未製品。	第1図
2	石匙	VI Ea 日層	6.3	2.6	0.5	9.2		先端部未調整。	第2図
3	石鏃	V Ea 表土	(2.6)	1.0	0.4	(1.2)		無茎石鏃、欠損品。	第3図
4	石筥	V Em 表土	8.7	4.6	1.6	60		片面に剝離面を残す。舟形の側面を呈する。	第4図
5	石筥	IV Dp 表土	8.3	3.7	1.9	60		全体に粗い加工、片面に自然面を残す。	第5図
6	石筥	V Em 3 Ⅲ層	6.4	3.9	1.6	39.4		両面に粗い加工が施される。	第6図
7	石筥	V Em 3 Ⅲ層	6.2	4.6	1.4	49		片面に自然面を残す。	第7図
8	磨石	V Dp 4 Ⅱ層	8.5	7.8	4.5	27.5		周辺部に磨痕が見られる。	第8図
9	磨石	V Em 1 Ⅲ層	9.1	8.4	2.6	300		円盤状の断面を呈し、両面と周辺に磨痕あり。	第9図
10	磨石	V Ef Ⅲ層	(10.2)	9.1	5.3	(785)		縁の縁辺部に磨面が帯状にあり、端部に打痕が見られる。	第10図
11	磨石	V Em 4 ?	11.6	8.7	3.6	705		両面と周辺部に磨痕が見られる。両端部に打痕あり。	第11図
12	敲石	V Em 表土	(7.0)	3.6	3.6	(140)		三角の断面を呈し、端部に打痕が見られる。	第12図
13	敲石	V Em 表土	(7.3)	6.1	4.0	(295)		三角の断面を呈し、端部に打痕、縁部に磨痕が見られる。	第13図
14	凹石	V Ef Ⅲ層	(10.0)	7.8	5.3	(655)		両面に磨面、凹があり、両端部欠損。	第14図
15	石斧	V Em 3 Ⅲ層	(11.5)	4.4	2.0	(240)		磨製石斧、両刃、基端部と刃部の一部欠損。	第15図



第16圖 遺構外出土遺物



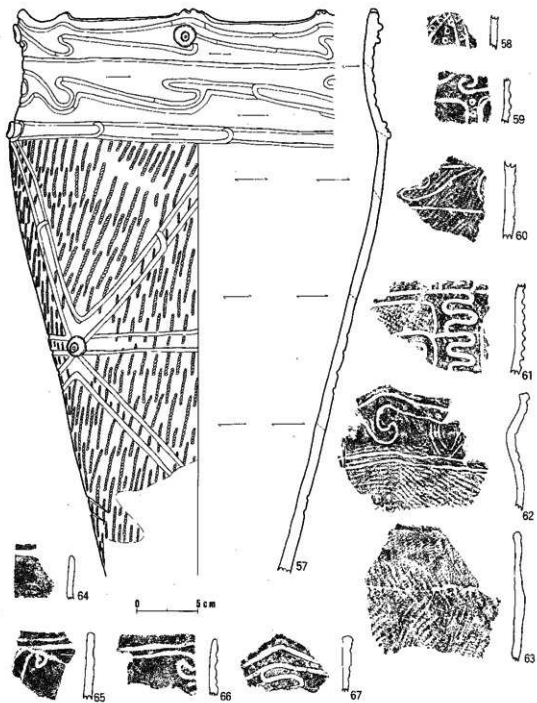
20. VE13IV層一碎 21. VE1 22. VE1 23. VE12層 24. VE1 25. VDp2層 26. VDp2層
 27. VE13層 28. VE14 29. VE1m 30. VE12層 31. VE11層 32. VE12層 33. VE13層
 34. VE1m層 35. VE12層 36. VE1m層 37. VE12層 38. VE12層 39. VE12層 40. VE1表土
 41. VE12層 42. VE11層 43. VE12層

0 5cm

第17圖 遺構外出土遺物

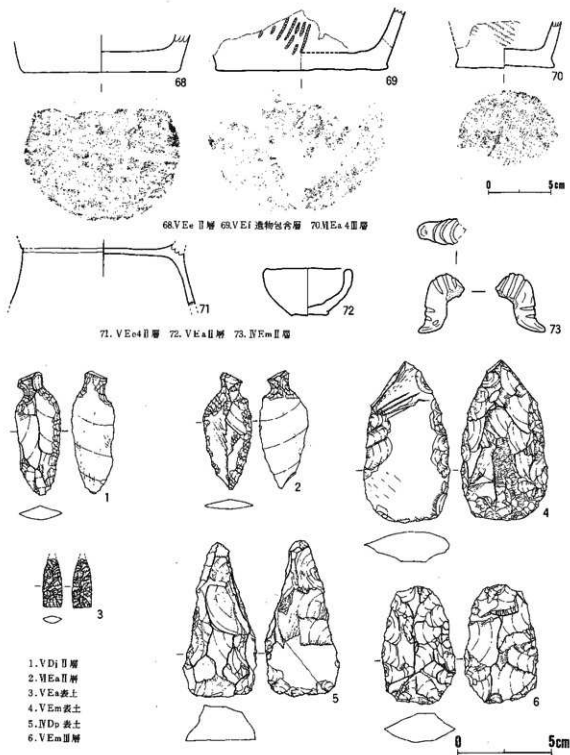


第18图 遗構外出土遺物

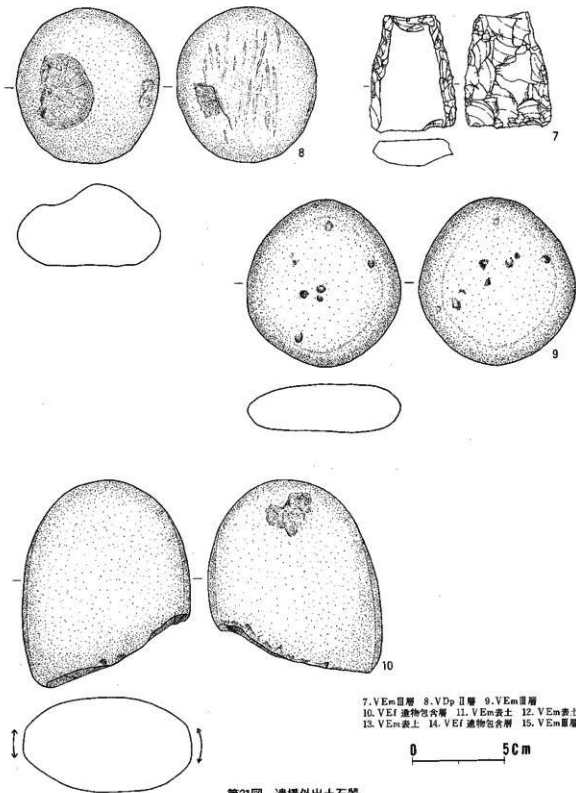


57-64、66、67 V E f 遺物包含層 65, IV E a II 層

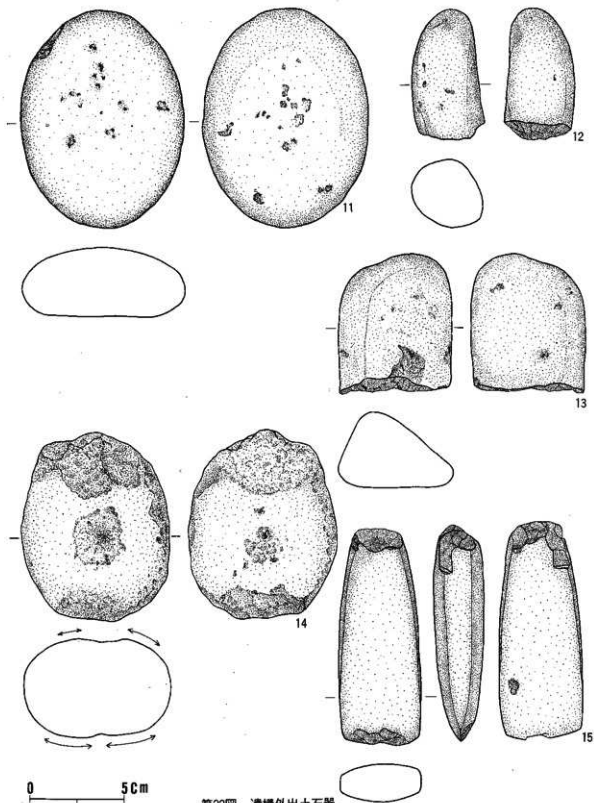
第19圖 V E f 遺物包含層出土遺物



第20圖 遺構外出土遺物



第21圖 遺構外出土石器



第22圖 遺構外出土石器

III ま と め

南々東に向かって張り出した台地上に住居址その他の遺構が集中しているが、調査区外西側に、調査区に倍する面積で台地は広がっており、連続する遺構群の存在が推定される。縄文時代早期・前期の遺物も多く出土しているが、その多くは調査区西へりに集中しており、台地西側の包含状況の解明が待たれる。又、調査区北西200mには、沢を隔てて20mほど登る小山があり、その南から南西に向けての斜面上に、縄文後期初頭と思われる土器片散布地(館の森遺跡)があり、その東側は侵食を受けているが、その沢が一時期調査区東へりを侵食したものと思われる。V E_f 遺物集中地点はその旧沢の屈曲部にあたり、その堆積遺物は館の森遺跡からの流れ込みである可能性が高い。

1. 遺 構

住居址は重複したのもも含め、5棟検出している。V D_p および V E_m の同竪穴住居址はその出土遺物からほぼ同時期(縄文中期末葉)のものと推定し得るが、他の3棟については、V E_i - 1 住が縄文後期中葉、V E_i - 2 住がそれより古い時期、VI E_a 住が縄文晩期中葉と、時期的なまとまりはみられない。本調査区検出の住居址にみられる特徴的な事ながら、V E_i - 1 住及び V E_m 住の炉にともなう立石と、V D_p 住の六角形と推される竪穴プランがあげられる。多角形竪穴住居址は、観音堂遺跡(大迫町)^①、長者屋敷遺跡(松尾村)^②、湯沢遺跡(都南村)^③などに多くの類例が見られるが、いずれも縄文時代中期末葉の遺構と報告されている。又、立石のともなう炉については、前述長者屋敷遺跡に二例、曲田 I 遺跡(安代町)^④にて数例報告されているが、いずれも単独の立石が地床炉に密接する形であり、時期的にも V E_m 住と大差ない。しかし V E_i - 1 住に見られる形(地床炉から少し離れて立石をともなう)は、他の時期でも明確な類例は探し得ず、特異な形態と言える。

配石土壌については、その多くは崩れてはいるものの、規模・形態の類似、相互の配置、検出面等から見て、ほぼ同一の時期に構築されたものと考えられる。遺物は、土壌の埋土中から時期不詳の細片3点のみの出土であり、遺構の時期決定は不能である。V E_m 竪穴住居址を切っている事、又、V E_i - 1 竪穴住居址と同一検出面と見られる事等から、縄文時代中期末葉以降後期のある時期までと言う以上には、構築時期を狭め得ない。但し、青森県一ノ渡遺跡^⑤、秋田県大岱 II 遺跡^⑥、二戸市下村 B 遺跡^⑦、そして当村にて昭和59年に調査したけや木の平団地遺跡(未報告)における配石土壌などの類例からは、縄文時代後期前半頃のものと推定し得る。埋

土の状態からは人為的な埋めもどしによると思われ、又上部組石が土壇と同時に構築されている点等、墓塚としての可能性は強いが、No 2・No 4 など20～30cmの浅いものもあり、又、土壇分析でも明確なリンの含有は認められない等、墓塚と言い切る積極的な根拠には欠ける。

2. 遺物

当区出土の土器は、縄文早期から同晩期まで出土しており、順を追って述べる。

第I群（縄文時代早期）の土器は4つに類別できる。1類は白浜式の古い段階と推定される土器であり、大新町遺跡（盛岡市）^①出土遺物に類似の物が見られる。2類は江刺家遺跡（九戸村）^②・平舟遺跡（一戸町）^③・鶴の木住吉遺跡（水沢市）^④などで出土している物と類似し、白浜、小船渡平式から寺の沢式にかけて位置づけられる、貝殻腹縁圧痕・条痕文、および爪形刺突文を有する土器である。3類は桜松遺跡（雫石町）^⑤・長瀬A遺跡（二戸市）^⑥に類似する、物見台式とみなし得る土器、4類は、早稲田3類^⑦や蛇王堂Ⅲ層^⑧に類似するムシリI式とみなし得る微隆起線文土器類である。ほとんどがⅢ層及びⅣ層からの出土であるが、兩層位による有意の差は見だし得なかった。多くは2類に属する土器で占められ、他の類に属するものは、いずれも1点ないし数点にすぎない。

第II群（縄文時代前期前半）の土器も多種出土している。花積下層式類似のものから、口縁部に横走縄文を有するもの、結束の無い羽状縄文、直前段多条の原体による縄文を施した土器、そしてループ文、結束のある羽状縄文、口唇部の無による平坦化等、時期的な変化を暗示する例が多く観察されるが、明確な分類は出来なかった。概して前期のもので、口唇部に刻目・縄文を持たない一群の土器である。時期的には、長七谷地3群から大木I式・円筒下層a式にかけての土器と言え、大新町遺跡（盛岡市）や高屋敷II遺跡（当村）^⑨などに類例の出土が見られる。これらも遺構にともなう出土は見なかった。

第III群（縄文時代中期末葉）の土器は、殆ど竪穴住居址から出土している。遺構外から出土しているわずかの土器も、V Dp 竪穴住居址の上層及びその周辺にのみ集中している。いずれも大木9～10式に比定されよう。周辺遺跡では、けや木の平団地遺跡に同時期のものが多くみられる。

第IV群（縄文時代後期）は、後期初頭の1類と後期中葉の2類とに大別し得る。1類は、V Ef グリッドの包含層からの一括出土が大部分を占める。この包含層中の土器は、ある程度復元し得たものは1点のみであり、あとはすべて小片のままであるが、いずれも後期初頭のほぼ同一時期のものと思われ、掘之内I式併行のものと思われる。当湯舟沢遺跡の8区3区、近隣の卯遠坂遺跡^⑩などで同時期のものが多量に出土している。2類としたものはV Ei - 1 竪穴住居址出土遺物であり、掘之内2式併行のものと思われる。同時期のものが、やはり8区及び5区から

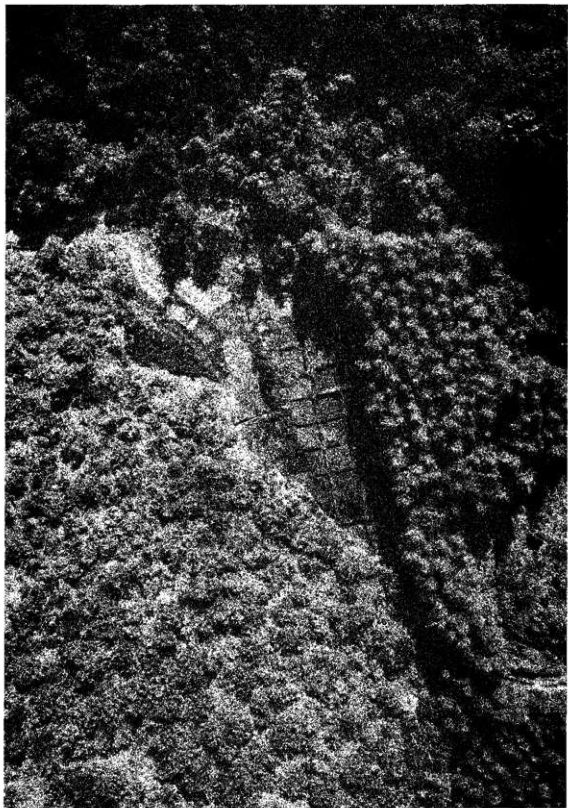
出土している。

第V群(縄文時代晩期)、VI Ea 堅穴住居址出土の1類は晩期中葉、遺構外出土の2類は晩期後葉のものと思われ、いずれも当湯舟沢遺跡3区・5区・8区で同時期のものが出土している。

参 考 文 献

- ①大迫町埋蔵文化財報告第5～9集 観音堂遺跡第1～5次発掘調査概報 大迫町教育委員会1980年～1984年
- ②岩手県埋文センター文化財調査報告書第20集 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書松尾村長者屋敷遺跡 昭和56年 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- ③岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集 都南村湯沢遺跡(遺構編) 昭和53年 (財)岩手県埋蔵文化財センター
- ④岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集 曲田I遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査
- ⑤青森県埋蔵文化財調査報告書第79集 一ノ渡遺跡発掘調査報告書 浅瀬石川ダム建設工事に係る発掘調査報告書 昭和58年度 青森県教育委員会
- ⑥秋田県文化財調査報告書第120集 東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ 1984 秋田県教育委員会
- ⑦岩手県埋文センター文化財調査報告書第56集 上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書 二戸バイパス関連発掘調査 岩手県教育委員会 (財)岩手県埋蔵文化財センター・建設省岩手工事事務所
- ⑧大館遺跡群大新町遺跡 昭和57年度発掘調査概報 1983.3 盛岡市教育委員会
- ⑨岩手県埋文センター文化財調査報告書第70集 江刺家遺跡発掘調査報告書 東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査
- ⑩岩手県埋文センター文化財調査報告書第76集 平船III遺跡発掘調査報告書 東北縦貫道関連遺跡発掘調査 (財)岩手県埋蔵文化財センター・日本道路公団
- ⑪水沢の原始・古代遺跡 草間俊一・伊藤鉄夫・及川二男・菊地郁雄 昭和40年3月 水沢市教育委員会
- ⑫岩手県埋文センター文化財調査報告書第29集 御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書 岩手県教育委員会 (財)岩手県埋蔵文化財センター・建設省御所ダム工事事務所
- ⑬岩手県埋文センター文化財調査報告書第35集 二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 (財)岩手県埋蔵文化財センター・建設省岩手工事事務所
- ⑭青森県上北郡早稲田貝塚 二本柳正一・角鹿扇三・佐藤達夫 考古学雑誌43-2
- ⑮岩手県蛇王洞洞穴 芹沢長介・林謙作 「石器時代」No.7 昭和40年10月 石器時代文化研究会
- ⑯岩手県文化財調査報告書第31集 東北縦貫自動車道関係文化財調査報告書I 昭和54年 岩手県教育委員会・日本道路公団

2 区写真図版



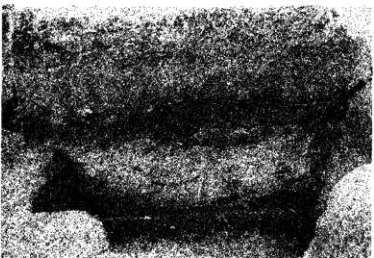
写真图版 1 2区航空写真



調査前2区全景、北より

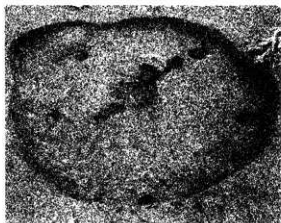


表土除去作業、北より

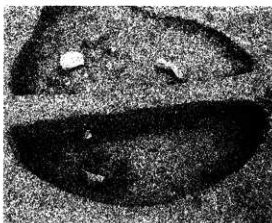


V E i 深掘断面、北より

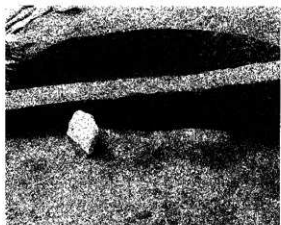
写真図版2 全景・表土除去作業・深掘



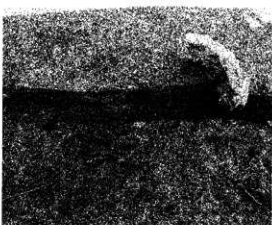
1



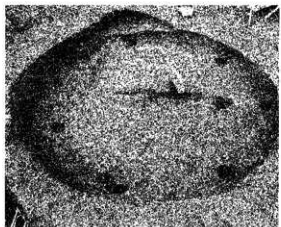
2



3



4



5

1. VEi-1 雙穴住居址、西より
2. VEi-1 住遺物出土状況、西より
3. VEi-1 住断面、東より
4. VEi-1 住炉断面、西より
5. VEi-2 雙穴住居址、南西より

写真図版3 VEi-1・2 雙穴住居址



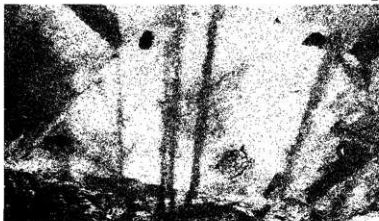
1. V Em竪穴住居址、北東より

1



2. V Em住炉断面、北より

2



3. V Dp竪穴住居址、北東より

4. V Dp住炉断面、東より

5. V Dp住炉、北より

3



4



5

写真図版4 V Em竪穴住居址・V Dp竪穴住居址

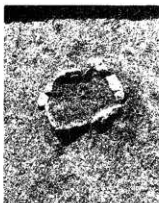


1

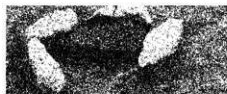


2

1. VI E a 竪穴住居址、南より
2. VI E a 竪穴住居址埋土断面、南より



4



3



5

6



6

3. VI E a 竪穴住居炉断面、南より
4. V Em 石囲炉、北より
5. V Em 石囲炉断面、北より
6. V E a 焼土、西より

写真図版5 VI E a 竪穴住居址・石囲炉・焼土



1. V Em配石土墳群No1～No4、南より



2. V Em配石土墳群No1～No4、南より



3. V Em配石土墳No1配石、南より

4. V Em配石土墳No1土墳断面、西より

5. V Em配石土墳No1土墳、南西より



4

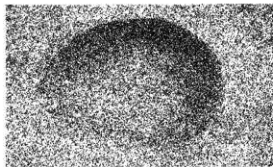


5

写真図版6 V Em配石土墳群



1

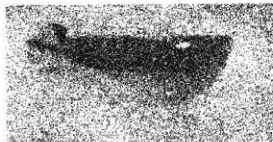


2

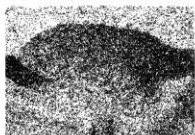
1. V Em配石土壤No2配石、南より
2. V Em配石土壤No2土壤、西より
3. V Em配石土壤No2土壤断面、西より



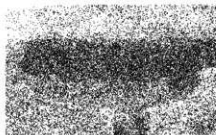
4



3



5

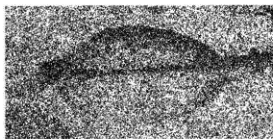


6

4. V Em配石土壤No3配石、南より
5. V Em配石土壤No3土壤、南西より
6. V Em配石土壤No3土壤断面、南西より

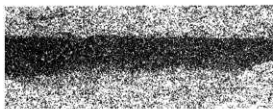


7



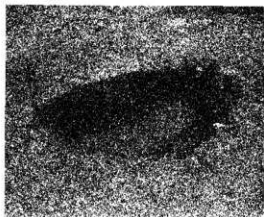
8

7. V Em配石土壤No4配石、南より
8. V Em配石土壤No4土壤、西より
9. V Em配石土壤No4土壤断面、西より

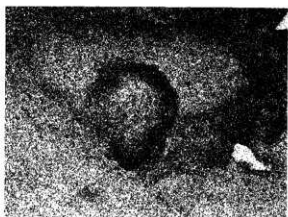


9

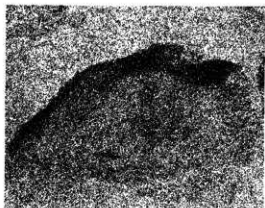
写真図版 7 V Em配石土壤群



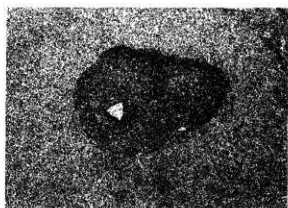
1



2



3



4



5



6



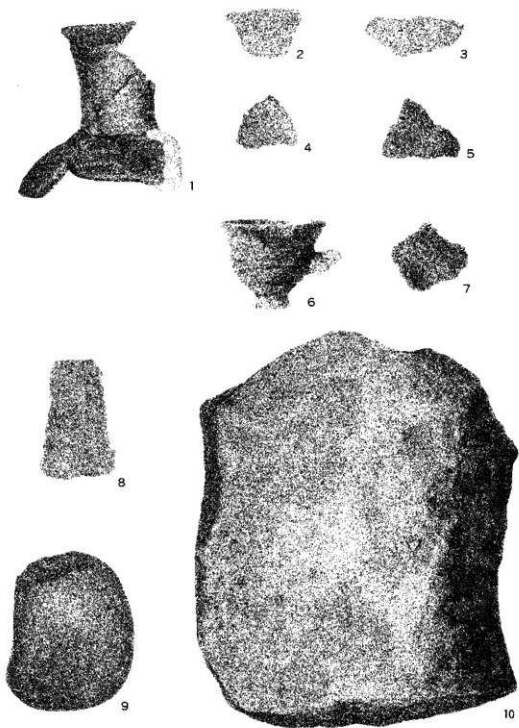
7

1. VEa-1ビット、西より
2. VEa-2ビット、西より
3. VEaビット、北より
4. VEiビット、北より
5. VDd集石、北東より
6. VEa集石、西より
7. VDi集石、東より

写真図版8 ビット・集石

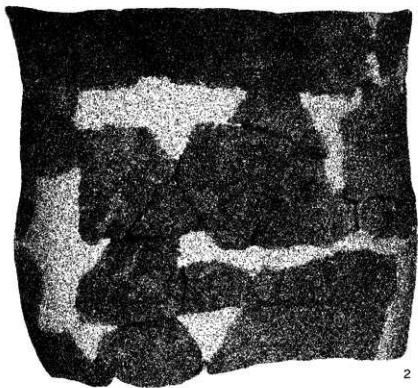
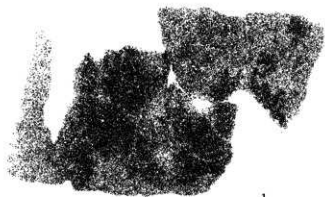


写真図版9 V E f 遺物包含層遺物出土状況、東より



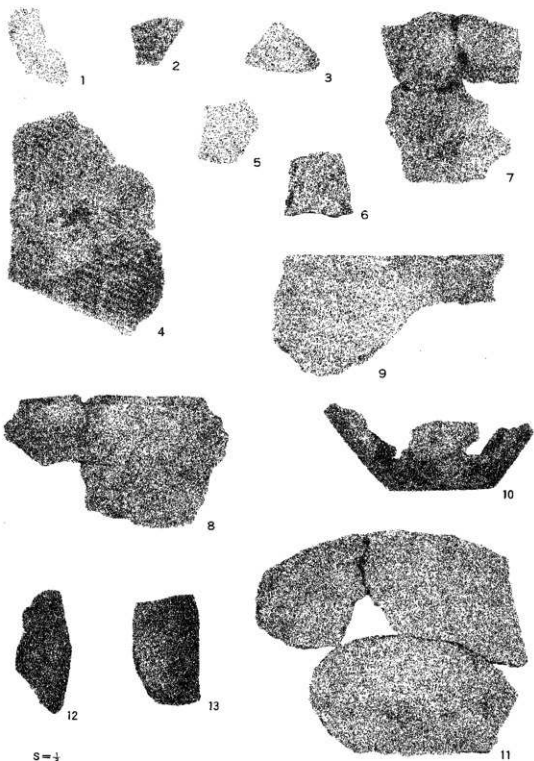
1~9 S=1/2, 10 S=1/3

写真図版10 VEi-1 雙穴住居址出土遺物



S=+

写真图版11 V Em型穴住居址出土遺物



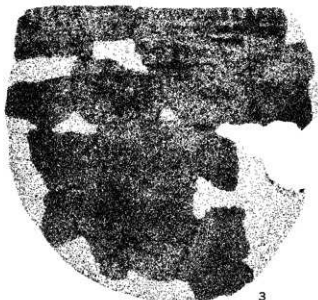
写真図版12 V D p 竪穴住居址出土遺物



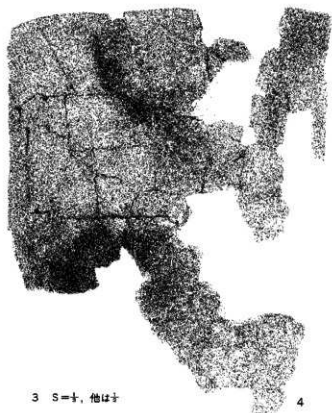
1



2



3



4



5

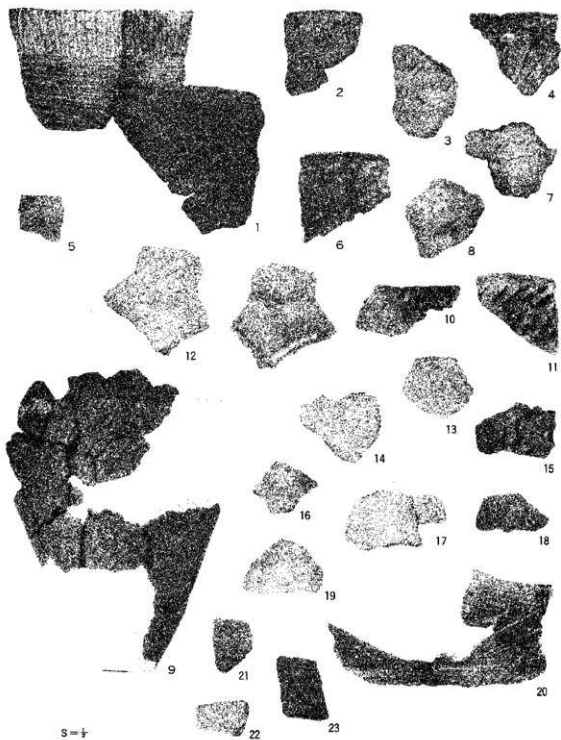


6

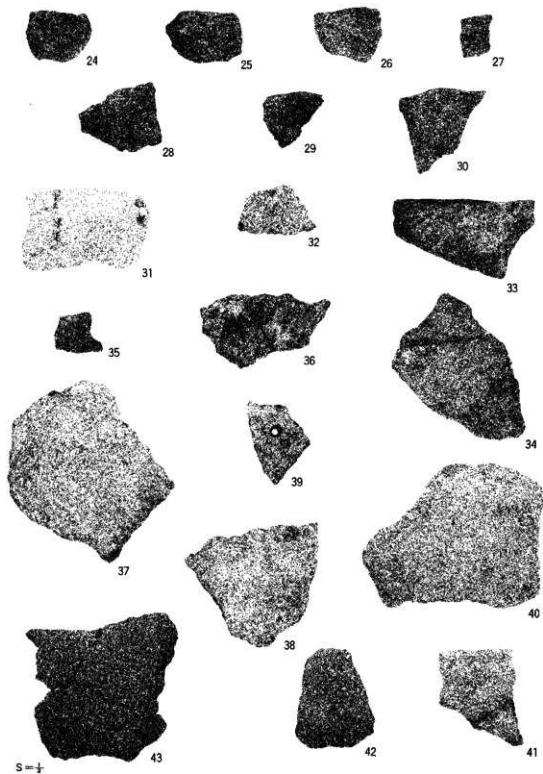
1~3 VI E a 竪穴住居址出土遺物
4~6 V Em 4 石囲炉出土遺物

3 S=十, 他は十

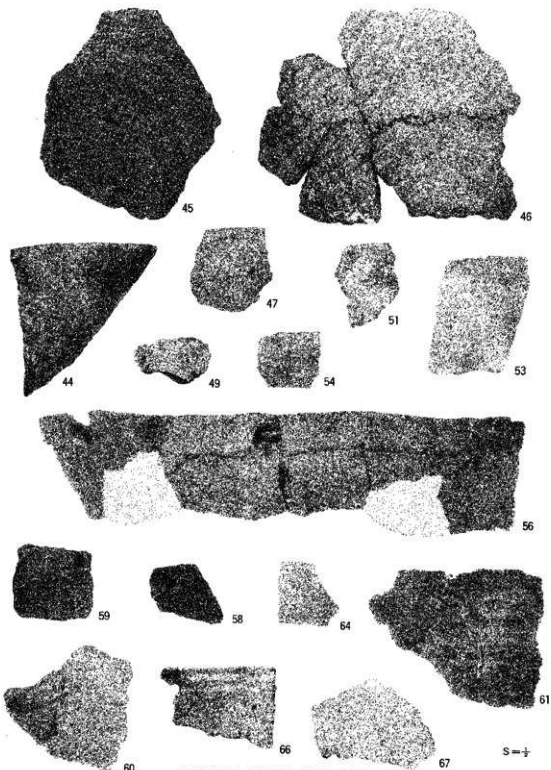
写真図版13 VI E a 竪穴住居址出土遺物
V Em 石囲炉出土遺物



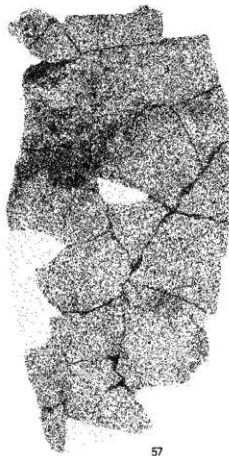
写真図版14 遺構外出土遺物 (土器)



写真図版15 遺構外出土遺物(土器)



写真図版16 遺構外出土遺物(土器)
包含層出土遺物(土器)



57



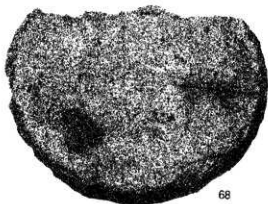
71



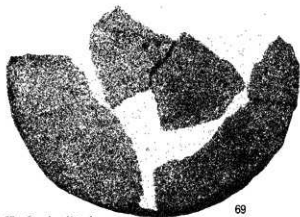
72



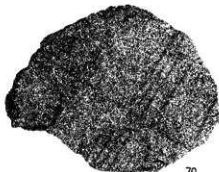
73



68



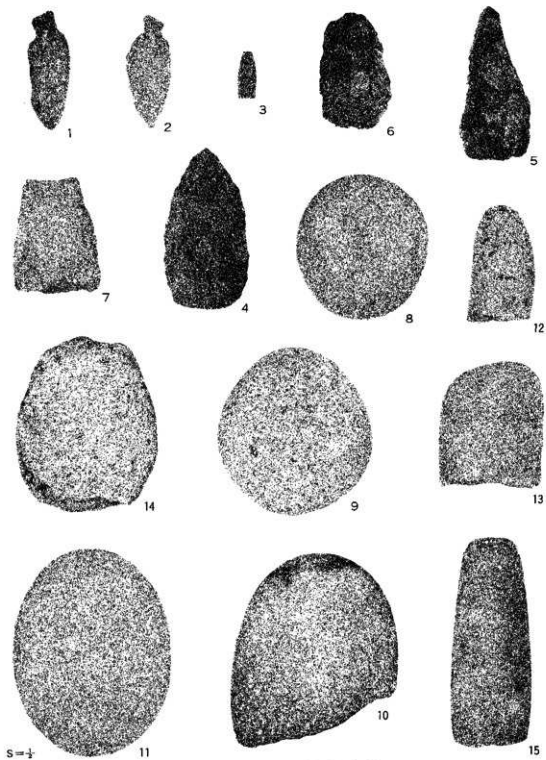
69



70

57 S=↓ 他は+

写真図版17 遺構外出土遺物 (土器)
包含層出土遺物 (土器)

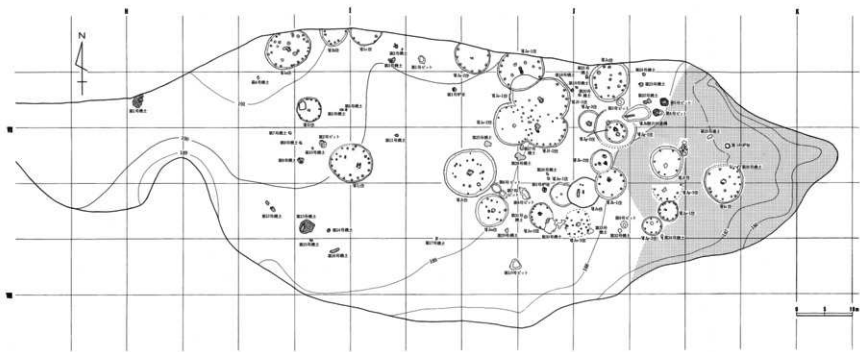


写真図版18 遺構外出土遺物（石器）
包含層出土遺物（石器）

3

区

略号	YH 3
調査面積	4,810 m ²
調査機関	滝沢村教育委員会



第1區 3區遺構配置圖

I. 地形と地質

1. 地形

当区は、湯舟沢遺跡の西半北側に位置する。南に東流する沢(市兵衛川支流)、北に谷地山(545m)につらなる丘陵が迫っており、東西120m・南北50m・面積4.810㎡ほどの小さな沖積地である。標高は、南東端水際で185m・北西端で191m・沢との比高はほとんど無く、高い岸で1m程度の軽い段丘崖を成す。域内は、全体として南東向きに緩く傾斜しているが、北東部にごく小さな沢が入り込む形であり、東南東に伸びた舌状の微高地と見なし得る。その微高地上にもわずかに下がった低所が南北に走り、3区を東西2ブロックに分断している。遺構(住居址)の大半はその東ブロックにあり、残る5棟が西ブロックにのる。東で南東に4区(低湿地)、南西に8区(段丘上)。西は沢の屈曲が丘陵に接する形で閉ざされ、北西120mに2区がある。

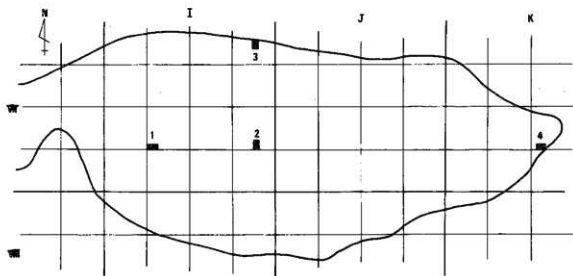
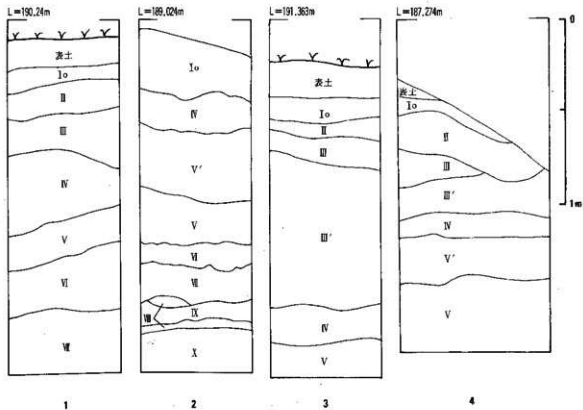
2. 地質

遺構検出面はおおむねII層、基本層序は次頁の通りである。

尚、下記I層は、黄白色の細粒テフラの層であり、三辻利一奈良教育大学教授により十和田aテフラとの鑑定結果を得ている。以下の文中においては、I層を「粉状パミス」の通称を用いる。III～IV層は、鉄砲水等自然の営力による二次堆積層と思われる。本区南側の沢沿い及び屈曲部近くに当る西端に堆積が著しい。遺構により、同層及びI層の土を埋土中に持つものとそうでないものがあるが、I層土の有無は時期による違い、又、III～IV層土の有無は、遺構の占地及び遺構の時期によるものと思われる。

基本層序

- | | |
|------------------|---|
| I。層 黒色土層 | しまり、粘りなし。砂粒含む。 |
| I層 黄白色火山灰層 | II層上の凹み・落ち込み等に、流れ込み堆積をしている。本文中遺構に関する記述等で、「粉状バミス」として表現されている。 |
| II層 黒褐色土層 | 弱い粘りをもつ。 |
| III層 褐色土層 | 多少しまってはいるが、粘りはない。 |
| III'層 暗褐色土層 | 弱い粘りを持つ。橙色のスコリアや小石を多く含む。 |
| IV層 鈍い赤褐色土層 | やや硬く、粘りを持つ。橙色のスコリアや小石を多く含む。 |
| V層 黒色土層 | 柔らかく、粘りを持つ。 |
| V'層 黒褐色土層 | 柔らかく、粘りはない。 |
| VI層 褐色土層 | 硬くしまっているが、粘りはない。橙色のスコリアを多く含む。 |
| VII層 赤褐色酸化砂層 | |
| VIII層 白色～青灰色粘土質層 | |
| IX層 黄褐色土層 | 硬くしまっている。橙色のスコリアを多く含む。 |
| X層 褐色土層 | 非常に硬くしまっている。 |



第2图 3区基本层序

II. 発見された遺構と遺物

1. 竪穴住居址

VII a 竪穴住居址 (第3図・第1表・写真図版2)

位置：調査区西側北端の丘陵裾部にあり、北西～南東に下る緩斜面に位置する。東にVII b 住居址、南東にVII f 住居址がある。北側の一部は道路の為未調査である。焼失家屋。

検出：地表下30cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模：長軸8.40m×短軸7.00mの北東～南西に長い円形である。床面積〔38.6〕㎡。

埋土：大略3層に区分される。1層粉状バミスは径6mの範囲に分布し、中央部で20cmの堆積を示す。3層黒褐色土には多量の炭化材・焼土が検出され、西壁～南壁沿いに顕著である。自然堆積。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、東壁20cm・南壁32cm・西壁50cmとなる。西側で深く東側が浅いのは、竪穴の立地する地形に起因するものと考えられる。北壁は不明である。

床：V層下位を床面とする。全体に柔らかく、ほぼ平坦であるが、P₁₅・P₁₇間より竪穴中央部にかけて、極めて硬い部分と僅かな凹凸を認める。特に炉を中心に径2mの範囲で顕著である。床面は全体に西～東へと緩やかに傾斜する。

柱穴：P₁・P₂を除き柱穴と考えられる。壁沿い16、やや内側5、中央寄り5の26ヶ検出した。全般に壁沿いのピットが小規模であることから、内側と中央に主柱穴を、壁沿いに補助柱穴を配したと推定される。埋土は全般に極めて柔らかく、何れも焼土・炭化粒子が認められる。特にP₅・P₁₂・P₁₃・P₁₉・P₂₆～P₂₈に多量である。

第1表 VII a 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
口徑(cm)	80×82	92×62	56×50	36×32	20×18	38×34	34×32	40×30	34×30	42×34	44×40	32×34	26×26	38×30
深さ(cm)	32	30	54	40	54	54	44	46	58	48	32	32	38	44
	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈
口徑(cm)	50×36	52×50	42×40	38×38	38×34	26×26	44×42	32×32	28×26	34×28	50×48	56×56	48×46	56×49
深さ(cm)	56	50	46	32	22	40	60	24	40	34	36	54	38	36

炉：ほぼ中央に石囲炉、兩壁寄りに地床炉を検出した。石囲炉は扁平な礫4ヶを直立させ、竪穴の長軸に直交する形で「二の字」に配される。礫列は、何れも60cmほどで、対面する礫の間隔は40cmとなる。構築方法は、床面を僅かに掘りくぼめた部分に礫を据え、暗赤褐色粘土によって固定される。北西、南東方向に礫の配置は認められない。焼土は中央部で20cmと厚い堆積を示し、北西方向で更に西壁寄りに不整に広がり、全体ではL字状の分布となる。地床炉は、径60cm×30cmの長円形に焼土が分布し、中央部で10cmの堆積を示す。床面には12cmほどの掘り込みが認められる。

その他の施設：長円形のピット(P₁・P₂)を検出した。何れも同規模のもので、埋土には多量の炭化粒子・焼土が認められる。柱穴とは見なし難く、貯蔵穴と考えられる。

出土遺物 (第4～9図・第2表・写真図版20・21)

住居址内からは、大量の土器・石器及び植物遺体が出土している。以下、これらについて述べるが、植物遺体の種類等については、後載する鑑定・分析の章を参照されたい。

(土器)

図示したものを含めて大多数は、埋土中・下位(焼失の際の炭化材・炭化粒子・焼土等と同面もしくは下位面)へ床面の出土であり、量・質共に充実しており、明確なセット関係が認められる。即ち、壺・小形鉢・小形甕・高坏・蓋・甕・台付鉢・手捏ね土器の各器種である。

No1は、磨消縄文に依る変形工字文を施した壺の上半部である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁は直線的に外傾するが、口唇部は欠損している。内面には積み上げ痕が顕著に残り、煤が多量に付着している。色調はにおい黄橙色を呈する。No2は頸部の屈曲がかなり強い壺の頸～口縁部片であり、拓影図No15・16も壺片であるが、No15には磨消技法を用いた連弧文が見られる。これら壺は、何れも金雲母・石英・砂粒等を含む胎土で、比較的焼成も良く、No2に於いては朱塗痕が見られる。No3～5の小形土器類は、No3が小波状口縁で殆ど括れを持たないタイプであり、No4・5は何れも頸部が「く」の字に括れる甕形土器を小形化した器形であるが、No3はRL・No4と5にはLR縄文が体部に付され、No4・5の底部外面にはアジロ痕が残る。また、3者共に、外面には煤の付着が認められる。

高坏類は何れも平口縁のものばかりで、文様は殆どが磨消縄文を用いた変形工字文であり、胎土には金雲母・砂粒等が入る焼成の良好なものも多く、朱彩が見られるものが殆どである。No6は篋描沈線に依る変形工字文が体上半に、横位LR縄文が下半に施され、口縁部は窄まる様に直立し、内外面に沈線を繞らせている。No7は、変形工字文の下端部分にのみ縄文が付されたものである。No8は床面直上出土の完形品で、平行沈線(坏部は2本・脚部は3本一組)に依って文様帯を区画し、坏部上半には変形工字文・下半には横位LR、脚部には2段の波状文が施されている。磨消部分及び内面調整も非常に丁寧であるが、脚部内面には積み上げ痕等

第2表 VII a 竪穴住居址出土土器計測一覧

No	器種	口径	最大胴径	底径	器高	脚径	No	器種	口径	最大胴径	底径	器高	脚径
1	壺	—	18.6	—	(8.8)	/	8	高坏	22.4	/	7.4	16.5	7.7
2	"	16.4	—	—	(4.7)	/	9	蓋	(22.8)	/	5.4	[11.3]	(ツマミ付)
3	小形鉢	(9.5)	10.1	5.6	10.6	/	10	壺	(27.0)	(24.9)	—	(21.1)	/
4	小形壺	(10.0)	(8.4)	(4.8)	9.0	/	11	"	(22.4)	(25.4)	7.4	24.8	/
5	"	9.0	9.0	4.8	9.1	/	12	手捏ね土器	5.2	/	4.0	3.5	/
6	高坏	19.5	19.6	7.5	(6.0)	—	13	"	6.0	/	(丸底)	3.7	/
7	"	19.7	/	—	(5.3)	—	14	"	5.2	/	(丸底)	3.4	/

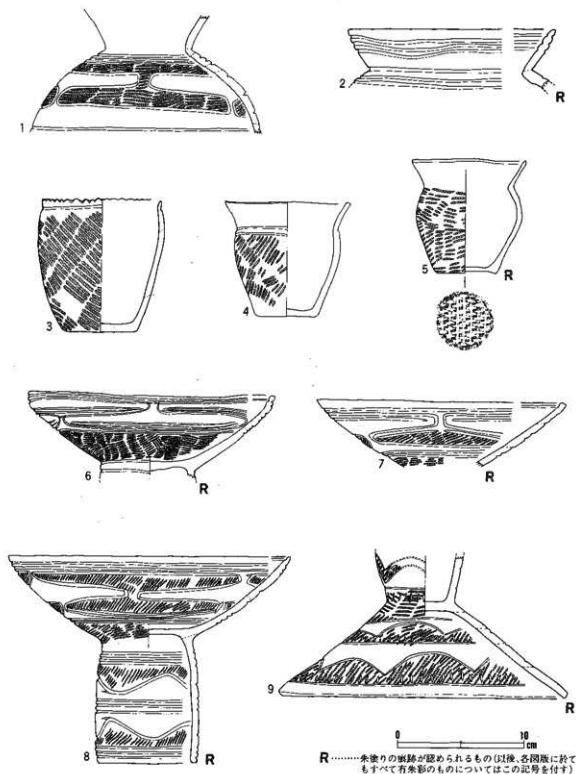
()推定値・()現器高・—不明・単位:cm

が残るやや雑な調整となっている。色調は内外面共に黒褐色を呈し、朱塗が顕著に残っている。拓影図で示したNo17~32 (No17~19及びNo23・24は各々同一個体である。)の高坏片に於いてもやはり磨消技法のものが目立ち、坏部では変形工字文の他に垂下文的要素を有すもの (No20・21・30) が見られる。

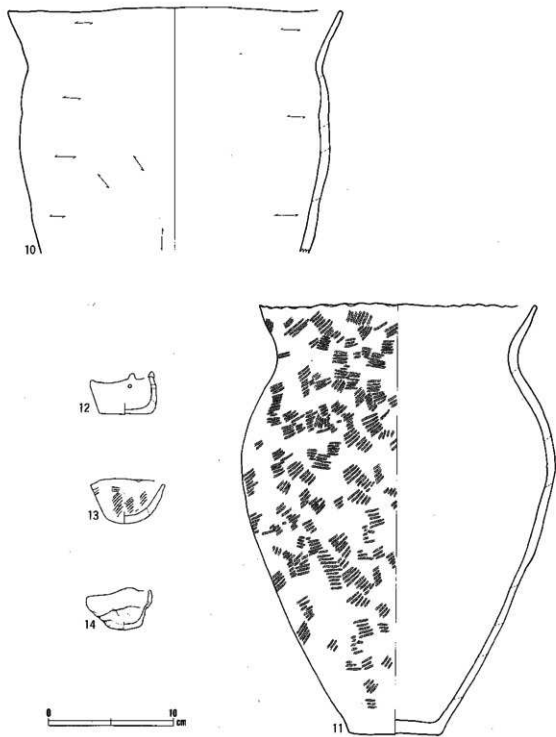
No9は、直線的な坏部・細身で坏部に比してやや小さめの脚・坏部内面のやや雑な調整・調整が丁寧で朱彩が施されている脚部の内面、などの特徴から、蓋形土器に分類した。文様は、連弧内のLR縄文部分に列点文を横に付したものが2段坏部に展開し、ツマミ接続部分にもLR縄文と列点文が付けられ、ツマミ部分では帯状に描かれた連弧内のLR部分に弧に沿った列点文が施されており、それぞれの文様帯は水平沈線に依って区画されている。また、朱彩の痕跡が顕著である。

甕形土器No10は内外面共に篋ナデ調整された無文土器で、体部はあまり張らずに緩く頸部で括れた最大径を口縁部に有する器形である。No11は、外面全体にLR縄文を付した波状口縁を持つ甕。やや小さめの底部から外傾的に立ち上がり、最大径を体部上半に有し、頸部で「く」の字状に括れて口縁で開く器形である。No10・11共に煤の付着が見られるが、No11では体部上半~口縁部が著しく、剝離部分も見受けられ、褐色を呈す器面の体部下半では赤化しており、体部下半内面にも炭化物の付着が残っている。両者共に石英・砂粒等を含む胎土で、焼成も比較的良好。拓影図のNo35はアジロ痕の上から篋ナデ調整された底部片であり、No36は台付鉢と思われる破片で、付け根部分に縦溝沈線を何本も並べ、更にその下に2本の平行沈線が繞っている。

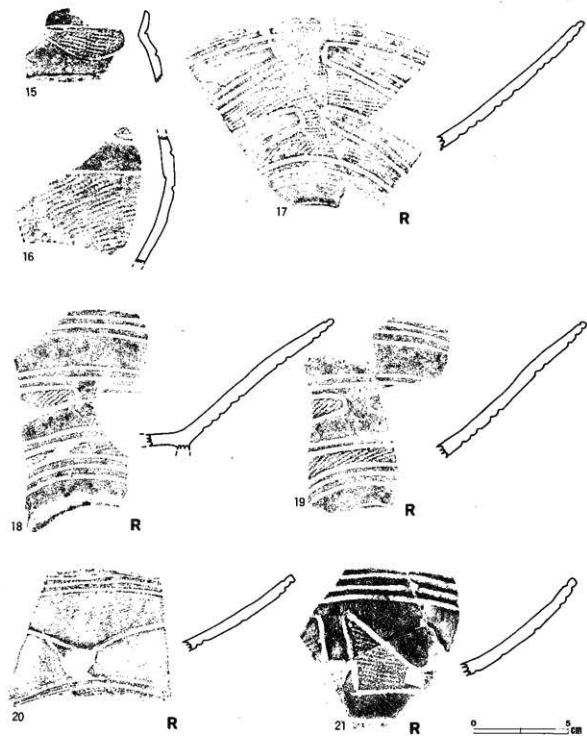
No12~14の手捏ね土器は、何れも稚拙な作りであるが、No12は小突起と有孔・No13はLR縄文・No14は複合口縁という特徴を有している。



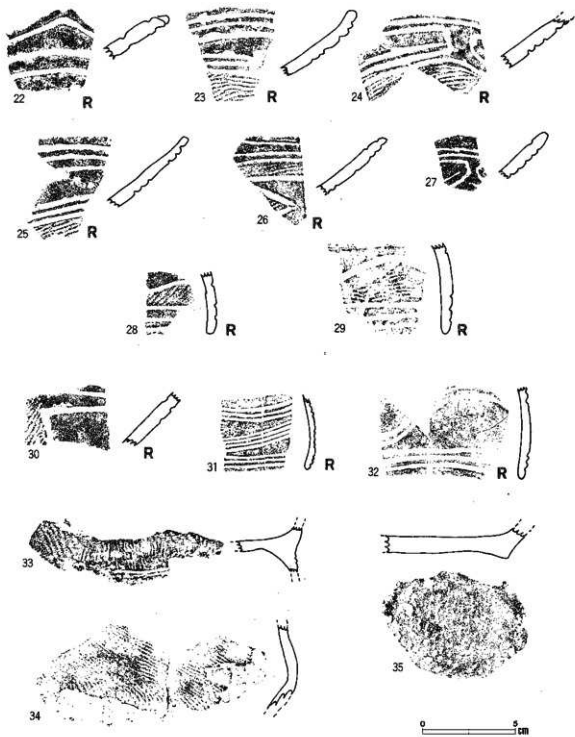
第4図 VII Ia竪穴住居址出土遺物(1)



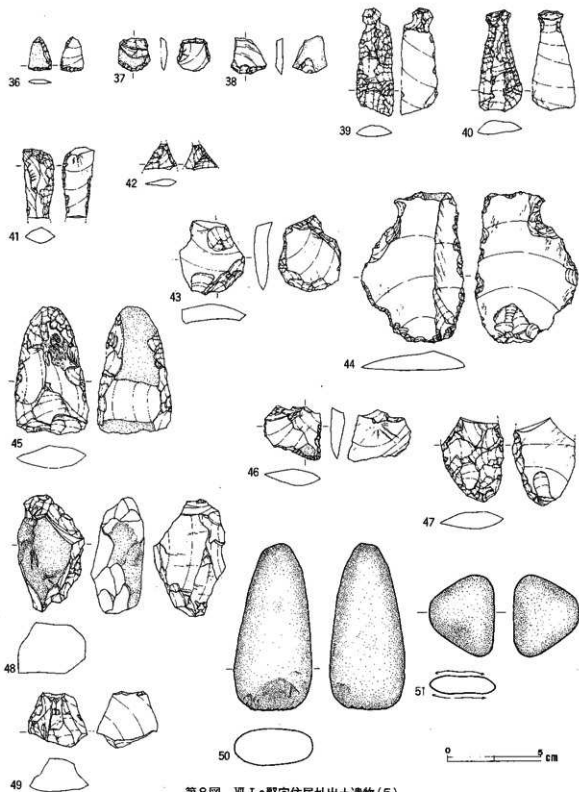
第5图 VII I a 竖穴住居址出土遗物(2)



第6图 VII a 豎穴住居址出土遺物(3)



第7圖 VII a 豎穴住居址出土遺物(4)

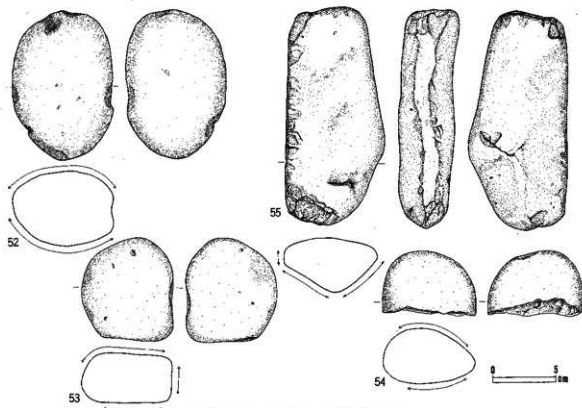


第8圖 VII a 豎穴住居址出土遺物(5)

(石器)

掲載したのは20点であるが、殆どが埋土下位層～床面出土である。他に、剥片が69点・一部加工を施したものの30点・コア6点が住居址内から出土している。

No.36～38はチップに加工を若干施したもので、3者共にあまり丁寧な作りではない。石質はNo.36が珪質頁岩、No.37・38が黒曜石である。No.39～42は石匙。No.39・40は何れも縦形石匙で、両者共に片面調整である。前者が硬質頁岩、後者が珪質頁岩で作られている。No.41・42は、それぞれ欠損品で、No.41では両端を欠き、No.42は先端部片であり、両者共に両面加工が施された硬質頁岩製のものである。No.43・44・46・47は不定形石器であるが、No.43及び44では若干の器面調整が行なわれている。No.44に於いては刃部形成がバルブ側の厚味の有る方に作られており、やや不格好ではあるが、石ベラの使用の可能性も考えられる。No.47は或は石匙等の一部とも考えられる。No.45は、表面に加工調整を施し、下端部に刃を形成しており、裏面では殆ど無調整で自然面を残したまま、両側縁にのみ刃部調整を行なっている石器で、同様の形成をしているものにVII j 住No.15 (第28区) 及び遺物包含層出土No.10 (第15区) が挙げられる。これらについて、一応便宜上、「台形状スクレーパー」と呼称することとした。尚、この石器の特徴その他については後述の石器のまとめの項で触れてある。No.48・49はコア。以上剥片石器No.43～49の石



第9図 VII a 竪穴住居址出土遺物(6)

質は、No43・45～47が硬質頁岩・No44が珪質頁岩・No48が頁岩・No49が玉髄である。

No50は砂岩製の磨製石斧で全体的にやや風化した様に磨耗しており、刃部に於いては小さな刃こぼれ及び剥離が見受けられる。No51～54は磨石。何れもよく使われており、No52に於いては敲石的使用の痕跡が残っている。但し、No51については表裏両面に擦痕があり、全体的に磨かれた様にスベスベしている上、三角を呈した形状及び緑色凝灰岩という他（No52～54は輝石安山岩）とは異なった石質であるという点から見ると、石製品とも考えられる。No55は石英安山岩製の砥石。

（その他出土遺物）

床面近くから出土した植物遺体は2点あるが、何れも炭化した状態で見つかり、それぞれミズナラ種子とオニグルミ種子であることが判った。

また、住居内に多数残っていた炭化材は、ナラ類及びクリであった。（以上、植物遺体及び炭化材の鑑定についての詳細は、後掲の鑑定・分析の章を参照されたい。）

以上の様な出土遺物から、本住居地の所属時期は、弥生時代中期後半に位置づけられると思われる。

Ⅶ I b 竪穴住居址（第10図・第3表・写真図版3）

位置：調査区西側北端にあり、東にⅦ I c 住居址、西にⅦ I a 住居址がある。北半部分は道路の為未調査である。焼失家屋。

検出：地表下20cmのⅡ層にて、Ⅰ層粉状パミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模：竪穴北半部分の未調査により詳細は不明であるが、検出値で東西〔5.0〕m×南北〔3.0〕mとなる。床面積〔9.1〕m²。

埋土：大略6層に区分される。1層粉状パミスは中央部で20cmと厚い堆積を示す。4～6層に炭化粒子・焼土が認められ、4層で最も多い。自然堆積である。

壁：Ⅴ層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。東壁53cm・南壁38cm・西壁56cmとなる。

床：Ⅴ層下位を床面とする。全体に柔らかく、ほぼ平坦であるが、南西壁P₅・P₆間より中央部にかけて、僅かに硬い部分を認める。

柱穴：壁沿いに7ヶ検出した。径30cm前後と小径であるが深いものである。埋土には微量の炭化粒子が認められ、何れも極めて柔らかい。

第3表 Ⅶ I b 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
口徑(cm)	28×24	34×30	32×30	32×33	30×28	40×32	28×28
深さ(cm)	32	43	43	51	45	46	38

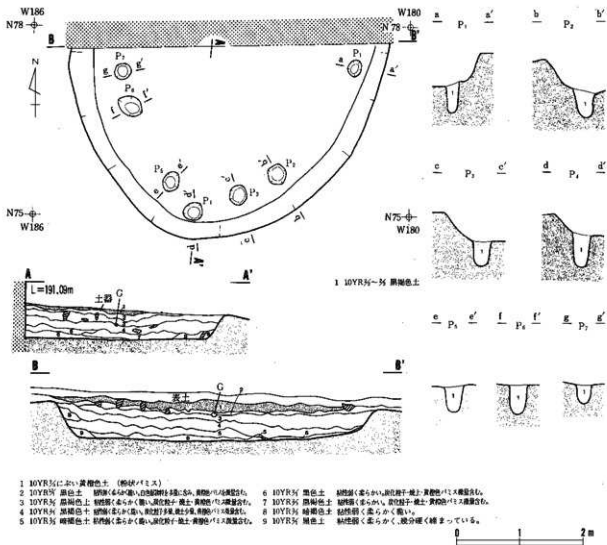
炉：未検出である。北側未調査部に位置すると推定される。

出土遺物 (第11・12図・写真図版22)

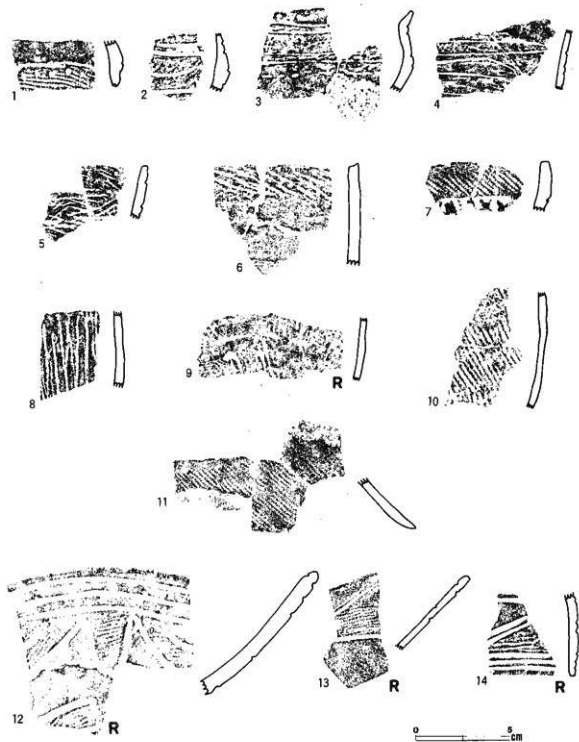
図示した遺物は、埋土中位以下のものばかりで、特に下位～床面直上のものが多い。

(土器)

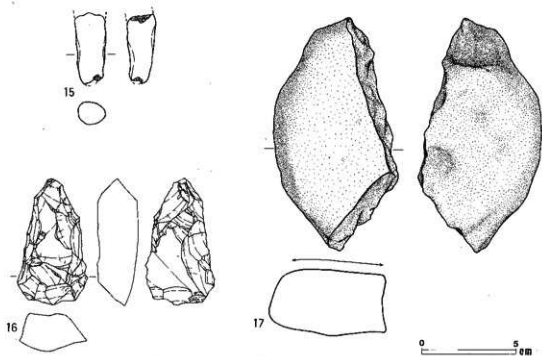
No 1～3は、小形壺の破片である。No 1は体部の膨らんだ部分で、沈線で区画した後、寛ナデして縄文を磨消しており、更に縄文部分に沈線に沿って刺突列を配している。No 2もやはり磨消縄文が見られ、連弧文が施されている。No 3は体へ口縁部片で、全体をナダた上から体中央部及び頸部に刺突列を伴った2本の平行沈線が横に走り、更に体下半にも平行する様に刺突列が成されている。No 1～3共に金雲母・石英粒等が混じる胎土で、特にNo 1は粒子も細かく、



第10図 VII b 竪穴住居址



第11圖 ⅦI b 豎穴住居址出土遺物(1)



第12図 VII b 壑穴住居址出土遺物(2)

緻密である。

No 4～10は壺の破片であるが、口縁部片のNo 5～7及び頸～口縁部片のNo 4は、頸部にあまり括れがない深鉢に近い器形であろうと推される。これら壺片は、何れも金雲母・石英等の粗砂が混入しているが、概して焼成は良好であり、全体に薄手である。No 4は、鋭利な工具に依る細い沈線文がナデの上から割と雑に施されている。尚、文様自体には工字文的様相が窺える。(後述のVII c 住No 6参照) No 5・6は、口縁部にRLの附加縄文を施したもので、No 5では頸部近くに糸とは逆向きの短い沈線が交叉する様につけられており、No 6では頸部は横ナデ調整されている。No 7も口縁部にRL縄文が施文されているが、その直下には所謂「交互刺突文」が付されている。No 8・9は縦位の燃糸文Lが付され、両者共に外面に煤が付着している。No 10は無節縄文Lr。

No 11は蓋で、全体に横回転RLが施されている。器形は笠形を呈すると思われ、口縁でやや外傾する様に開く。外面に煤の付着が見られ、色調は褐色を呈する。

No 12・13は高坏の坏部、No 14は脚部片である。何れも磨消縄文を持つ精良な土器であり、三者共に朱塗りの痕跡が認められ、特にNo 13では内面にも施されている。

No 15は土製品で、両端を欠いている。表面の調整は殆どされておらず、単に粘土を棒状に延ばした様な感がある。用途は不明であるが、或いは土偶の一部でもあろうか。3層出土。

(石 器)

No16は、両サイドと下端に刃部を持つ石核を加工した石器であるが、概して作りは雑で、刃部の形成にも細かい剝離技法は用いられていない。石質は硬質頁岩。No17は一部欠損の台石。片面が良く使い込まれている。安山岩製。

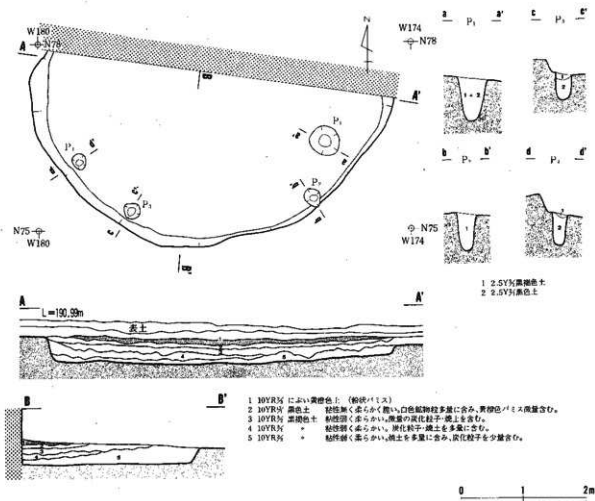
本住居址の時期は、出土遺物から、弥生時代後期に属すると考えられる。

VII c 竪穴住居址 (第13図・第4表・写真図版3)

位置：調査区西側北端にあり、西にVII b 住居址がある。北半部分は道路の為未調査である。

焼失家屋。

検出：地表下20cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。



第13図 VII c 竪穴住居址

形態・規模：竪穴北半部分の未調査により詳細は不明であるが、検出値で東西(5.70)m×南北(2.90)mとなる。床面積(10.9)m²。

埋土：人略6層に区分される。1層粉状バミスは中央部で10cmと厚い堆積を示す。3～5層に炭化粒子・焼土が認められ、4・5層で最も多い。自然堆積である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、東壁2cm・南壁20cm・西壁34cmとなる。東壁が浅いのは、調査時の不手際によるものである。

床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。床面には多量の炭化粒子・焼土が認められる。

第4表 VIIc竪穴住居址
ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄
口径(cm)	30×46	32×36	38×26	26×24

柱穴：壁沿いに3ヶ、やや内側に1ヶ検出した。埋土には多量の焼土・炭化粒子が認められ、極めて柔らかく脆い。

炉：未検出である。北半未調査部分に位置するものと推定される。

出土遺物 (第14～16図・写真図版23)

(土器)

図示した7点は、すべて壺形土器である。No1は底部から徐々に広がり、最大径が口縁部にある括れのない深鉢タイプで、口縁は緩い波状を呈すると思われる。外面全体にRLにLを左巻きにした縄巻縄文(以下、同様の縄文原体については、「附加条RL」と記す。)を施文しており、体上半～口縁に浅い篋描沈線を加えている。文様の最下部には不整な連続山形文が横に繞り、その上部にも半円或いは碗様ともとれる不整な文様が描かれているが、口縁部分はあまり残存していないため、パターン的には捉えられなかった。また、頸部付近には、1ヶの孔がある。土器の肥厚は全体に極めて薄い。金雲母・細砂等を含む比較的精良な胎土で、焼成も良好である。外面にはぶい橙色を呈し、若干の煤付着。内面は横ナデ調整。口径(35.2)cm・器高(28.8)cm・底径6.8cm。尚、No1土器は、殆どが埋土1～2層の出土であり、一部遺構外出土片も接合している。No2はやはり、全体に薄手の頸部に緩い括れを持つ底部欠損の甕で、体中～上半部に横～斜位の無節縄文LⅠを施し、頸～口縁は横ナデ調整・体下半は横或いは縦の篋ナデ調整が成されている。内面は体上～口縁部が横ナデ、それ以下は縦の篋ナデ調整である。また、口唇部には、上記原体の押圧縄文が回転文の如く繞っている。器面は、煤の付着が内外に見られる上、二次加熱を受けたりしく、一部赤変している他、剝離している場所もあり、残存状態はあまり良いとは言えない。胎土には、石英・粗砂を多量に含む。口径29.8cm、No3も薄手の甕である。体部には緩い膨らみを持ち、頸部で若干締まった後、口縁で開く器形で、口縁部は平らな複合口縁である。文様は、体部下端～上部にかけて撚糸文Lが縦位につけられ、体上部に到って一見条が屈折する様に附加条RLが斜位(横回転)に2～3段施されている。

一部燃糸と交叉する部分もある。頸部は横方向の割と丁寧な篋ナデで調整されている。口縁部にも附加条R Lが縦位に走る。また、内面の篋ナデ調整は体下端で縦の他は横位である。外面体上半～口縁部に多量の煤が付着するにぶい黄褐色を呈する。内面にも若干の炭化物の付着が認められる。胎土には若干の砂粒を含み、焼成は比較的良いが、一部磨滅している部分もある。口径(33.6)cm・現器高36.7cm。一部反転実測。このNo 3土器に於ける附加条と燃糸文は、節の大きさ・条の間隔等よく似ており、一見同一の原体を想像させるが、体部に走る縦位の条は一度の施文単位が長く条と条の間には何も無い点から単軸綫状の燃糸文であると考え、斜位に走る体上部の条では条の長さが短い点・横回転の痕跡が残る点・条と条の間に所に依つては極薄くも1本条が見える点から単節綫文R LにLを強く巻きつけて殆どLの条が出現しない様にした縄巻綫文であろうと判断した。(以後用いる附加条R Lは、すべての条間隔が広く見えるこのタイプのものである。)

No 4・5は共に口唇部で、No 3と同様縦位の燃糸が口縁付近まで施されて、口縁部で斜位の附加条が走っており、No 5に於いては附加条が、口唇部にまで至っている。両者共に、焼成は良好である。No 6は頸部が若干締まって緩やかに口縁部が外反する薄手のものである。体部は燃糸文Lが縦位に施文されるが、頸～口縁部には鋭利な工具による細い沈線文で文様を描いている。沈線は、何条も横に走りながら一部で「工字文」的な文様を作り出している。また、施文の仕方、高坏に見られる様な精巧な感じが無く、割と雑な印象を受ける。砂粒等を若干含む胎土で、焼成は良く硬い仕上がりになっており、色調は暗褐色を呈する。

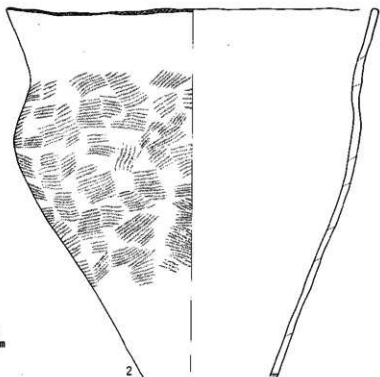
No 7は頸部に沈線が1条繞り、所謂「く」の字状に口縁が外反するタイプの壺。体部は横位のL R、口縁は内外共に横ナデで、口唇部に沈線の様な溝が繞る。

(石 器)

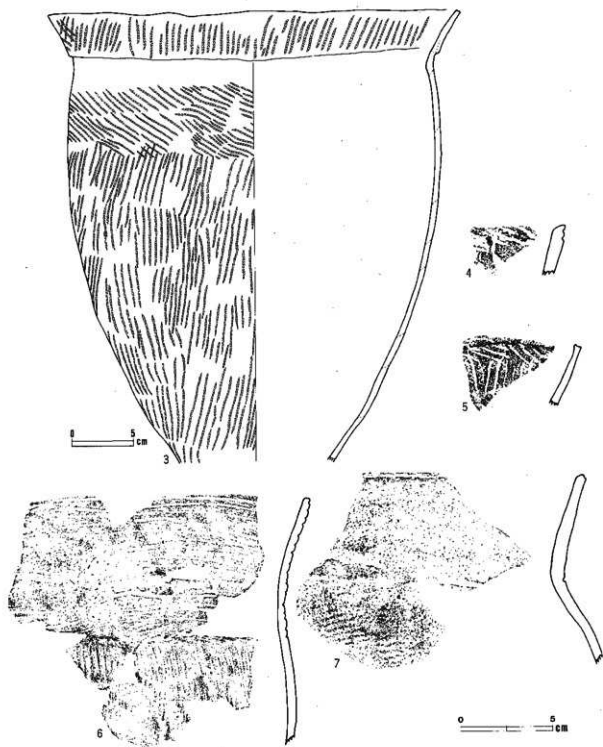
No 8は、チップの加工品で、一辺に刃を持つ。No 9は、片面に自然面を残したまま片面からのみ加工を施した稚拙な刃を持つ不定形な石器である。No 10は、コア。以上3点の石質は、すべて硬質頁岩。No 11は凹石であるが、一部磨石的にも使用されたりしく、擦痕が見受けられる。No 12は磨石、No 13は台石或いは砥石の類と考えられる。No 11が安山岩質溶岩。No 12・13が輝石安山岩を使用している。

以上石器の出土層位は、No 8・9が埋土内、他は床面直上である。

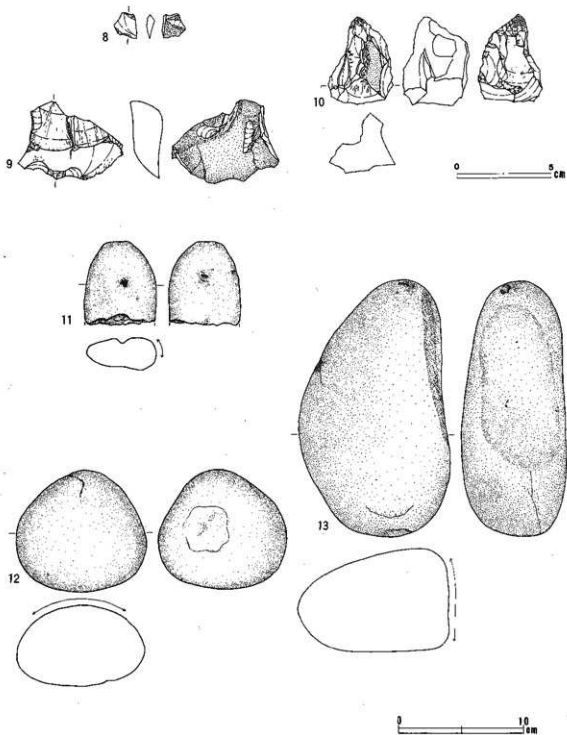
本住居址の時期は、以上掲載した遺物、及び他に埋土～床面に至るまで燃糸文或いは附加条的な文様を持つ薄手の土器が出土している点から、弥生時代後期に位置づけられると思われる。



第14图 VII c 豎穴住居址出土遺物(1)



第15图 VII Ic 竖穴住居址出土遺物(2)



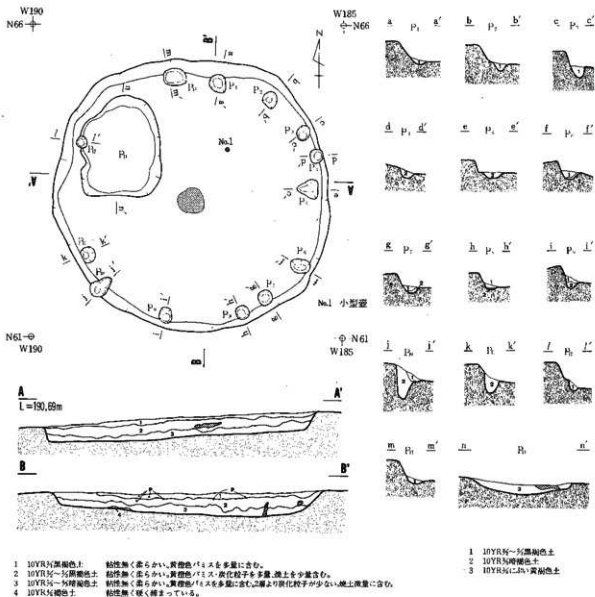
第16図 VIIc 竪穴住居址出土遺物(3)

VII f 竪穴住居址 (第17図・第5表・写真図版4)

位置：調査区西側北寄りの北西～南東に下る緩斜面に位置する。北西にVII a住居址、南東にはVII j住居址がある。焼失家屋。

検出：地表面下40cmのII層において、径4 mほどの遺物密集地点として検出した。

形態：規模：長軸4.40m×短軸4.34mの円形である。床面積13.3㎡。



第17図 VII f 竪穴住居址

埋土：大略3層に区分される。2・3層には炭化粒子・焼土が認められ、2層で多量である。自然堆積。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁32cm・東壁20cm・南壁16cm・西壁20cmとなる。南東が浅いのは堅穴の立地する地形に起因すると考えられる。

床：ほぼ平坦で、全体に西へ東へと傾斜している。壁沿いでは柔らかく、中央部で極めて硬い。若干凹凸が認められた。

柱穴：壁沿いに13ヶ検出した。P₁₀を除き、何れも小径で、10~20cmと浅い。埋土には多量の炭化粒子が認められ、P₃・P₄・P₁₁には薄い焼土も認められる。

炉：中央に地床炉を検出した。径20cmの範囲で床面が火熱を受けている。掘り込みや蹠の痕跡は認められない。

その他の施設：北西壁寄りに円形の皿状ピット(P₁₄)を検出した。埋土には薄い焼土が認められる。

第5表 VII f 堅穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄
口径(cm)	36×26	28×26	24×24	20×20	34×26	32×26	24×24	20×22	24×20	46×28	24×24	18×18	28×26	160×124
深さ(cm)	10	18	11	11	18	11	12	10	13	31	25	18	15	21

出土遺物 (第18~25図・第6表・写真図版24~26)

本住居址から出土した大量の遺物は、その殆どが土器片であり、石器は図示した磨石の他には剥片が14点程出ているに過ぎない。また、これらの遺物の出土状況は、埋土上位~中位に多く分布し、床面近くになるとその量が減少する傾向が見られる。従って、図示した37点の殆どは埋土中からの出土であり、床面出土のものはNo1が挙げられる程度である。

(土器)

壺・蓋・鉢・甕の各器種があるが、大部分は大形の深鉢或いは壺である。全体的に薄手で、砂粒等を含む緻密な胎土。焼成も良く、しっかりした硬い焼き上がりのものが多い。

No1・2は壺形土器。No1は肩部及び頸部に各2本の沈線が繞る小形のもので、張った肩部から急に窄まった頸部となって、そのまま直立する口縁部へと続く。内外面共に横ナデ調整が施されているが、若干雑な感じがある。色調は、褐色を呈する。No2は、壺の体部上半~口頸部で、2段の沈線に依る連弧文(上段はやや不整で若干鋸歯的である)が描かれている。更に図上ドットで示した連弧文の下部には意図的に朱塗りが施され、全体に朱を用いるのではなく、朱の有無によって文様を作り出している。このような朱の使い方は、このNo2のみで、他には見られない。内面は、外面の割合丁寧なナデに比べ雑で、積み上げ痕が顕著に残っている。朱

彩以外の部分は、におい赤褐色を呈す。反転突刃。

No 3 は、小形の鉢で、底部から徐々に開き、口縁で更に外傾する器形である。文様は、底部外面及び体部下端に燃糸文 L に依る連弧文が描かれ、体部には縦位の燃糸文・体部上端には附加条 R L が横回転されている。更にナデを施した無文帯が走り、交互刺突文を施した複合口縁へと繋がる。口縁部の交互刺突文は 2 段施され、水平な沈線文がそれぞれを区画するが、交互刺突文はきれいにはならず、途中でズレたり、やや乱れて施されたりしている。また、口唇部にも附加条 R L が回転施文されている。この No 3 は内外面のナデ調整を始め、全体に非常に丁寧な作りで、浅黄褐色を呈す器面には、朱彩が残る。

No 4～7 は甕形土器で、何れも口径・器高等の大きさに比べて底径が小さいという特徴がある。No 4 は最大径を体部やや上位部に持ち、そこから緩やかに頸部で括れて口縁で開く器形であるが、全体的に曲線的な感じを受ける。体部下端～頸部に至るまで、全体に附加条 R L が縦回転で施されるが、その際、原体端の結び目の痕跡が同時に残されている。体上部～頸部及び口縁部には、浅い沈線に依る連弧文が上向きと下向きに描かれているが、やや崩れた感じで、各弧の沈線数も一定していない。頸部は、上端に粘土紐を貼付した上から施した交互刺突文・下端に横回転の附加条 R L が付され、中央は無文帯となっている。尚、これら口縁部・頸部・体上部の文様部分は、それぞれ水平沈線に依り区画されている。この No 4 は全体に磨滅が激しく、他に比べて砂粒が多目であり、やや脆い感がある。器面にはにおい黄褐色を呈するが、体部上半～口縁部にかけては炭化物の付着が見られ、体部下半以下では赤変が認められる。No 5 は体部やや下位に最大径を持つ甕で、頸部の括れはさほど強くなく、口縁部へと開く器形である。底部はやはり小さく目やや厚手であり、粘土が若干外側へはみ出しているのが特徴的である。体部文様は下端から燃糸 L が縦位に施文され、上部では斜方向となり、上端では横回転の附加条 R L が施される。この附加条は、口縁下端にも同様のものが付されているが、何れも条の上端には縄文原体の末端部に依る絞結的な文様が伴う。或いは環付縄の一種であるかもしれないが、結節縄文に依るものであると考えたい。この附加条の間には、極細い沈線で不整な鋸

第 6 表 VII I「竪穴住居址出土土器計測一覧

No	器種	口 径	最大口径	底 径	器 高	No	器種	口 径	最大口径	底 径	器 高
1	壺	3.4	7.0	5.0	5.2	7	甕	(27.2)	(31.6)	7.0	45.0
2	#	—	—	—	(7.2)	8	深鉢	(44.0)	/	7.8	(30.7)
3	小形鉢	14.4	/	5.9	10.9	9	#	25.0	/	7.0	25.0
4	甕	29.0	31.9	6.9	44.7	10	#	38.6	/	—	(35.4)
5	#	(27.8)	26.1	7.6	31.5	11	異形鉢	(位 2) × (35.4)	/	—	(20.4)
6	#	30.3	31.3	8.9	44.2						

() 推定値・() 現残高・—不明・単位: cm

陶文が描かれており、殆どが2本一組であるのに3本或いは1本となっている箇所もある。また、口縁部には孔が1ヶ穿っており、頸部にも孔を穿とうとしたが真跡が1ヶ残っている。色調はよい黄橙～褐色を呈す。反転実測。

No 6は、底部より緩やかに膨らみながら頸部で若干括れた後、口縁部で大きく開く器形の、大きな甕である。文様は、体部下端の立ち上がり部分で附加条R Lが横回転され、下位部分には燃糸Lが、更には下位より体部上端まではR L縄文が密に施文されている。頸部～口縁部にかけては、横ナデ調整の上より結節を伴う附加条R Lが3段施され、複合口縁部分には円形断面を持つ工具に依り交互刺突文が成され、口唇部分に於いても附加条R Lが施文されている。この交互刺突文は、No 4で見られた浮線的な端正なものではなく、2本の沈線間に刺突を上下交互に施したに過ぎず、しかも、No 3・4で見られた様に刺突方向も上下交互になっているのではなく、単に器面に対して直角に刺突している。また、全体的に雑な感は否めず、交互刺突になっていない部分・沈線が1本しか無い部分等があり、ラインとして繋がらない所もある。尚、体部外面には炭化物の付着が見られる。No 7は体部全体に膨ら味を持ち、頸部でやや窄まりながら、そのまま直立気味の口縁へと続くタイプの甕。下端から体部上位まで縦位の燃糸文Lが施され、上端で横～斜位に糸の向きを変化させている。頸部は横ナデに依る無文帯となり、複合口縁上には結条体土痕文が3条繞るが、部分に依っては4条になっている所もある。また、口縁部には、頂点に刻みを持つ緩い突起が1ヶあるが、口縁部分は完形でないので実際の突起数は定かではないものの、1～3ヶの間であったと思われる。外面全体に煤の付着が残る。

No 8～10は深鉢形土器。No 8は底部から口縁部へと外傾的に立ち上がり、口縁部分で更に開く器形で、体部上半まで燃糸文Lが縦行し、上端で横回転の附加条R Lと交叉しており、体部上位～口縁部は丁寧なナデが施されている。赤褐色を呈す器面には、煤の付着が見受けられ、体上半～口縁部が顕著である。硬質で、非常に焼成は良い。一部反転及び図上復元である。No 9は他に比べるとあまり開かない器形で、下端～口縁部付近まで附加条文R Lが割合疎に施され、口縁部分には割と深い平行沈線が施され、やや不整な波状文が描かれる。口縁部分には小さい突起が付けられるが、全体に7ヶ作られた様である。よい橙～浅黄色を呈す器面の内外には、ところどころに煤の付着があり、特に外面口縁部～体部に目立つ。尚、底部外面には、附加条R Lが若干付されている。No 10はNo 8と同様の器形を持つ鉢の体部上半～口縁部分である。体部には燃糸文Lが縦に走り、その上位～口縁にかけて3段の横回転附加条R Lが施される。最下段のものは、燃糸との交叉が著しい。口縁部分には2ヶの孔が穿たれている。

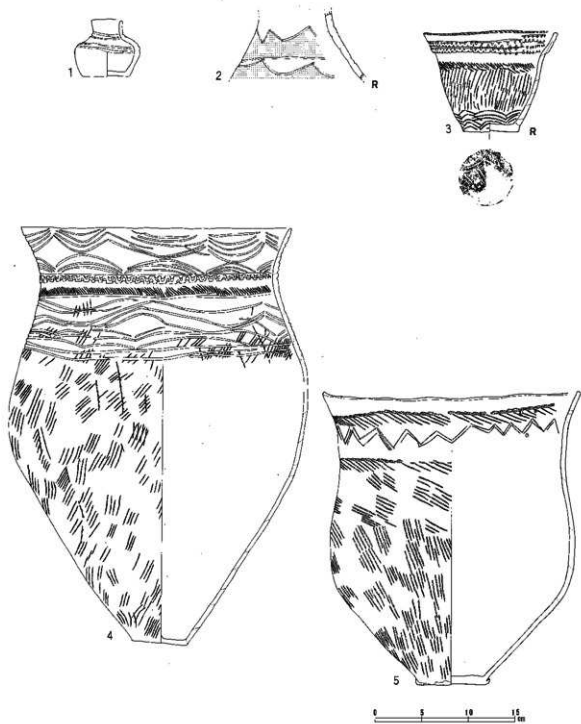
No 11は異形の浅鉢で、口縁部分の形状は一部推定復元部分はあるものの歪んだ楕円形を呈している。口縁部には沈線が2～3条引かれ、体部には単節縄文R Lが付され、体下半では削りの様なナデが縄文施文の上から大胆に成されている。内面及び外面体部上半～口縁部には煤の

付着が顕著であり、下半では赤変が見受けられる。尚、No11の底部と思われるアジロ痕を持つ小破片が1点見つまっているが、推定底径を出すには若干難があるものの、8～10cm位になるものと推される。また、この底部片は、やはり赤変が見受けられる。

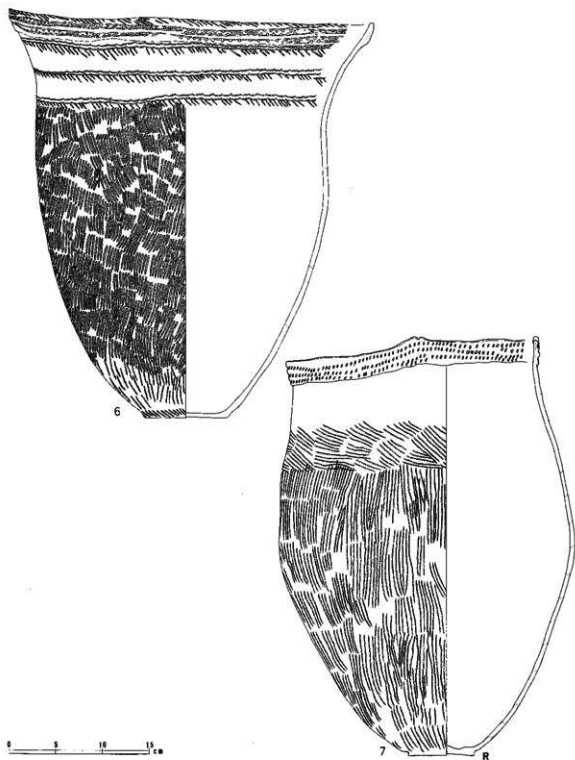
No12は、RLを施した粗製の蓋片。No13～19は割合小形の深鉢土器片であり、No13は極浅い沈線が山形に連なるもの、No14・15は共に結条体瓦痕文を有する口縁部。No16～19は同一個体で外面には附加条RLが施され、口縁部～体部には3本の沈線で描かれた連続山形文が2段続くが、各段を区画する沈線が2段下にも施されているため、或いはそれ以上の段があったものかもしれない。また、この沈線は所謂「櫛目」の如く、1本の工具に予め刻みを入れて施したものの様である。尚、この土器の口縁部内面にも、附加条RLが横回転施文されている。全体に、いぶい赤褐色を呈す。No12は甕の体部～口縁部片で、体部には燃糸文Lが縦に付された後、上端で附加条RLが横回転されている。頸部はナデの無文帯で、複合の口縁部には体部と同様の縦位の燃糸文Lが施される。内外面には煤の付着が見受けられる。No21・22（同一個体）もNo20と同様の文様を持つ甕で、体部には燃糸文Lが縦位に、体部上端及び口縁部には横回転の附加条RLが付され、頸部は無文帯である。外面には煤が付着する。口縁部に附加条RLが付されている例は、他にNo25・27・28（複合口縁）とNo29・30（同一個体）がある。No24は縦位燃糸Lの上位に沈線を施した例。

No26は深鉢形土器で、下端から口縁近くまで単節縄文LRが施され、体部上位にかけては沈線文が描かれる。この沈線は割合深く、しっかり描かれていて、全体的に横方向に引かれるが、一部斜位になる部分もあり、パターン的には定かではない。尚、口縁部には、つまみ出した様な半円状の小突起が見られる。No29・30は燃糸文L及び附加条RLを用いた同一個体の破片であるが、この土器の裏面には「モミ痕」が1ヶ見つまっている。（No30拓本左側の右下隅…後掲の鑑定結果参照）。No31は口縁部にまで単節LRを付し、体部上位～頸部にかけて沈線文を口縁部下端に刺突列点文を施している深鉢土器。沈線は、ナデで縄文を多少消した上から全体に雑に描かれており、横に延びた沈線が長楕円のように閉じる点などから、変形工字文的なモチーフを窺わせる。外面には煤の付着が多い。No34・35は同一個体で、体部には縦位燃糸Lが付されるが、底部外面にも施文され、底部側面から外面に向けて左右2ヶずつ孔が穿たれている。No36は、縦回転LRの付された底～体部の小形土器片。

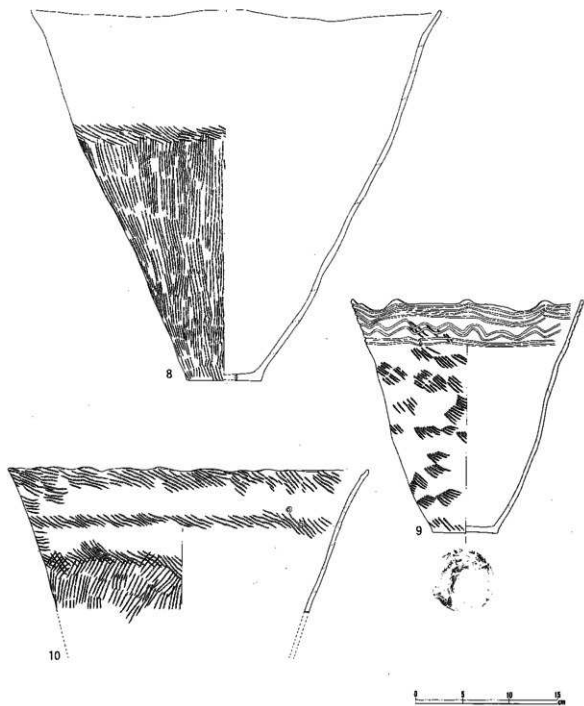
図示した土器の説明は以上の如くであるが、これ以外にも多数の破片資料があり、その中には燃糸Lを付すものが一番目立ち、附加条RLと組み合わせられるものも見受けられる。また、煤の付着するものも多く、その殆どは体部上半～口縁にかけてが顕著である。尚、これら大量の土器片の中には、全く他時期の破片が含まれないのも特徴的である。



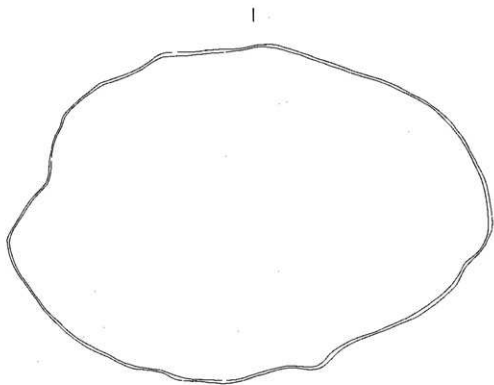
第18圖 VII f 豎穴住居址出土遺物(1)



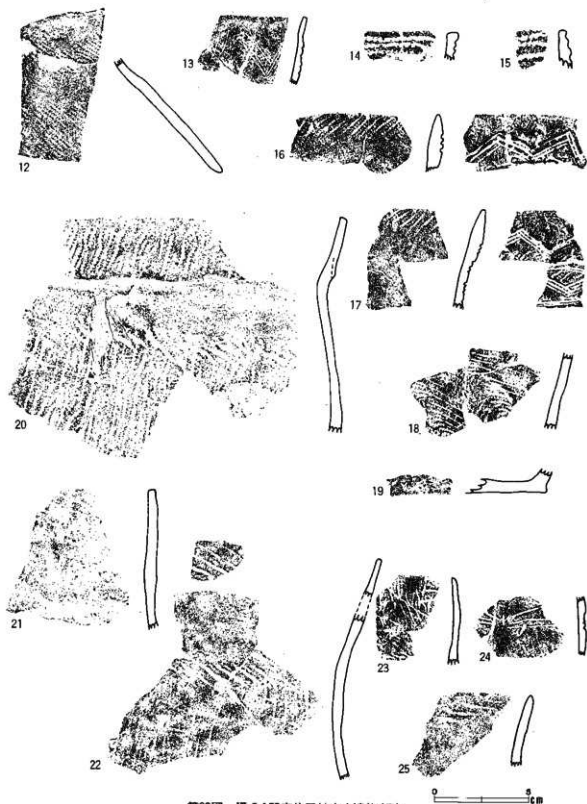
第19図 VII f 壁穴住居址出土遺物(2)



第20图 VII f 豎穴住居址出土遺物(3)



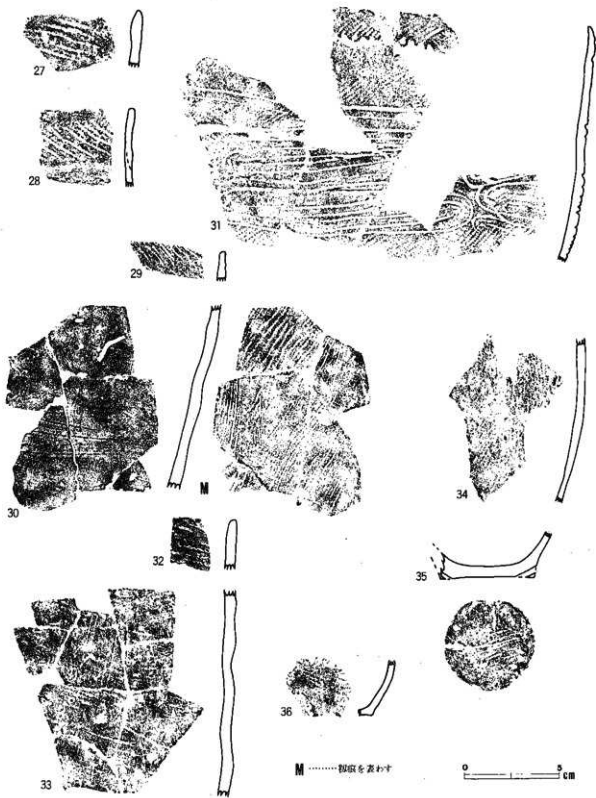
第21图 VII f 竖穴住居址出土遗物(4)



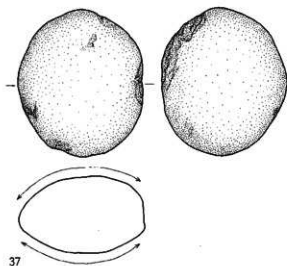
第22圖 VII f 豎穴住居址出土遺物(5)



第23圖 VII f 雙穴住居址出土遺物(6)



第24图 VII f 嬰穴住居址出土遺物(7)



第25図 VII I f 竪穴住居址出土遺物(8)

VII I j 竪穴住居址 (第26図・第7表写真図版5)

位置：調査区西側中央の西～東に下る緩斜面に位置する。北西にVII I f 住居址、東にはVII I i 住居址がある。焼失家屋。

検出：地表面40cmのII層にて、I層粉状バミスを含む黒色土の不整な分布域として検出した。北西壁は調査時の不手際により一部不明である。

形態・規模：長軸7.80m×短軸6.68mの僅かに東西に長い円形である。床面積(37.4)㎡。

埋土：大略5層に区分される。1・2層中には粉状バミスが多量に、3層には少量含まれる。

4層には多量の炭化材・焼土が認められ、東壁寄りで顕著である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、北壁52cm・東壁36cm・南壁30cm・西壁47cmとなる。北・西側が深く、東・南側が浅いのは、竪穴の立地する地形に起因するものと考えられる。尚、北西壁プランは推定によるが、立ちあがり土層断面にて確認した。

床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。床面は僅かに北西～南東に傾斜する。

柱穴：23ヶ検出した。壁沿いに位置するP₁～P₁₆とやや内側に位置するP₁₇～P₂₃がある。P₁₇～P₂₀は規模が大きいため主柱穴と考えられ、壁沿いに補助柱穴を、やや内側に主柱穴を配したものと想定される。P₁₄～P₁₆・P₂₁～P₂₃は床面下にて検出した。

炉：ほぼ中央、東壁寄りに位置する。火災時の影響によるものか保存状態は不良である。偏平な5ヶの礫を、やや弧状の「二の字」に配した石囲炉と推される。礫は、床面を掘り込んで設

(石器)

図示したNo.37は、割合使い込まれている磨石で、一部敲石的に使われた痕跡も残っている。石質は、輝石安山岩である。

本住居址の所属時期は、床面出土の遺物が少ないものの、極浅い埋土内から大量の土器がまとまって出ており、しかも他の時期を混じえない単一時期の遺物であるという点から、弥生時代後期に位置づけられると考えられる。

第7表 VII I 竪穴 住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
幅(cm)	32×32	34×32	32×30	31×31	60×40	38×34	42×42	40×36	34×34	36×32	32×30	36×36
深さ(cm)	26	65	33	66	69	57	37	29	30	30	43	41
	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	
口径(cm)	16×28	(24×22)	(28×28)	(26×26)	38×38	44×44	40×36	32×32	(32×32)	(26×24)	(26×24)	
深さ(cm)	26	30	35	34	74	64	68	68	40	42	45	

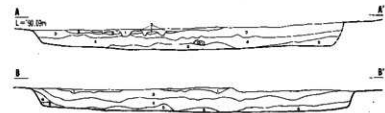
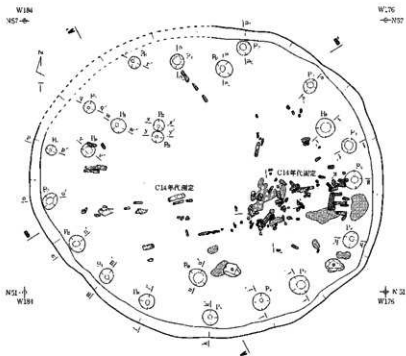
置されたものもあるが、大半は僅かな凹みに配された状況である。平行する礫は長さ80cm前後である。北西・南東方向には礫の配置は認められない。焼土は長60cmの方形に分布し、最厚10cmの堆積を示す。構築に際しては、床面に長80cm、深さ20cmの方形皿状ピットを作り、粘質な黒褐色土で10cmほど埋め戻し火床面としている。

出土遺物 (第27～29図・第8表・写真図版27)

(土器)

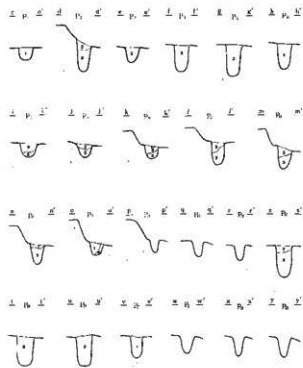
復元可能な土器は図示した4点のみである。No 1・2は壺形土器の体～口縁部で、何れも頸部に沈線を持ち括れるタイプである。No 1は、刻みのある浅い山形突起を持つ口縁で、外面に3本・内面にも極細い沈線が1本繞っているが、内外面共にやや不整な沈線で場所に依っては本数の増減が見られる。No 2はNo 1に比べて口頸部がやや短い平口縁で、内外面共に寛ナデ調整のみが施される。体部は、No 1・2共に横位LRが施文されるが、No 2の方がやや膨ら味を持っている。両者共に炭化物の付着が見られ、No 1にあってはより顕著である。口径はNo 1が(15.4)cm・No 2が(15.0)cmで、何れも反転実測である。No 3は、波状口縁を持つ壺。頸部には沈線が1本繞り、体部上半に膨ら味を持ちながら頸部で括れ、口縁へと開くタイプで、最大径は口縁部にある。体部には横～斜位のLRがやや疎に施文され、口縁部内外面では横ナデ・内面体下半では縦の寛ナデ調整が成されている。外面には煤の付着が認められる。口径(26.5)cm。以上No 1～3は、何れも胎土に雲母・石英・砂粒等を含む焼成も比較的良好な資料であるが、3者共に埋土中からの出土である。

No 4は床面直上の出土であるが、口縁部片の一部がVII I a住の埋土より出土している。口径15.0cm最大径17.2cm・底径6.2cm・器高16.8cmの大きさを持つ、肩部が張り頸部で「く」の字状に括れて外傾する口縁部に至る、最大径を肩部に有する壺である。体部下端～肩部及び口縁部には縦位のLR縄文が付され、肩～頸部には計11本の平行沈線が繞り、更に平行沈線と直交する様に縦位の刻み目が2箇所描かれている。また、口縁には2ヶ一對の山形小突起が3ヶ配されている。砂粒を若干含む胎土で、焼成も比較的良好であり、内面調整も寛に依る横ナデが丁



- 1 3YIV 土砂埋没土 柱状穴の底から約1m掘削した土層に於ける。
- 2 3YIV 土砂埋没土 柱状穴の壁に接している土層(約0.7m厚)に於ける。
- 3 土 柱状穴の壁に接している土層(約0.7m厚)に於ける。
- 4 柱状穴の壁に接している土層(約0.7m厚)に於ける。
- 5 3YIV 埋没土 柱状穴の底から約1m掘削した土層に於ける。
- 6 3YIV 埋没土 柱状穴の壁に接している土層。

W:76
→N57



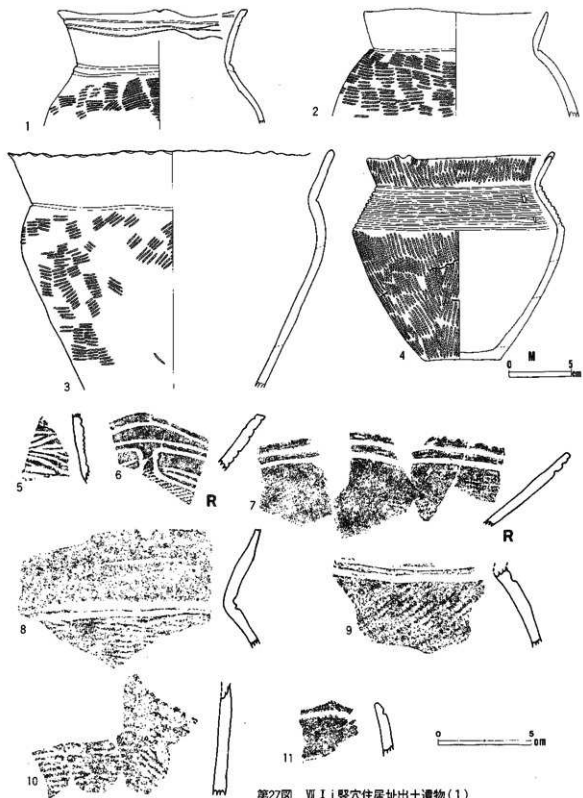
- 1 3YIV 土砂埋没土
- 2 3YIV 土砂埋没土
- 3 YIV 埋没土
- 4 3YIV 埋没土



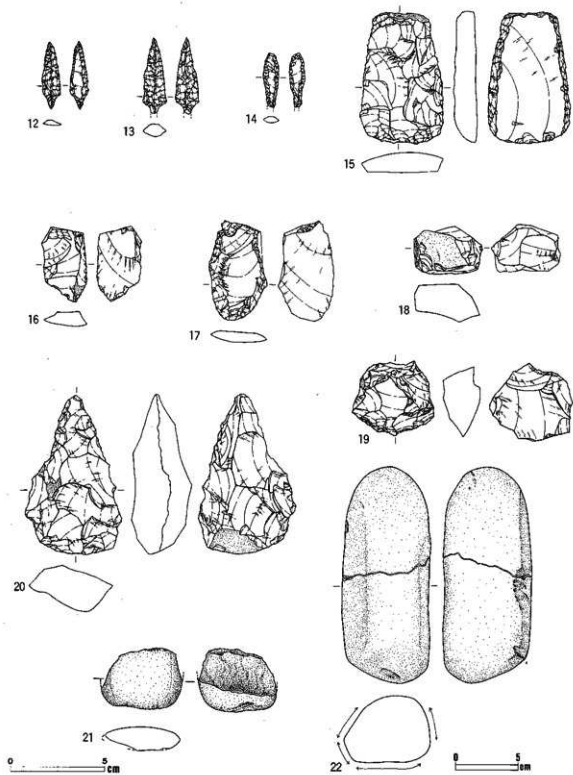
- 1 3YIV 埋没土 柱状穴の底から約1m掘削した土層に於ける。
- 2 3YIV 埋没土 柱状穴の壁に接している土層(約0.7m厚)に於ける。



第26図 Ⅰ | 竪穴住居址



第27圖 VI j 豎穴住居址出土遺物(1)



第28图 VI I j 豎穴住居址出土遺物(2)

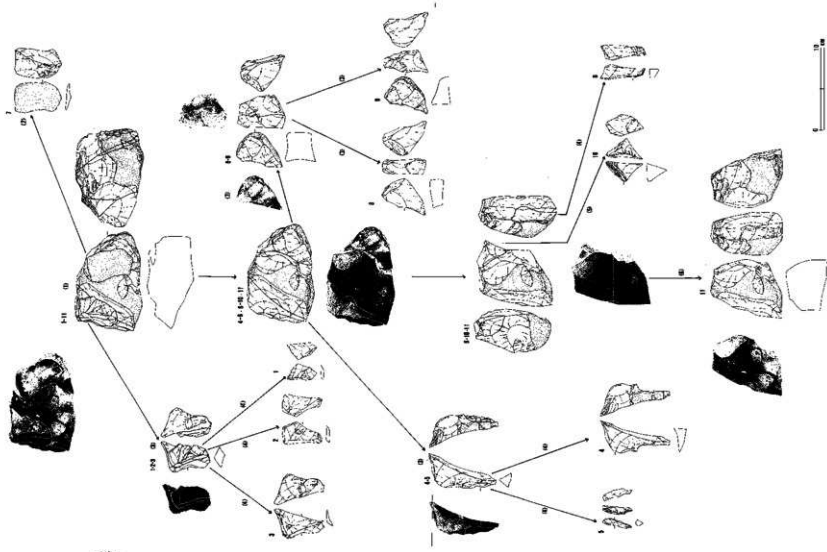


图1 郭家崖新石器时代遗址出土器物(3)石器组合原料

穿に成され、全体として精良な感じを受ける。色調は内外面共に、によい灰黄褐色を呈し、外面には煤の付着が顕著に見られる。尚、このNo 4土器の底部外面には、「モミ痕」が1ヶ付いているのが確認された。(モミ痕の鑑定分析の項参照)

No 5は、壺の頸～口縁部片。No 6は高坏・No 7は高坏或いは浅鉢の口縁部片である。3者共に作りは丁寧で焼成も良く。No 6・7では朱塗りの痕跡が認められる。No 8～10は甕片・11は壺の口縁部片である。以上拓影図のNo 5～9は何れも埋土出土、No 10は床面、No 11は焼土内からの出土である。

(石 器)

図示したのは、第28図の11点と第29図の接合資料である。これらの出土層位は、埋土中・下層及び面直上のもので、何れも家屋焼失の際に伴出した焼土・炭化粒子含有層以下の出土であり、特に接合資料は床面出土の一括資料である。また、掲載した以外にも多数の石片等が出ており、全部で45点にも登る。

No 12～13は、何れも凸基有茎鎌である。No 12は基部にあまり括れを持たない菱形に近いタイプで、稜線は片面にのみ見られ、他面は刃部調整のみが施される。No 13は茎部末端が欠損しているが、表裏面共に稜線を持つ丁寧な作りであり、先端部も鋭利である。No 14は薄い剝片を加工して作った鎌で、側縁の刃部調整のみが成されている。基部自体はあまり目立たず、柳葉型にも近いが、基部と頸部の区別があることから凸基有茎鎌とした。頸部末端は欠損しており、先端部では、一度欠損した後再度調整剝離を施した痕跡が見られる。以上3点の石質は、No 12・13が硬質頁岩、No 14がチャートである。No 15は偏平な長台形を呈する石器で、下端及び両側縁に刃部を有している。成形は、表面全体に調整を施して割と偏平な器面を作り出し、裏面ではコアから剝離した際の大きな剝離面をそのまま器面として使用しており、下端部の刃は表面・両側縁の刃は裏面から形成されている。用途は掻・削器の類とも考えられるが、不明である。硬質頁岩製。(尚、同種のものには、VII a 住第8図No 45・遺物包含層出土第13図No 10がある。) No 16・17は硬質頁岩製の不定形石器。両者共に裏面は無調整で、表側からのみ刃形成されている。No 18・19は硬質頁岩ののコアであるが、No 19では下端に刃が形成されており、コアスクレーパーとして使用されたものであろう。No 20も硬質頁岩製の石ペラで、下端部に若干の刃部を持つが、概して調整は大まかである。

No 21は磨製石斧の刃先端部で、硬砂岩を用いている。No 22は輝石安山岩の砥石で、良く使い込まれている。

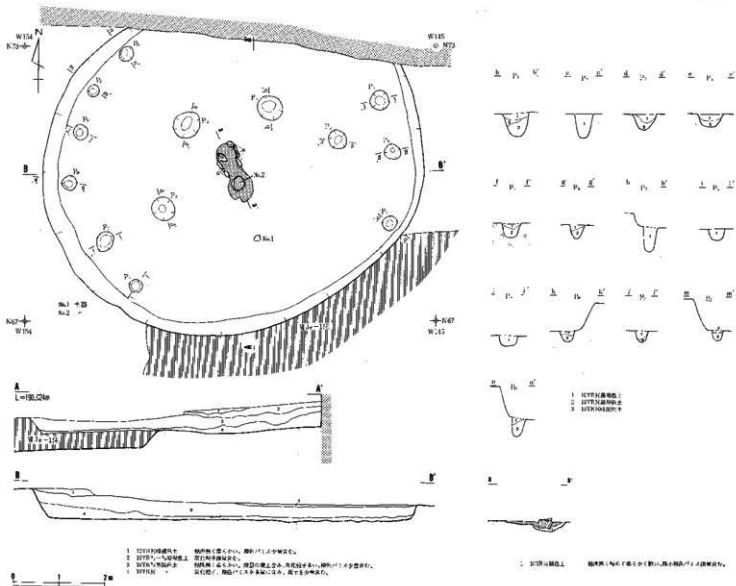
接合資料：図示した接合資料は、石質が硬質頁岩で、全部11点からなる。これら11片は、何れも石器としての2次加工が施されたものではなく、すべてフレーク及びコアである。また、接合復元された母岩は完全なものではなく、剝離消失している部分がある。

第8表 VII I 竪穴住居址出土石器接合資料計測一覧

No	試片				備 考	No	試片				備 考
	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	
1	3.7	1.9	0.4	2.1		7	5.7	3.6	0.5	10.1	打面作製の調整剥離
2	4.9	2.6	0.4	5.5	一括剥離	8	3.7	5.1	1.6	43.2	一括剥離
3	6.5	3.1	0.6	10.1		9	5.5	3.9	2.3	54.3	
4	8.9	3.0	1.6	29.8	一括剥離	10	4.5	2.3	2.5	14.0	打面作製の調整剥離
5	3.6	1.0	0.5	2.5		11	8.7	6.0	5.0	95.0	コア
6	5.5	1.9	1.1	0.9		8-11	8.3	12.1	5.7	207.4	母岩

第29図は、母岩から各剥片に至るまでの剥離過程と、各形態について図示したものである。この接合資料は、No11のコアを中心に、左右両側で剥離作業が行なわれている。従って便宜上、左側剥離グループ(1～6)をA・右側剥離グループ(7～10)をBと呼び、剥離過程に沿って図中にも番号を付した。以下、作業過程に沿って、簡単に説明していくこととする。

- (1)母岩：器面を観察すると、まず第1に細かい敲打に依る器面調整が行なわれているのが判かる。即ち、図の上線部分、特に裏面上部に見られる細かい剥離がそれである。従って、各フレック作製に当たって、母岩そのものを加工しやすい形態に整えることが、作業工程の第1であった。
- (2)打撃面の作成：フレックを作っていく際のちょうど良い器面を得るために、不必要な表の自然面を剥離させる。母岩よりNo7が剥離しているのが、この過程である。また、左側の剥離グループAでは表皮部分は見つかっておらず、すでに打撃面が作られている段階である。更に、母岩の裏面に於いても、この作業が完了していることが判かる。
- (3)ブロックの作成：母岩より、各フレックの素になる大きな剥片を作り出す過程である。この接合資料では、直接母岩よりフレックを剥離させて行くのではなく、必ず大片を作った上で、それに再打撃を加えてフレックを作っている。Aグループでは、2回ブロックを取っており(1～3及び4・5)、Bでは1回(8・9)作り出している。
- (4)フレックの作成：各ブロックに各々打撃を加えて、石器の直接的な素材としてのフレックを作り出す過程。Aに於けるNo1～3及びNo4・5がこれに当たる。但し、No5については素材としてのフレックというよりは、或いはNo4を加工する際の剥離部分とも受け取れる。また、BのNo8・9はそれ自体がまだブロックの状態であると考えられる。尚、No6は例外的に、コアより直接的にフレックが剥離したものである。
- (5)新たな打撃面の作成：ブロックを取り去った結果、打面として不都合な部分を更に取り除いて、次の打撃面作成のために調整を施している。即ち、母岩に加えられた最初の調整(1)・(2)



と同様の作業に当たる訳である。Bグループに於けるNa10の剝離がこれである。

- (6)コア：No11は、以上の様な過程を経て残った母岩の一部である。従って、母岩と同様に更に打撃を加えられればフレークを生み出して行くものである。但し、No11に関しては、再打撃を加えられた痕跡は見受けられない。

以上の様にして、フレークやコアが生み出されるのであるが、これらは、石器作成のための材料貯蔵として住居内に残されたものと思われる。

本住居址の所属時期は、以上記述した出土遺物から、弥生時代中期後半と考えられる。

VII J a - 1 竪穴住居址 (第30図・第9表・写真図版6)

位置：調査区中央北端の北西～南に下る緩斜面に位置する。南にVII J e - 1住居址、VII J f - 1住居址がある。北側の一部は道路の為未調査である。焼失家屋。

重複：VII J e - 1住居址、VII J f - 1住居址に後続する。

検出：地表下40cmのV層にて検出した。

形態・規模：東西8.30m×南北(6.40)mとなる。未調査区域があり全容は不明であるが、北東～南西に長軸を有する円形と推される。床面積(39.5)㎡。

埋土：大略4層に区分される。2～4層にかけて炭化粒子が認められ、下位層ほど濃密となる。4層には焼土も認められる。自然堆積。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、東壁35cm・南壁38cm・西壁62cmとなる。東壁が浅いのは検出時の下げすぎによるもので、本来50cm前後と推される。南壁が浅いのは、竪穴の立地する地形に起因すると考えられる。

床：硬い部分が炉を中心に径1mの範囲からP₈北側にかけて帯状に認められるほかは、全体に柔らかい。凹凸は認められず、ほぼ平坦で全体に北～南へと僅かに傾斜する。床面全域に炭化粒子の分布が認められ、特に壁際から、やや内側にかけて顕著である。

柱穴：13ヶ検出した。中央寄りに位置するP₁～P₄、壁沿いに位置するP₅～P₁₃がある。中央寄りに位置するものは、規模が大きいことから主柱穴と考えられる。埋土には炭化粒子が濃密に認められる。尚、竪穴南半は調査の不手際により未検出である。

第9表 VII J a-1 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
□径(cm)	56×52	49×46	34×50	60×56	42×42	36×34	32×32	30×25	46×37	34×32	32×32	28×25	34×31
深さ(cm)	51	52	54	48	34	30	38	24	23	23	27	24	21

炉：ほぼ中央に土器埋設石囲炉を検出した。埋設土器は、径50cm・深さ20cmの円形ピットを10cmほど埋め戻した部分に掘えられる。焼土は土器内に14cm、周囲に10cmと厚い堆積を示す。石囲炉部は、偏平な竈を直立させ南東・北西側に「二の字」状に配置される。掘り込みは認められず、床面に直接配置されたものと考えられる。焼土は竈の内側に沿って分布し、最厚6cmを測る。

出土遺物 (第31・33図・写真図版28)

埋土・床面よりかなりの遺物が出土している。特に、埋土下位～床面出土のものが多く、土器点数で290点近くにも登っており、石器についてもフレック等を含めて36点を数える。

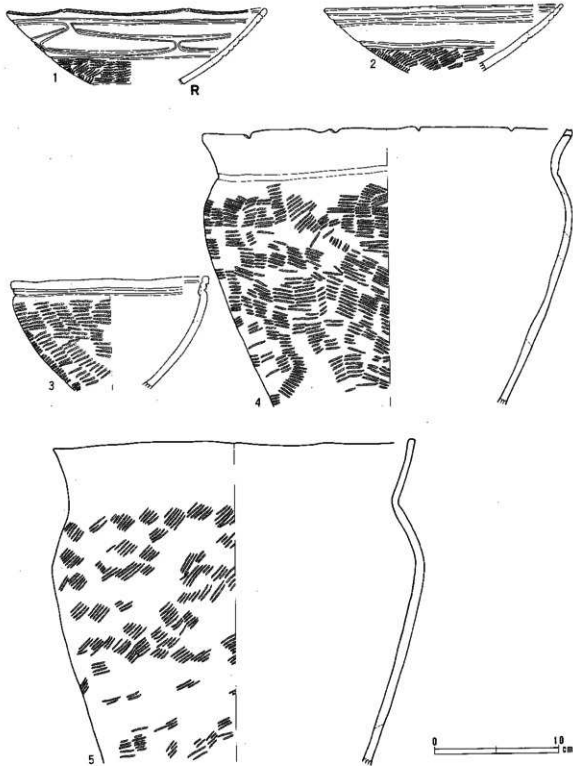
(土 器)

No1は、刻みを有する緩い山形突起がある高坏。口縁・体中位・下端に水平な沈線を引いて区画し、体上半に変形工字文・下半に単節縄文LRが横位に施文されている。尚、突起間の口唇部及び口縁内面に、沈線が描かれている。No2も高坏であるが、体中位に2本・口縁に3本の平行沈線が繞り、体部上半は丁寧なナデ・下半は横位LRが施される。口縁内面にも平行沈線が2本描かれている。No1・2共に金雲母の入る精良な胎土で、焼成も良く、外面には朱塗り痕が認められる。No1の口径は(21.0)cm・No2は(19.4)cmを測り、No1では明赤褐色・No2では暗褐色を呈する。No3は浅鉢で、口縁近くで段を持つ碗に近い器形。括れた部分に2本の平行沈線・内面口唇近くに平行沈線が1本繞っている。体部外面には横位のLRが全体に施文され、煤の付着も見受けられる。口径(16.1)cm。No4・5・10・11は、何れも頸部が「く」の字状に屈曲する甕で、体部には横～斜位のLRが施される。特に、No4は埋設炉として使われていた口径30.0cmの甕で、全体に煤の付着・赤変箇所が見られる。他の3点にもやはり炭化物の付着が認められる。No6～8は壺片で、No7は沈線を有する山形突起部分の口縁片・No8は平行沈線を文様とする体部片である。(No8と同種の物に遺構外出土第154図No88・89がある) No6は、磨消に依る連弧文を施した精製土器であるが、文様は体下半にまで及んでいる。文様は水平沈線に依って体上半・中位・下半の3段に区画される。上半では連弧文が二重に描かれた後、帯状に真中部分を磨消しているが、中位では二重に描かれた連弧の更に内側に半円が描かれており、内側から順に縄文部と磨消部が繰り返されて文様を作っている。下半では上位とは逆向きの連弧が描かれ、やはり弧内に縄文が残されている。金雲母の入る緻密な胎土で焼成良好。尚、外面には朱彩が良く残っている。No9は台付鉢の脚部分と考えられる。

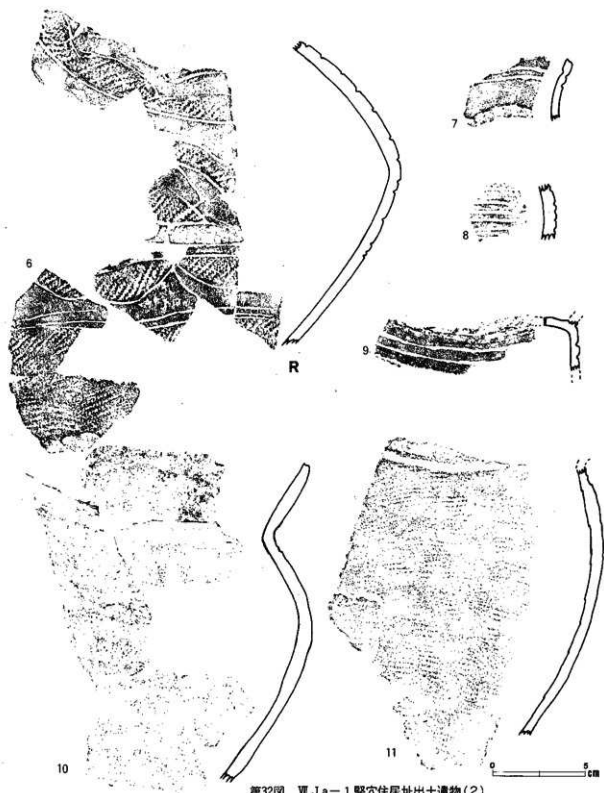
以上挙げた11点は、何れも床面及び埋土下層出土のものであるが、No1・2では遺構外出土の破片も接合している。

(石 器)

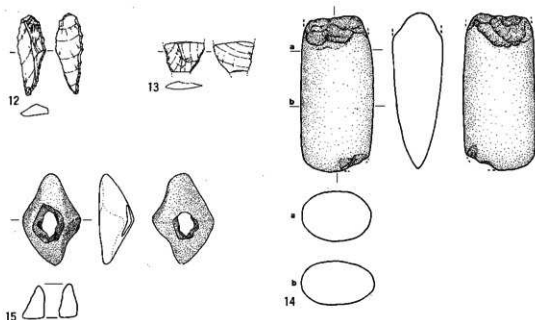
図示した4点は、全て埋土最下層の床面直上出土。No12は片刃を両側に持つ不定形石器で、



第31圖 VII Ja-1 豎穴住居址出土遺物(1)



第32圖 WJa-1 竪穴住居址出土遺物(2)



第33図 VII J a-1 竪穴住居址出土遺物(3)

0 ——— 5 cm

No.13は石匙の破片であろう。No.14は大型始刃石斧の刃部で、刃先にも欠損が見られ、使用の痕跡が顕著である。全体に丁寧な作りで、石質はプロピライト。No.15は、外見菱形を呈するが有孔の石製品である。孔は、両面から偏平な工具を用いて穿たれた様に思われ、断面に凹凸のある不整形をしている。また、表面は凹凸を残すものの、全体に磨かれすべすべしている。No.12・13・15の石質は、硬質頁岩。

以上の出土遺物から、本住居址は弥生時代中期後半に属するものと思われる。

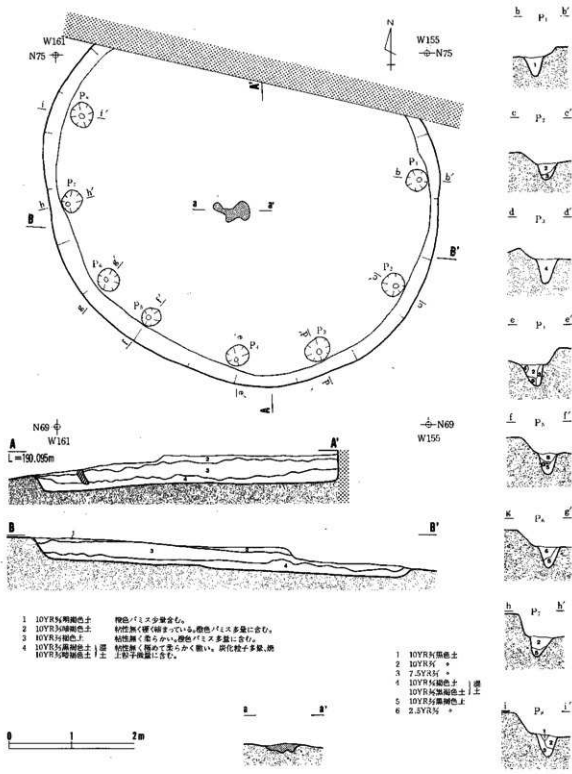
VII J a-2 竪穴住居址 (第34図・第10表・写真図版6)

位置：調査区中央北端の北西～南東に下る緩斜面に位置する。東にはVII J a-1住居址がある。北側の一部は道路の為未調査である。焼失家屋。

検出：地表下30cmのII層にて検出した。

形態・規模：東西6.60m×南北(5.00)mとなり、北西～南東に長軸を有する円形と考えられる。床面積(22.8)㎡。

埋土：大略4層に区分される。全体に橙色バミスを多量に含み、2層で硬くしまっているほかは柔らかい。4層には炭化粒子・焼土が少量認められる。自然堆積である。



- | | |
|------------------|---------------------------------|
| 1 10YR5/4 暗褐色土 | 褐色パリス多量含む。 |
| 2 10YR 5/6 暗褐色土 | 粘性無く硬く締まっている。褐色パリス多量を含む。 |
| 3 10YR 5/8 暗褐色土 | 粘性無く柔らかい。褐色パリス多量を含む。 |
| 4 10YR 5/3 黒褐色土 | 粘性無く極めて柔らかく脆い。炭化粒子多量、炭上粒子微量を含む。 |
| 5 10YR 5/2 黒褐色土 | |
| 6 2.5YR 5/4 暗褐色土 | |

- | | |
|------------------|--|
| 1 10YR 5/4 暗褐色土 | |
| 2 10YR 5/6 暗褐色土 | |
| 3 7.5YR 5/4 暗褐色土 | |
| 4 10YR 5/6 暗褐色土 | |
| 5 10YR 5/3 暗褐色土 | |
| 6 2.5YR 5/4 暗褐色土 | |

第34図 VII Ja-2 竪穴住居址

第10表 VII J a-2 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
口径(cm)	34×34	38×36	38×42	38×34	32×30	36×34	34×32	40×38
深さ(cm)	33	26	40	39	34	35	33	35

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、東壁15cm・南壁25cm・西壁32cmとなり、東壁が浅いのは掘掘時の下げすぎによる。

床：全体に硬く、小さな凹凸が認められる。それらは、炉を中心に径2mの範囲・P₅～P₆の間で極めて顕著である。全体に北西～南東に僅かながら傾斜する。

柱穴：壁沿いに8ヶ検出した。P₁～P₆間で90cmと近接するほかは、1.50m前後のほぼ等間隔の配置となる。埋土は混土状態が多く、P₁・P₆には炭化粒子が認められた。

炉：中央に地床が検出した。焼土は、東西58cm・南北28cmの帯状に広がり中央部で15cmと厚い堆積を示す。焼土下に分布に沿った帯状の掘り込みが認められる。

出土遺物 (第35図・写真図版29)

出土した土器は比較的少なく、復元できたものはNo1の壺1点であり、全体に体部片が多い。

No1は、緩やかな山形突起が連続的に7ヶ繞る口縁で、体部上端～口縁になくて沈線に依る区画が見られる深鉢である。体上端～頸部にかけて平行沈線が3本繞り、括れる頸部～口縁部にかけて、口縁の曲線に沿いながら突起毎に閉じる三角形に近い磨消帯を配している。施文される縄文はLRで、体部と文様部では向きが異なっているが、明らかに沈線に依って切られている。体部下半は線位のナデ調整がなされており、底部外面にはアジロ痕が見られる。また、外面及び内面に煤の付着を有し、本来的には浅黄橙の色調を呈する外面の体下半では赤変しており、外面の剥離も一部に見られることから火熱を強く受けたことが窺える。口径(29.2)cm・底径(11.6)cm・器高33.7cm。No2はミニチュア土器で、非常に稚拙な作りである。No3・5・6は深鉢片、No4は括れを持たない鉢形土器である。何れも胎土には砂粒が混じる厚手の土器片で、No3を除き単節縄文RLが付けられている。

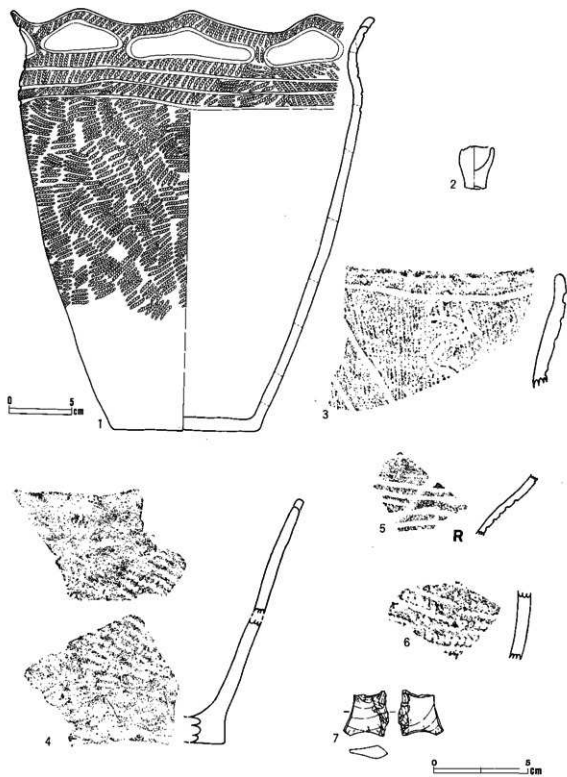
No7の不定形石器は、両面加工の刃を持つ珪質頁岩製のものである。

以上図示した遺物は、No1～3が埋土中位・No4～7が埋土下位～床面直上の出土である。

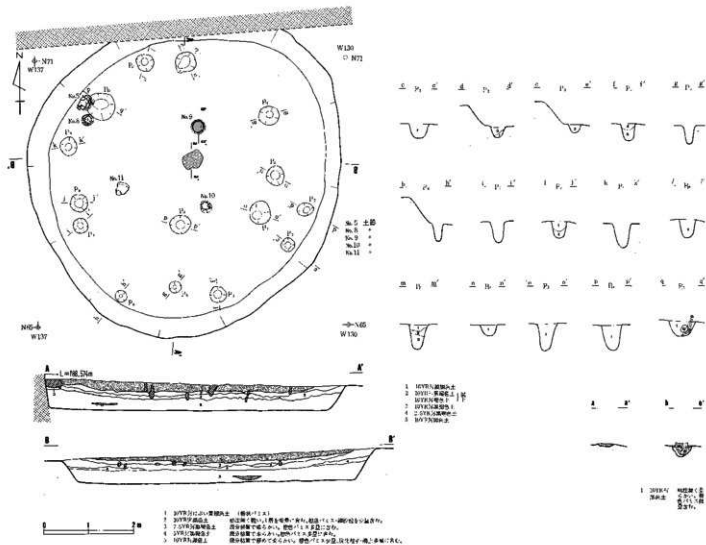
以上の出土遺物から、本遺構の所属時期は縄文時代後期と考えられる。

VII J c 竪穴住居址 (第36図・第11表・写真図版7)

位置：調査区東側北端の西～東に下る緩斜面に位置する。西にVII J f-1住居址、南にはVII J g-1・2・3住居址がある。北側の一部は道路の為未調査である。焼失家屋。



第35图 VII Ja-2 竖穴住居址出土遗物



第36図 青 Jc 竪穴住居址

検出：地表下80cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模：長軸7.52m×短軸6.90mの北東～南西に長い円形である。床面積〔30.7〕㎡。

埋土：大略5層に区分される。I層粉状バミスは6mの範囲に分布し、中央部で20cmと厚い堆積を示す。3～5層にかけて、炭化粒子・焼土が認められる。特に5層では、炭化材や焼土塊の小ブロックが見られる。自然堆積である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、東壁50cm・南壁58cm・西壁70cmとなり、北壁は断面観察から60cm前後と推される。西側が深く、東側が浅いのは堅穴の立地する地形に起因すると考えられる。

床：V層下位を床面とし、炉を中心に径2mの範囲とP₆・P₇間から炉にかけて硬い部分が認められる。全体凹凸は見られず、ほぼ平坦である。床面の中央から1ヶ、北西壁沿いから2ヶ、保存状態の良好な土器（甕）が出土している。何れも倒立した状態である。

柱穴：14ヶ検出した。壁沿いに位置するP₁～P₁₀、内側に位置するP₁₁～P₁₄がある。P₁₁・P₁₃・P₁₄は、他のピットに比べ規模が大きいため主柱穴と想定されるが北西側では検出されず明確ではない。埋土には、何れも炭化粒子・焼土が認められ、特にP₄・P₁₀・P₁₃・P₁₄では多量である。P₅～P₇・P₉は床面下にて検出した。

第11表 VII Jc 堅穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	
口径(cm)	50×48	38×20	40×34	38×34	(28×28)	(30×30)	(35×35)	40×40	(40×40)	42×38	46×44	44×40	52×48	48×42	66×60
深さ(cm)	31	24	19	37	42	40	50	38	56	43	54	25	61	50	35

炉：ほぼ中央に地床炉及び土器埋設炉を検出した。地床炉は径50cm×36cmの円形に焼土が広がり、中央部で6cmの堆積を示す。僅かな掘り込みが認められる。土器埋設炉は、地床炉の北側に位置し、径36cm、深さ34cmの円形の掘り込みに埋設される。土器内焼土は8cmの堆積を示す。外側埋土の上位部分は、極めて硬く叩き締められている。

その他の施設：北西壁沿いに検出したP₁₅は形態・規模等から柱穴とは見なし難く、近接している土器が出土していることから、貯蔵関連施設の可能性が考えられる。

出土遺物 (第37～42図・第12表・写真図版30)

本住居址からは多量の遺物が出土し、その大部分が床面出土である。

(土器)

図示した17点の殆どは床面出土であり、特にNo 5・10・11は完形に近い形で床面上に伏せてある状態で検出され、No 8は体部下半以下を埋設して置かれたものであり、No 9は炉の埋設土器として用いられていたものである。また、No 2～6は埋土中～下位層の出土であり、No 16・

17も埋土内の出土である。

No 1・2は壺形土器。No 1は口縁部及び底部が欠失しているが、体部中央に最大径を有し、上下対称の様に頸部・底部で同様に窄まる。文様は頸部～体下半までを平行沈線（2～3本）に依り3段に区画し、それぞれに磨消技法を伴う波状文が描かれ、体部下半には縄文LRが施される。金雲母等が若干入る胎土で焼成も比較的良く、褐灰～にぶい橙色を呈し、外面には朱彩が残る。No 2は体部上半～頸部片で、工字文と刺突列が施された比較的薄手の土器である。

No 3は磨滅の激しい高坏であり、No 4はLR縄文が付された蓋形土器のツマミ部分である。

甕形土器の出土は多く、図示したものだけでもNo 5～15の11点に登り、種類も多い。口縁部形態も波状・突起・平縁とあり、頸部の括れも強弱様々見られ、文様もLR縄文（横位及び斜位）・捺糸文・無文とある。但し、これら甕類は何れも体部外面に煤の付着が見され、体部下半が赤変しているもの（No 5・8・11・12。No 9は全体が赤変している。）・内面にまで煤や炭化物の付着が見られるもの（No 5～8・10～12）などがある。底部外面は、アジロ痕を残すもの（No 5・10・12）・ナデ調整のもの（No 6～8）・粘土が外側にはみ出して外面そのものもザラザラして、地面上に置いた様な痕跡を持つもの（No 9・11）が見られる。胎土は石英・砂粒等を含み、焼成も比較的良いものが多い。

No 16・17は縄文時代晩期の土器で、No 16が小形の浅鉢で朱塗りの痕跡があり、No 17はやや胎土等も粗い壺の一部である。何れも流れ込みに依る遺物と思われる。

No 18は、上器片を加工した円盤状土製品で、埋土中位からの出土である。

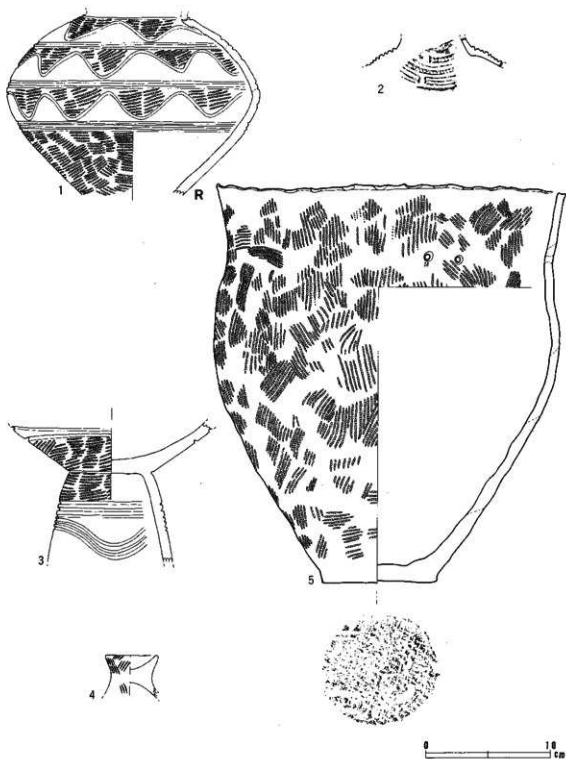
（石器）

6点の図示であるが、他に剥片が32点出土している。No 19は珪質頁岩製の円形状の石器であるが、表裏両面から調整を施し、刃部形成も両面から行なっている。No 20は不定形石器で、石

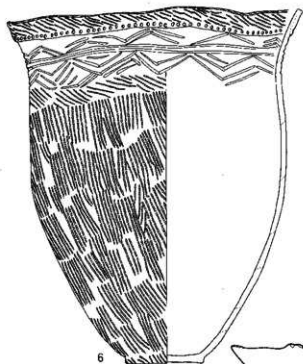
第12表 VII J c 竈穴住居址出土土器計測一覧

No	器種	口径	最大胴径	底径	器高	脚径	No	器種	口径	最大胴径	底径	器高
1	壺	—	26.4	—	(14.4)	/	10	壺	27.5	28.0	11.9	35.4
2	#	—	—	—	(2.3)	/	11	#	27.8	26.1	8.6	27.2
3	高坏	—	/	6.8	(10.8)	—	12	#	—	—	8.9	(10.3)
4	蓋	—	—	—	—	(ツマミ径) 4.4	13	#	(23.4)	(22.2)	—	(20.2)
5	甕	28.3	27.9	9.2	32.4	/	14	#	—	—	5.5	(4.7)
6	#	(23.9)	20.9	6.4	28.9	/	15	#	(22.2)	(25.7)	—	(21.7)
7	#	(27.8)	(28.0)	(9.8)	33.9	/	16	小形浅鉢	8.0	/	3.7	4.9
8	#	29.3	26.8	9.5	34.8	/	17	壺	—	19.4	—	(8.7)
9	#	—	26.3	9.2	23.0	/						

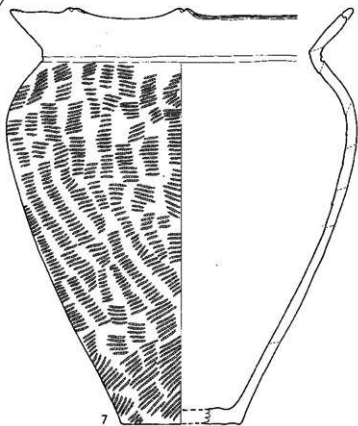
() 推定値・() 範囲高・—不明・単位: cm



第37图 VII Jc 豎穴住居址出土遺物(1)

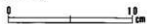


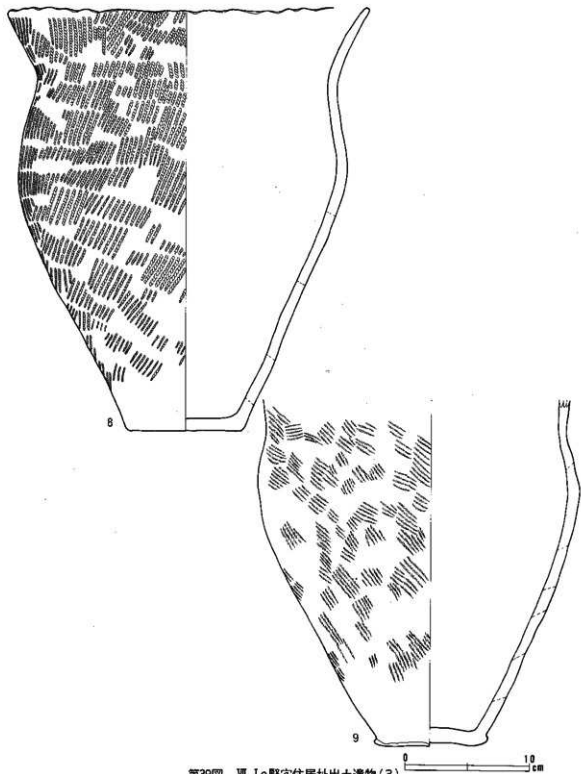
6



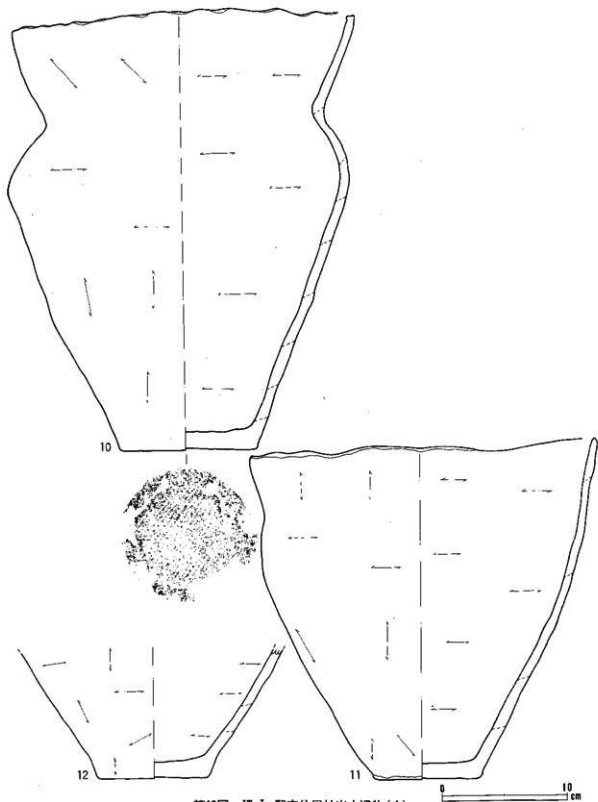
7

第38圖 Ⅶ c 豎穴住居址出土遺物(2)

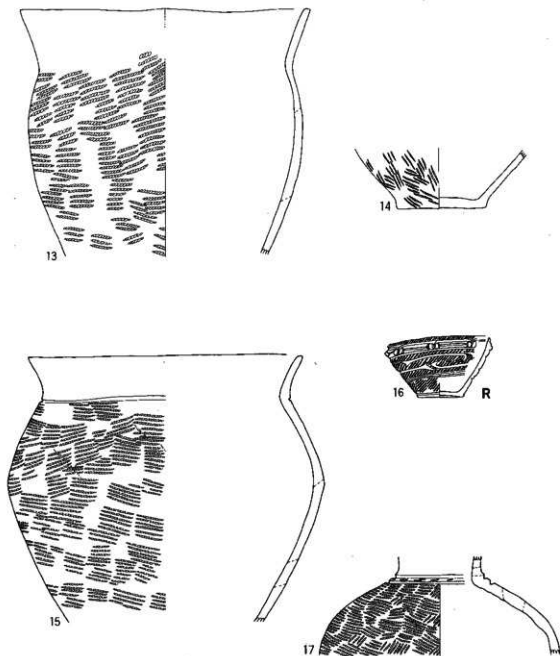




第39图 Ⅵ Jc 豎穴住居址出土遺物(3)

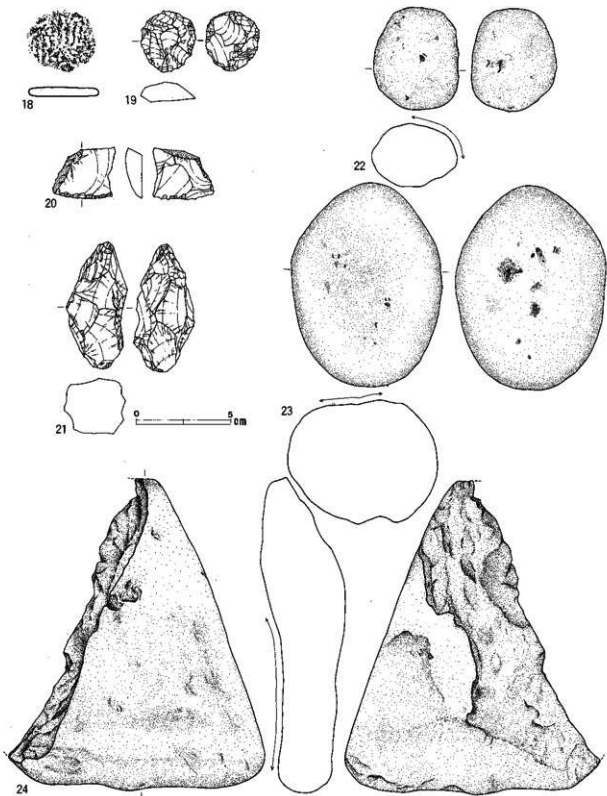


第40圖 VII Jc 壑穴住居址出土遺物(4)



0 5 cm

第41圖 VI Jc豎穴住居址出土遺物(5)



第42图 VII Jc 暨穴住居址出土遺物(6)

0 5 cm

質は珪質頁岩である。No21は、石質が頁岩のコア。No22・23は安山岩質溶岩の磨石であるが、両者共にあまり使用が顕著ではない。No24は台石。表面のみに使用痕が見られ、その使用面から見ると元来割れていた石を利用したものの様である。石質は輝石安山岩。

以上の様な出土遺物から、本住居地の所属時期は弥生時代中期後半と考えられる。

VII J e - 1 竪穴住居址 (第45・46図・写真図版8・9)

位置：調査区東側北寄りの北西～南東に下る緩斜面にあり、VII J f - 1 住居地の西側、VII J e - 2 住居地の北側に位置する。

重複：VII J f - 1 住居址、VII J a - 1 住居址、VII J e - 2 住居址に先行する。

検出：地表下40cmのV層にて検出した。

形態・規模：残存する北壁・西壁から、径6mの円形と推される。

埋土：大略5層に区分される自然堆積である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立みあがる。壁高は、北壁47cm・西壁73cmとなる。北壁は後続するVII J a - 1 住居址により削平を受けている。

床：全体に硬くしまっており、ほぼ平坦である。

柱穴：西壁南側に1ヶ検出した。径28cm×22cm・深さ21cmの小ピットである。

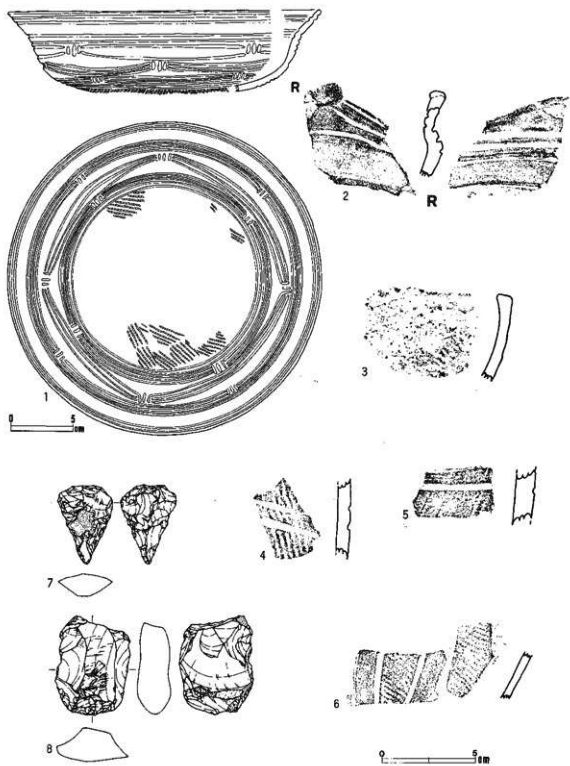
炉：中央に地床炉を検出した。焼土は50cm×40cmの方形に広がる薄いものである。

出土遺物 (第43図・写真図版31)

(土 器)

本住居址から出土した遺物は、点数的に少ないだけではなく、破片が殆どであり、接合復元できたものはNo1だけである。

No1は、括れを有する浅鉢状の土器であるが、底部形状については欠損のため不明である。括れを持つ頸部と急に開く口縁部には2本一組の沈線が内外面に繞っており、更に外面体部下半に於いても一組の平行沈線がひかれ、それぞれが文様帯を区画している。即ち、頸～口縁部はナデ・体上半では変形工字文・体下半では単節斜行縄文RLが施され、外面全体に朱彩の痕跡が残っている。変形工字文は、縦の刻みに依り、4を基調として区画している。細かめの砂粒を含む精良な胎土で焼成も良く、灰白～にぶい黄橙の色調で、全体的に薄手に仕上がっている。口径(25.4)cm。反転実測。埋土上層の出土であるが、遺構外出土の土器片もかなり接合している。No2は、壺或いは高坏の段を持つ口縁部片で、突起の頂部を丸く肥大させており、外面段の部分に平行沈線3本が入り、内面には段に沿ったものと突起に沿って頂部に至る2本の沈線が描かれている。焼成は良好で、胎土と精良なこの土器片は、埋土上層の出土である。



第43图 VII Jo-1 聚穴住居址出土遗物

No 3は小形深鉢の口へ体部片。口縁が内湾気味に立ち上がるタイプで、刻みを持つ小さな突起を有し、体部にはLRが斜行する。No 4～6は、何れも深鉢の体部片であるが、No 4はLRに沈線・No 5ではRLに沈線が走り、No 6では沈線区画に依る磨消帯が縦に入る。以上No 3～6は、床面直上の出土である。

(石 器)

住居内から出土した石器は、図示した2点の他にコアが2・フレークが12程あるが、何れも埋土から出土したものである。No 7は二等辺三角形を呈する厚みを持つ石器であるが、両縁にやや雑な刃が作り出されており、先端部では若干薄くなっている。用途的には楯・削器の類と考えられるが、石錐の可能性も有り得る。硬質頁岩製。No 7はコアである。下端に細かい剝離がみられ、調整が成された様である。両サイドが薄く作り出されているが、細かい剝離を加えた刃作りはされておらず、使用された可能性は薄いであろう。硬質頁岩製。

本住居地の所属時期は、床面直上の土器片から、縄文時代後期に位置づけられると思われる。

VII J e - 2 竪穴住居址 (第45・46図・第13表・写真図版8・9)

位置：調査区中央北寄り、VII J e - 1住居地の南側、VII J f - 2住居地の西側に位置する。
焼失家屋。

重複：VII J e - 1住居地に後続し、VII J f - 1・2住居地に先行する。

検出：地表下40cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模：南側～西側にかけて検出された壁から、南北(7.60)m×東西(7.60)mの円形と推定される。床面積(37.8)m²。

埋土：大略5層に区分される。I層粉状バミスは中央部で10cmと厚い堆積を示す。床面直上には炭化粒子・焼土が濃密に認められる。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁88cm・南壁70cm・西壁87cmとなり、全般に深い傾向を示す。

床：ほぼ平坦で全体に柔らかいが、炉を中心に径1.5mの範囲と北東域に硬い部分を認める。床面全体は僅かに北西～南東へと傾斜する。

柱穴：20ヶ検出した。本住居地の柱穴配置は壁沿いを基本とし、北東域で多数検出されたピット群は、床面の硬さが顕著な部分に位置することから、出入口等の施設に関連する可能性がある。しかし、重複するVII J f - 2住居地の床面レベルやピットの埋土とに明確な相違が認められないことから断定は出来ない。

炉：ほぼ中央に地床炉を検出した。焼土は径56cmの円形に広がり、中央部で20cmと厚い堆積

第13表 VII J e-2 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂	P ₃₃	P ₃₄	P ₃₅	P ₃₆	P ₃₇
口径(cm)	26×22	24×22	28×25	22×19	24×22	24×22	34×26	31×28	24×24	30×26
深さ(cm)	18	14	14	22	29	31	32	36	34	38
	P ₃₈	P ₃₉	P ₄₀	P ₄₁	P ₄₂	P ₄₃	P ₄₄	P ₄₅	P ₄₆	P ₄₇
口径(cm)	26×25	27×23	28×26	24×23	28×23	32×30	30×30	28×27	28×26	18×20
深さ(cm)	35	35	38	40	40	44	44	46	32	26

を示す。掘り込みが認められる。

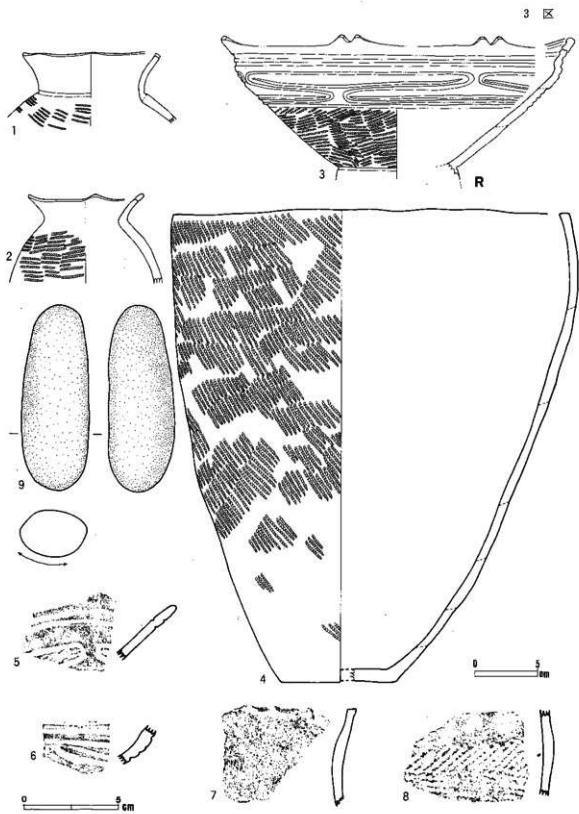
出土遺物 (第44図・写真図版31)

(土器)

図示したのは、壺2点・高坏3点・甕3点の計8点である。

No 1・2は床面出土の壺であるが、口縁に緩やかな突起 (No 1は8ケ・No 2は4ケ) を持ち頸部は「く」の字状に括れ、体部には横位のLR縄文が施される。器形は、No 1では体部上位位いは中位に膨らみを持ち底部に向ってすぼまるタイプ (VII J f-1住No 1参照)・No 2は緩やかに膨らみながらそのまま底部に連なる長胴タイプ (VII J k-1住No 1参照) になると思われる。両者共に、金雲母・石英・細砂を含む精良な胎土で焼成も良く、外面には煤が付着する。No 3は殆どが埋土中～下位層出土の脚部欠損の高坏であるが、遺構外出土の破片も接合している。頸部に段を有し、2ヶ一對の山形突起が6ヶ配される口縁へと広がる。頸部及び体中位・下端には沈線が繞り、体上半には変形工字文・下半には横～斜位のLR縄文が付されている。口縁内面には水平に1本沈線が繞り、更にその上的一对の突起の片方から次の突起の一つへと突起に沿って沈線が引かれている。但し、一對の2つの突起間には、沈線は描かれない。金雲母を含む精良な胎土で焼成もよく、にぶい橙色～浅横橙色を呈し、外面全件には朱塗痕が残っている。No 4は口縁が内湾する深鉢で、器面全体に斜行縄文RLが施されるが、二次加熱のため体下半は磨滅・体上半～口縁部は赤変し、口縁部には煤が付着している。内面は、口縁付近では丁寧な横ナデが見られるが、それ以下は割合雑な仕上げとなっている。胎土には、石英・砂粒を含む。出土は、埋土中～下位。No 5・6は埋土下層出土の高坏。No 7・8は何れも埋土中位層出土の甕片であり、No 7は押圧に依る波状口縁・No 8は体上半部の破片である。

尚、本住居址は、VII J e-1住及びVII J f-2住との切合い関係があるものの、明らかに本住居址に属すると判断出来る遺物は、図示した以外にも土器片が多数出ており、その殆どが弥生時代に属するものであることから、No 4土器についても同時期であろうと見做した。



第44图 Ⅷ Je-2 整穴住居址出土遗物

(石 器)

№9は、床面直上出土の磨石。一面に使用痕が残されているものの、あまり使用頻度は高くない様である。石質は、安山岩。

本住居址の所属時期は、以上の様な出土遺物から、弥生時代中期前半であると考えられる。

VII J f - 1 竪穴住居址 (第45・46図・第14表・写真図版8・9)

位置：調査区東側北寄りの北西～南東への緩斜面に位置する。北西にVII J a - 1住居址、西にVII J e - 1住居址、南にはVII J f - 2住居址がある。焼失家屋。

重複：VII J e - 1住居址、VII J f - 1・2住居址に後続し、VII J a - 1住居址に先行する。

検出：地表下40cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模：北側～東側にかけて検出された壁と埋土断面より、南北(8.80)m×東西(8.84)mの円形と推される。床面積(46.0)㎡。

埋土：大略5層に区分される。1層粉状バミスは西側に分布し、中央部で16cmと厚い堆積を示す。3層黄褐色土は基本層序IIIに相当し、竪穴がまだ凹みを有する時の急激な自然的営力による堆積と考えられる。4・5層には炭化粒子・焼土が認められる。自然堆積。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁67cm・東壁40cmとなり、竪穴の立地する地形から北西が深く、南東が浅いものと考えられる。

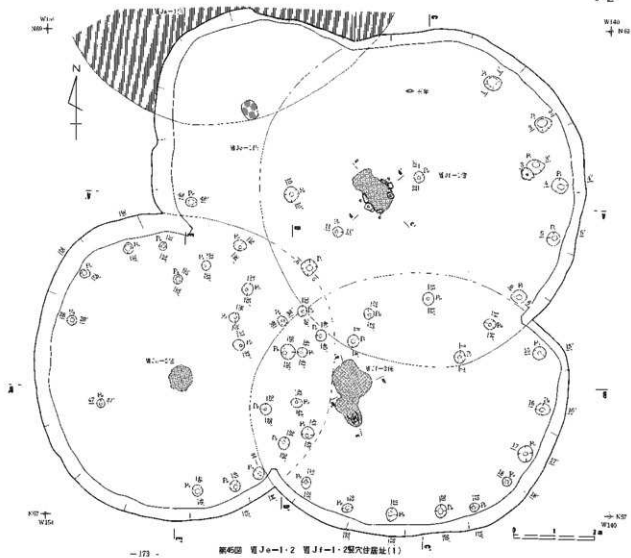
床：全体に柔らかく、ほぼ平坦であるが、炉の周辺にて硬い部分と僅かな凹凸を認める。特に炉の北西側で顕著である。床面は全体に西～東へと僅かな傾斜を認める。

柱穴：12ヶ検出した。壁沿いに位置するP₁～P₁₀、炉を挟むように位置するP₁₁・P₁₂とがある。北西域において検出できなかったが、壁沿いに全周していたものと推される。

炉：中央西寄りに「二の字」状の石囲炉を検出した。礫は、北東・南西側にそれぞれ3ヶ配される。竪穴の長軸が北東～南西方向と推定されることから、長軸に直交する形の配置と考えられる。平行する礫列は僅かに弧状を示し、北東側56cm・南西側68cm、両者の間隔は内側で62cmとなる。焼土は礫の内側に沿って115cm×64cmの方形に広がり、中央部で10cmと厚い堆積を示す。礫の配置に掘り込みは認められず、床面に直接配置され、焼土部分も特に掘り込みは認められない。北西・南東側に礫の痕跡は認められなかった。

第14表 VII J f - 1 竪穴住居址ビット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
11径(cm)	40×36	42×38	46×36	39×42	37×34	40×34	32×28	32×30	42×41	39×37	26×26	36×26
深さ(cm)	28	29	30	30	24	30	33	44	36	36	40	38



出土遺物 (第47~49図・写真版32)

土器26点・石器12点の図示である。

(土 器)

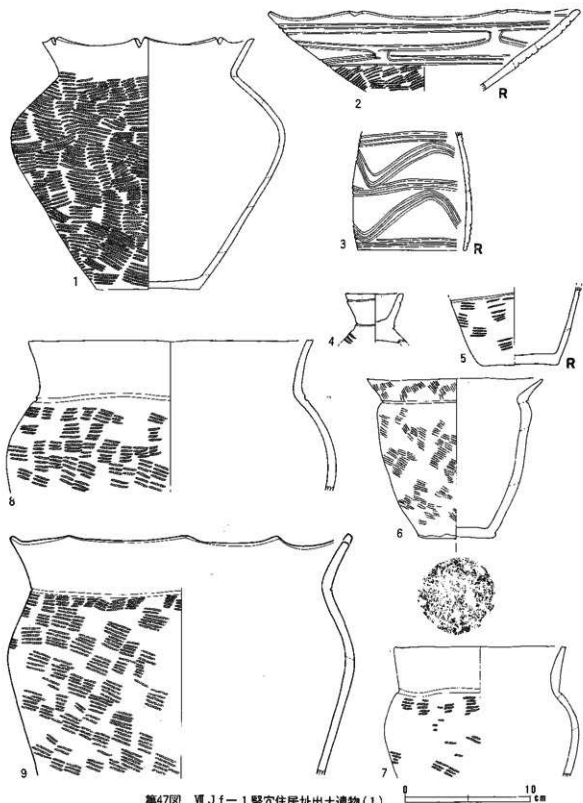
壺・高坏・蓋・甕の各器種が出土している。壺は、No 1と5。No 1は体上部に最大径を持つもので、体部全体に横位LRが施され、頸部は「く」の字状に括れた後、刻みを持つ6ケの山形突起を有する口縁へと広がる。全体に薄手の丁寧に作られた土器で口径16.9cm・最大径22.0cm・底径8.2cm・器高20.2cm。No 5は体下半以下の部位しか残存していないが、体下半に沈線を有する点・横位LR施文後、更になからナデを加えるなど、作りが丁寧である点・朱塗痕が見られる点などから壺であると判断した。No 1・5共に精良な胎土で焼成も良く、外面には煤が付着している。

高坏は、No 2・3及びNo12~23。No 2は脚部欠損の刻みのある緩やかな山形突起を6ケ持ち、上半に沈線描きに依る変形工字文・下半に横位LRを施すもの。No12~14も坏部片であるが、No12は段を持つ平口縁・No14は小さな突起を持つ。脚部には、寛描沈線に依る波状文を施すもの(Na 3・16・17・19)、磨消縄文を持つもの(Na18・20)、波状沈線に刺突烈を加えたもの(Na21~23)が見られる。特にNo20は、磨消部分が左右両側から斜めに延びて降りて来た部分に、刺突1ケを施しているのが特徴的である。また、No21~23は同一個体であるが、上下2段に波状文が施され、その上下を区画する沈線沿いに刺突列点文が加えられている。以上述べた高坏類には、すべて朱彩が施されており、金雲母等を含む精良な胎土で、焼成も良好である。

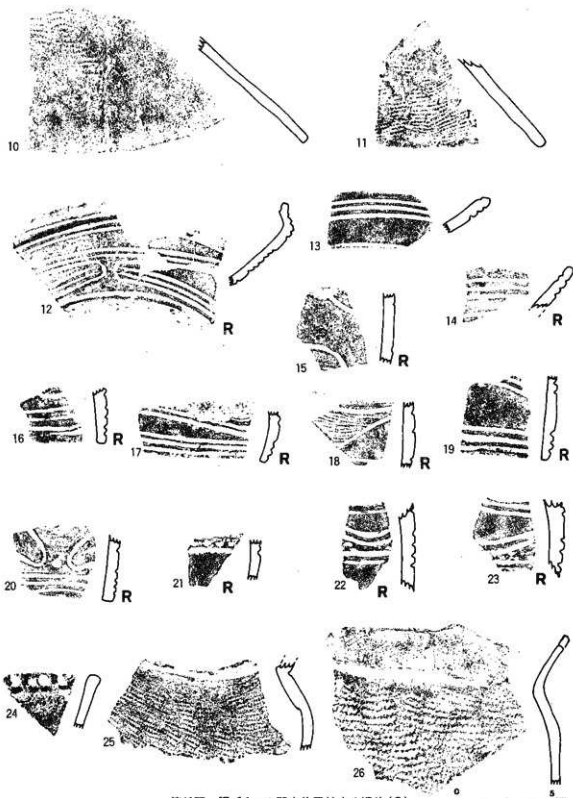
蓋形土器はNo 4・10・11の3点。No 4はツマミの部分であるが、上端及び頸部に細い沈線を持つ。何れも縄文LRを施した粗製のもので、内面の調整もあまり丁寧でなく、胎土も砂粒等を含むもので、焼成も普通である。色調はにぶい橙色~褐色を呈す。

甕形土器は、頸部に沈線を1本伴う括れのあるものが多く、口縁は平口縁・緩い山形突起を持つもの・押圧に依る小波状口縁のものなどがある。また、最大径を体部上半に持ち、体部には横~斜位のLR縄文を付すものが殆どである。No 6は小形の甕で体部にあまり膨らみを持たず、頸部で若干括れて強く開いて口縁に至る。最大径が口縁に有るタイプである。外面全体に極細い無節縄文R / が斜位に施され、底部外面には木葉痕が残る。内面は寛ナデ調整がかなされているが、非常に雑で、一部指で直接搔に取った痕跡も残っている。石英・砂粒等が混じり、焼成は比較的良好で、外面には煤が顕著に残っている。石英・砂粒等が混じり、焼成は比較的良好で、外面には煤が顕著に残っている。口径13.8cm・底径6cm・器高12.8cmを測る。

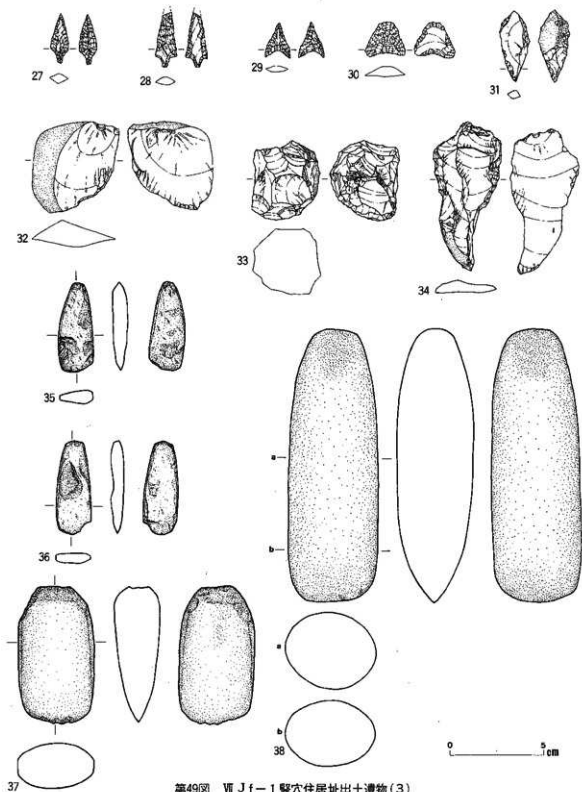
以上図示した土器類は、No 5・9が床面出土、No18が炉、他が埋土中位~下位層出土のものである。この以外にも多量の土器が出ているが、殆どが中位層以下からのもので、甕・高坏片が特に多い。



第47图 Ⅱ J f-1 竖穴住居址出土遗物(1)



第48圖 VII Jf-1 豎穴住居址出土遺物(2)



第49圖 VII Jf-1 鬃穴住居址出土遺物(3)

(石 器)

12点の図示。他にコア1点・二次加工のある剥片13点・加工無しの剥片42点が出土している。

No.27～29は石鏃。No.27は凸基有茎鏃で、全体的に丁寧に作られており、先端も非常に鋭利である。No.28は平基有茎鏃であるが、先端部が欠失している。No.29は凹基無茎鏃で、両側縁に軽い段を持ちながら鋭い先端部へと続く。作りは丁寧である。石質は、No.27が珪質頁岩・No.28が珪質凝灰岩・No.29が硬質頁岩。No.30は、凹基無茎鏃に近い形態を呈するが先端部及び基部両端の鋭利さが若干欠ける点。及び長さ1.9cm・幅2.2cmと横の数値の方が大きい点などから、スクレーパーの類と考えたい。メノウ製。No.31は不定形な石鏃である。剥片の一端を鋭く加工して鏃部としているが、他の部分は殆ど調整されておらず、片面には自然面が残る。硬質頁岩製。No.32・34は不定形石器で、一部に簡単な刃が作られている。No.33はコア。以上No.32～34は、何れも硬質頁岩製である。

No.35・36は小型の磨製石斧であるが、両者共に使用痕が明瞭であり、刃部を両研磨している。No.37は基端部欠損の磨製石斧で、刃部には刃こぼれが見られる。また、欠損の基部には軽い再研磨が認められることから、欠損後も再加工して使用された可能性が高い。No.38は、「太型蛤刃石斧」の完形品である。基部は側面が作られない断面円形の棒状を呈するが、そのまま左右対称に緩い丸味を持って刃部へと至る形状であり、基端部に於いても緩やかにすばまり、基端面は方形を呈している。刃部には若干の刃こぼれが見受られるが、磨ぎ直しは成されていない様である。長さ14.8cm・幅(a)4.8cm・厚さ(a)4.1cm・重さ471gを測る。これら4点の石斧の石質は、No.35・36が珪質泥岩、No.37が角閃岩、No.38が緑色凝灰岩である。

以上挙げた石器12点の出土層位は、No.35・36が床面、他は何れも埋土中位～下位層である。

本住居地の所属時期は、出土遺物から弥生時代中期前半に位置づけられるものと推される。

VII J f-2 竪穴住居址 (第45・46図・第15表・写真図版8・9)

位置：VII J e-2 住居地の東側、VII J f-1 住居地の南側に位置する。焼失家屋。

重積：VII J e-2 住居地に後続し、VII J f-1 住居地に先行する。

検出：地表下40cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模：東側～南側にかけて検出された壁と埋土断面より、南北(6.50)m×東西(8.00)mの円形と推される。床面積(36.5)m²。

埋土：大略5層に区分される。1層粉状バミスは中央部で12cmと厚い堆積を示す。4・5層には炭化粒子・焼土が少量認められる。自然堆積。

第15表 VII J f-2 堅穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂	P ₂₃	P ₂₄	P ₂₅	P ₂₆	P ₂₇	P ₂₈	P ₂₉	P ₃₀	P ₃₁	P ₃₂
口径 (cm)	34×28	30×26	32×32	37×30	42×39	34×23	34×22	33×28	33×29	28×22	28×24	30×29	28×26	38×36	26×28
深さ (cm)	45	45	42	45	44	30	44	38	37	38	41	36	42	42	52

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、東壁33cm・南壁39cmとなる。

床：ほぼ平坦で全体に柔らかいが、炉の東側と堅穴中央にて硬い範囲が認められる。床面全体は僅かに南東～北西へと傾斜する。

柱穴：壁沿いに検出したP₁₈～P₂₉の9ヶの柱穴配置から、P₁₈・P₂₄～P₂₇も含めた15ヶより構成されると想定されるが、重複する他の住居址のピット埋土と特別な相違も認められないことから断定はできない。埋土には何れも炭化粒子・焼土が認められる。

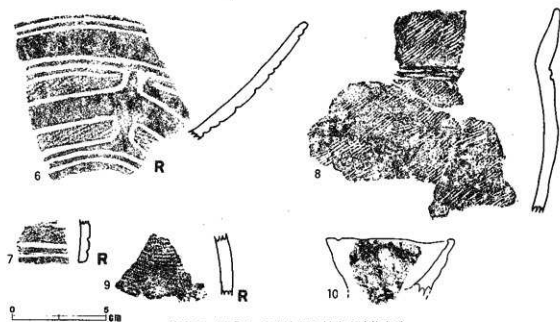
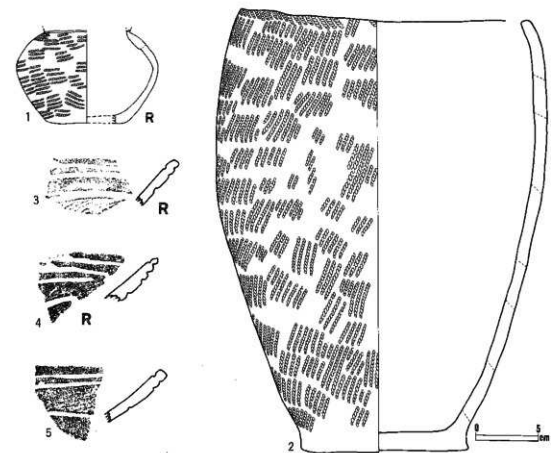
炉：中央西寄りに地床炉を検出した。焼土は1.60m×1.00mの範囲で不整に広がり、中央部で16cmと厚い堆積を示す。掘り込みは認められない。

出土遺物 (第50・51図・写真図版33)

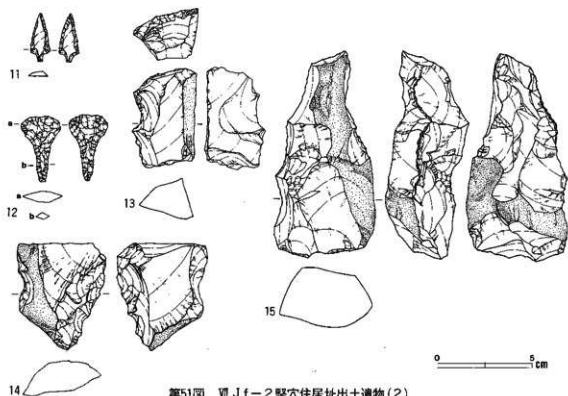
(土器)

全部で10点の図示。No 2・7・9が炉出土、No 3・4・8が床面直上、他が埋土中～下位の出土である。他にも多数の土器類が出ているが、総じて埋土中位以下が多く、その大多数が弥生時代に属すると思われるものである。

No 1は、口縁部欠失の小形壺。体部には横位LRが施されるが、更にその上からナデ調整が加えられており、炭化物の付着も目立つ。頸部には沈線が1条繞り、本来的には「く」の字状に屈曲すると思われる。胎土には金雲母が多量に見られ、焼成は比較的良い。反転実測。No 2は、炉の焼土上に転がった状態で検出された殆ど完形の深鉢である。器面は全体に斜位LRが施されるが、口唇近くで羽状に条が逆方向になる。底部外面には木葉痕が残るが、ナデに依る再調整が成されており、内面調整も口縁付近と底部では横ナデ・体部は縦の篋ナデが加えられているがやや雑である。器形は、厚味のやや外反した底部から緩やかに立ち上がり、口縁で内湾するタイプである。胎土には石英・砂粒が入り、焼成も比較的良好であるが、浅横橙～橙色を呈する外面には二次加熱に依る赤変があり、所々に剝離が見られる。大きさは、口径が23.2cm・底径14.4cm・器高35.8cm。No 3～6は高坏の坏部片であるが、何れも変形工字文が施され、No 3・6には磨消縄文が見られる。No 7は高坏の脚部片。No 8は細い無筋縄文LRが施された壺の口縁～体部片である。頸部には細い沈線が2本描かれるが、括れは殆ど見られず、やや外傾する口縁が連なる。No 10は蓋形土器のツمامミ部分と考えられる。文様の無い雑な作りで、口



第50圖 Ⅷ Jf-2 豎穴住居址出土遺物(1)



第51図 Ⅷ J f-2 竪穴住居址出土遺物(2)

唇部分に押圧に依る凹みが見られる。

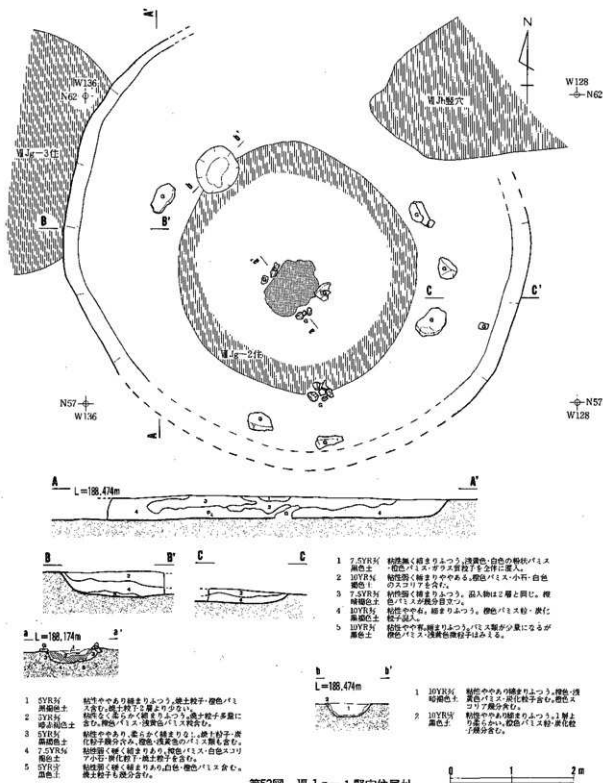
尚、以上図示した土器類の中で、朱塗りの痕跡が認められるのは、No1・3・4・6・7・9の6点である。

(石器)

石器の出土は少なく、図示した5点の他に、フレーク2点・二次加工のある剥片5点・コアが1点出ている。

No11は凸基有茎鏃で、偏平な石片と両面加工したもの。茎端が一部欠損している。硬質頁岩製。No12は珪質頁岩製の石鏃であるが、両面から丁寧な加工が施されている。No13・14は一部に刃を作り出したコアである。No15は打製石斧で、全体に大きな剝離で作られており、調整的な細かい剝離はあまり施されていない。刃部も大きな剝離に依って作られるが、端部に若干の調整剝離が見られる。また、全体に厚味があり、刃部に至ってやや薄くなるが、刃部はあまり鋭利ではない。石質は硬質頁岩で、長さ11.1cm・幅5.3cm・厚さ3.2cm・重さ214.0gを測る。

本住居址の所属時期は、出土遺物及びⅦ J f-1住・Ⅶ J e-2住との重複関係から、弥生時代中期前半に位置するものと考えられる。



第52図 WJg-1 竪穴住居址

ⅦJ g-1 竪穴住居址 (第52図・写真図版10)

位置：調査区東側北寄りの北西～南東に下る緩斜面に位置する。北にⅦJ c住居址、東にⅦJ h 竪穴状遺構、南にⅦJ k-2住居址、西にはⅦJ g-3住居址がある。焼失家屋。

重複：ⅦJ g-2・3住居址に後続し、ⅦJ h 竪穴状遺構に先行する。

検出：地表下30cmのⅡ層にて検出した。

形態・規模：東西7.60m×南北(7.60)mの円形と推されるが、調査の不手際により不明な部分も多い。床面積(37.9)㎡。

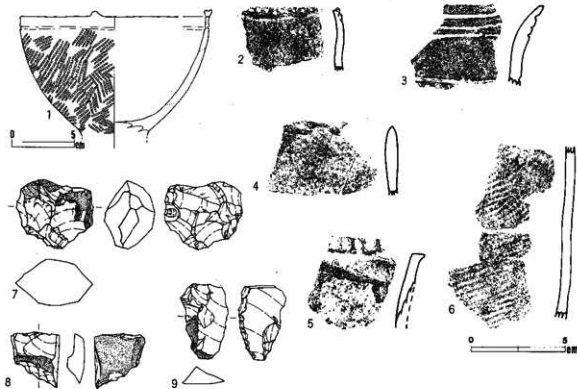
埋土：大略4層に区分される自然堆積である。2層はⅢ層に相当するもので自然的営力による急激な堆積と考えられる。

壁：東壁・西壁のみ検出した。何れも床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、東壁16cm・西壁23cmとなる。

床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。

柱穴：不明。

炉：中央南寄りに「二の字」状の石囲炉を検出した。焼土は100cm×70cmの範囲で不整な方形に広がり、中央部で10cmと厚い堆積を示す。径100cm×90cmの円形の掘り込みを有する。隣の掘



第53図 ⅦJ g-1 竪穴住居址出土遺物

り込みは認められず、炉を構築する際に掘り込まれたピットの側壁に偏平な礫を寄りかける状態で直立させたものと考えられる。

その他の施設：床面より偏平な大礫6ヶを検出した。直立するものは南端の1ヶのみであるが、何れも礫の下に掘り込みが認められることから、他の5ヶも直立していた可能性が極めて高い。性格は不明である。また、径80×70cm、深さ22cmの円形ピットを検出している。形状・規模等から柱穴とは見なし難い。

出土遺物 (第53図・写真図版33)

全体に遺物は少なく、土器で復元出来たものはNo1のみで、他は何れも破片資料であり、石器についても掲載した3点以外には若干二次加工のある剥片が4・無い剥片が11点出ているに過ぎない。

No1は小突起を持つ薄手の台付鉢で、口縁付近まで斜位LRが施され、内外面に引かれた沈線に依って口縁と体部を区画している。突起の数は3ヶと推定される。一部反転夾漈。床面直上～床面出土。No2・3は甕の口縁部片であるが、何れも床面に配置された大礫の掘り込みからの出土である。No4・5は床面出土の甕口縁部片で、両者共に口唇部が押圧に依る波状を呈する。No6はLR施文の体部片で、炉内出土。

No7はコア、No8・9は不定形石器で、搔・削器の類。No7が埋土下層出土で硬質頁岩製、No8が床面・No9が炉内出土で何れも玉髓製。

上記記載した遺物等から、本住居地の所属時期は弥生時代中期に位置するものと考えられる。

VII J g-2 竪穴住居址 (第54図・第16表・写真図版10)

位置：調査区東側北寄りに位置する。焼失家屋。

重複：VII J g-1住居址に先行する。

検出：VII J g-1住居址の床面下にて検出した。

形態・規模：長軸4.20m×短軸3.90mの円形である。床面積9.6㎡。

第16表 VII J g-2 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
口径(cm)	(30×20)	(30×30)	(30×30)	30×30	(30×30)	(30×30)	(30×30)
深さ(cm)	30	34	50	30	40	30	30

埋土：大略2層に区分される自然堆積である。1・2層ともに炭化粒子が認められる。

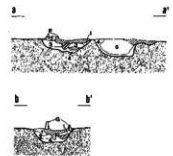
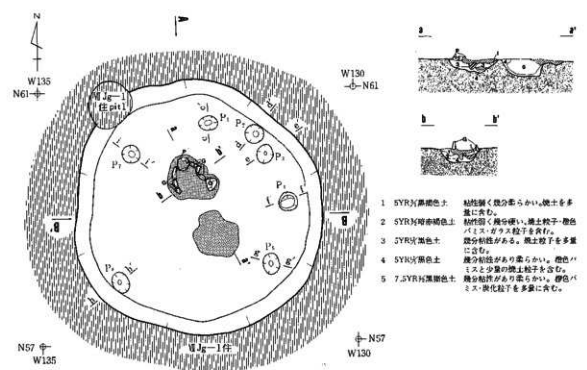
壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北

壁24cm・東壁16cm・南壁23cm・西壁22cmとなる。

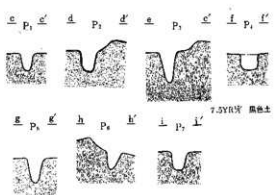
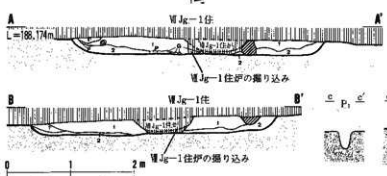
床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。

柱穴：壁沿いに7ヶ検出した。P₄を除き床面下の検出である。

() 推定値

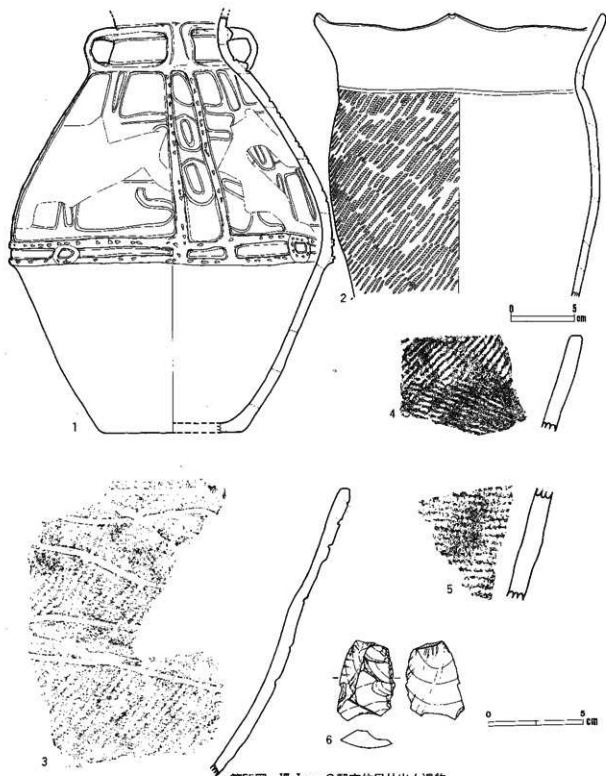


- 1 SYR片黒褐色土 粘性弱く炭分少ない。炭土を多量に含む。
- 2 SYR片暗赤褐色土 粘性弱く炭分多い。炭土粒子-棕色バミス-ガラス粒子を含む。
- 3 SYR片黒色土 炭分粘性がある。炭土粒子を多量に含む。
- 4 SYR片黒色土 炭分粘性があり柔らかい。棕色バミスと少量の炭土粒子を含む。
- 5 7.SYR片黒褐色土 炭分粘性があり柔らかい。棕色バミス-炭化粒子を多量に含む。



- 1 10YR片褐色土 粘性弱く炭分多量に多い。棕色バミス-小石を含む。炭化粒子を少量含む。
- 1' 10YR片褐色土 1層 耕熟土で1層と掘り込みの炭土。
- 2 10YR片褐色土 粘性炭分有って柔らかい。棕色バミス-炭化粒子を含む。

第54図 VI Jg-2 雙穴住居址



第55图 VII Jg-2 竖穴住居址出土遗物

炉：中央北寄りに土器埋設石囲炉を検出した。北西方向に配置される土器を頂点とし、「ハの字」状に隙が配される。焼土は径80cm×70cmの範囲で隙の外側まで広がり中央部で6cmの堆積を示す。他に隙は検出されなかった。径80cm×80cm、深さ25cmの円形の掘り込みを有す。

その他の施設：中央南寄りに炉と同規模な焼土の広がりを検出した。焼土は80cm×70cmの範囲に不整に広がる。南東側で8cmの堆積を示す。径100cm×90cm、深さ25cmの円形の掘り込みを有し、埋土には多量の炭化粒子が認められる。性格は不明である。

出土遺物 (第55図・写真図版34)

土器6点、石器1点の計7点の図示である。No1は埋土出土の壺で、口縁部分が欠損している。底部から緩やかに外傾して立ち上がり、体部中央で最大径を持ちながら、緩やかに頸部に向って絞む器形で、頸部には半管状把手が4ヶ所に取り付けられている。体部中央を境に、下半は無文であり、上半は以下の如き文様が展開する。即ち、4ヶの把手から刺突烈を伴った2本の隆沈線が下り、体中央にやはり刺突烈を持つ2本の隆線と交わって大きな方形区画を作り出し、その内に沈線に依る方形・長円形或いは不規則な区画文が描かれる。また、体部中央に繞る隆沈線上の4ヶ所には、更に楕円状の隆線が貼付され、刺突も加えられている。胎土には小礫や粗砂を含み、焼成も普通である。No2は、炉内に倒立の状態埋設されていた壺で、下端欠失している。頂点に浅い刻みを有する緩い山形突起を4ヶ持ち、若干括れた頸部には沈線が1本繞る。体部には単節斜行縄文RLが施されるが、二次加熱に依り、著しく赤化或いは煤の付着した部分も見受けられる。No3は口縁～体上半部にかけて沈線文様が描かれたRL縄文の壺片。No4は、無節縄文L・rの施文方向を変えることによって羽状の如く見せている口縁部片。両者共に炉内からの出土である。No5は柱穴P₁出土の土器体部片。恐らく壺の一部と考えられるが、外面にはLRが施され、内面は丁寧なナデである。粗砂を含む。

No6の石器は、一辺を簡単に二次加工して刃を作り出した不定形石器で、硬質頁岩製である。床面からの出土。他には剥片が2点出土しているのみである。

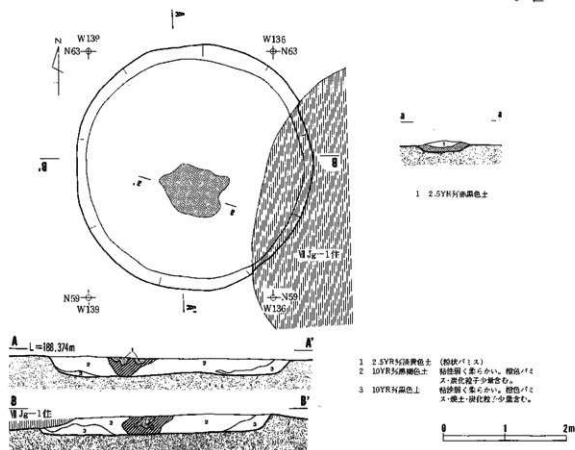
以上述べた出土遺物等から、本住居址の所属時期は、縄文時代後期前葉に位置づけられると考えられる。

VII J g-3 竅穴住居址 (第56図・写真図版10)

位置：調査区東側北寄りの北西～南東に下る緩斜面に位置する。北にVII J cの住居址、東にVII J g-1住居址、西にはVII J f-1・2住居址がある。焼失家屋。

重複：VII J g-1住居址に先行する。

検出：地表下40cmのII層にて検出した。



第56図 W Jg-3 竪穴住居址

形態・規模：長軸4.0m×短軸3.80mの円形である。床面積9.8㎡。

埋土：大略3層に区分される。1層粉状バミスは擾乱による不整な混入を示す。2・3層は焼土粒子・炭化粒子が少量含まれる。自然堆積である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁27cm・東壁19cm・南壁20cm・西壁29cmとなる。東壁が浅いのはVII Jg-1住居址に切られている為である。

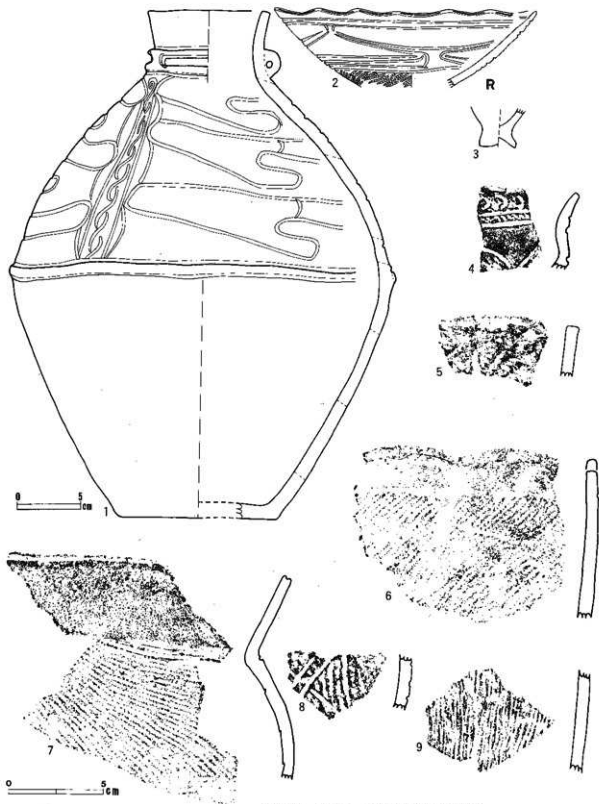
床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。

柱穴：竪穴内外ともに検出されず、不明である。

炉：ほぼ中央に地床炉を検出した。焼土は100cm×80cmの範囲で不整に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。径90cm、深さ13cmの円形の掘り込みをもつ。東壁寄り中央部に60cm×54cmの範囲で不整に広がる薄い焼土を検出したが炉とは見なし難い。

出土遺物 (第57図・写真図版34)

遺物は割合少なく、特に石器ではチップ等の単なる剥片が4ヶ出ているだけである。図示し



第57图 VII Jg-3 竖穴住居址出土遺物

た9点の内、がから出土したNo5以外は何れも埋土からの出土であるが、特にNo1・2は住居外の破片とも接合している。また、同No2及びNo7は、VII J 8-1住に切られた地点の出土であるから、或いはVII J 8-1住に伴う可能性も残る。

No1は体部中央に最大径を有する楕円形に近いプロポーションを持つ大形の甕である。体部中央及び絞んだ頸部には貼付に依る隆帯が繞り、小さな半管上把手3ヶ付けられ、体下半ではナデ調整のみ・体上半では沈線文様が展開する。即ち、各把手下には、平行沈線間に「縦長のS字」が繰り返される帯状の文様帯が縦に展開し、それによって上半部全体を3区画に分け、その中には沈線に依る「波瀾文」的なモチーフが3段に重なって描かれている。胎土には石英・粗砂を含み、焼成も良好。一部反転復元。No2は波状の口縁を持つ高杯の坏部で、口唇部のゆるい突起間には沈線が引かれる。体上半には篋描沈線に依る変形工字文が施され、体下半には斜位のLRが施文されるが、更に全体に朱彩の痕跡が残っている。胎土には金雲母・細砂等を含み、焼成も良好である。No3は上部欠損のミニチュア土器。内外面共にナデ調整が加えられる。No5は、深鉢の口縁部である。外面には太めの斜位RLが施され、胎土には石英・粗砂等が混じる。他にも同一個体片が若干出土しているが、復元出来なかった。

以上本住居地の所属時期は、VII J 8-1住との切合い関係、これら遺物の出土状況を考えて、埋土中に弥生時代のものが入って来るものの、本来的には縄文時代後期に位置付けられるものと思われる。

VII J i 竪穴住居址 (第58図・第17表・写真版11)

位置：調査区中央の西～東に下る緩斜面に位置する。南東にVII J m住居址がある。焼失家屋。

検出：地表下30cmのII層にて、I層粉状バミス不整な分布域として検出した。

形態・規模：長軸9.20m×短軸8.94mの北東～南西に長い円形である。床面積51.8m²。当区検出住居群のなかで最大規模を誇る。

埋土：大略9層に区分される。I層粉状バミスは7mの範囲に分布し、中央部で20cmと厚い堆積を示す。4層赤褐色土は基本層序IIIに相当し、竪穴がまだ凹みを有する時の急激な自然的営力による一時堆積と推定される。同層には多量の砂粒が認められ、下半には人頭大～拳大の礫が多量に見られる。最下層には炭化粒子・焼土が濃密に分布する。自然堆積である。

壁：V・VI層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、北壁62cm・東壁62

第17表 VII J i 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉
口径 (cm)	20×20	20×18	24×24	24×24	26×24	24×24	62×56	36×36	20×20	26×26	30×28	28×26	24×20	32×28	38×38	50×34	36×30	50×46	34×34
深さ (cm)	12	30	16	16	14	14	24	20	14	14	16	10	50	60	66	82	42	84	64

cm・南壁70cm・西壁61cmとなる。

床：ほぼ平坦で柔らかい。全体に堅穴中央付近が低く、僅かに播鉢形となる。

柱穴：中央寄りに7ヶ検出した。規模を比較するとP₁₃・P₁₅・P₁₇は小規模であることから、P₁₄・P₁₆・P₁₈・P₁₉の4ヶが主柱穴と想定される。埋上には何れも炭化粒子・焼土が濃密に認められる。

炉：石囲炉を中央に検出した。礫は堅穴の長軸に直交する形で北東側に3ヶ、南西側に4ヶの直線的な「二の字」状に配される。平行する礫列の間隔は内径70cmと大規模なもので、焼土は中央部で10cmと厚い堆積を示す。北西・南東側に礫の配置は認められない。構築方法を見ると、床面を90cm×90cm・深さ20cmの方形皿状に掘り込んだ後、礫を側壁に配置し炉としている。礫の配置に掘り込みは認められない。

その他の施設：堅穴内に12ヶの小ピットを検出した。柱穴に関連する施設とも考えられるが、明確ではない。

出土遺物 (第59～64図・第18表・写真図版35・36)

土器・石器共に大量の遺物が出土したが、その殆どが埋土下位層～床面の資料である。従って図示した土器35点及び石器10点は、すべて床面或いは床面直上から出土したものである。

(土器)

No 1～4は壺で、No 1～3には朱彩が残る。No 1は全体に横位LRを施し、平行沈線に依る波状文が2段に描かれるが、文様帯は水平な平行沈線に依り区画され、体下半にまで及んでいる。No 2も文様帯は平行沈線で区切られた体下半～頸部に展開し、充填・磨消技法を用いて、「コ」の字状と逆「コ」の字状を組み合わせた区画文様を作り出している。また、この2ヶ一對の文様は、三対展開するが、それぞれの間には「V」字状の沈線が描かれる。器面には朱塗りが顕著に残り、口縁部内面にまで及んでいるが、更に煤の付着も見受けられ、色調は浅黄橙色を呈す。底部にはアジロ痕が残る。口唇部が若干欠けているものの、ほぼ完形品である。No 3は、体部上半～口縁が完全に残存している壺で、頸部及び口縁部に沈線が繞るが、口縁部のそれは、一部山形文的に描いたところが見られる。浅黄橙色を呈する器面には煤の付着が有り、残存下端部の断面にまで付着している。No 5は雑な作りの鉢で、底部にはアジロ痕が残る。No 6～11は高坏。すべて磨消縄文・充填縄文に依る文様が展開し、工字的或いは垂下文的要素を取り入れたパターンを作り出している。特に坏部の文様帯では数多い出土片の中に同一パターンのものが見られず、個々それぞれが独自の文様を持つという土器組成的観点から見て、非常に珍しい特徴が見出せる。また、脚部に見られる波状文は、中央に引かれた沈線によって上下2段に区画されるが、波状のパターンは上下対象のものが多く、磨消を伴わない寛播平行沈線で構成された上下平行タイプのは殆ど見出せない。但し、磨消部分は各個に依って異なっている。

第18表 VII J i 竪穴住居址出土土器計測一覧

No	器種	口径	最大胴径	底径	器高	脚径	No	器種	口径	最大胴径	底径	器高	脚径
1	甕	—	19.7	7.9	(17.6)	/	11	高坏	—	/	(9.0)	(8.2)	10.0
2	#	(8.5)	10.3	6.5	11.0	/	12	台付鉢?	—	/	5.0	(4.4)	(6.2)
3	#	8.0	—	—	(7.6)	/	13	壺	(11.1)	17.1	6.9	11.6	/
4	#	(13.2)	—	—	(5.5)	/	14	#	(16.2)	16.9	7.7	17.1	/
5	洗鉢	(10.4)	/	4.9	4.8	/	15	#	—	19.0	—	(12.5)	/
6	高坏	25.5	/	7.8	(6.4)	—	16	#	(20.4)	(21.7)	—	(17.1)	/
7	#	(22.7)	/	(7.0)	14.7	8.6	17	#	(22.4)	(22.5)	(7.5)	26.5	/
8	#	(26.5)	/	8.5	19.1	7.5	18	#	—	(25.1)	—	(16.0)	/
9	#	23.2	/	7.4	(6.3)	—	19	#	—	—	9.2	(11.3)	/
10	#	—	/	6.8	(10.0)	(6.8)	20	#	—	—	(9.0)	(12.4)	/

() 測定値・() 推察値・—不明・単位:cm

No12は高坏の脚というよりは、台付鉢等の台と考えられる。2本の沈線で「の」の字状に地文LR上より描かれてあり、外面の朱彩が明確に残っている。

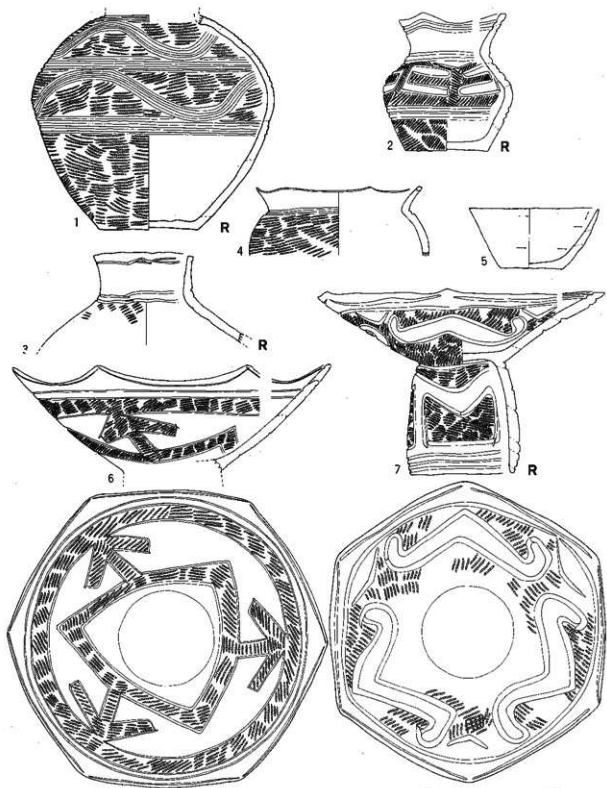
No13~20は壺類で、何れも体部に膨らみを持ち、頸部が「く」の字状に括れるものが多い。但し、No15はやや広口の壺になる可能性もある。地文は殆どが斜位~横位LRであるが、No13・14の如く無文のものも見られる。

拓影図No21~24は壺類、No25は蓋・No26~32は高坏片、No33~35は甕片である。但し、No26は坏部が底部に比べやや小さめである点などから、台付洗鉢の可能性も強い。また、No35は底部片であるが、外面に木葉痕及びアジロ痕の両方が残っているもので、アジロ痕の方がはつきりしているため、木葉の上にアジロを乗せ、その上で土器製作を行なったもの様である。

(石 器)

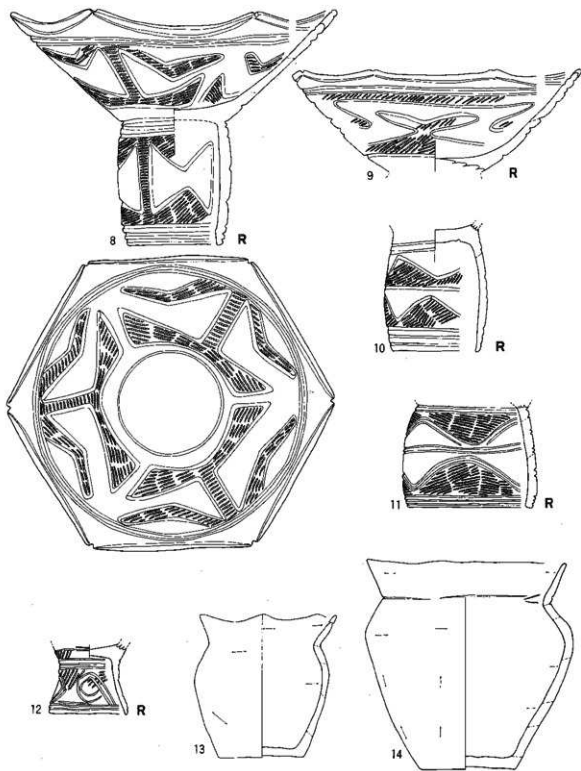
No36は、割合丁寧な作りをした鋭利な玉髓製有蓋凸基石鏃である。No37・39~40は不定形石器。No37は一方に自然面を残したまま、下端に雑な片刃を作ったもので、No38は下端及び両面に雑な刃を持ち、No40は側面に刃を持つ。何れも硬質頁岩製。No38は石質が硬質頁岩の石ペラであるが、片面が成形調整した後で割と細かい剥離で刃を作り出しているのに比し、他面は成形した後、最後に1回の大きな剥離によって下端の刃部を作り出している。No41~43はコアで、No41・42は頁岩製、No43は硬質頁岩製である。特にNo43は打面を作り出す調整剥離とは異なる刃作製的な剥離が見受けられることから、コアスクレーパーとして一部使用した可能性が考えられる。No44は割合使われている磨石。石質は安山岩製。No45は台石で、表面両面共に使われている。安山岩質溶岩製。

以上の出土遺物から、本住居址の所属時期は、弥生時代中期後半に位置づけられる。

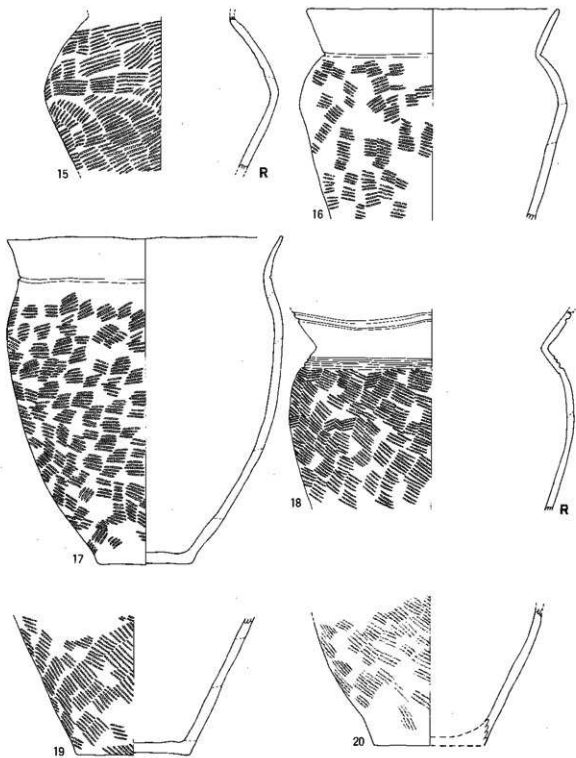


第59圖 晋 JI 豎穴住居址出土遺物(1)

0 10 cm

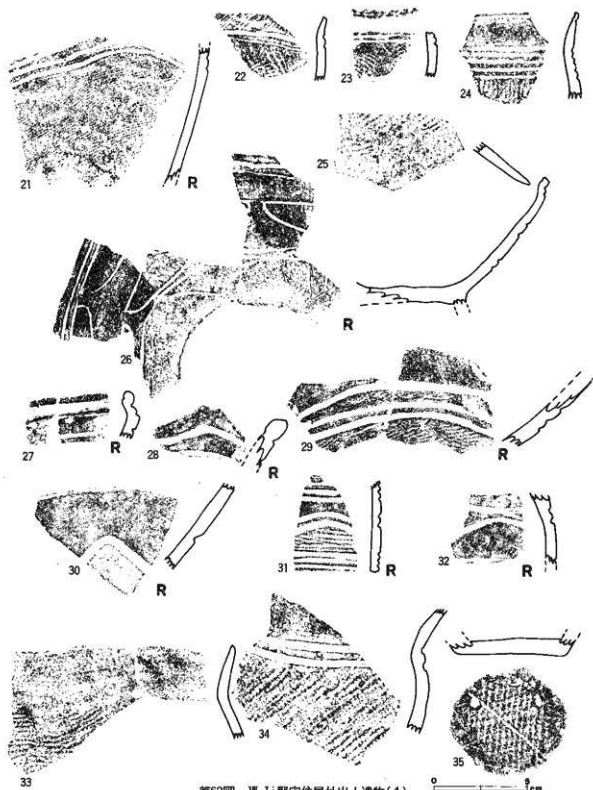


第60图 VI Ji 豎穴住居址出土遺物(2)

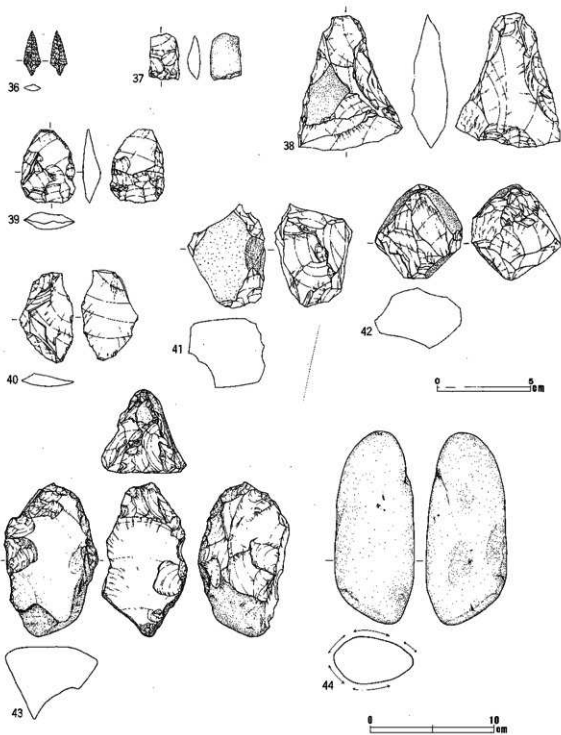


第61圖 Ⅷ Ji 壑穴住居址出土遺物(3)

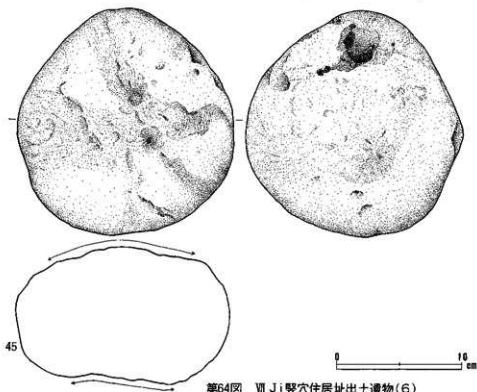
0 10 cm



第62图 W Ji 竖穴住居址出土遗物(4)



第63図 VII J 鬢穴住居址出土遺物(5)



第64図 VII J 竪穴住居址出土遺物(6)

VII J k - 1 竪穴住居址 (第65図・第19表・写真図版12)

位置：調査区東側の中央の西～東に下る緩斜面に位置する。北にVII J k - 2 住居址、西にはVII J o 住居址がある。焼失家屋。

重複：VII J k - 2 住居址に先行し、VII J o 住居址に後続する。

検出：地表下40cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。

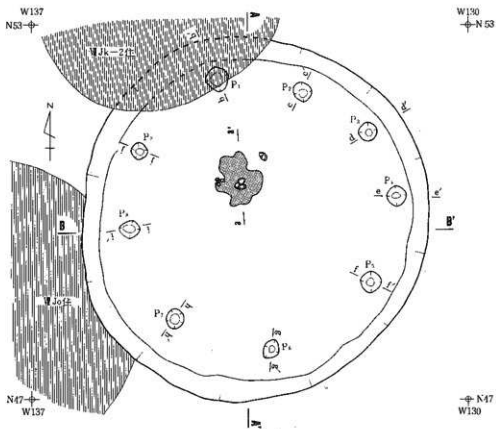
形態・規模：長軸5.80m×短軸5.60mの円形である。床面積20.2㎡。

埋土：大略4層に区分される。I層粉状バミスは、竪穴の中心域より北寄りに分布し、最厚6cmの堆積を示す。4層下位には多量の炭化粒子、薄い焼土分布が認められる。自然堆積。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、北壁36cm・東壁36cm・南壁37cm・西壁37cmとなる。

床：全体に柔かく平坦であるが、炉を中心に径1.20mの範囲と竪穴南半で硬い部分が認められる。床面は全体に西～東へと僅かに傾斜する。

柱穴：壁沿いに9ヶ検出した。何れも径30cm、深さ40cm前後と同規模のものである。P₂～P₄が1.10mと近接するほかは、1.40m～1.90mの間隔で配置される。埋土には炭化粒子が濃密に認められる。



N47
W130

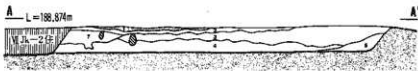
f f'
g g'



j j'



1 10YR 4/6 暗褐色土
2 10YR 4/7 暗褐色土
3 10YR 4/8 暗褐色土



- 1 10YR 4/6 暗褐色土 (軽微バミス)
- 2 10YR 4/7 暗褐色土 粘性强く柔らかく極めて重い。暗色バミス・白色磁粉粒微量含む。
- 3 10YR 4/8 暗褐色土 粘性强く柔らかい。暗色バミス多量に含む。
- 4 10YR 4/9 暗褐色土 粘性强く柔らかい。暗色バミス多量に含む。炭化粒子多量に含む。焼土少量含む。
- 5 10YR 4/10 暗褐色土 粘性强く柔らかい。暗色バミス・炭化粒子少量含む。
- 6 10YR 4/11 暗褐色土 炭分稍多で柔らかく暗色バミス少量含む。
- 7 10YR 4/12 暗褐色土 粘性强く柔らかく軽い。



第65図 Wjk-1 竪穴住居址



第19表 VII J k - 1 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
口径(cm)	40×40	32×30	32×30	32×32	34×34	30×26	30×30	30×30	28×26
深さ(cm)	43	35	38	36	37	36	34	30	34

炉：中央北寄りに地床炉を検出した。焼土は、80cm×60cmの範囲で不整に分布し、8cmの堆積を示す。中央部には、径10cmほどの偏平な礫3ヶが密接して配置される。礫には火熱の跡が認められ、極めて脆いことから、炉に伴い使用されたと考えられる。

出土遺物 (第66・67図・写真図版37)

(土器)

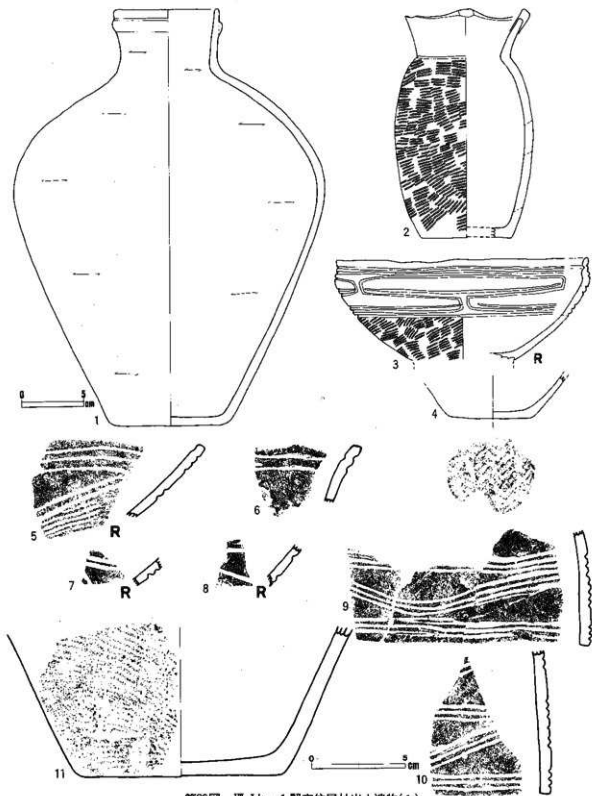
壺3点・高坏5点 (No 9・10は同一個体)・甕2点の图示。No 1の無文壺は、体下半部が欠損しているため推定復元したもので、最大径を体部やや上位に持ち、緩やかに頸部ですぼまりそのままほぼ直立する口縁へ至る。口縁には、幅1cm程の隆帯が貼りつけられている。内外面共にナデ調整が施されるが、内面ではやや粗雑な感じがある。胎土には金雲母・砂粒等が入る割合緻密なもので、焼成も比較的良好であり、色調は褐色～黒褐色を呈す。口径8.4cm・底径(9.2)cm・最大径(25.2)cm・器高(33.7)cmを測る。No 2は長胴の壺で、体部には横位LRが施文され、「く」の字状に括れる頸部には沈線が1本走り、外傾する口縁へと続く。口縁部には緩やかな山形突起が7ヶ作られているが、内1ヶが意図的に大きく作られている。外面全体に炭化物が多量に付着しており、胎土には金雲母・細砂が入るが、全体的に精良な作りで、焼成も比較的良好い。口径9.5cm・器高18.5cm・底径(6.8)cm。No 3は脚部欠損の平口縁で、やや内湾気味に立ち上がり、口縁部で直立する器形で、体部上半には篋描沈線に依る変形工字文・体下半に横～斜位のLR縄文を付す。口径(20.4)cm。一部反転実測。No 4は小形の甕もしくは壺になると思われる無文の破片で、底部にはアジロ痕が残る。

以上掲載した資料の内、床面出土のものはNo 3・4、埋土下位層～床面直上のものがNo 7～9であり、埋土中位～下位のものがNo 1・2・5、他は埋土上位からの出土である。但し、1に於いては、本住居外出土の破片も接合している。

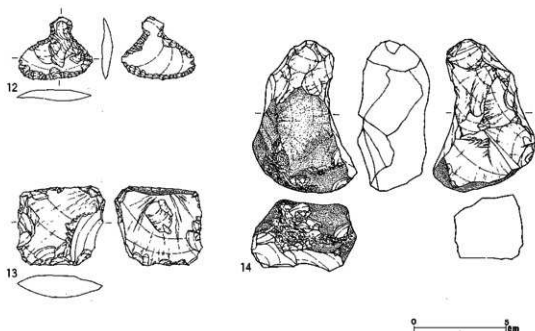
(石器)

图示した3点は何れも硬質頁岩製で、No 12が埋土上位、No 13・14は埋土中位以下の出土である。No 12は横形石匙で、薄手の剝片に両面から加工を施したものである。No 13は両サイド及び下端に刃を作り出した方形の石器で、割合稚拙な作りである。掻・削器の類であろう。また、No 14のコアには、下端部で印石として使用された痕跡が残っている。尚、他に本住居址からは、コアが2・二次加工の若干有る剝片が5・無い剝片が8点出土している。

以上の出土遺物から、本住居址の所属時期は、弥生時代中期に位置すると思われる。



第66圖 VII Jk-1 豎穴住居址出土遺物(1)



第67図 VII J k-1 竪穴住居址出土遺物(2)

VII J k-2 竪穴住居址 (第68図・第20表・写真図版13)

位置：調査区東側中央の北西～南東に下る緩斜面に位置する。北にVII J g-1・2・3住居址、南にはVII J K-1住居址、VII J o住居址がある。焼失家屋。

重複：VII J k-1住居址に後続する。

検出：地表下30cmのII層にて検出した。

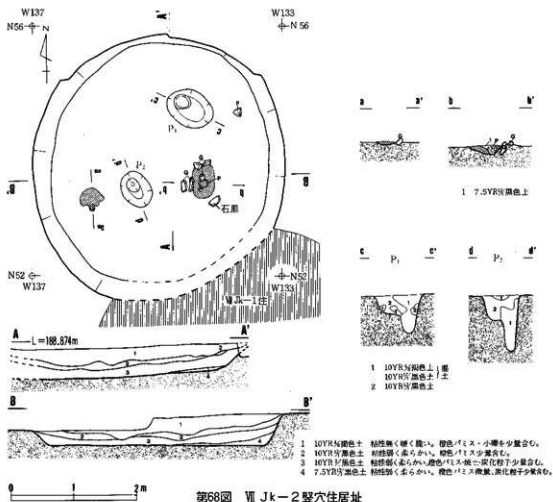
形態・規模：長軸4.30m×短軸4.0mの円形である。床面積(10.5)m²。東壁～南壁にかけて調査の不手際により一部推定となっている。

埋土：大略4層に区分される自然堆積である。3・4層には炭化粒子が少量認められる。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁25cm・東壁23cm・南壁41cm・西壁48cmとなる。北壁・東壁が浅いのは調査の不手際によるもので、本来南壁・北壁と同等の高さと推測される。

床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。南東壁寄りには46cm×30cmの範囲で薄い焼土の広がり認められた。

柱穴：2ヶ検出した。何れも同形状のもので、床面を長円形に掘り込んだ後、北西側を更に深く掘り下げている。他に検出されず、全容は不明である。



第20表 VII Jk-2 竪穴住居址ピット計測値一覧表

	P ₁	P ₂
口径 (cm)	80×60	60×50
深さ (cm)	77	89

炉：中央東壁寄りに土器埋設炉、西壁寄りに地床炉を検出した。土器埋設炉は、50cm×40cmの範囲で方形に焼土が広がり、中央部で10cmの堆積を示す。土器は口縁部を欠いた深鉢が中心域に埋設される。北側と西側に礫が配置され、西側では礫と同規模の掘り込みに埋め込まれる形で直立する。北側で掘り込みは認められない。他に礫の痕跡は確認されなかった。地床炉は40cm×30cmの範囲で不整に焼土が広がり、中央部で10cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

出土遺物 (第69～71図・写真図版38)

(土 器)

図示した11点以外にも破片資料は出土しているが、何れも埋土中位以下の出土で、その殆どが弥生時代に属すると思われる破片であるものの、細片が多い。

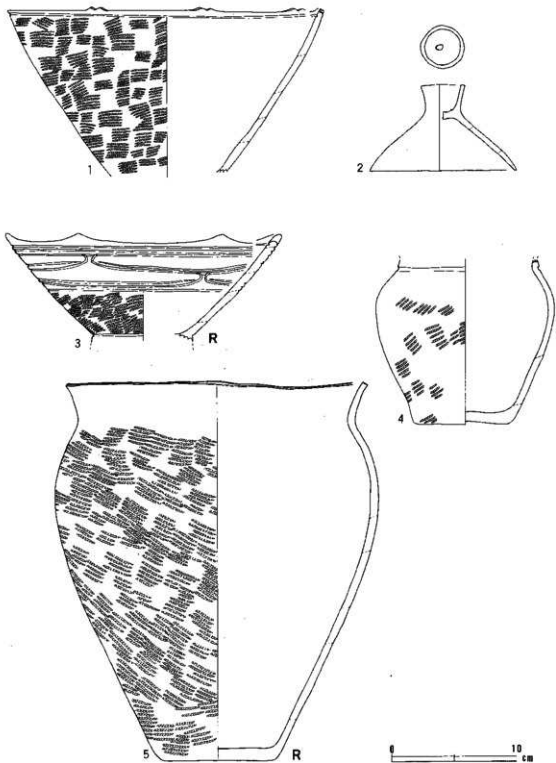
No 1は2ヶ1組の突起が8ヶ付く浅鉢で、全体にLR縄文が施されている。内外面には炭化物の付着が見られ、外面に於いては剝離も顕著である。底部欠損。口径25.6cm。No 2は反転実測の蓋形土器で、全体に篋ナデ調整が施される無文タイプのやや小形のものである。また、底部中央には孔が穿たれており、外面に煤が見られる点などから、煮沸時に用いられたものと解され、前述の孔は「蒸気口」としての機能を持った可能性が考えられる。No 3は脚部欠損の高坏。緩やかな山形突起が6ヶ付けられ、上半には寛播沈線で変形工字文・下半には横位LRが施されており、外面全体には朱塗痕が認められる。以上No 1～3は、何れも金雲母・石英を含む精良な胎土で、焼成も比較的良く、色調にもよい橙色～褐色を呈している。No 4は炉内埋設のやや小形の甕で、口縁が欠損しており、全体が二次加熱の影響で外面の剝離が著しく、また赤化している。No 5・6は頸部に沈線を伴わずに括れるタイプの甕で、何れも体部に横位LRが走るが、No 5が緩やかなカーブを描く体部であるのに対し、No 6は肩部を持つ如くに体部上半が張る。また、No 5の口唇部には沈線が繞り、頸～体部にかけて朱彩の痕跡が若干見受けられる。両者共に炭化物の付着が内外面に有り、胎土も金雲母・石英等を含んでいる。No 5は口径(24.4)cm・底径(9)cm・器高(35.7)cm、No 6は口径(24.0)cm・最大径29.8cmを測る。共に一部反転実測。No 7・8は朱彩の残る高坏片、No 9・10も高坏細片、No 11は押圧に依る甕の波状口縁である。以上既述のこれら土器は、No 1・3が埋土上位の外はずべて炉内或いは床面直上の出土である。

(石 器)

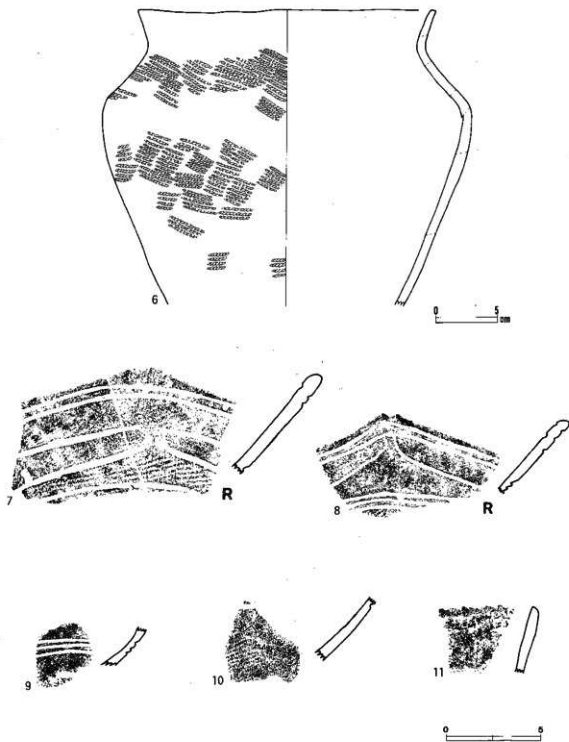
No 12・13は磨石で、前者は全面非常に良く使われているが、後者は表側は良く使っているが、裏面は殆ど使われず、裸の感じが残っている。No 12は床面直上の出土で輝石安山岩製、No 13は埋土中位出土の安山岩製である。No 14は炉近くの床面に置かれていた台石。両面共に良く使用されており、すべすべになっている。輝石安山岩製。

以上3点の他に、石器類では加工を施さない剥片が11点出土している。

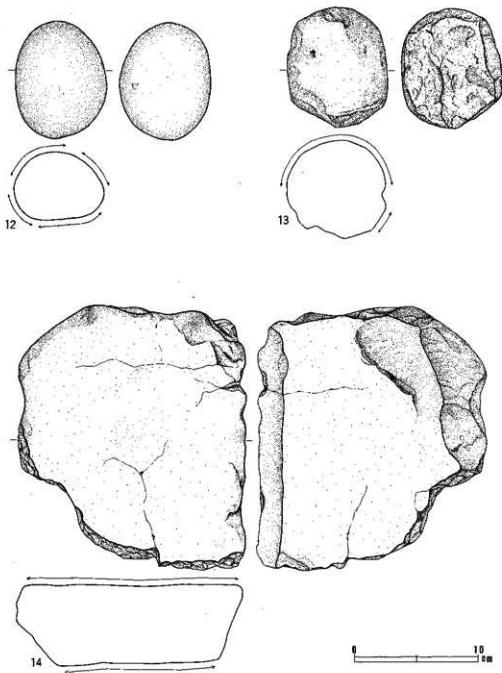
本住居址の所属時期は、図示した土器及び出土した他の土器類から、弥生時代中期前半に位置するものと考えられる。



第69图 VI J k-2 豎穴住居址出土遺物(1)



第70图 VII Jk-2 整穴住居址出土遺物(2)



第71图 Ⅴ Jk-2 竖穴住居址出土遺物(3)

VII J/ 竪穴住居址 (第72図・第21表・写真図版13)

位置: 調査区東側中央の西～東に下る緩斜面に位置する。南にVII J P-3住居址、北西にVII J R-1住居址、南東にはVII K i住居址がある。焼失家屋。

検出: 地表下40cmのII層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模: 長軸5.90m×短軸5.80mの円形である。床面積20.1m²。

埋土: 大略4層に区分される。1層粉状バミスは2mの範囲で分布し、中央部で16cmと厚い堆積を示す。3・4層には焼土・炭化粒子が認められ、4層下位では特に濃密である。自然堆積。

壁: V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、北壁46cm・東壁43cm・南壁50cm・西壁54cmとなる。西側が深く、東側が浅いのは竪穴の立地する地形に起因するものと考えられる。

床: V層下位を床面とする。炉を中心に径1mの範囲とP₄西側から炉にかけて硬い部分が認められる。他は全体に柔らかく、凹凸も認められない。床面は全体に西～東へと若干傾斜する。

柱穴: 壁沿いに7ヶ検出した。P₁・P₂が1.1mと近接するほかは、ほぼ2m前後の等間隔となる。床面状況及び柱穴配置等から、

第21表 VII J/ 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
口径(cm)	32×28	30×28	28×25	26×22	28×28	30×30	28×25
深さ(cm)	45	39	39	40	39	42	38

出入口はP₄・P₅間と推定される。埋土には、何れも炭化粒子・焼土が認められ、特にP₁・P₂に顕著である。

炉: 中央やや南寄りに地床炉を検出した。焼土は80cm×50cmの範囲で不整に広がり、中央部で4cmの堆積を示す。掘り込みは特に認められず、床を直接火床面として使用している。

出土遺物 (第73～79図・第22表・写真図版39～41)

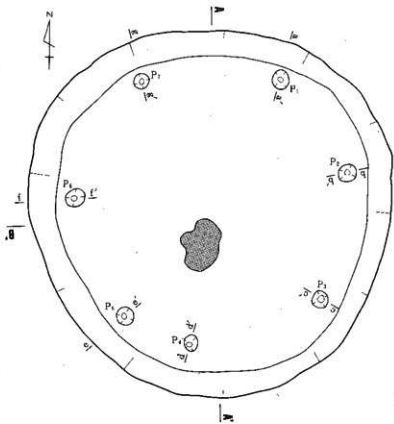
本住居址から出土した遺物は非常に多く、特に埋土中位～下位層出土のものがかなりの数に登る。

(土器)

掲載した35点で示した様に出土した土器類の種類は多く、壺・浅鉢・台付鉢・高坏・蓋・甕の各器種が見受けられ、殆どが埋土中位～床面直上出土のものである。尚、35点中、No15・16の2点は埋土上～中位出土片と遺構外出土片が接合したものであり、遺構外出土片の方が半数以上を占める。

壺は、8ヶの突起を持ち、体部が膨らむ器形のNo1と拓影図で示した変形工字文を施したNo17がある。No1には疎な横位LRが付され、突起間の口唇部には沈線が描かれており、内外面には煤が見られる上、体部下半では赤変している。No2は或いは高坏となるかもしれないが、体上半部の直線的な開き方・体下半の曲線的な立ち上がり、及び平行沈線とナデのみの簡素な文様という点から、浅鉢になる可能性が強いものと考えた。No3は上半に変形工字文・下半に横

W127
N56



N51
W127

a P₁ a'

W120
N56



b P₂ b'



c P₃ c'



N51
W120

d P₄ d'

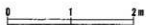
A L=187.974m



B



- 1 10YR 5/1 黄褐色土 (粉状パミス)
- 2 10YR 5/2 暗褐色土 粘性無く柔らかい。褐色パミス少量含む。
- 3 10YR 5/3 暗褐色土 粘性無く極めて柔らかい。褐色パミス・炭土・炭化粒子少量含む。
- 4 10YR 5/4 暗褐色土 炭分粘質で極めて柔らかい。褐色パミス少量含む。炭化粒子少量含む。



e P₅ e'



f P₆ f'



g P₇ g'



h P₈ h'

1 10YR 5/1 無褐色土

第72図 ⅦJ/ 竪穴住居址

第22表 VII J/ 竪穴住居址出土土器計測一覧

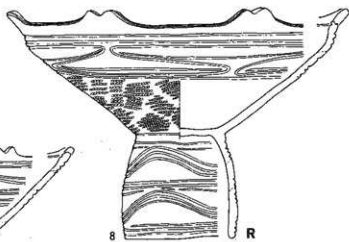
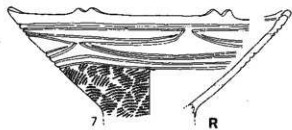
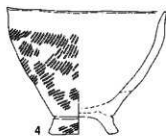
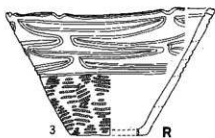
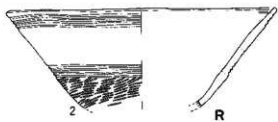
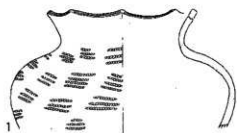
No.	器種	口径	最大胴径	高	径	器高	脚径	No.	器種	口径	最大胴径	高	径	器高	脚径
1	壺	12.2	18.2	—	(10.0)	/	/	9	壺	(21.5)	(21.5)	8.6	26.4	/	/
2	浅鉢	(21.8)	/	—	(8.0)	/	/	10	#	(18.6)	21.3	—	(20.4)	/	/
3	#	16.8	/	6.2	10.4	/	/	11	#	(23.1)	25.9	16.2	32.4	/	/
4	台付浅鉢	(12.9)	/	(5.2)	9.8	(5.5)	/	12	#	(27.6)	(26.6)	—	(22.8)	/	/
5	小形鉢	(6.9)	(8.6)	(4.7)	(6.8)	/	/	13	#	(22.6)	(24.6)	8.2	33.2	/	/
6	蓋	—	—	—	(3.2)	ツマミ径 4.9	/	14	#	—	—	9.1	(19.3)	/	/
7	高坏	(22.9)	/	(7.5)	(8.7)	—	/	15	#	(33.9)	33.3	13.3	49.3	/	/
8	#	(27.6)	/	(7.4)	18.6	8.9	/	16	台付鉢	(15.7)	(16.4)	5.6	(16.9)	/	—

() 推定値・() 測高・— 不明・単位: cm

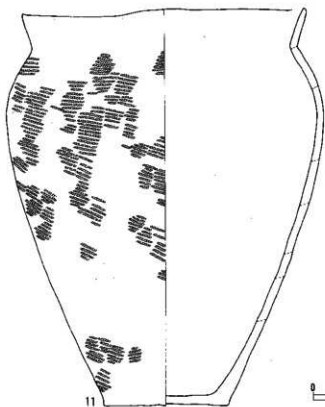
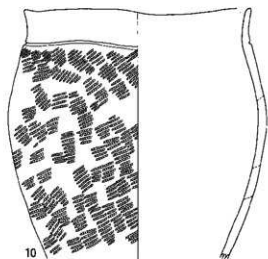
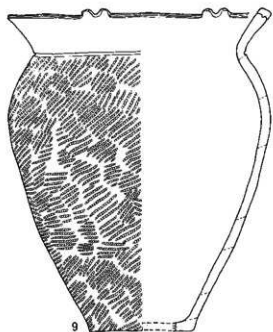
位LRを施した突起6ヶを有する浅鉢。No 2・3には朱彩が残る。No 4は小さな台を持つ浅鉢で、台及び体部にはLRが付される。No 5は小形鉢、No 6は蓋形土器のツマミ部分である。共にLRが施されている。また、拓影図No18・19も蓋形土器片で、No18はナデのみ・No19はLRが付されている。

No 7・8は高坏。共に2ヶ一對の突起が6ヶ付く口縁を持ち、体部上半には変形工字文・下半には横位LRが施される。No 8では口縁下で若干段を有する器形であるのに比し、No 7は直線的に開く器形であるが、両者共に金雲母・細砂を含む精良な胎土で非常に緻密であり、焼成も割合良好である。No 7は浅黄橙〜にぶい橙色、No 8は明赤褐色を呈す。また、No 8の脚部は、平行沈線に依る波状文が2段繞っており、上・中・下端に水平沈線が繞って区画しているが、波状の山に合わせて沈線が更に1本開いた部分に加えられている。尚、拓影図で示したNo20〜30も高坏片であるが、No23が磨消縄文・No25が三角をモチーフとした変形工字文が発展したものではないかと考えられる文様を持ち、No26の脚部には透かし技法が使われている。これらNo 7・8及び20〜30の高坏類には、全て朱彩の痕跡が認められる。

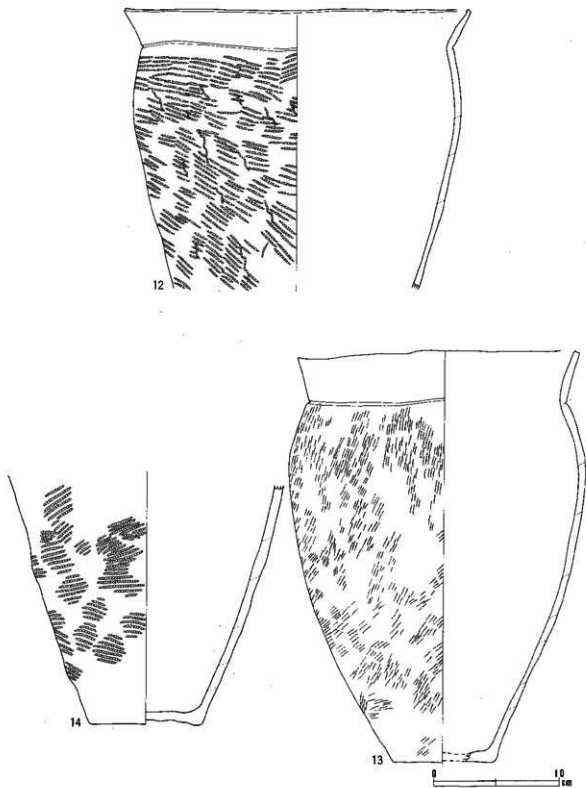
壺形土器はNo 9〜14及びNo31〜35で、平口縁のものが多く、殆どのものが頸部で括れを持つが、沈線は有無の両者ある。また、体部には横〜斜位のLRが付されるが、No12の様に所々に絞絡の見えるもの・非常に細いRLを回転させたもの (No13) なども見られる。尚、これら壺形土器には、全て煤の付着が認められ、外面対部上半〜口縁部にかけて沈線文が展開する縄文時代後期の大形土器である。口縁には、3ヶの凹みを持つ山形突起が9ヶ繞り、底部外面には木葉痕が残る。全体に煤の付着が見られる。No16は縄文時代晩期の台付鉢で、台部末端が欠損している。このNo15・16の2点は前述したように、流れ込み遺物と考えられる。



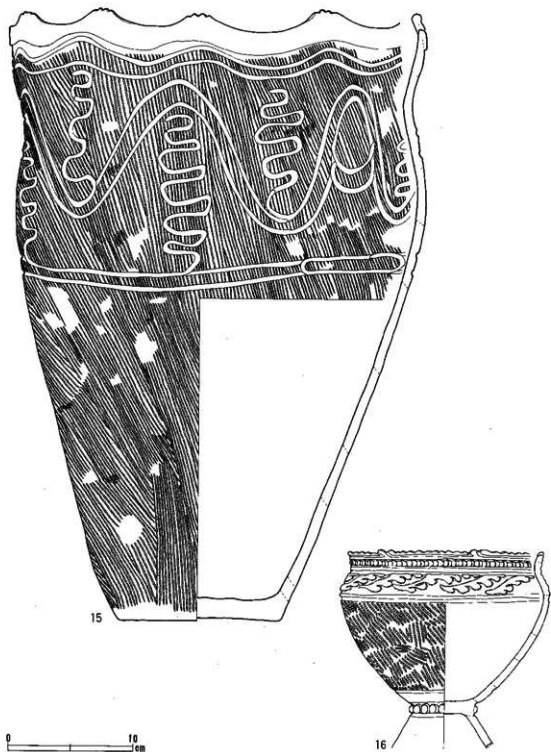
第73圖 VII J! 雙穴住居址出土遺物(1)



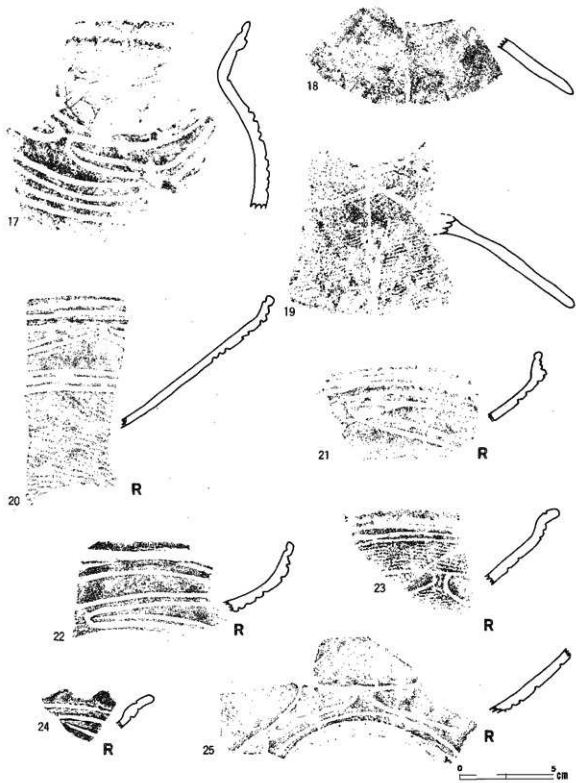
第74图 ⅣJ1 竖穴住居址出土遗物(2)



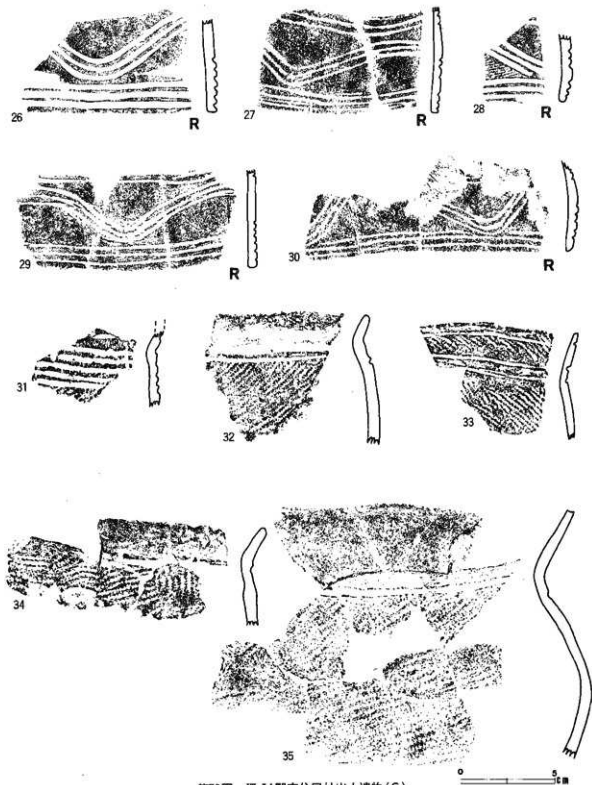
第75図 VII J/ 壑穴住居址出土遺物(3)



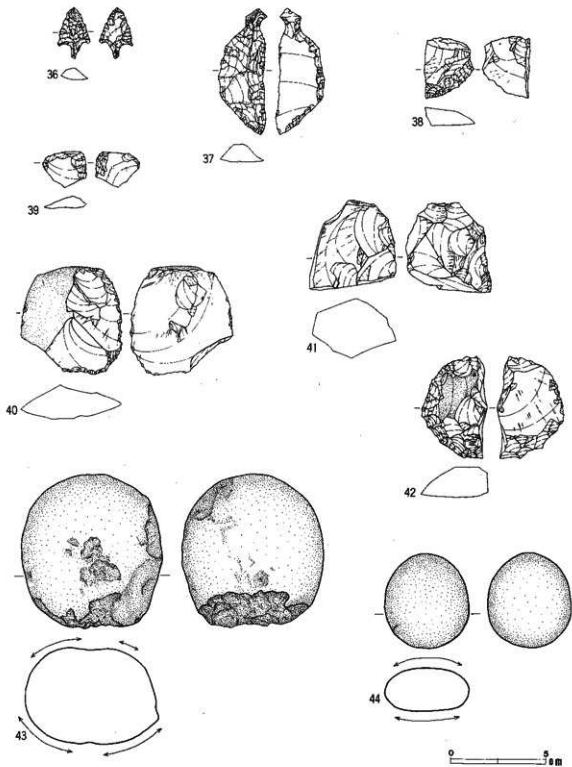
第76图 VIJ/ 豎穴住居址出土遺物(4)



第77图 VII JI 豎穴住居址出土遺物(5)



第78图 VII J 豎穴住居址出土遺物(6)



第79図 VII J/竪穴住居址出土遺物(7)

(石 器)

9点の図示。No36は硬質頁岩製の凹基有茎鏃で、片面の先端部が一部剝離してはいるが、全体的に作りは割合丁寧である。No37は炭形石匙で、刃部の作成は側縁の一方は表からのみの加工であるが、他方では両面から加工している。珪質頁岩製。No38～40は不定形石器で、特にNo38の刃部調整は丁寧であり、鋭利な仕上がりとなっている。何れも硬質頁岩製。No41は下端部が欠失している上、側縁の一部に石器としての調整痕らしきものが若干見られることから、打製石斧等の一部と思われる。石質は頁岩。No42は半円状に刃が形成されている石器で、刃部調整も丁寧であり、握り具合も非常に良い。用途的には掻・削器の類であろう。硬質頁岩製。

No43・44は磨石で、前者が輝石安山岩・後者が砂岩で作られており、前者は一部欠損しているものの良く使い込まれており、一部敲打痕も残っている。後者も割合使い込まれている。

尚、これら石器類の出土層位は、No37が床面直上で、他は中～下位層の出土である。

以上の様な出土遺物から、本住居地の所属時期は、弥生時代中期初頭と考えられる。

VII J m 竪穴住居址 (第80図・第23表・写真図版14)

位置：調査区中央南側の北西～南東に下る緩斜面に位置する。北西にVII J i住居址、東にはVII J n-2住居址がある。焼失家屋。

検出：地表下40cmのIII層にて検出した。竪穴の南半は粗掘の不予際により下げすぎている。

形態・規模：長軸5.95m×短軸5.82mの円形である。床面積20.9㎡。

埋土：大略4層に区分される。1層には砂粒が多量に含有され、同層下半には人頭大～拳大の礫が見られる。これは、竪穴がまだ凹みを有する時の急激な自然的営力による一時的堆積と推定される。3層には微量の粉状バミスが認められる。4層は炭化材・焼土を多量に含む。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、北壁72cm・東壁28cm・南壁19cm・西壁69cmとなるが、本来、東・南壁も北・西壁と同等の壁高と推定される。

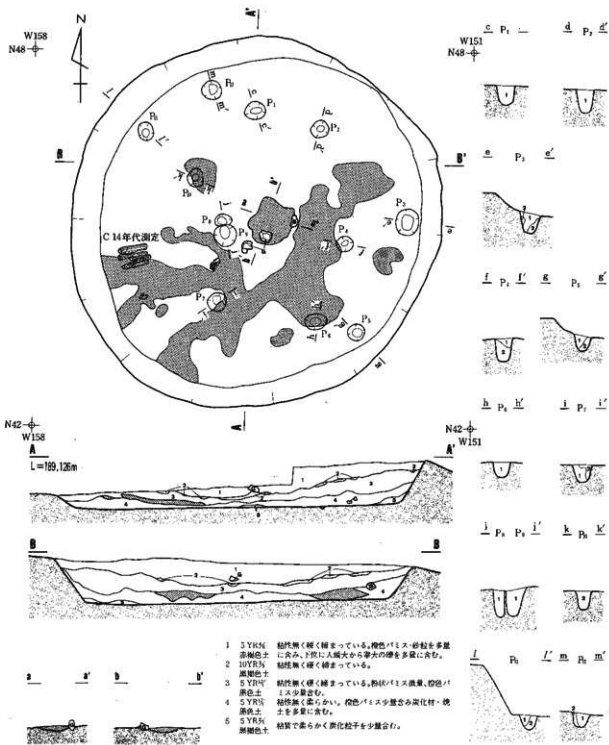
床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。床面全域に炭化粒子の濃密な分布が認められ、僅かに北東～南西に傾斜する。

柱穴：12ヶ検出した。壁沿いに4、やや内側に6、中央に2となる。埋土には極めて濃密に炭化粒子・焼土が認められる。

炉：中央に地床炉を検出した。焼土は60cm×70cmの方形に広がり、中央部で4cmの堆積を示

第23表 VII J m 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂
1) 径 (cm)	34×29	30×28	42×36	28×25	28×25	36×25	32×30	28×18	34×34	30×28	29×25	30×30
深さ (cm)	27	36	30	38	20	23	30	49	44	31	21	20



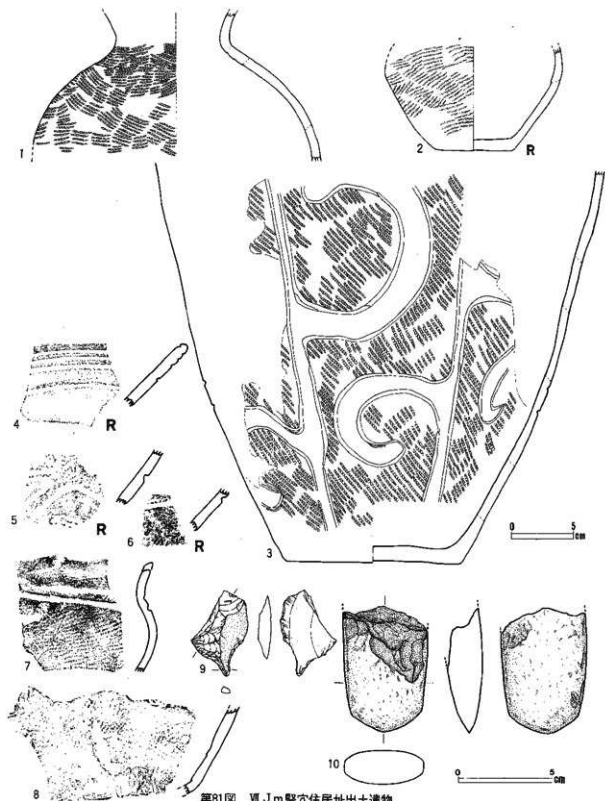
C 14年代測定

L=189.126m

- 1 5YR/6 赤褐色土
粘質無く硬く締まっている。棕色パミス-砂粒を多量に含み、下部に人楯大から掌大の礫を多量に含む。
- 2 10YR/6 風化色土
粘質無く硬く締まっている。
- 3 5YR/4 黒色土
粘質無く硬く締まっている。粉砂/パミス微量、棕色パミス少量含む。
- 4 5YR/4 黒褐色土
粘質無く柔らかい。棕色パミス少量含む炭化材・焼土を多量に含む。
- 5 5YR/4 黒褐色土
粘質で柔らかく炭化粒子を少量含む。

- 1 7.5YR/4 黒色土
- 2 7.5YR/4 褐色土
- 7.5YR/4 黒色土

第80図 Jm 竈穴住居址



第81图 Ⅵ Jm 壑穴住居址出土遺物

す。東・南側に長さ20cmの扁平な礫を検出したが、石圍の痕跡は認められない。

出土遺物 (第81図・写真図版42)

(土 器)

住居内から出土した土器は割合少なく、その殆どが破片資料で、実測可能なものは図示した3点のみである。No 1は床面直上出土の壺で、口唇部及び下半部が欠けるが、残存部分は全く壊れていない。体部には横位LRが走り、内外面には多量の煤が付着するが、それは下端の断面にまで及んでいる。No 2は横位L-r無節縄文が施される壺の下半部分であるが、底部にはアジロ痕が残り、内外面の一部には朱塗痕が認められる。また、内面調整は横位のナデが成されているが、非常に雑で、削りに近い様相を呈す。No 1・2共にふい橙色～褐色を呈し、砂粒等の混じる胎土であるが、No 2では磨滅がやや激しい。No 3は全体に磨耗が激しく残りが悪い深鉢で、全体にRL縄文を施した後沈線区画に依る磨消帯を配置している。即ち、縦に走る磨消帯から更に下向き或いは上向きの弧状を呈する磨消帯が枝葉の如く描かれている。埋土2層からの出土。No 4～6は同一個体の高坏。朱彩が残る。No 7は小形の壺、口縁～体部で、口縁には緩い突起が有り、頸部には沈線が2本繞る。体部は斜位LR。No 8はLR縄文の壺体破片で、床面直上の出土。

(石 器)

No 9は不定形石錐であるが、錐部を作り出している他に一部刃を作って、錐的機能と併せて挿・削器的機能を持たせている。硬質頁岩製。No 10は磨製石斧の刃部で、基部は欠失。刃部には再研磨が見られる。珪質泥岩製で、床面直上の出土。他に本住居からは剥片が若干出ているが、何れも未加工品である。

以上の様な出土遺物からみて、本住居の所属年代は、弥生時代中期前半頃と考えられる。

VII J n-1 竪穴住居址 (第82図・写真図版15)

位置：調査区東側中央の西～東に下る緩斜面に位置する。東にVII J o住居址、南にはVII J n 2・3住居址がある。

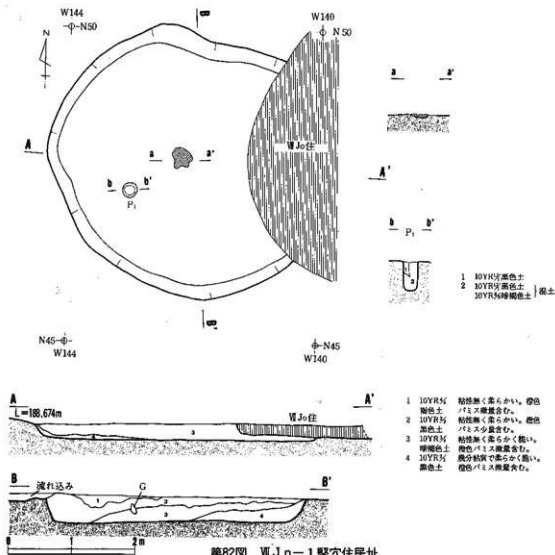
重複：VII J o住居址に先行する。

検出：地表下30cmのII層にて検出した。

形態・規模：長軸4.50m×短軸4.30mの円形である。床面積(11.8)㎡。

埋土：大略4層に区分される。全般に柔らかく、橙色バミスを微量含む。自然堆積である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁42cm・東壁4cm・南壁16cm・西壁27cmとなる。東壁が浅いのはVII J o住居址と重複する為であり、北・西側が深い



第82図 W Jo n-1 竪穴住居址

のは竪穴の立地する地形に起因すると考えられる。

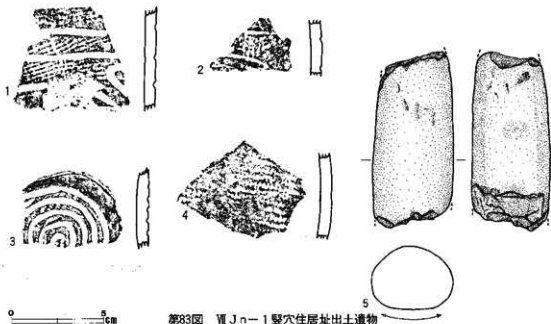
床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。

柱穴：南西中央寄りに1ヶ検出した。口径24cm×24cm、深さ46cmのビットである。床面下の精査においても他に検出できず、柱穴配置は不明である。

炉：中央に地床炉を検出した。焼土は径30cmの範囲に広がり、中央部で6cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

出土遺物 (第83図・写真図版43)

遺物は非常に少なく、土器は何れも破片資料である。No 1～3は単節縄文LRに篋描沈線を



第83図 VII J n-1 竪穴住居址出土遺物

配したもので、胎土は石英・砂粒等が混入する。これら掲載した拓影図は、鑿痕は深鉢の体部片で、No 1 が埋土下位・No 2 と 4 が床面出土・No 3 は埋土中位の出土である。

No 5 は、両端部欠損の磨製石斧。断面形は楕円で、側面を持たない棒状タイプであるが、主面の一方のみが擦痕を残しながらやや偏平となっている。従って、欠損後に磨石的使用がなされた可能性も考えられる。流紋岩質岩石製。埋土 1 層の出土。

本住居の所属時期は、床面出土上器片等からみて、縄文時代後期前葉に位置するものと考えられる。

VII J n-2 竪穴住居址 (第84図・第24表・写真図版15)

位置：調査区東側南寄りの北西～南東に下る緩斜面に位置する。北東にVII J n-1 住居址、東にVII J n-3 住居址、西にはVII J m 住居址がある。焼失家屋。

重複：南東域で第30号焼土と重複し、同遺構に先行する。

検出：地表下30cmのII層にて検出した。

形態・規模：南北4.74m×東西4.20mの北西～南東に長い円形である。床面積(13.2)㎡。

埋土：黒褐色土の単層からなる。全体に、炭化粒子・焼土が認められる。自然堆積。

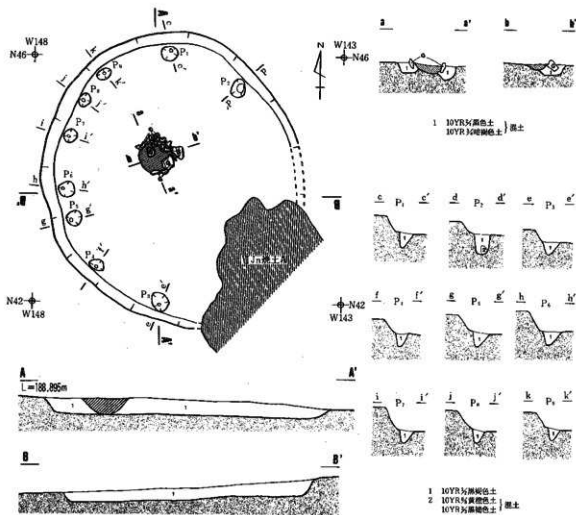
壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁38cm・東壁20cm・南

壁21cm・西壁26cmとなり、東・南壁側が浅いのは竪穴の立地する地形に起因すると考えられる。

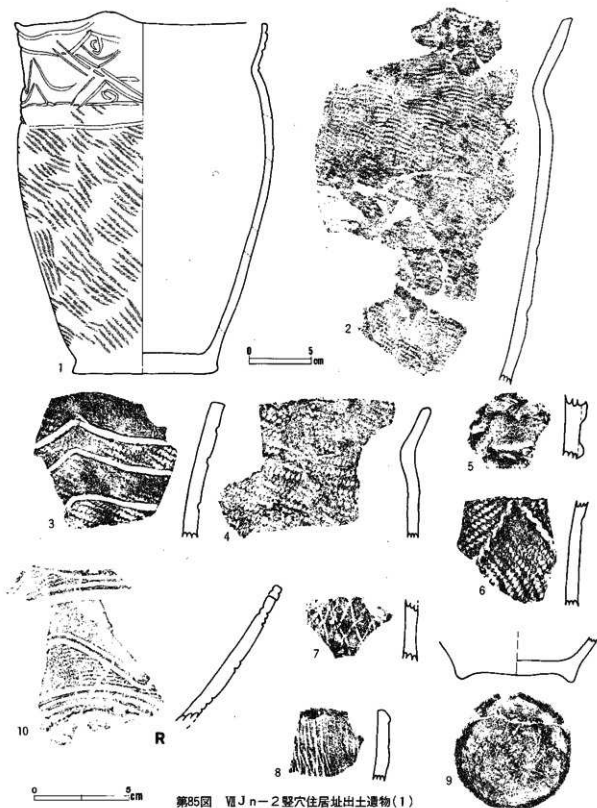
床：V層を床面とし、ほぼ平坦である。全体に硬く、小さな凹凸も認められる。

柱穴：壁沿いに9ヶ検出した。西側で50～60cmと近接し、北・南側で1.20mと広い配置となる。P2を除き全般に内側に傾く断面形を示す。

炉：中央北寄りに石囲炉を検出した。殊は南西で開口する「コの字」状に配置され、50cm×



第84図 VII Jn-2 竪穴住居址



第85图 VII J n-2 竖穴住居址出土遗物(1)

第24表 VII J n-2 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
口径 (cm)	26×24	30×22	34×28	26×18	26×24	26×22	24×24	22×20	24×18
深さ (cm)	26	31	21	24	26	24	20	21	22

50cmを測る。焼土は、中央部で14cmの堆積を示し、同規模の掘り込みを有す。礫は床面を20cmほど掘り込んで配置され、南西側開口部に掘り込みや礫の痕跡は認められない。

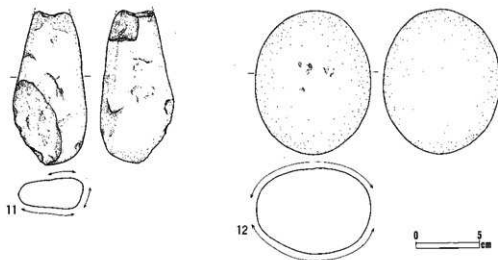
出土遺物 (第85・86図・写真図版43)

(土器)

全体に土器は少なく、埋土出土のものも殆ど床面近くからの出土である。No 1は、体部上位～口縁部に沈線に依る文様帯を持ち、体部全体に無節縄文L-rを施した甕で、口径(20.2)cm・底径(11.7)cm・最大径(20.5)cm・器高34.0cmを測る。内外面には炭化物の付着が見られ、色調は褐～暗褐色を呈する。反転実測。床面及び床面直上出土。No 5は刻み目入りの粘土紐を貼付けており、No 6では押圧縄文に依る区画後、地文RLを充填している。No 9の底部は、削りに近い荒いナデで台付の様により出した土器であり、残存部分での地文は見受けられない。No 10は磨消縄文に依る山形文様を展開した高坏片で、金雲母等が入る精良な胎土であり、焼成も良好である。埋土からの出土であるが、遺構外出土片と接合している。これ以外の掲載した拓影図No 2～9は、No 2・6が床面、他も埋土ながら床に近いレベルでの取り上げである。

(石器)

No 11・12は何れも安山岩製で、共に擦痕が顕著で、良く使われている。No 12は磨石・No 11は



第86図 VII J n-2 竪穴住居址出土遺物(2)

砥石の類と考えられる。他に、未製品の刻片が計28点出ている。

本住居址の所属時期は、これら出土遺物から縄文時代後期前葉に位置づけられるものと思われる。

VII J n-3 竪穴住居址 (第87図・第25表・写真図版15)

位置：調査区東側南寄りの北西～南東に下る緩斜面に位置する。北にVII J o住居址、西にはVII J n-2住居址がある。

検出：地表下50cmのV層にて検出した。

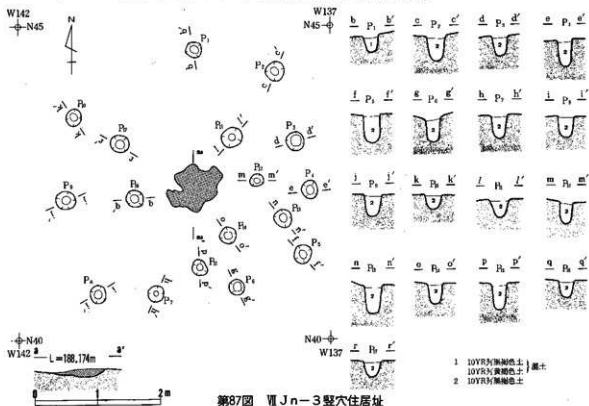
形態・規模：柱穴配置から円形と推されるが詳細は不明。

埋土：不明。

壁：不明。

床：南東域で硬い部分が認められるほかは、全体に柔らかく、ほぼ平坦である。

柱穴：17ヶ検出した。炉を中心に、内・外の2列に配置される。P₁・P₆間からP₁₃・P₁₄間を通り炉にかけて極めて硬い部分が認められることから、南東側に出入口を有する可能性がある。埋土には炭化粒子を認めるものもあり、焼失家屋の可能性もある。



炉：中央に地床炉を検出した。焼土は90cm×60cmの範囲で不整に広がり、中央部で10cmの厚い堆積を示す。掘り込みは認められない。

尚、本住居址に、伴うものと明確に認定でき得る出土遺物が皆無な為、詳細な時期決定はし

第25表 VII J n-3 竪穴住居址ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
口径(cm)	24×26	31×29	30×28	29×26	30×28	24×24	26×26	29×26	30×28
深さ(cm)	35	40	32	44	41	36	36	36	34
	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	
口径(cm)	26×24	33×30	22×20	29×27	26×26	26×24	28×27	30×27	
深さ(cm)	22	28	35	44	34	42	26	26	

かねるが、住居址検出域グリッドにおいて十腰内I式に比定される土器が若干蓋出土している点、当区弥生時代住居址との比較等から、縄文時代後期前葉に属する可能性が極めて高いものと思われる。

VII J o 竪穴住居址 (第88図・第26表・写真図版13)

位置：調査区東側中央の西～東に下る緩斜面に位置する。東にVII J k-1住居址、西にはVII J n-1住居址がある。

重複：VII J k-1住居址に先行し、VII J n-1住居址に後続する。

検出：地表下30cmのV層にて検出した。

形態・規模：南北5.40m×東西(5.40)mとなる。残存する東壁部分から、北東～南西に長軸を有する円形と推される。床面積(22.5)㎡。

埋土：大略3層に区分される。自然堆積である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より直立に立ちあがる。壁高は、北壁18cm・東壁13cm・南壁17cm・西壁16cmとなり、何れも極めて浅い壁である。東壁の一部はVII J k-1住居址と重複し、不明である。

床：炉を中心に径1mの範囲で硬い部分が認められ、特に炉の北・西側で顕著である。同部分には僅かながら凹凸も認められる。他は、全般に柔らかく、ほぼ平坦である。

柱穴：北寄りに2ヶ検出した。何れも小径である。埋土は黒褐色土の単層からなり、極めて柔らかい。

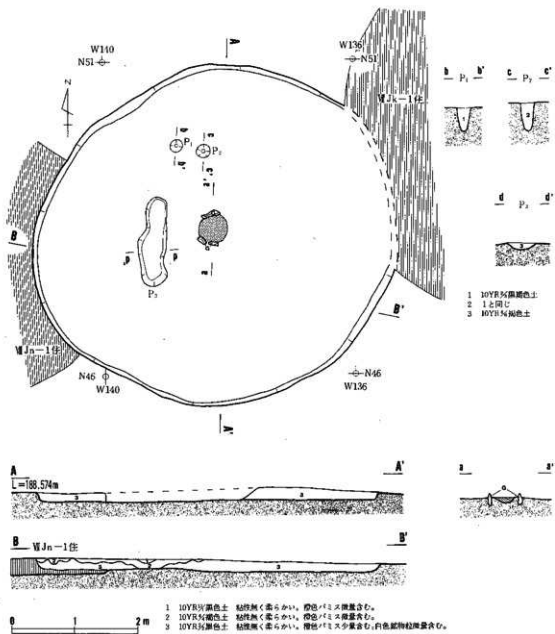
炉：ほぼ中央に位置する「二の字」状の石囲炉である。偏平な磔を直立させ、南に2ヶ、北に1ヶ配される。対面する磔の間隔は西側30cm、東側44cmとなり、僅かに斜行する「二の字」を示す。構築方法は、磔同様の溝を床に掘り込んだ後、填め込まれている。東西方向に磔の痕

第26表 VII J o 竪穴住居址ピット計測値一覧

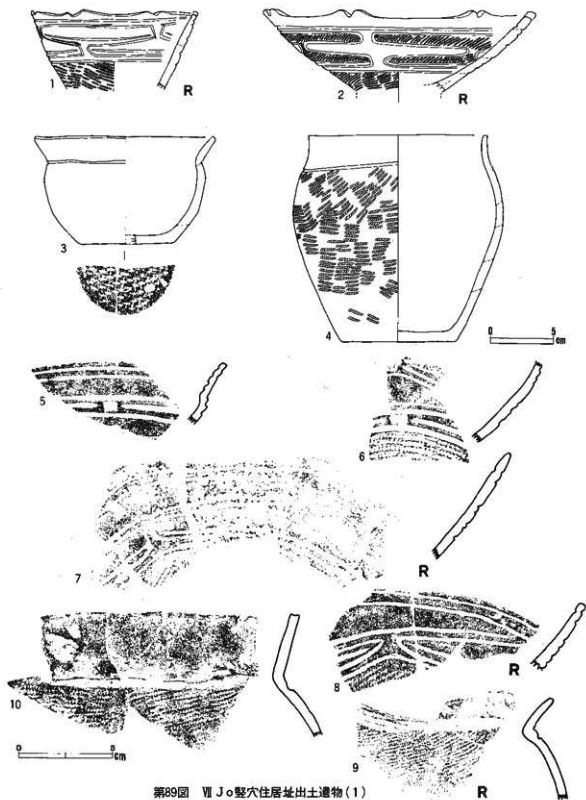
	P ₁	P ₂	P ₃
口径(cm)	22×22	22×22	142×48
深さ(cm)	34	42	10

跡は認められない。焼土は、窯の内側に沿って広がり、中央部で10cmと厚い堆積を示す。掘り込みが認められる。

その他の施設：炉の西側において南北に伸びる浅い溝状のピットを検出した。埋土は褐色土の単層からなり、極めて柔らかい。性格は不明。



第88図 W Jo 竪穴住居址



第89圖 VII J○竪穴住居址出土遺物(1)

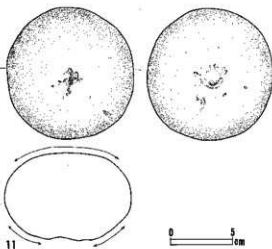
出土遺物 (第89・90図・写真図版44)

土器10点・石器1点の図示。全体として遺物量は少なく、殆どが破片資料であり、石器についても図示した1点以外に剥片資料が10点あるに過ぎない。

No 1は底部欠損の浅鉢で、体部上半に寛指沈線の変形工字文・下半にLR織文が施される。また、口縁部には頂部に凹みを持つ緩やかな山形突起が6ヶ作られており、口縁部・体部上半・下半の区画は水平な沈線に依ってなされている。色調は内外面共に黒褐色を呈し、外面には朱彩が残る。緻密な胎土には金雲母が見られ、焼成も良好である。口径(13.4)cm。反転実測。尚、この浅鉢No 1は本住居址とVII J n-1住居址との重複地点からの出土であるが、層的には本住居址の床面に当たる。No 2は脚部欠損の高坏で、口縁にはNo 1と同様2ヶ1組の山形突起が6ヶあり、体部上半には変形工字文・下半には細目のLRが施され、それぞれの文様帯の区画には水平沈線が1条繞る。このNo 2で見られる変形工字文は、充填と磨消を組み合わせて作り出した様である。即ち、篋ナデ調整した体部上半に沈線で工字文を描き、必要部分に織文を付した後、全体を更にナデに依る再調整を加えて仕上げたものである。金雲母の入る精良な胎土で、焼成も良く、褐〜黒褐色を呈する土器の表面には朱彩の痕跡が微かに残る。口径22.0cm。床面及び埋土からの出土。No 3は頸部に括れを有する浅鉢タイプであるが、内外面共にやや雑な篋ナデ調整が施され、底部外面にはアジロ痕が残る。また、沈線が1本繞る頸部は括れを持ち、やや外反する口縁へと広がる器形であるが全体的に厚手である。尚、体部外面には煤の付着が見られ、内面は橙色・外面にぶい褐色を呈する。埋土下層の出土。No 4は体部上端に沈線が1条繞る甕で、括れは殆ど見られず、口縁は直立に近い。口径(14.4)cm・底径(7.2)

cm・器高(17.7)cmで、反転実測である。埋土下層出土。拓影図No 5〜8は何れも高坏の坏部で、No 7・8には朱塗り痕が残る。また、No 5・6は同一個体である。No 9は短頸で強く外反するタイプの口縁〜体部片で、頸部には沈線が2本引かれ、外面には朱彩が残る。甕と思われる。No 7・10が床面で、他は埋土の出土であり、No 6・8は遺構外出土片とも接合している。

No 11は床面出土の磨石。非常に良く使われており、両面の中央付近には敲石の利用の痕跡も見られる。輝石安山岩製。



第90図 VII J o 竪穴住居址出土遺物(2)

以上出土遺物から、本住居址の所属時期は、弥生時代中期前半に相当すると思われる。

Ⅶ J p-1 竪穴住居址 (第91図・第27表・写真図版16)

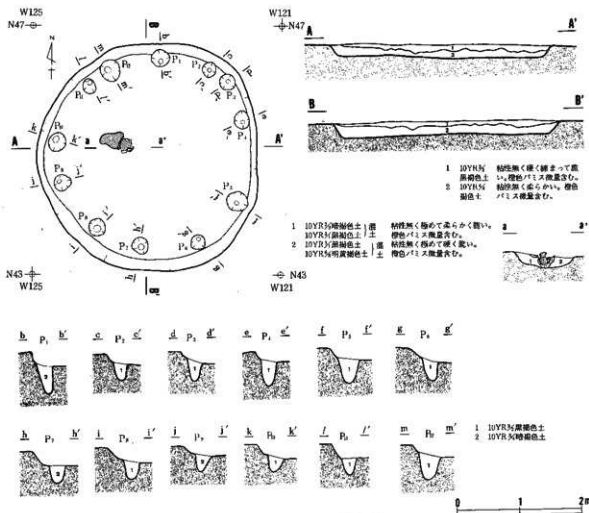
位置：調査区東側南端に位置する。北にⅦ J p-3 住居址、南西にⅦ J p-2 住居址、東にはⅦ K i 住居址がある。

検出：地表下30cmのV層にて検出した

形態・規模：長軸3.80m×短軸3.70mの円形となる。床面積8.5㎡。

埋土：大略2層に区分される。自然堆積。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁24cm・東壁15cm・南壁25cm・西壁18cmとなる。



第91図 Ⅶ J p-1 竪穴住居址

床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。炉の東側、竪穴中央部に硬い部分が認められる。

柱穴：壁沿いに12ヶ検出した。何れも径30cm、深さ30cmほどである。P₁・P₂・P₃・P₁₀・P₁₁・P₁₂が40～60cmと近接するほかは、ほぼ1mの等間隔に配される。

炉：中央寄りに地床炉と土器埋設炉を検出した。両者は併設された状態にある。土器埋設炉は、床面を径90cm×60cmの長円形に掘り込んだ後埋設され、土器内焼土は厚さ5cmに達する。地床炉は、埋設土器外側の埋め戻し部分に位置する。焼土は、40cm×30cmの範囲で不整に広がり中央部で7cmの堆積を示す。

出土遺物 (第92・93図・写真図版45)

第27表 VII J p-1 竪穴住居址ピット計測値一覧

P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	
口径(cm)	30×30	25×24	28×28	30×28	36×32	28×28	29×29	29×29	30×29	30×28	26×20	36×32
深さ(cm)	44	25	29	42	38	27	31	28	24	28	27	38

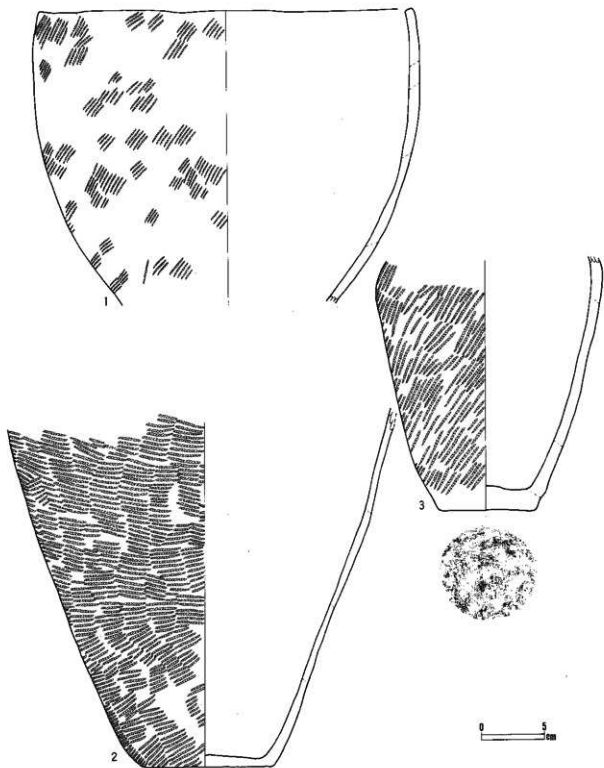
(土器)

出土した遺物で器種の判明するものは、殆どが深鉢或いは壺であり、床面直上もしくは埋土2層検出のものが多く。

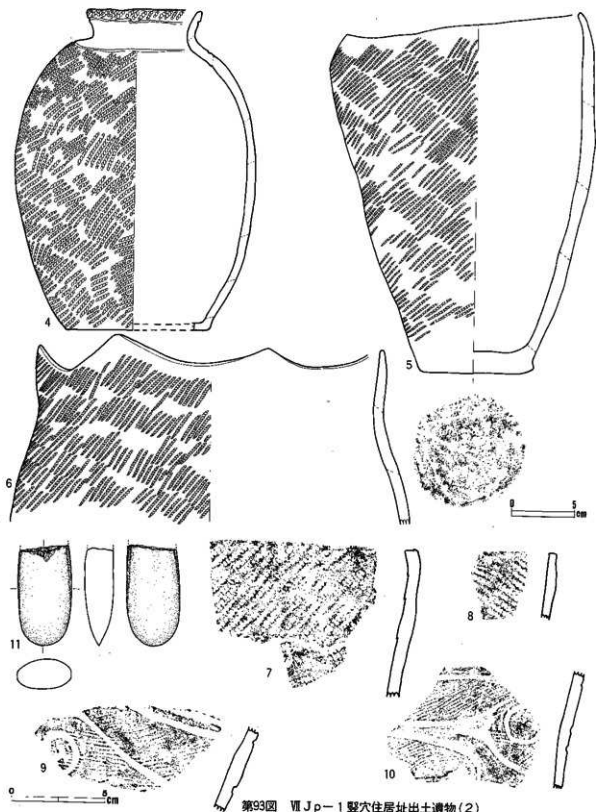
No 3は埋設炉として用いられていた深鉢で、口縁は欠損しているが内湾するタイプと思われる。外面にはR L縄文が付され、内面には寛ナデ調整が丁寧に施され、スベスベしており、内外面共に煤の付着が認められる。また、底部外面には木葉痕が残るが、更にその上からヘラナデ調整されている。胎土は小石等を含む緻密なもので、焼成も良好で、本来的には黄褐色を呈すのであろうが、火熱に依り赤化が目立つ。No 5はNo 3と近似した深鉢で、やはり口縁が内湾するタイプであるが、若干歪みが見られる。底部は木葉痕が残る。口径18.6cm・底径9.2cm・器高29.0cmを測る。埋土2層から一括して出土した。No 4は長胴の壺形土器であるが、埋土1・2層出土に遺構外出土のものがかなり接合しており、流れ込み遺物であると考えられる。体部上端及び口縁に沈線を纏らせて区画し、全体にL R縄文を施した後で頸部分のみを寛ナデに依る無文帯としている。No 6は山形突起を持つ粗製壺で、R L縄文が口縁にまで及ぶが、口縁に沿ったナデ調整に依り無文帯を作っている。石英・砂粒を含む胎土で、色調は灰黄褐～赤褐色を呈する。口径(27.8)cm。No 6～9は何れも埋土2層の出土。No 9は地文L R上に寛描沈線を施した甕の体部片であるが、沈線文様は渦巻から波状或いは波頭文的に展開するものと思われる。No 10は細かいL R縄文に沈線を描き、更に磨消技法を用いたもので、縄文時代晩期の深鉢片である。出土層位は埋土1層で、本住居外出土の破片が接合している。

(石器)

No 11の磨製石斧は床面出土で、基端部を欠くが、先端部はよく研かれており使用痕が認めら



第92図 Ⅱ Jp-1 竪穴住居址出土遺物(1)



第93圖 VII Jp-1 豎穴住居址出土遺物(2)

れる。石質は角閃岩。他には、未加工の剥片が4ヶ出ているに過ぎない。

以上の様な出土遺物から、本住居址の所属時期は、縄文時代後期に位置づけられると考えられる。

VII J P - 2 竪穴住居址 (第94区・第28表・写真図版16)

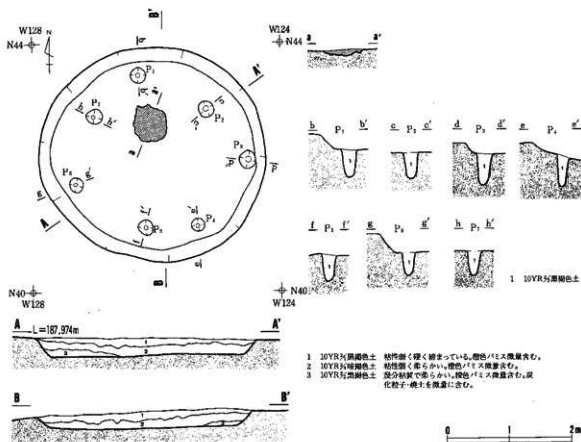
位置：調査区東側南端に位置する。北東にVII J P-1住居址がある。焼失家屋。

検出：地表下30cmのV層にて検出した。

形態・規模：長軸3.60m×短軸3.40mの円形である。床面積7.5㎡。

埋土：大略3層に区分される。自然堆積である。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より緩やかに立ちあがる。壁高は、北壁29cm・東壁19cm・南壁17cm・西壁28cmとなる。



第94図 VII J P-2 竪穴住居址

床：全体に柔らかく、ほぼ平坦である。

柱穴：壁沿いに7ヶ検出した。何れも径26cm前後、深さ40cm前後と同規模のもので、90cm～130cmの間隔で配される。埋土には僅かながら炭化粒子・焼土が認められた。

炉：中央北寄りに地床炉を検出した。焼土は径60cmの円形に広がり、中央部で10cmと厚い堆積を示す。同規模の掘り込みをもつ。

出土遺物 (第95図・写真図版45)

全体に出土遺物は少なく、実測可能な土器はNo1・2の2点のみであった。No1は口縁内湾の深鉢で、底部はナデ調整に依り台付の如く作り出され、上半部に比べかなり小さ目である。

第28表 VII Jp-2 竪穴住居址

ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
口徑(cm)	26×26	26×26	30×29	22×22	28×27	22×24	28×26
深さ(cm)	42	42	50	44	45	36	38

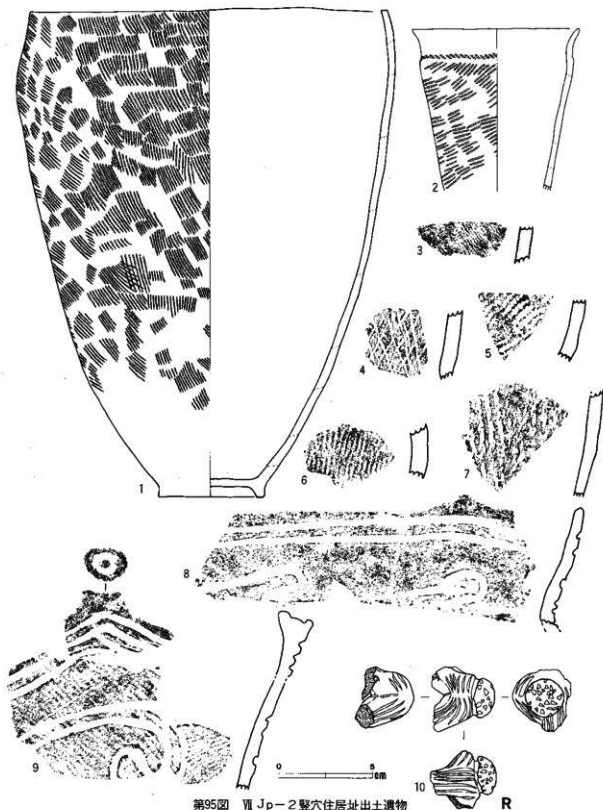
地文は細いRL単節縄文で、体下半分～底部は二次加熱のため赤化しており、内外両面共に煤の付着が見られる。口径28.8cm・底径8.6cm・器高39.1。このNo1深鉢は埋土1層の出

土であるが、遺構外出土の破片が相当数接合している。No2は図上復元の深鉢で、体部にはLR縄文・頸部には縄文庄痕が残り、やや外反した平口縁に至る。胎土には砂粒を含み、精良な焼き上がりとなっている。また、内外面に煤の付着が見られる。埋土1・2層からの出土。拓影図No3～7は深鉢の体部片で、網目状燃糸文のNo4とLR縄文のNo6が床面・No5が焼土内出土であり、他は埋土下層の出土。No8・9は深鉢の口縁片で、No8では波頭文の沈線が描かれ、No9では地文LR上に沈線文が描かれている。何れも埋土出土。

No10は土製品の一部分であるが、刺突を施した円形の凸部を中心に沈線が配され、更に顕著な朱彩の痕跡が残る。胎土は細砂を含む精良なもので、焼成も非常に良く、色調は橙色を呈する。土偶の一部と思われ、或いは肩部にでも相当するものであろうか。埋土2層出土。

本遺構から出土した石器類は、単純な削片が3ヶあるに過ぎない。

以上のような出土遺物から見て、本住居址は縄文時代後期に属すると考えられる。



第95图 VII Jp-2 整穴住居址出土遺物

R

Ⅶ J P-3 竪穴住居址 (第96図・第29表・写真図版16)

位置：調査区東側中央に位置する。北にⅦ J 1住居址、南にⅦ J P-1住居址がある。

検出：地表面50cmのV層にて検出した。調査の不慎際により南半部分のみの検出である。

形態・規模：検出した柱穴配置から円形と推されるが詳細は不明である。

埋土：不明

壁：不明

床：検出した南半分は、東側で硬い部分が認められるほかは全体に柔らかく、ほぼ平坦である。床面には炭化粒子・焼土の濃密な分布域が認められることから、焼失家屋の可能性が高い。北半分は先行する調査により削平され不明である。

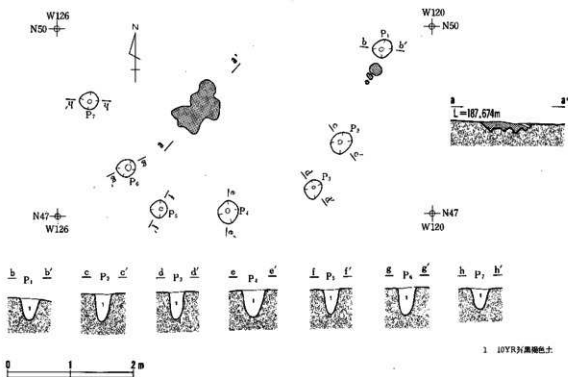
第29表 Ⅶ J P-3 竪穴住居址

ピット計測値一覧

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
口径(cm)	34×30	38×30	39×28	38×32	28×26	30×25	30×30
深さ(cm)	35	47	44	38	40	40	33

柱穴：7ヶ検出した。何れも同規模のものである。埋土には、僅かながら炭化粒子・焼土が認められる。

炉：中央西寄りに地床炉を検出した。焼土は80cm×60cmの範囲で不整



第96図 Ⅶ J P-3 竪穴住居址

に広がり、中央部で12cmと厚い堆積を示す。同規模の掘り込みをもつ。

本住居址に伴うと明確に認定される出土遺物が皆無なことから詳細な時期は不明であるが、住居址検出域グリッドにおいて、十腰内I式、大洞B式・B-C式に比定される土器が出土していることから縄文時代後・晩期に属するものと考えられる。尚、推定される形態・規模・柱穴配置・炉等がVII J a-2 竪穴住居址に近似する傾向を認めることから、後期前葉の可能性が高いものと思われる。

VII K i 竪穴住居址 (第97図・第30表・写真図版17)

位置：調査区東端中央の西へ東に下る緩斜面に位置する。北西にVII J 1住居址、西にVII J P-3住居址、南西にはVII J P-1住居址がある。焼失家屋。

検出：地表下40cmのII層にて、I層粉状パミスの不整な分布域として検出した。

形態・規模：東西7.00m×南北7.00mとなり、いくぶん歪んだ円形と推される。但し、北側の一部が調査の下手際により不明な為明確ではない。床面積(33.3)㎡。

埋土：大略4層に区分される。2層粉状パミスは3mの範囲に分布し、中央部で18cmと厚い堆積を示す。3～5層には、炭化粒子・焼土が認められ、4層下位でより濃密である。自然堆積。

壁：V層中に掘り込まれ、床面より外傾気味に立ちあがる。壁高は、北壁30cm・東壁35cm・南壁31cm・西壁50cmとなる。

床：全体に柔らかく、ほぼ平坦であるが、炉を中心に径1.5mの範囲と、P₁₃・P₁₄間の南西壁寄りにおいて硬い部分が認められた。なかでも、炉の北東側で極めて顕著である。床面全域に炭化粒子・焼土が分布し、特に南半で濃密である。

柱穴：17ヶ検出した。壁沿いに位置するものと中央寄りに位置するものがある。中央西半域では検出できなかったが、柱穴規模の比較から、中央に主柱穴を配したものと想定される。埋土には何れも炭化粒子・焼土が濃密に認められ、特に南側に位置するP₉～P₁₅で顕著である。

第30表 VII K i 竪穴住居址ピット計測値一覧 () 推定値

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径(cm)	(36×36)	(26×26)	(24×24)	(30×30)	(30×30)	(24×24)	(28×28)	(30×30)	(38×38)
深さ(cm)	34	40	32	34	44	40	40	46	50
径(cm)	(34×34)	(44×44)	(36×36)	(32×32)	(34×34)	(40×40)	(32×32)	(32×32)	
深さ(cm)	46	52	34	38	30	32	42	42	

P₁₁を除き床面下に検出した。

炉：ほぼ中央に「二の字」状の石囲炉を検出した。偏平な礎を直立させ、北東・南西側に配するもので、構築の際

に掘り込まれたピットの側壁に寄りかかるように配置される。対面する礎の間隔は、60cmとなり、ほぼ平行する「二の字」を示す。焼土は礎の内側に沿って、90cm×70cmの範囲に分布し、

中央部で14cmと厚い堆積を示す。

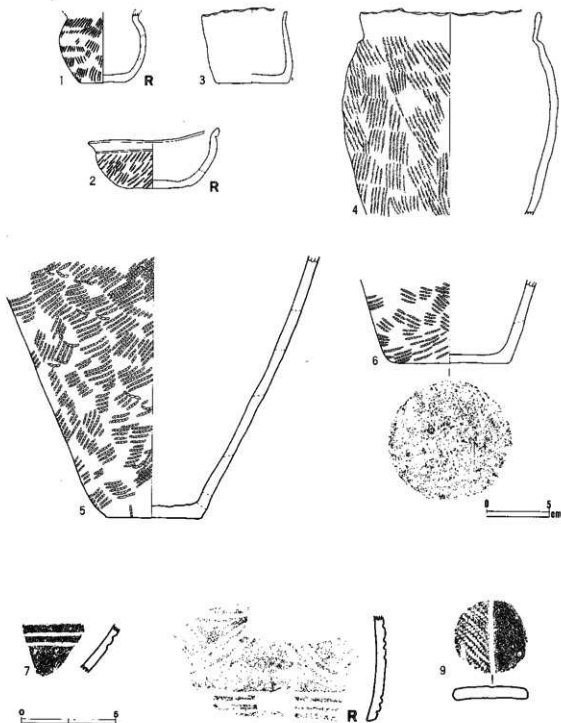
出土遺物 (第98～100図・写真図版46)

本住居址から出土した遺物は膨大な量であり、特に埋土出土のものが多く、出土量の大部分に当る。即ち、この多量の埋土出土遺物は、本住居址が遺物包含層を切って作られたということに起因するものであり、これら土器は、縄文時代晩期に属するものが殆どであった。

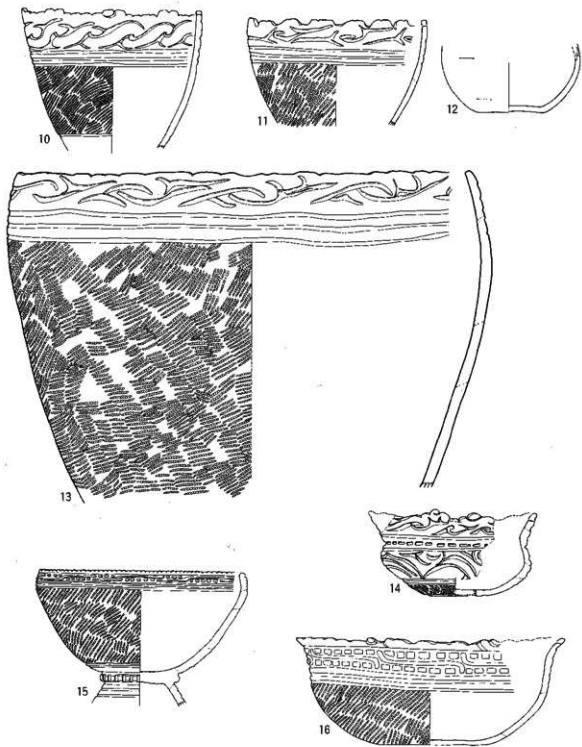
(土器)

No 1は口縁部欠損のやや広口の小型壺で、体部外面には斜位L R縄文が付され、朱塗りの痕跡も残っている。埋土最下層の床面近くの出土。No 2は皿状の浅鉢で、沈線に伴う括れを有し、全体にやや歪んである。外面に施された縄文は横回転のL Rで、更に上から朱彩が内外面共になされていたようである。雲母等を含む精良な胎土を使っており、焼成も良好で、黄褐色～にぶい黄褐色を呈している。埋土からの出土である。No 3は床面出土の無文土器で、全体的に雑な作りで、内外面共に横上げ痕が見受けられ、口縁部の押圧波状も稚拙な出来である。体部内面全体には、炭化物の付着が見られ、口径6.9cm・底径6.0cm・器高6.1cmを測る。No 4は波状口縁を有する壺で、体部には無筋R-1が施され、底部は欠失している。外面には、体上半～口縁部にかけて煤の付着が著しく、内面に於いても若干の煤付着が認められ、外面体部下半では赤化も見られるなど、火熱の影響を大きく受けている。金雲母や砂粒を若干含む胎土で、口径(14.2)cm・現器高16.3cmを測る。最下層の床面近くからの出土。No 5・6共に甕の体部下半～底部にかけてのもので、前者は埋土・後者は炉内からの出土である。また、No 6の底部外面は削りの様に力強いナデが加えられており、内面下端に於いても同様の調整を見ることが出来る。このNo 6には煤等の付着は殆ど見られないが、一部赤変箇所があり、二次加熱を受けていることがわかる。また、赤変以外では褐色を呈している。底径9.5cm。No 7・8は高坏片で前者が口縁部片・後者が脚部片であるが、共に埋土最下層の床面直上出土である。No 9は円盤状土製品で、縄文時代晩期の深鉢口縁部片を再加工したものの様である。埋土最下層の出土。

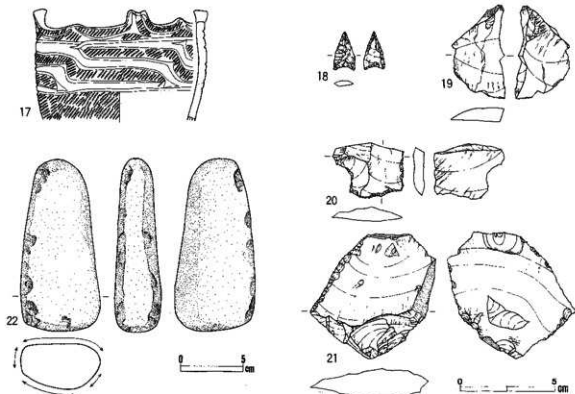
No 10～16までの縄文時代晩期土器群は、何れも埋土上位～中位出土のもので、遺構外出土片が接合するものもある。No 10・11・13は深鉢土器で、何れも地文はL Rを施し、口縁部文様帯とは3本の平行沈線に依って区画される。口縁部文様帯は、所謂「三叉文」を施したものである。また、口縁部形態を見ると、No 10では刻みを持つ突起の間に刻みに依る小波状が作り出されており、No 11では刻みを有す突起からなる波状口縁であり、No 13は刻み目の間隔が広くつけられた緩い波状となっている。因に、3点の口径は、No 10と11が(10.4)cm・No 13が(36.6)cmである。No 12は寛ナデ調整のみの体部～底部片で、碗状或いは壺状になるものと思われる。No 15は台付浅鉢で、台部の端部が欠失している。小波状口縁の下に展開する文様帯は浮彫的に作り出した所謂「シダ状文」であり、平行沈線以下の地文にはL Rが用いられている。また、



第98图 VII Ki 竖穴住居址出土遗物(1)



第99图 VII K 1 竖穴住居址出土遗物(2)



第100図 V K 窪穴住居址出土遺物(3)

台部上端には刻み目を持つ隆帯が続っており、更にその下には平行沈線が繞る。口径16.4cm・台接合部径6.4cm・現器高10.8cmである。No16はシダ状文を有する浅鉢。地文はやはりLRである。口径(21.6)cm・底径7.0cm・器高8.6cmを測る。No14は括れを有する浅鉢で、曲線的な突起を持つ口縁は大きく開いて作られている。文様帯は、平行沈線に依って口縁部・体部上半・体部下半の3段に区画され、括れ部の平行沈線間には更に刺突列が施される。区画された口縁部及び体部上半の文様帯には「三叉文」が用いられるが、後者にあつては、より裝飾的で連弧文的表現を使つており、体部上半には縄文RLが施されている。No17は埋土出土の土器で、遺構外出土片も多数接合している。中央に凹みを持つ突起を4ヶ配置し、更にその間に山形突起を配した口縁形態を持ち、横に走る沈線及び磨消帯は、この山形突起部分を起点としている。地文はLR縄文で、外面には若干の煤が付着し、器面は褐色を呈しており、焼成も良好である。口径14.2cmの後期後葉の深鉢土器である。

(石 器)

No18は凹基無茎石鏃で、全体に偏平ではあるが両側縁及び先端部は非常に鋭く作られている。硬質頁岩製。No19～21は何れも一部に刃を持つ不定形石器で、No19・No21が珪質頁岩、No20が

硬質頁岩を用いている。No19が埋土下層、No20が中位、No21が床面の出土である。No22も床面出土で、砥石と考えられる。非常に良く使われており、表裏両面だけでなく両側面及び下端面も使い込まれている。石質は安山岩である。

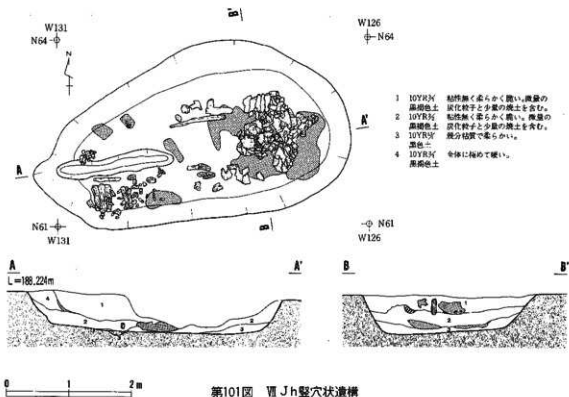
本住居址から出土した石器類は、土器と同様埋土出土のものが多く、掲載したこれら5点以外に、二次加工のある剝片11点・コア1点・フレークの類が10点程度見つかった。

本住居址の所属する時期は、床面及び床面直上出土の遺物から、弥生時代中期に位置づけられると考えられる。

2. 竪穴状遺構

VII J h 竪穴状遺構 (第101図)

調査区東側北寄りの北西～南東に下る緩斜面に位置する。北西にVII J c 住居址、西にはVII J g-1 住居址がある。VII J g-1 住居址と重複し、同住居地に後続する。地表下20cmのII層で検出した。平面形は、東西5.1m×南北2.8mの東西に長い楕円形を呈し、深さは60cmを測る。埋土は、大略4層に区分される自然堆積で、何れも炭化材・焼土が多量に認められ、特に床面



第101図 VII J h 竪穴状遺構

直上に顕著である。西側床面から、東西1.9m×南北0.3m、深さ7cmの東西に伸びる溝を検出している。

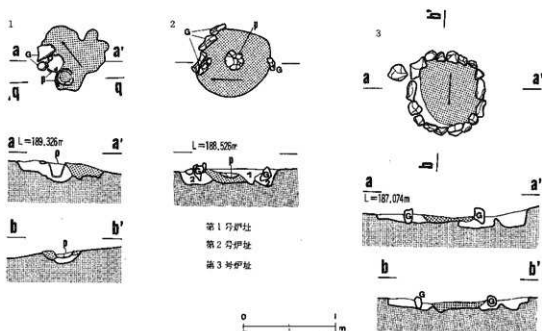
出土遺物

埋土上位の崩落土層より縄文後期の深鉢形土器その他が出土しているが、Jブロック遺物包含層土の崩落であり、包含層出土遺物として後述する。

3. 炉 址 ・ 焼 土

第1号炉址 (第102図・第107図No4・写真図版48)

調査区中央北寄りに位置する。V層で検出した。焼土は、70cm×70cmの範囲で不整に広がり中央部で18cmの堆積を示す。同規模の掘り込みが認められる。土器は、底部だけのものと、体部上半を欠くものの2ヶが、焼土の西側に南・北に配される。北側の体部上半を欠く土器内には、多量の炭化粒子が認められたが、焼土は、極めて少量であった。何れも掘り込みが認められる。



第102図 炉址

出土遺物

深鉢の体部下半から底部にかけて、炉の埋設土器として出土している。残存部器外面全局に縦に近い斜行縄文を施している。R L 2段半節で端部に結束を持つ原体を使用しており、結束痕から、幅約3cmで斜めに原体を回転させていたことがわかる。底部外面に木葉痕を持つ。底径12.5cm。胎土や器面の調整からは、縄文後期前葉のものと同推測される。

第2号炉址 (第102図・写真図版18)

調査区中央南寄りに位置する。焼土は、径84cm×70cmの円形に広がり、中央部で6cmの堆積を示す。同規模の掘り込みが認められる。焼上のほぼ中央には、底部のみの土器が配される。礫の配置は、北側に4ヶ、南側に1ヶとなり、偏平な礫を直立させている。何れも掘り込みが認められる。他に、礫の痕跡は確認されなかった。

遺物の出土は無かった。

第3号炉址 (第102図・写真図版18)

調査区東端北寄りに位置する。10～20cmの偏平な礫17ヶが直立して円形に配される。礫の配置には、掘り込みが認められる。焼土は、中央部で2～4cmの堆積を示す。深さ10cmほどの掘り込みが認められる。

遺物の出土は無かった。

第1号焼土 (第103図・第105図No1・写真図版47)

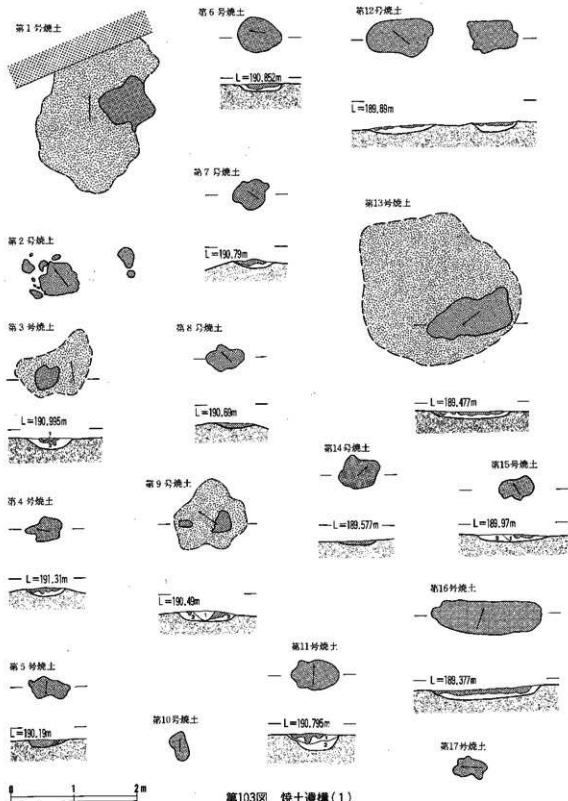
調査区西側北端のVIIH 1 グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は68cm×68cmの範囲で不整に広がり、中央部で10cmの堆積を示す。110cm×100cm、深さ16cmの方形皿状の掘り込みを有す。西側では、焼土を囲む形で東西1.60m×南北(2.30)mの範囲で帯状に炭化粒子が分布する。尚、北側の広がりとは道路の為一部未調査である。

十師器の壺の口縁片が、焼土中より1点出土している。断面形より奈良時代のものと推される。

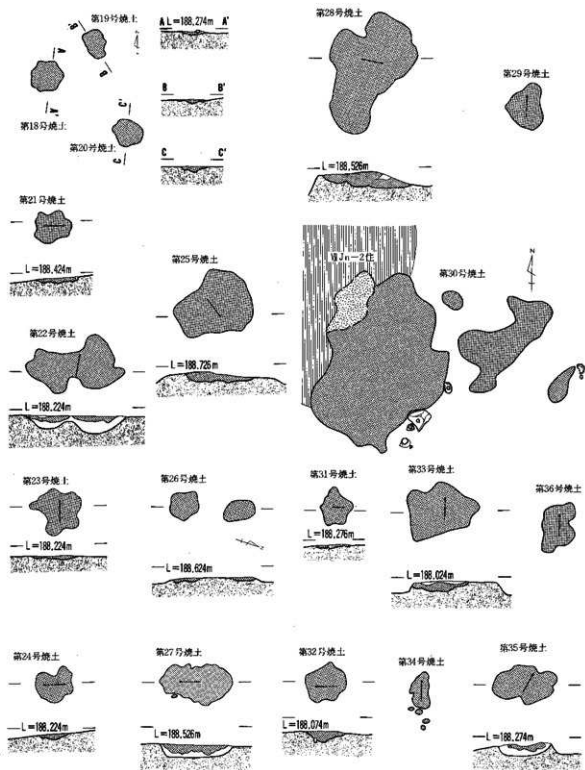
第2号焼土 (第103図)

調査区西側北端のVII I c 4 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は180cm×80cmの範囲に不整に分布する。掘り込みは認められず、焼土厚は2～3cmと薄い。

遺物の出土は無かった。



第103图 坑土遺構(1)



第104图 烧土遺構(2)

第3号焼土 (第103図)

調査区西側北寄りのVII I c 4グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は40cm×30cmの範囲で不整に広がり、中央部で10cmの堆積を示す。径80cm×60cm、深さ20cmの円形の掘り込みを有す。焼土を取囲むように110cm×100cmの範囲に炭化粒子が不整に広がる。
遺物の出土は無かった。

第4号焼土 (第103図)

調査区西側北寄りのVII I e 1グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は60cm×40cmの範囲で不整に広がり、中央部で10cmの堆積を示す。径70cm×50cm、深さ16cmの円形の掘り込みを有す。
遺物の出土は無かった。

第5号焼土 (第103図)

調査区西側中央のVII I f 4グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は60cm×40cmの範囲で不整に広がり、中央部で10cmの堆積を示す。径60cm×50cm、深さ10cmの円形の掘り込みを有す。
遺物の出土は無かった。

第6号焼土 (第103図)

調査区西側中央のVII I f 4グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は径70cm×60cmの円形に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。径70cm×60cm、深さ12cmの円形の掘り込みを有す。
遺物の出土は無かった。

第7号焼土 (第103図・第105図No 2・写真図版47)

調査区西側中央のVII I i 2グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は径60cm×40cmの円形に広がり、中央部で10cmの堆積を示す。50×48cm、深さ16cmの方形の掘り込みを有す。
LR原体の縄文を施した体部の小片1点のみの出土。時期不詳。

第8号焼土 (第103図・第105図No 3・写真図版47)

調査区西側中央のVII I j 1グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は径60cm×40cmの円形に広がり、中央部で10cmの堆積を示す。径66cm×44cm、深さ10cmの円形の掘り込みを有す。
頸部を沈線で区切った、壺の肩部小片1点が出土している。LR原体の横走縄文が施され、胎土中に雲母片が認められる。弥生中期のものと思われる。

第9号焼土 (第103図)

調査区西側中央のVII j 3グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は20cm×10cmと34cm×24cmの範囲に不整に広がり、最厚10cmの堆積を示す。焼土を職固むように120cm×110cmの範囲で炭化粒子が広がる。径96cm×54cm、深さ18cmの長円形の掘り込みを有す。

遺物の出土は無かった。

第10号焼土 (第103図)

調査区西側中央のVII j 1グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は30cm×20cmの範囲で不整に広がり、中央部で1cmの堆積を示す。

遺物の出土は無かった。

第11号焼土 (第103図)

調査区中央のVII k 2グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は60cm×50cmの範囲で不整に広がり、中央部で20cmの堆積を示す。径84cm×68cm、深さ26cmの円形の掘り込みを有す。

遺物の出土は無かった。

第12号焼土 (第103図)

調査区西側南端のVII m 2グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は100cm×60cmと70cm×50cmの範囲で不整に広がり、何れも中央部で4cmの堆積を示す。それぞれ、径110cm×60cm・径74cm×70cmの円形の掘り込みを有す。

遺物の出土は無かった。

第13号焼土 (第103図)

調査区西側南端のVII n 3グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は140cm×60cmの範囲で不整に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。焼土を取固むように260cm×240cmの範囲で炭化粒子が広がる。

遺物の出土は無かった。

第14号焼土 (第103図)

調査区西側南端のVII n 4グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は70cm×50cmの範囲で不整に広がり、中央部で6cmの堆積を示す。径60cm×46cm、深さ6cmの掘り込みを有す。

遺物の出土は無かった。

第15号焼土 (第103図)

調査区西側南端のⅧ I b 1 グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は56cm×34cmの範囲で不整に広がり、中央部で6cmの堆積を示す。116cm×50cm、深さ12cmの掘り込みをなす。

遺物の出土は無かった。

第16号焼土 (第103図)

調査区西側南端のⅧ I b 2 グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は172cm×66cmの範囲で不整に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。172cm×66cm、深さ12cmの掘り込みを有す。

遺物の出土は無かった。

第17号焼土 (第103図)

調査区中央南端のⅧ I d 2 グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は50cm×30cmの範囲で不整に広がり、中央部で6cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第18号焼土 (第104図)

調査区東側北端のⅧ J f 2 グリッドに位置する。V層で検出した。56cm×46cmの範囲で不整に広がり、中央部で6cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第19号焼土 (第104図)

調査区東側北端のⅧ J g 1 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は48cm×30cmの範囲で不整に広がり、中央部で6cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第20号焼土 (第104図)

調査区東側北端のⅧ J g 1 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は50cm×44cmの範囲で不整に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第21号焼土 (第104号)

調査区東側北端のⅧ J g 1 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は60cm×48cmの範囲

で不整に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第22号焼土 (第104図・第105図№4～8・写真図版47)

調査区東側北寄りのVII J h 3グリッドに位置する。II層で検出した。焼土は160cm×88cmの範囲で不整に広がり、最厚10cmの堆積を示す。径70cm×60cm、深さ20cm・径90cm×90cm。

土師器(甕)の口縁部から頸部の小片2点(4・5)、時期不詳の縄文を持つ土器片3点が出土している。4・5の土師器小片は火熱を受けているが、他は受けていない。

第23号焼土 (第104図)

調査区東側北寄りのVII J h 1グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は74cm×74cmの範囲で不整に広がり、中央部で4cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第24号焼土 (第104図)

調査区東側北寄りのVII J h 1グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は60cm×44cmの範囲で不整に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第25号焼土 (第104図)

調査区中央のVII J i 1グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は128cm×100cmの範囲で不整に広がり、中央部で16cmの堆積を示す。同規模の掘り込みを有す。

遺物の出土は無かった。

第26号焼土 (第104図)

調査区中央のVII J i 4グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は48cm×38cm・50cm×30cmの範囲で不整に広がり、何れも中央部で4cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第27号焼土 (第104図・第105図№9, 10・写真図版47)

調査区中央のVII J i 1グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は100cm×60cmの範囲で不整に広がり、中央部で14cmの堆積を示す。径122cm×84cm、深さ20cmの円形の掘り込みを有す。

縄文を施した土器小片 2 点が出土しているが、時期は不明である。原体は、ともに R L を用いている。

第28号焼土 (第104図)

調査区中央の VII J j 1 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は200cm×110cmの範囲で不整に広がり、中央部で22cmの堆積を示す。同規模の掘り込みを有す。

遺物の出土は無かった。

第29号焼土 (第104図・105図No11・写真図版47)

調査区中央南寄りの VII J m 4 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は70cm×60cmの範囲で不整に広がり、中央部で3cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

L R 縄文を施した小片 1 点が出土。断定はし得ないが弥生時代のものである可能性が大きい。

第30号焼土 (第104図)

調査区中央南寄りの VII J n 4 グリッドに位置し、VII J n-2 住居址に後続する。II層で検出した。焼土は4.0m×2.75mの広大な範囲に不整に分布し、2cm~12cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。北西域には炭化粒子の濃密な広がりを認める。

遺物の出土は無かった。

第31号焼土 (第104図)

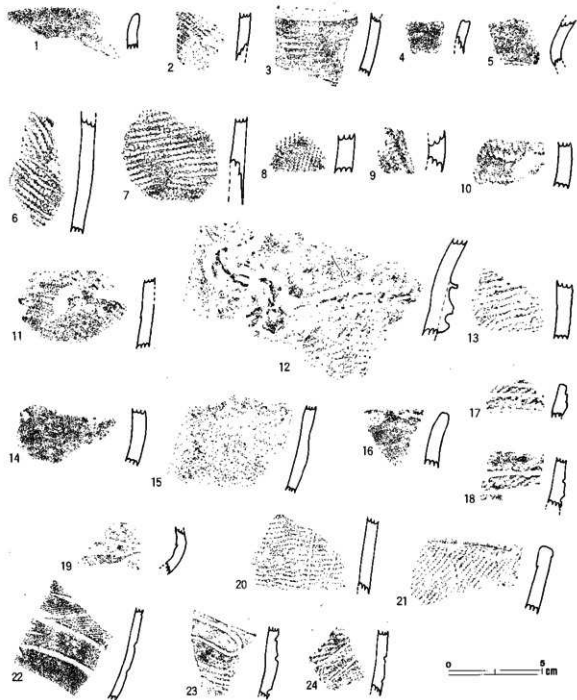
調査区中央南寄りの VII J n 3 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は60cm×50cmの範囲で不整に広がり、中央部で4cmの堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第32号焼土 (第104図・第105図No12・写真図版47)

調査区東側南寄りの VII J o 4 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は66cm×60cmの範囲で不整に広がり、中央部で20cmの堆積を示す。同規模の掘り込みを有す。

縄文後期初頭の深鉢口縁部近くの上器片が1点出土している。連続刺突を施した貼付隆帯で文様を描いている。体部は R L 縄文が横走している。



1. 第1号烧土 2. 第7号烧土 3. 第8号烧土 4-8. 第22号烧土 9-10. 第27号烧土
11. 第29号烧土 12. 第32号烧土 13-15. 第33号烧土 16-20. 第35号烧土 21-24. 第36号烧土

第105图 烧土遺構出土遺物

第33号焼土 (第104図・第105図No13~15・写真図版47)

調査区東側南寄りのVII J o 3 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は110cm×80cmの範囲で不整に広がり、中央部で14cmの堆積を示す。同規模の掘り込みを有す。

L R 縄文を施した土器小片 2 点、無文のもの 1 点が出土。時期不明。

第34号焼土 (第104図)

調査区東側寄りのVII J P 4 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は100cm×50cmの範囲に不整に分布し、2~3cm堆積を示す。掘り込みは認められない。

遺物の出土は無かった。

第35号焼土 (第104図・第105図No16~20・写真図版47)

調査区東側中央のVII K i 1 グリッドに位置する。V層で検出した。焼土は100cm×60cmの範囲で不整に広がり、中央部で8cmの堆積を示す。100cm×60cm、深さ18cmの掘り込みを有す。

弥生時代の土器と思われる小片 5 点が出土している。17と20には朱彩の痕跡が認められる。

第36号焼土 (第104図・第105図No21~24・写真図版47)

調査区東側中央のVII K i 4 グリッドに位置し、VII K i 住居址に後続する。II層で検出した。焼土は90cm×56cmの範囲で不整に広がり、薄い堆積である。掘り込みは認められない。

土器小片 4 点の出土。すべて地文はL R 原体の縄文である。いずれも弥生中期のものと思われる。

4. ビ ッ ト

第1号ビット (第106図・第109図No 7, 8・写真図版19)

調査区中央北端のVII I d 3 グリッドに位置する。II層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。160cm×114cm、深さ13cmの不整形である。埋土は、2層から成る自然堆積で、何れも粉状バミスが認められる。1層には、炭化粒子も少量認められる。

埋土中より弥生時代の土器片 2 点が出上している。7はL R 2段単節の原体による横走縄文、8は沈線による文様が入る。

第2号ピット (第106図・写真版19)

調査区西側中央のVII j 2グリッドに位置する。II層で検出した。140cm×120cm、深さ34cmの不整形である。埋土には、5層から成る人為的堆積で、何れも炭化粒子・焼土がブロック状に認められる。

遺物の出土は無かった。

第3号ピット (第106図)

調査区東側北寄りのVII J 8 4グリッドに位置する。II層にて、I層粉状バミスの不整な分布域として検出した。径146cm×135cm、深さ39cmの円形である。埋土は、大略2層に区分される。何れも炭化粒子・焼土が認められ、1層に濃密である。1層には、炭化材も多量に認められる。人為的堆積と考えられる。但し、1層上半部に見られる粉状バミスは自然的営力によるものとする。

遺物の出土は無かった。

第4号ピット (第106図・第107図No.1・第109図No.9~18・写真版48)

調査区東側北寄りのVII J h 3グリッドに位置する。II層にて、炭化粒子の不整な分布域として検出した。径180cm×116cm、深さ51cmの長円形である。埋土は、大略3層に区分される。何れも炭化粒子が認められ、1層に濃密である。1層には、微量ながら粉状バミスが認められる。全体に炭化粒子が小ブロック状に含有されることなどから人為的堆積と考えられる。

出土遺物

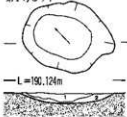
縄文後期前葉の深鉢1点(1)、弥生時代中期前葉と思われる土器片10点を掲載。他に弥生時代と思われる土器片数点の出土を見たが、小片のため時期不詳のものも多い。

1は、推定4ヶの低い山形突起を持つ口縁で、文様は沈線・竹管・ボタン状貼付で成る。体部地文は、LR 2段単節の原体による斜行縄文。口径は推定36cmと大きい。9~17は、壺・鉢等の小片であり、縄文の付されているものは、すべてLR原体である。13は底部欠損しているものの、残存片が体部下端までである小品である。18の高坏脚部は、朱彩のあとがみられる。

第5号ピット (第106図・第107図No.2, 3・第109図No.19~22・写真版48)

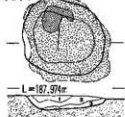
調査区東側北寄りのVII J h 4グリッドに位置する。II層にて、炭化粒子の不整な分布域として検出した。140cm×120cm、深さ20cmの不整形である。埋土は、大略3層に区分される。何れも炭化粒子が認められ、1層に濃密である。1層には、焼土も多量に認められる。焼土・炭化粒子の含有状況などから人為的堆積と考えられる。尚、1層には粉状バミスが認められた。

第1号ピット



- 5YR/7 褐色土 粘性强く柔らかく締まっている。腐植質が少量あり、炭化粒子を少量含む。
- 7.5YR/7 褐色土 多少の粘りあり、炭化粒子を少量含む。赤褐色浮石を少量、褐色パリスを少量含む。

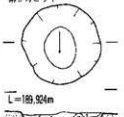
第5号ピット



- 7.5YR/7 褐色土 柔らかく締まっている。腐植質が少量あり、炭化粒子を少量含む。
- 5YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。炭化粒子、褐色浮石、赤褐色浮石を少量含む。

褐色パリスを少量含む。

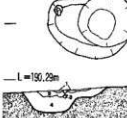
第9号ピット



褐色パリスを少量含む。

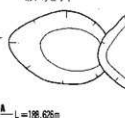
- 4層と同じ
- 4層と同じ
- 10YR/7 褐色土
- 10YR/7 褐色土
- 10YR/7 褐色土

第2号ピット

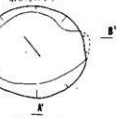


- 7.5YR/7 褐色土 炭化粒子を多量に含む。
- 1層と同じ 炭化粒子を多量に含む。腐植質を多量に含む。
- 5YR/7 赤褐色土
- 7.5YR/7 褐色土 炭化粒子と腐植質の割合が大きくなる。

第7号ピット

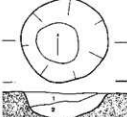


第6号ピット



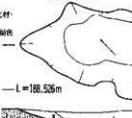
- 7.5YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。赤褐色パリスを少量、腐植質を少量含む。
- 7.5YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。腐植質を少量含む。
- 7.5YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。腐植質と地山の腐植質を少量含む。
- 2.5YR/7 赤褐色土 炭化粒子を多量に含む。褐色パリスを少量含む。
- 5YR/7 赤褐色土 腐植質を多量に含む。
- 7.5YR/7 褐色土 腐植質を多量に含む。
- 7.5YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。腐植質を少量含む。
- 7.5YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。腐植質を少量含む。
- 腐植質と地山の腐植質を少量含む。
- 柔らかい。腐植質を少量含む。

第3号ピット



- 7.5YR/7 褐色土 上部部に腐植質パリス、炭化材料、赤褐色土、腐植質を多量に含む。
- 7.5YR/7 褐色土 腐植質を多量に含む。赤褐色浮石を少量含む。

第8号ピット

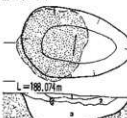


L=188.126m



- 10YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。
- 10YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。褐色パリスを少量含む。腐植質を少量含む。
- 10YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。腐植質を少量含む。
- 10YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。腐植質を少量含む。

第4号ピット



- 10YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。炭化粒子、腐植質、赤褐色パリス、白色炭化物を多量に含む。腐植質を少量含む。
- 10YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。褐色パリス、白色炭化物を多量に含む。炭化粒子を少量含む。
- 10YR/7 褐色土 粘り強いが柔らかい。腐植質を少量含む。褐色パリスを少量含む。

第106号ピット



出土遺物

2・3はともに縄文後期と思われる深鉢であり、2はLRの、3はRLの原体を用いている。19～21は弥生中期の土器片。21は朱が残る。22は時期は不明。LR縄文を転がしている。

第6号ピット (第106図・第110図No29～38・写真図版19)

調査区中央のVII J m 2グリッドに位置する。第7号ピットと重複し、同ピットに後続する。V層で検出した。径182cm×154cm、深さ120cmの長円形である。埋土は、大略6層に区分される。2～6層は自然堆積であるが、1層には多量の焼土粒子が認められ、混土状態であるところから人為的堆積と考えられる。

出土遺物

埋土の2～3層中より小片多数が出土している。ほとんどの土器片は時期を明確にし得ないが、29～34は弥生中期の土器片と思われる。38は壺の体部片と推定され、弥生後期の可能性が大きい。

第7号ピット (第106図・第110図No39, 40)

第6号ピットと重複し、同ピットに先行する。径(170)cm×120cm、深さ40cmの長円形と推される。埋土は、3層から成る自然堆積である。

出土遺物

縄文を施した体部の小片2点のみの出土。ともに原体はLRを用いている。時期不詳。

第8号ピット (第106図・写真図版19)

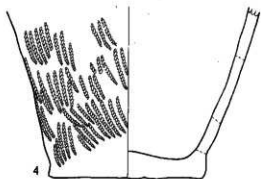
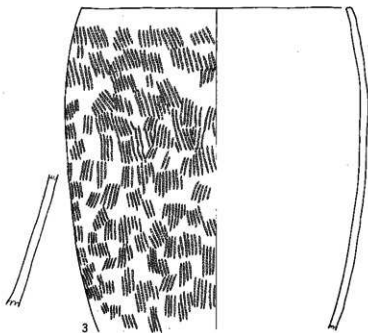
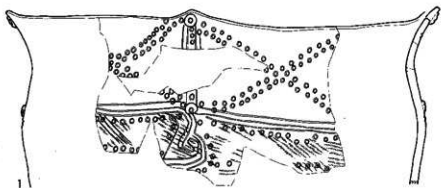
調査区中央VII J n 1グリッドに位置する。II層で検出した。270cm×140cm、深さ32cmの不整形である。埋土は、2層から成る自然堆積である。1層には、粉状バミスが少量認められる。遺物の出土は無かった。

第9号ピット (第106図・第108図No6・写真図版19・48)

調査区東側南寄りのVII J o 4グリッドに位置する。V層で検出した。径130cm×130cm、深さ43cmの円形である。ピットのほぼ中央に底部を欠いた深鉢が倒立した状態で埋設される。埋土は、大略9層に区分される人為的堆積である。最下9層が極めて硬く、叩き締められた状況を示し、丁度その上に土器が配置される。

出土遺物

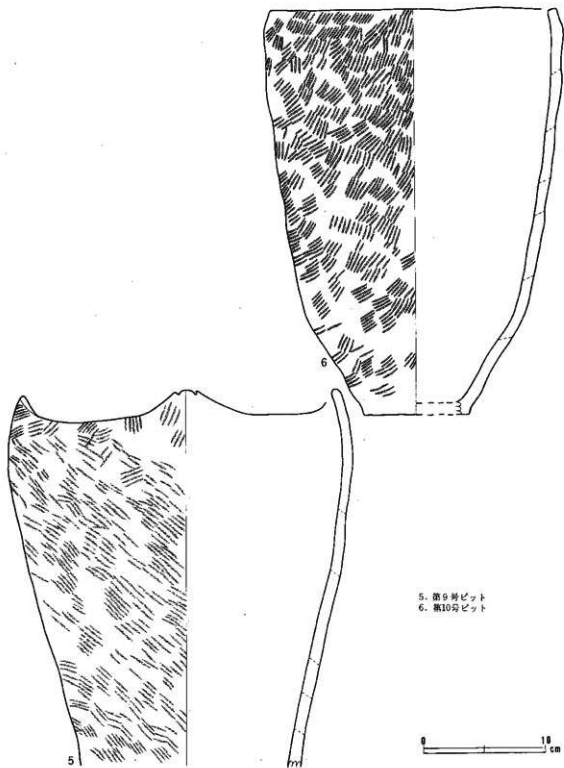
平口縁で器外面全体にLR原体による斜行縄文を施した深鉢が、埋土上位層より出土してい



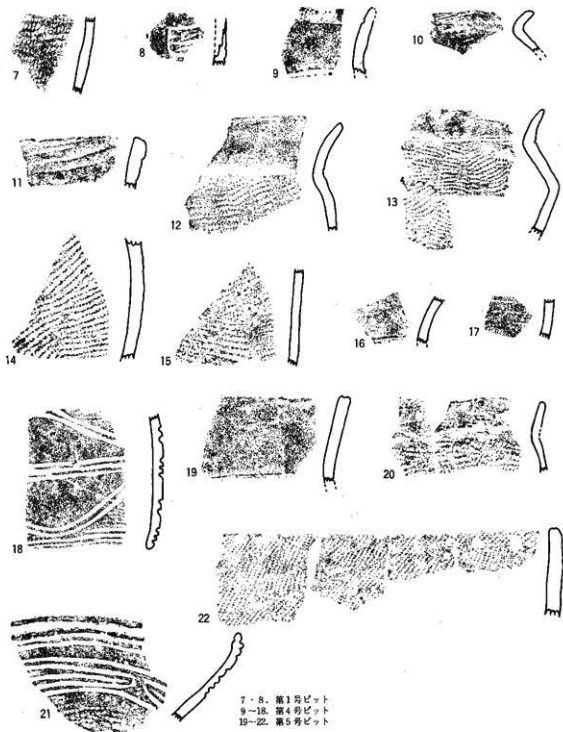
1. 第4号ビット
2-3. 第5号ビット
4. 第1号炉址



第107図 炉址・ビット出土遺物(1)

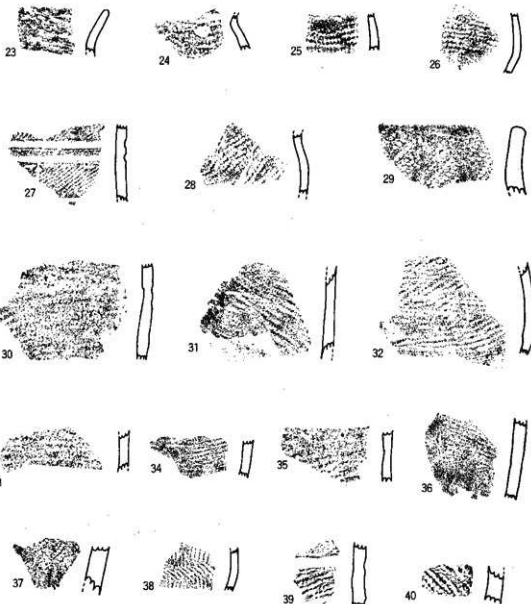


第108図 ピット出土遺物(2)



0 5 cm

第109図 ピット出土物(3)



23-28. 第5号ビット
 29-38. 第6号ビット
 39-40. 第7号ビット

第110図 ビット出土遺物(4)

る。推定口径28cm、器高35cm。時期は不詳である。

第10号ピット (第106図・第108図No5・写真図版19・48)

調査区中央南端のⅦJ a 1グリッドに位置する。V層で検出した。190cm×190cm、深さ38cmの隅丸三角形である。埋土は、大略4層に区分され、焼土・炭化粒子が小ブロック状に認められ、混土状況を呈するところから人為的堆積と考えられる。

出土遺物

埋土中位層より、倒立した形で深鉢が出土している。口縁に4ヶの山形突起を持ち、R1の燃糸を斜位に施している。底部は欠損して不明。口径は26cm、最大胴径28.5cmを測る。縄文後期の土器と思われる。

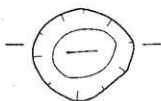
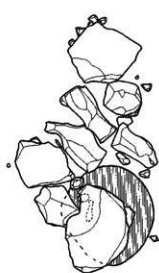
5. 配石遺構

ⅦJ / 配石遺構 (第111図・写真図版18)

調査区東側中央に位置する。II層で検出した。偏平な大礫が東西1.5m×南北2.8mの範囲に8ヶ密接に配される。礫は、小さいものでも、大人が辛うじて持ち上げることが出来るほどの重量である。配置の形状には、密接に配される以外、特に有意性を見出し難い。南端の礫直下より、凹み石・石刀が出土し、径110cm×100cm、深さ15cmの円形の掘り込みが認められる。

出土遺物 (第111図1・2、写真図版49)

礫直下より、上述の石器2点が出土している。凹み石(1)は、輝石安山岩を用いており、図の下端部に敲打痕と、すり石としての磨滅痕がある。上端部は特に使用痕はみられない。側面は四面あるが、うち1面はすり石としての使用痕が顕著であり、他の2面に1ヶずつの凹みがあり、残りの1面は広い不整の凹みがみられ、敲打痕と思われる。石刀(2)は、石質凝灰岩を用いている。全長23.8cmだが、先端から12cmほどまでの片側縁辺を刃部としている。鋭利ではない。続く8cmほどを刃まちとし、残りを軽くくびれをつけて柄としている。自然礫の形態をそのまま使用したらしく、全面でいねいに磨いているが、形はあまり整っていない。縄文晩期のものである可能性が大きい。



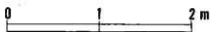
Ⅶ J 配石

L=187.47m

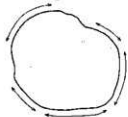
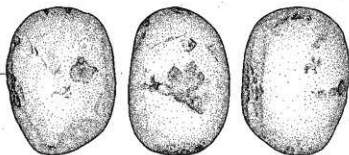


10YR 黄褐色土
10YR 6 暗褐色土
10YR 4 黄褐色土

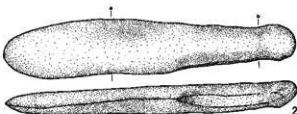
配石
極めて柔らかい。
褐色パラス層を含む。



第111図(1) Ⅶ J 配石遺構



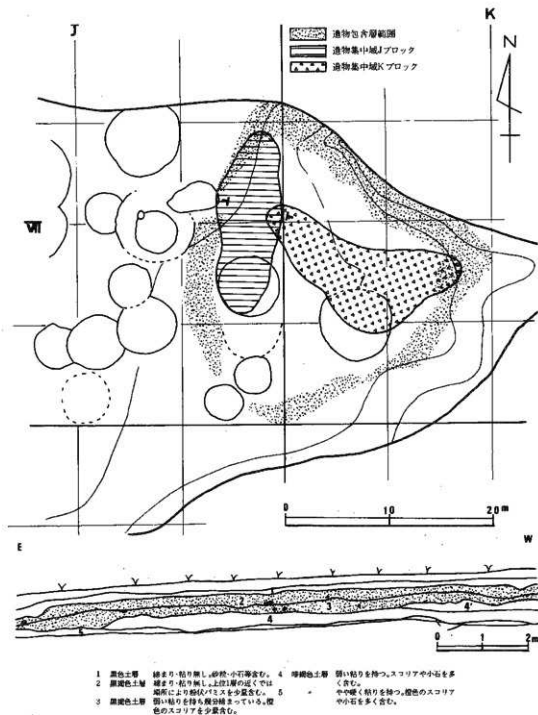
1



2



第111図(2) 出土遺物



第112図 遺物包含層位置と層序

6. 遺物包含層

位置と層序 (第112図)

遺物包含層は、3区東端、主に北半に形成されている。範囲はほぼ30m四方に広がるが、その中でも特に遺物が集中する地点が2ヶ所あり、設定した大グリッドのネームから、Jブロック・Kブロックと呼んだ。Jブロック(南北15m・東西6m)は、Jh4~Jl2の小グリッドを、Kブロック(南北8m・東西18m)はKe~Kiの小グリッドを中心とした範囲である。JブロックからKブロックにかけて残したベルトセクションからは、遺物包含層であるセクション2~3層は3区基本層序の第II層に相当することがわかる。出土遺物の60%以上は、基本層序第II層下半の、ベルトセクション3層にあたる層から出土している。

Jブロック出土遺物

コンテナ9箱分の遺物が出土しているが、大半は土器片であり、他には石器が少数出土している。出土土器の8割を縄文後期前半の土器、他の2割をそれ以降の土器が占めている。層位による時期差は認め難く、表土~1層にて晩期遺物の占める比率が多少上がる程度である。

(1) 土器

IV群2類 (第113図1・2・第114図13~18・第115図20~26, 写真図版50・51)

突起部外面に把手・内面に沈線による渦巻文をもつもの(13)、平行沈線による三角形を基調とした文様をもつもの(14・16・19)、円・楕円・長円を基調とした沈線文を有するもの(1・15・20)、沈線による矩形文に刺突をもつもの(18)、沈線による変形の波状文を有するもの(2・20~23)、横位・斜位の平行沈線文に、列点文を有するもの(24・26)などがある。

IV群3類a (第113図3・5, 写真図版50)

体部上半に斜位を基調とする平行沈線による文様を描く。3は壺形・5は鉢形体部である。

IV群3類b (第113図4・6・7第115図27~30, 写真図版50・51)

平行沈線による方形・渦巻などの文様を描く。4は大型の壺であり、口縁突起は1個のみである。6・7は頸部のくびれる鉢形で、どちらも4突起を持つものである。以上2類としたものは、磨り消しの多用がめだつ。

IV群4類 (第113図8・第116図32~37・写真図版50・51)

平行沈線と磨消縄文・円文・入組文などを用いるもの。8は大小2ヶ1対の突起を4対持つ鉢形土器である。大突起には2本の刻目、小突起には1ヶの刺突が真上から入る。32は同様の小突起と思われ、やはり刺突が入る。又、文様に磨り消しの後刺突列を施す。34は小さな貼瘤とシュリツが入る。35は突起が肥厚している。

IV群6類 (第114図10~12・第115図31・第116図38・40・写真図版50・51)

文様を持たない土器群。10は複合口縁、11はごくゆるい波状の口縁、38・40は刻みのある山形突起を持つ。いずれも口縁~体部上半にかけて、外面に煤の付着がみられる。12は小形の土器であるが、これも外面に煤を付着させている。

V群1類 (第113図9, 写真図版50)

三叉文を持つ碗形土器。ゆるい波状口縁を呈す。

V群2類 (第116図39, 写真図版51)

羊歯状文を持つ鉢形土器。口径22cmほどで、この種としては小形だが、やはり外面には煤が付着する。胎土は粗い。

(2) 土製品 (第159図5・9・写真図版75) 2点のみの出土。5は耳栓であり丁寧に磨いて、内外ともに朱彩が施されている。9は円盤状土製品で、周辺を打ち欠いて製作してあるが、多少磨滅している。

(3) 石器 (第117・118図・写真図版76)

前述のように、土器の多量さに比し、石器の出土量は、はるかに少ない。剥片石器9点、磨製石器3点、磨石類6点を数えるのみである。

石鏃(1・2)

無茎鏃・有茎鏃各1点が出土している。1は無茎の凹基形をしており、先端がわずかに破損している。玉髓を用い、両面とも全面加工している。両縁辺基底方向からの調整である。2は有茎鏃。基部末端が欠損している。両面に主剥離面を残し、基部及び両縁辺部を主として基部方向から調整している。1・2ともアスファルト等の付着は見られない。2は表土中からの出土であり、遺物包含層2~3層の出土ではない。

石錐（3）

錐部は断面三角形を示すが、中央付近で9mm前後と巾が広い。つまみ部は厚みがあるが、形としては多少不定である。両側縁の調整はつまみ部から錐先端へと進むが、両側縁とも片面においては上端から始まっており、つまみ上半が欠損している可能性もある。錐先端は使用の為かわずかに破損しているが、顕著な磨減はみられない。

石匙（4・5）

縦形のもの2点が出土している。1点(4)はつまみ部が欠損しているもので、稜線に近い側縁辺と先端辺に表面からの片側調整により刃部を形成しており、残る一边はつまみ部に近い上半のみ、裏面から調整剝離を加え刃部を作る。同縁下部の鋸歯状は調整前に加工されており、トリミングと思われる。他の1点(5)は、稜線に近い側縁が、つまみ方向からの両面加工、他の側縁は、同じくつまみ方向から調整を始めているが、片側加工である。

搔器・削器の類（6～9）

6は全局に両面加工の刃部を持ち、7は三角形の二辺に片面加工により刃部を形成している。8は同様に二辺を両面から加工、9は一部大きく破損しているが、先端部は片面から、上半は両面からの加工による刃部の形成となっている。いずれも小品である。

石斧（10～12）

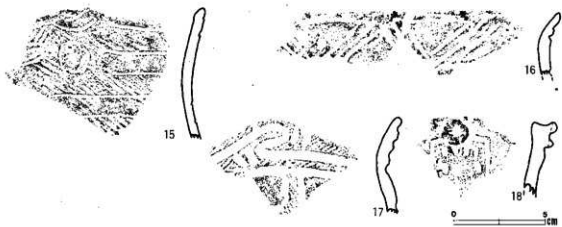
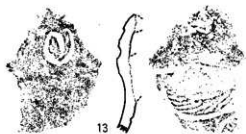
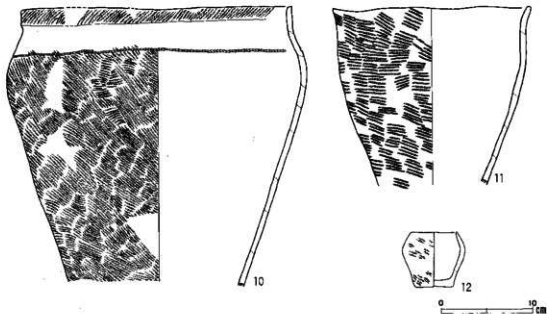
11は定角的なものであり、残存長14cm以上と大型だが、刃部が破損している。10は全体に断面が丸くなるもので、基部も丸い。刃部は全辺磨耗しており、中央に剝離もみられる。8.6cmと比較的小型である。12は基部が折損して不明だが、刃部付近の断面は鋭角張っている。刃部も一部欠損。残った刃部も磨耗している。

磨石・石皿（13～18）

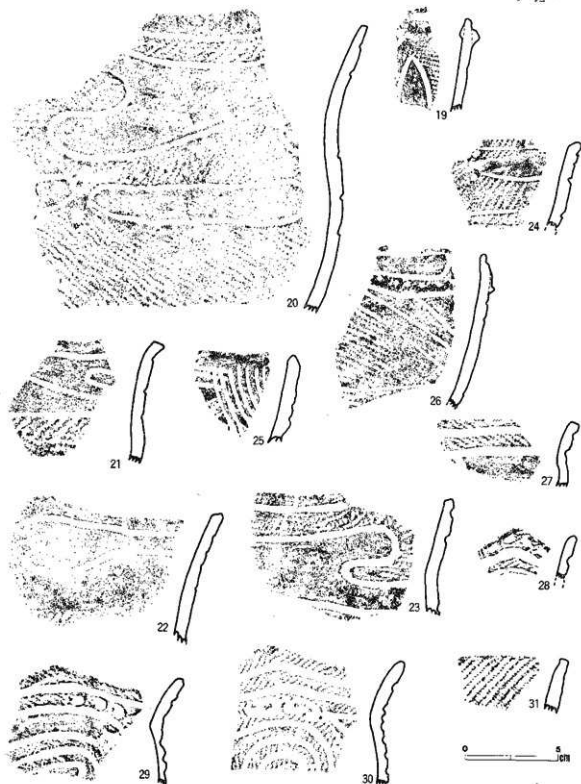
13は球状を呈し、ほぼ全面を磨石として使用している。14は楕円形で多少偏平であり、表・裏面のみで使用で側面は使用していない。15は表・裏面および側面の一部、16は全面を使用している。17は三角おむすびの形をしており、各面がそれぞれ使用され磨減している。18は石皿。自然石をたくみに利用したもので、破損はほとんどない。中央がすり減って丸くくぼんでいる。17と18は重なりあって出土した。



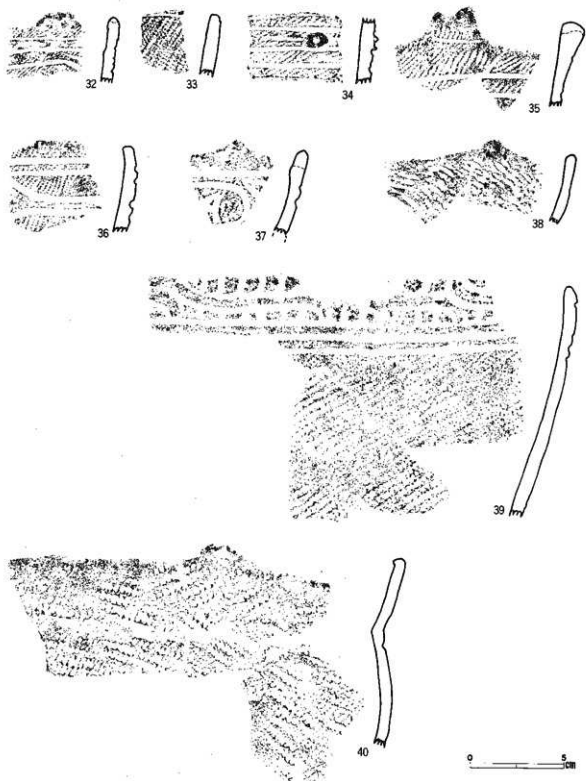
第113図 遺物包含層Jブロック出土遺物(1)土器



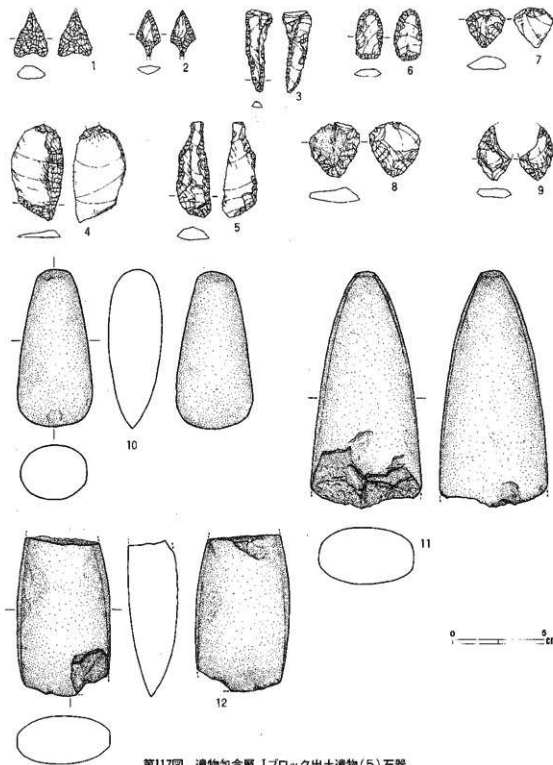
第114図 遺物包含層 Jブロック出土遺物(2)土器



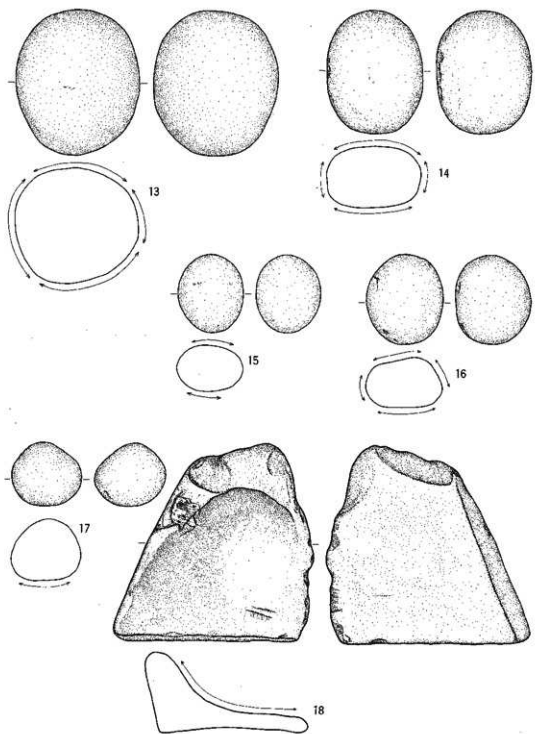
第115図 遺物包含層 Jブロック出土遺物(3)土器



第116図 遺物包含層Jブロック出土遺物(4)土器



第117図 遺物包含層 Jブロック出土遺物(5)石器



第118図 遺物包含層Jブロック出土遺物(6)石器



Kブロック出土遺物

コンテナ14箱分の遺物が出土しているが、Jブロックと同様やはり土器片がほとんどであり石器は少ない。出土土器の70%以上を、縄文晩期前葉を主とした晩期前半のものが占め、残りはほとんど縄文後期の土器である。層位による時期差はJブロック同様認め難く、2層・3層とも各時期の遺物が大差ない比率で混在する。図に掲載はしたものの、晩期後半以降の遺物は表土および1層より少数出土しているものであり、本来遺物包含層出土遺物とは画し、各時期遺物の分布を考慮に入れるべきものが多い。

(1) 土器

IV群2類 (第119図1～5・第122～125図46～78・写真図版52・58・59)

隆帯・沈線・平行沈線による文様を有するもの。刺突を持つ隆帯により、平行線・渦巻文を描くもの(46)、刻みをとまなう隆帯をめぐらすもの(47～49・59・60)、沈線をめぐらし、刺突文をもつもの(50)、沈線にて方形もしくはそれに近い区画文を有するもの(51～55)、三角形もしくは、菱形を基調とした沈線文をもつもの(58～68)、波状もしくは渦巻を基調とした沈線文をもつもの(1・4・5・69～75)、などがある。

IV群3類 (第125図79～81・写真図版56)

平行沈線を多用し、一部に磨消縄文をもつもの。但し縄文は、沈線に沿って転がされている。79はLR2段単節の縄文原体、他はRLのそれを用いている。

IV群4類 (第126図82～85・87・写真図版56・57)

平行沈線と磨消縄文、円文、入組文などを有するもの。文様の下描きに深い沈線を引き、縄文施文および磨消しによりつぶれた沈線を最後にひきなおす手法(82～84)が目立つ。85・87も、やはり沈線に沿って縄文を転がしている。87はLR、他は全てRLの単節である。

IV群5類 (第120図7～10・第126図86・88～94・写真図版52・57)

縄文後期終末から晩期初頭の一括した。全面に磨きを施す注口土器・台付鉢(7・8)と、一定方向への縄文施文の後の磨り消しとがある。後者には、沈線と磨消帯がめぐるだけのもの(9)、入組文をもつもの(86・88・89)、口縁部に平行沈線による連弧文を描くもの(10・89～94)がある。

V群1類 (第120図～121図11～19・第127～130図95～130・写真図版52・53・59)

三叉文を持つグループ

壺形・口縁の広い鉢形・口縁の内湾する鉢形・碗形・台付鉢の4器種5形態のみであるが、口縁の内湾する鉢形土器にはかなり大形のものもある。

壺形a：頸部があまりすばまらずに口が開く。口縁突起部に三叉文を有するが、体部には、IV群3類aにある、文様帯に沿う原体回転の縄文磨り消しを持つ。(95・96)

壺形b：1点のみ、体部片の出土(130)。胴中央を沈線で上下に二分し、上に磨り消しをともなう唐草状の文様を持つもの。

碗形：これも1点のみ出土している(129)。推定口径17cmほどの口縁部に、小さな山形突起が四個のる。三叉文および入組文の閉じる部分をていねいに磨り消している。

鉢形a：口の開くもの(11・12・124・126～128)、刻目帯を口縁部にもち、頸部にシュリツが入る(126・127)。又、刻目帯の上にシュリツが入り、体部に文様帯を持つものもある。(128)。127はシュリツは持たず、頸部下に刻目帯を持つ。11・12は台付鉢の可能性もある。

鉢形b：(14～17・97～125)口縁の内湾する鉢形土器はKブロック出土土器の大半を占めるが、他器種に比しより大型のものが多くなる。復元し得たものは少ないが、口径をほぼ正確に推定し得る口縁部片は24個体であり、それによれば口径は28cmを平均値として、17～43cmまで、ほぼ正規に分布する。文様帯の幅は一定の制限があり、極端に大型のものがある程度幅広(50mm以上)になる他は、46～48mmと39～42mmのグループに二分されるが、口径や文様のちがいはよるものとは考えられず、他に有意の差も見出し得ない。この器種は一般に外面に煤の付着するものが多く、たまたま残存片に残っていたものだけを数えても、全体の46%と高い比率を示す。煤の付着しているものとそうでないものでは、口径、文様その他の差は見出し得なかった。

台付鉢：台付であろうと思われる浅鉢1点(12)、台部1点(13)が出土している。12は体部にも沈線と磨り消しによる文様が付されている。

V群2類 (第121図21～31・第131～133図131～159・写真図版53・59)

羊歯状文を持つグループ

このグループには小形の台付鉢・浅鉢・壺・大形、小形の鉢などがある。

壺形土器：(31)底部付近に最大径を持つ変形壺が1点出土している。上に行くに従い頸部まで単調にすばまり、その上で広がる形を見せるが口縁部は欠失している。

浅鉢：(27)これも1点のみ出土をみた。底部から内湾気味に立ち上がっており、碗ともとれる。体部は縄文のみである。

台付鉢：(21～26・28～30)出土点数は多い。口縁部が大きく開く浅鉢形のもの(28)、口縁

部が小さく屈曲するもの(21・24~26)、単調に内湾するもの(22・23)の3形態がある。文様では、明確に浮彫風のものには少なく(23)、ほとんどが沈線と刻みを主体としたものである。

鉢形土器：(21~27・131~159)多くの破片が出土しているが、やはりこれも復元し得たものは少ない。特に口径が25cmを越えると思われる大型のものは、ほとんど復元不能であり、拓影図のみの掲載である。19cm以下の小型のものも、底部まで復元し得たものは無い。

a. 小型鉢形土器(21~26・150・154・156・159)

口縁部が軽く内湾しながら直立しているものと、口縁部文様帯で軽くくびれるものとの2器形に大別できる。口縁部が大きく内湾する器形はない。文様は大型深鉢に比し、バラエティーにとんでいるが、いずれも基本的に平行沈線と刻みが主体となっており浮彫風のものには少ない。口縁部の形態は、小波状口縁のもの(21・25・26)と2個1対の突起を多く持つもの(22~24)と平口縁のもの(150・154)とがある。他に装飾としては、文様帯の下部の沈線上に、21と24が突起を有する。21は縦1対、24は横1対の突起である。完形品が多く、観察が容易であるが、煤の付着がみられるものは11個体中3列と、大型に比し少ない。

b. 大型鉢形土器(131~158)

小片多数の出土をみたが、復元し得たものは無く、口縁部片を主に掲載した。大きさは43cmという特例(116)を除けば、他は25~37cmの間にまんべんなくちらばり、前述1類の同種鉢とは多少異なった様相を呈している。平均値は31.1cmである。口縁部形態は文様帯中央付近で外に屈曲する例が2点(132・158)あるが、他は全て微かに内湾さみにほぼ直立している。すべて口縁部にのみ文様が施文されていると思われるが、その幅は、口径が小さい2例(150・154)および極端に幅の狭い1例(157)を除けば、全て3.9~5.7cmの範囲にあり、平均値は4.3cmである。口唇部は刻みによる小波状口縁がほとんどだが、5例のみ平口縁が存在する。うち3例は上記の幅の狭い3点であり、少数ではあるが口縁部文様と口唇部形態との規則性も考えられる。文様はほとんどが1段の羊歯状文であり、その沈線が口唇に伸びて刻みとつながるものが多い。地文はRL・LRともにあるが、多少LRの方が点数が多いようである。胎土は砂粒を多く含むが一般に焼成がよくしっかりしている。

V群3類(第121図34~39・第133・134図160~175・写真図版54・59)

鉢形と壺形が出土している。鉢形は2類の分類における台付鉢に当たるものがほとんどと思われる。

壺形土器：(174・175)2点とも口縁部・底部が欠損しており、全体形は不明である。ともに頸部に隆帯を貼付けその下に三叉状を主体とした沈線と磨り消しによる浮彫風の文

様が施される。地文は細かいRLの斜行縄文。176は体部下半から沈線で区切られた無文帯となっている。胎土良・焼成良。

鉢形土器：(34～39・160～174)

(口縁部形態) 内湾してきたものが、上端に近くなってから軽く外に開くものが多い。(160・161・169～173)。165は屈曲が小さくなる。内湾するものは、38・39・162・164・168・170があるが、38・39・170は内面の突出する小屈曲を持つ。直立するものは36・163・167があり、浅鉢である可能性が大きい。160には突起が付いている。

(文様) 口唇部の刻み、口縁部沈線文、体部文様とがある。口唇部刻みはいずれも口唇直下の沈線文につながりはするが、1類・2類のように、全く口縁部文様と一体となっているものはみられない。但し、唯一36の浅鉢のみ、口唇に刻みを有しない。沈線で区切った下に、羊歯状の沈線と刻み、もしくは連続する刻み、もしくは平行沈線のみ口縁部文様を形成する。体部は縄文のみのもものと、磨り消しの文様を施すもの(34～37・172・173)とがある。地文は、LR・RLとも使用されている。

(全体形) 底片が37の1点しか存在しないため全体形は不明であるが、口径が10～21cmと小さいものが多く、台付となるものが多いと思われる。但し、36は、ほぼ丸底風の浅鉢と推定し得る。

V群4類 (第121図41・42・写真図版54)

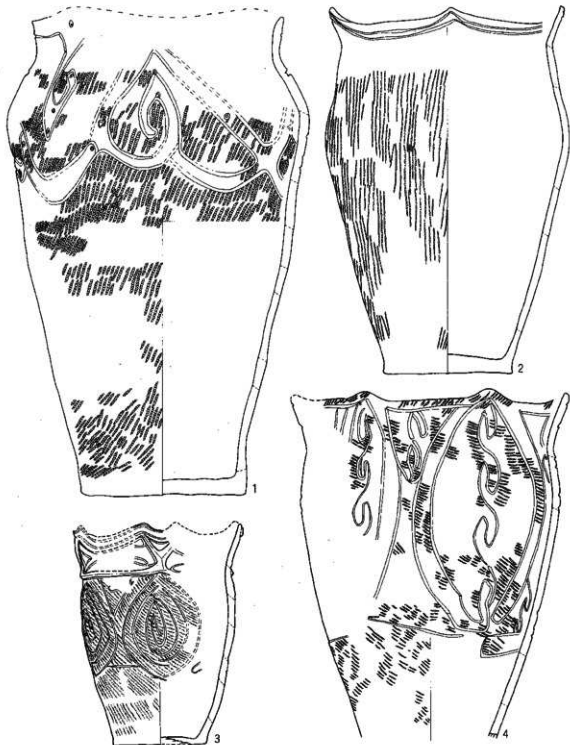
内外面を丁寧に磨いた浅鉢形の上器である。42は口縁部に2本の沈線をめぐらし、41はまったくの無文である。どちらも縄文晩期前半のある時期のものと思われる。

V群5類 (第134図177～179・写真図版61)

ほぼ地文のみの、あまり装飾を持たない土器である。177は小波状口縁の鉢形土器、178は口縁部が屈曲して外に開く鉢形土器である。縄文後期後葉から晩期前半にかけてのものであろう。179はLR原体を用いた結束の無い羽状縄文を施す鉢形土器であり、期的には断定しかねるが、施文はキッチリとしている。

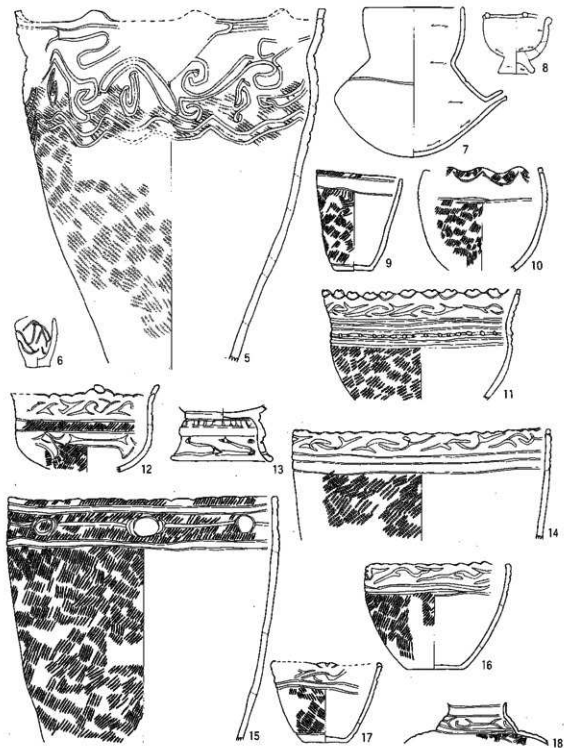
V群6類 (第134図179～181・写真図版61)

179は壺の、180・181は鉢の口縁部であるが、179は晩期後葉前半、他は同後半のものと思われる。



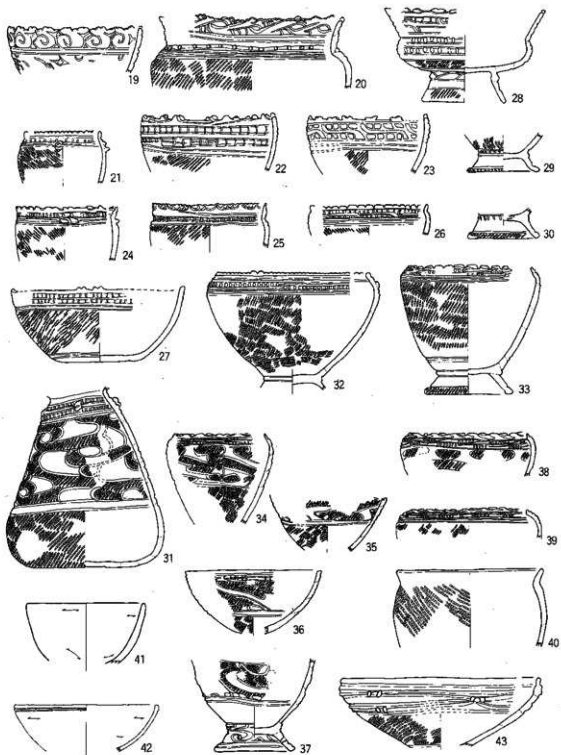
第119図 遺物包含層Kブロック出土遺物(1)土器

0 10cm



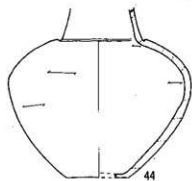
第120図 遺物包含層K ブロック出土遺物(2)土器

0 10 cm

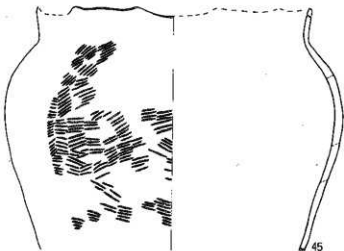


第121図 遺物包含層Kブロック出土遺物(3)土器





44



45



46



47



48



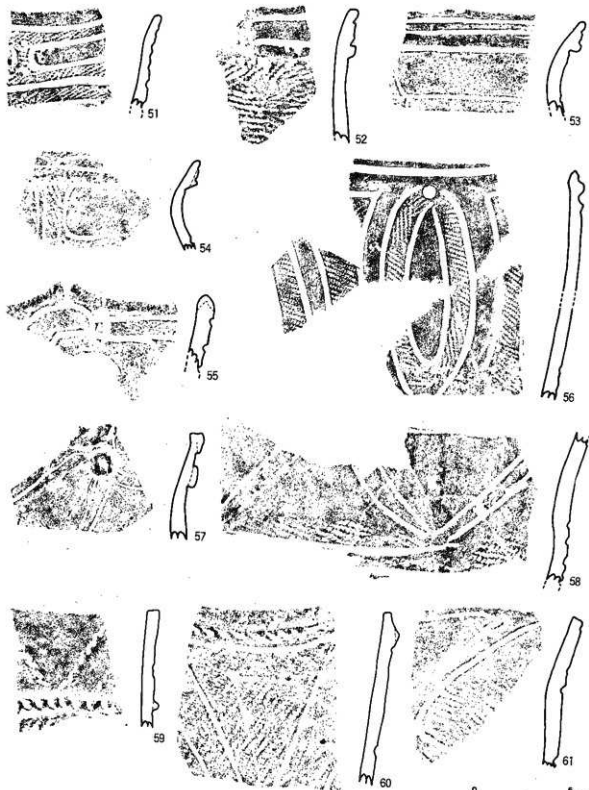
49



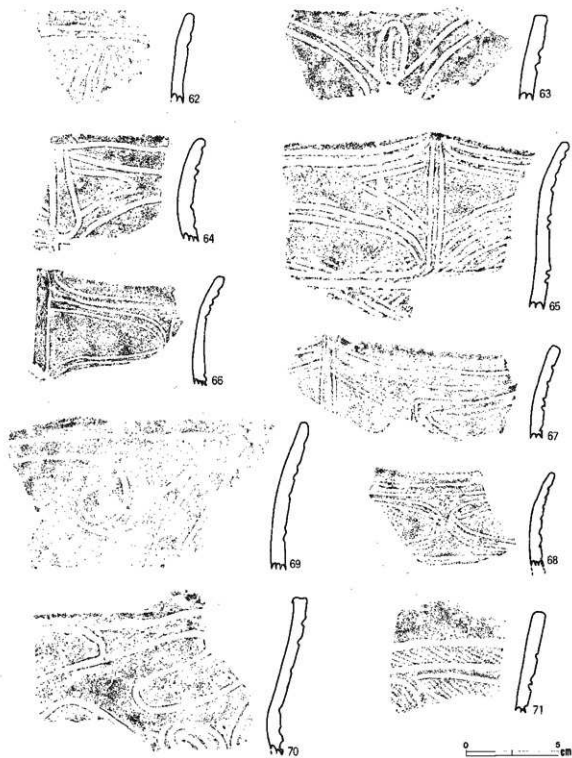
50



第122図 遺物包含層Kブロック出土遺物(4)土器



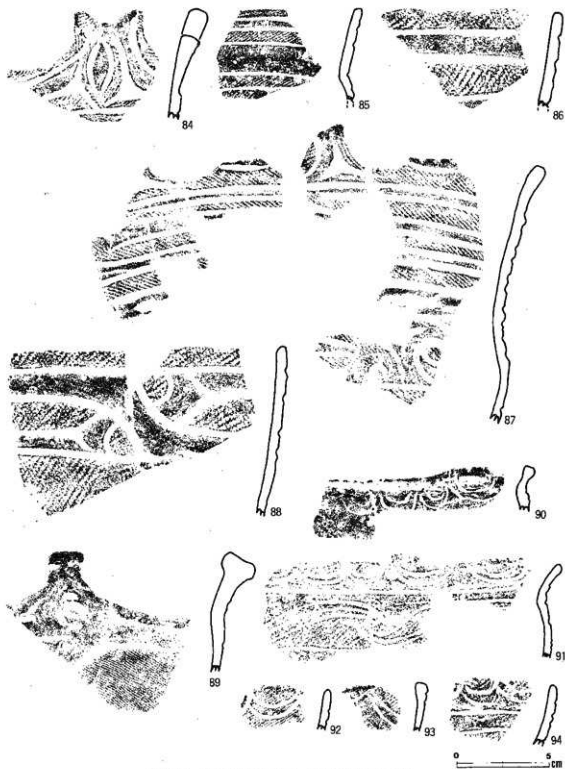
第123図 遺物包含層Kブロック出土遺物(5)土器



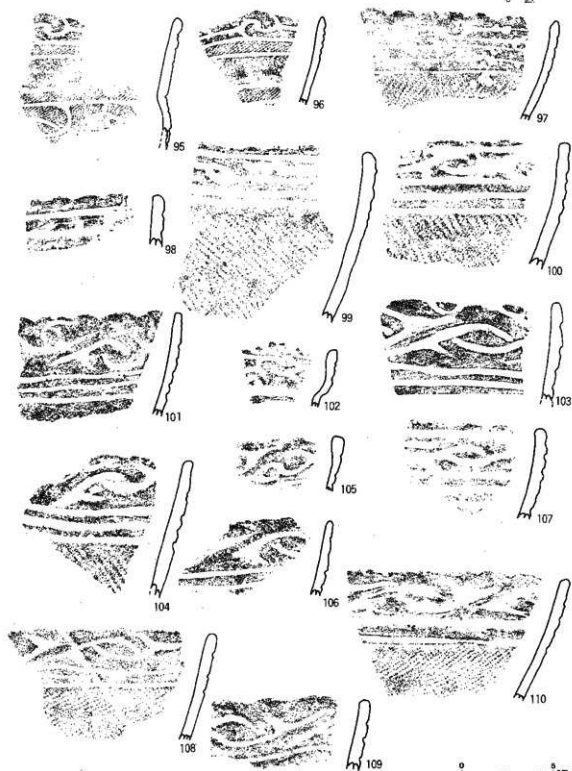
第124図 遺物包含層Kブロック出土遺物(6)土器



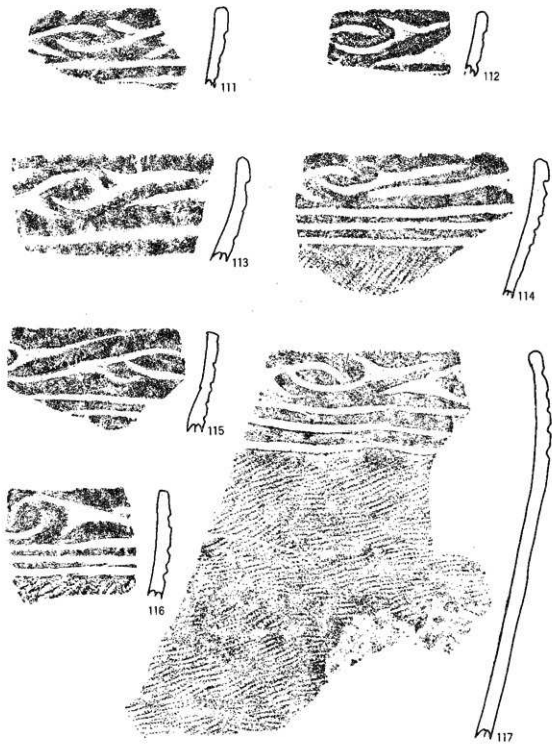
第125図 遺物包含層K ブロック出土遺物(7)土器



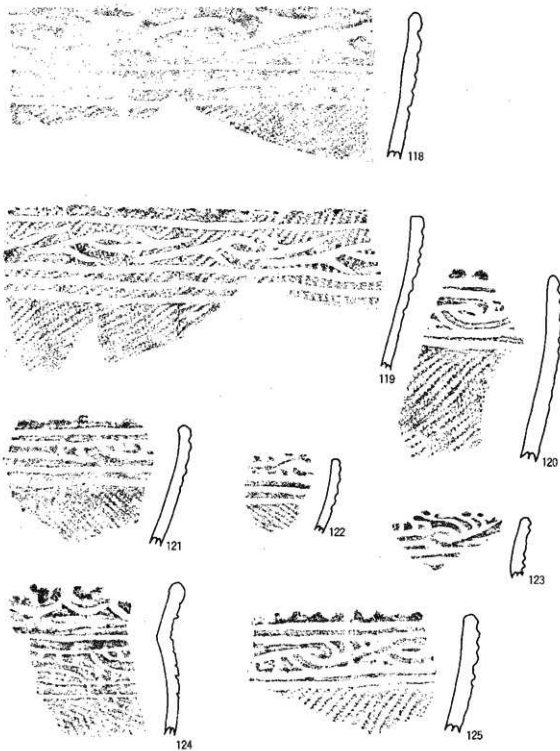
第126図 遺物包含層Kブロック出土遺物(8)土器



第127図 遺物包含層Kブロック出土遺物(9)土器

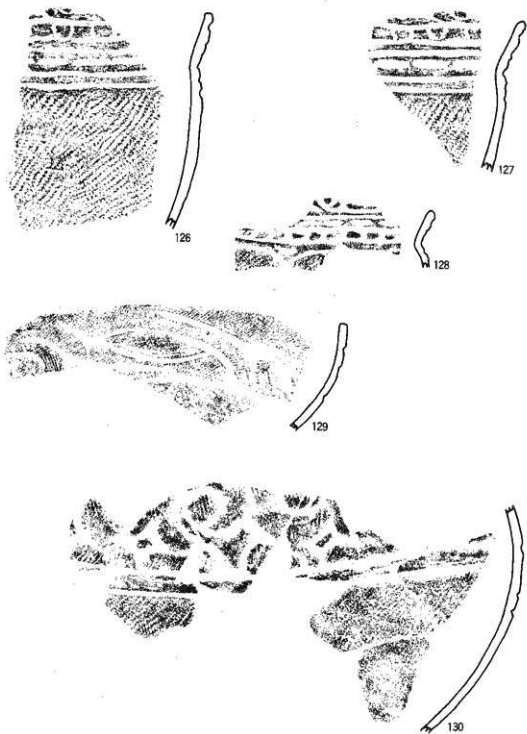


第128図 遺物包含層K ブロック出土遺物(10)土器



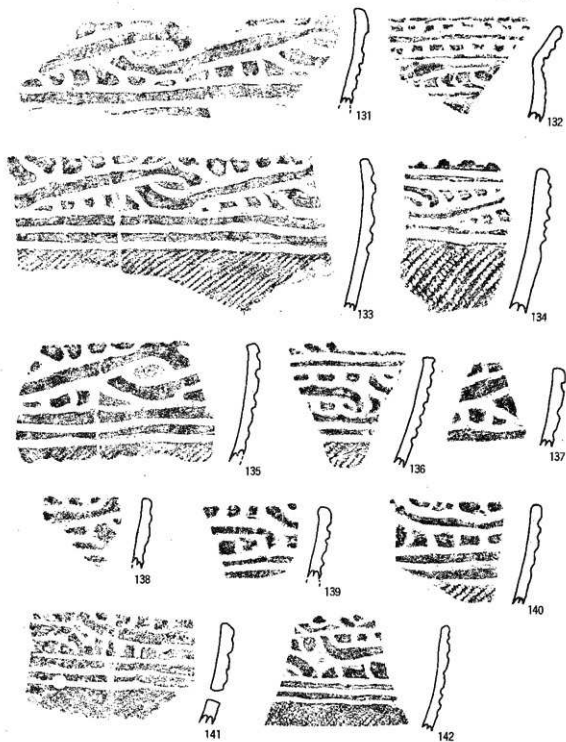
第129回 遺物包含層Kブロック出土遺物(11)土器

0 5 cm



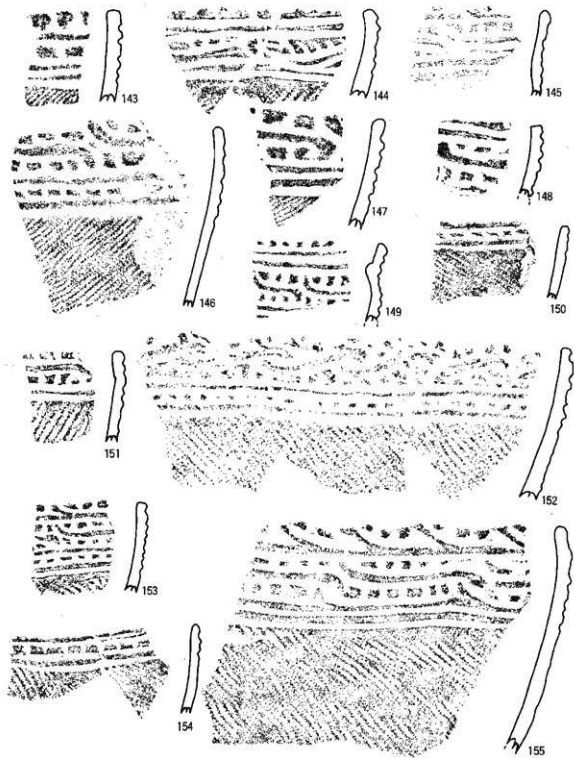
第130図 遺物包含層K ブロック出土遺物(12)土器





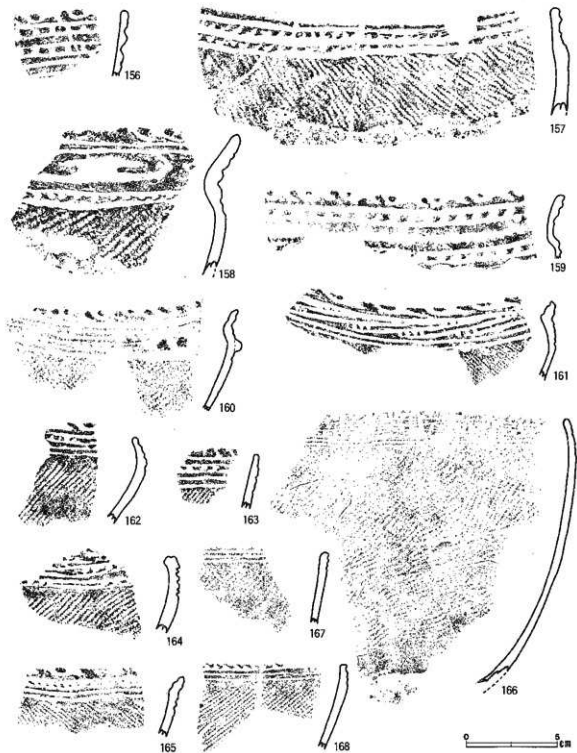
第131図 遺物包含層Kブロック出土遺物(13)土器

0 5 cm

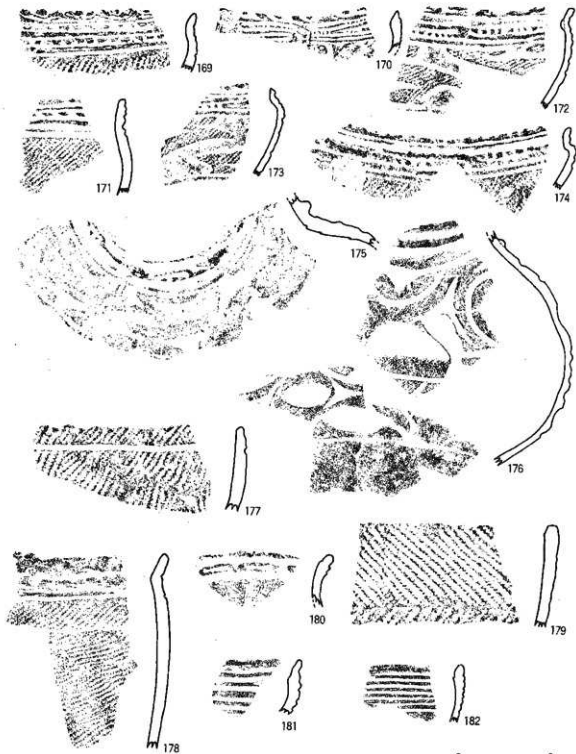


第132図 遺物包含層Kブロック出土遺物(14)土器

0 5 cm

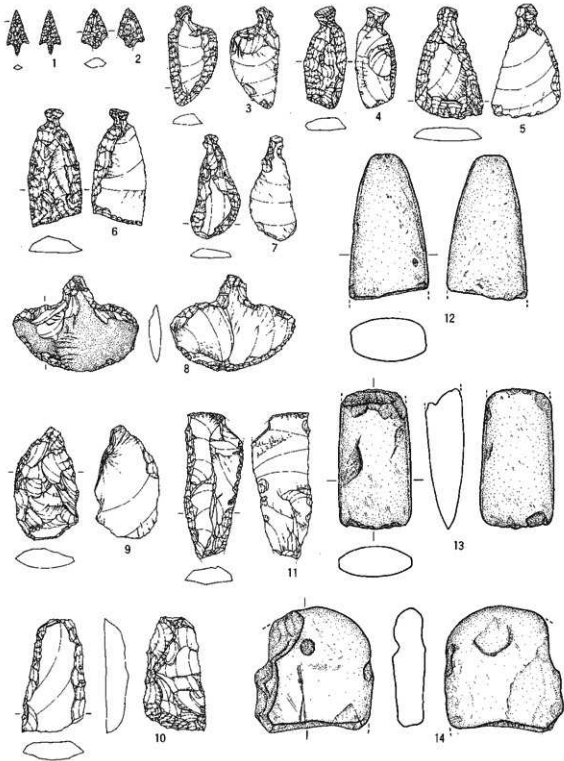


第133図 遺物包含層Kブロック出土遺物(15)土器



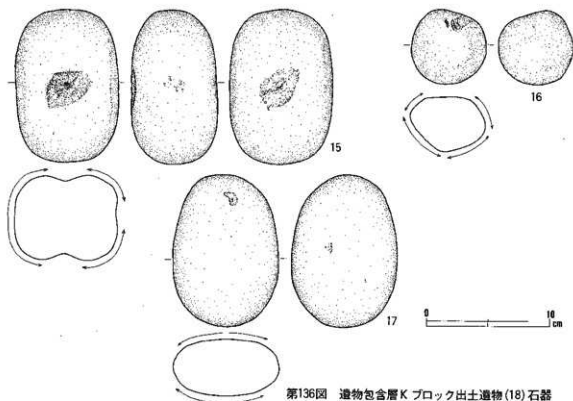
第134図 遺物包含層Kブロック出土遺物(16)土器

0 5 cm



第135図 遺物包含層Kブロック出土遺物(17)石器

0 5 cm



第136図 遺物包含層Kブロック出土遺物(18)石器

(2) 土製品

土偶 (第159図1～4・写真図版75)

2個体分の出土と思われる。1～3は同一個体の脚と胴と思われる中空土偶の破片である。足指を表現する四つの刻みが認められ、その他には沈線と刺突の文様が認められる。4は沈線と隆帯の施文を持つものだが、頭部・両手・右脚・左脚先端・腰部隆帯の一部が欠損している。

円盤状土製品 (第159図10～18・写真図版75)

Kブロックからは9点の出土をみた。14が表土、16がI層からの出土であり、他はすべてII層からの出土である。大きさは4.9cmから2cmまで各大きさがあり、周辺を打ち欠いたのみの製作と思われる。12のみは周囲がまんべんなく磨滅しているが、製作の際の磨滅か使用の際のそれかは不明である。

(3) 石器 (第135図・136図1～17・写真図版76・77)

Jブロック同様、出土点数は少ないが、多少Jブロックの石器群とは異なった様相を示す。

石鏃 (1・2)

有茎の小型のもの2点が出土している。1は先端方向から調整しており、両面全域を加工している。2は茎および基部片側末端が破損しており、本来は左右対称形であったと思われる。1とは逆に基部方向から調整しており、両面全周にわたっている。

石匙 (3~8)

縦形4・横形1が出土している。

a. 縦形石匙(3~7): 3は、つまみ部および先端一部を除き片面からの調整により刃部を形成している。湾曲を持つ図の右側縁はつまみ方向から先端に向けて順序に調整しているが、直線的な左側縁は任意であり順が読みとれない。4は稜縁に近い右側縁が片面、左側縁および末端縁は両面からの調整となっている。5は左側縁のみ両面から、他の2辺は片側からの調整である。図の左下隅、末端刃部左半分に明瞭な磨耗が認められる。横形石匙も含め、磨耗が明確に観察できたのは、この1点のみである。6は左側縁のみ片面、他は両面からの調整であり、裏面の調整は先端部からつまみ方向へ進められている。7の刃部は全周片面調整である。

b. 横形石匙(8): 横形の石匙は図の8の1点のみであり、大きく湾曲した刃部は、主に片面加工であり、図の左から右へと調整が進められている。

掻器 (9~11)

9は図の右側縁のみ片面加工により刃部を形成する。先端は鋭利であるが、右側縁に刃部形成は認められない。10は定形的に石筥状を呈しているが、特異な調整を持つ。全体整形の後、まず両側縁に図で表面とした主剝離面からの片面加工により刃部を形成する。方向は、図の上端から下へ向かっての順序である。次に下端縁には、裏面からの片面加工によって刃部を形成している。これと類似の遺物は、本調査区のVIIa 竪穴住居址およびVIIj 竪穴住居址より各1点出土している。11は両側縁に刃部を持つものである。図の上端は表皮を残し、下端は破損している。両側縁とも稜縁を持つ面からの片面加工であり、図の左側縁は上端から下端への順で大きな剝離単位による鈍角な刃を作り、右側縁は逆に下端から上端への順で、細かい剝離単位による鋭角の刃を作っている。

石斧 (12・13)

定角形な石斧2点が出土している。12は刃部が破損して無い。13は基部が破損している。13の刃はボロボロになっており、使用による損耗と思われる。

磨石・凹石 (15~17)

15は隅丸の直方体を呈する凹石である。4側面のうち3面は磨石としても使用されており、同時に表裏面に顕著な凹部、左右面に軽い敲打痕が認められる。上下面は使用されていない。16は全面磨石として使用されているが、使用された面が平らになり、隣接する使用面との境がそのまま段線になってしまっている。17は偏平な磨石で表裏2面が使用されている。側縁は使用されていない。

岩板 (14)

破損面が大きく、全体形は不明だが、残存形からは偏平な楕円形が想定される。全体を磨いて成形したものらしい。片面上方に丸い凹みがみられるが、何らかの使用痕か又は穿孔しようとしたものなのかは不明である。凹みの下に縦にまっすぐに2~3本の細く浅い平行沈線がひかれている。他面は摂理による剝離が激しいが、文様らしきものは見られない。

7 遺構外出土遺物

(1) 土器

第I群土器 (第141図26~28・写真図版64)

3点のみの出土である。格子状押型文を持つ口縁部片2点と、貝殻腹縁文を有する体部片である。

第II群土器 (第141図29~142図42・写真図版64)

胎土に繊維を含む破片が200点近く出土しているが、同一個体と思われるものや類似の施文が多い。施文別に以下に述べる。

- a、0段多条を施文されているもの (29~31) 29は口縁部がわずかに内湾ぎみのもので、RL原体である。30はLRを用いた穿孔を持つ口縁片。31はRLを用いている。
- b、ループ文を持つもの (37) 体部片1点のみの出土である。LR 2段単節の縄の1回結びを原体として、2条1組のループ文が横平行に何段かめぐっている。
- c、羽状縄文を持つもの (33) 1片のみ出土している。軽く外反する口縁部であり、口唇

は平らになでである。結束の上下とも RL 原体を用いている。

- d、複節の縄文を施文されているもの (32・34~36) 32は体部片であり、RLR 複節の原体で施文した後、その下方に直前段多条の原体を用いて施文している。34は LRL 原体を用いている。わずかに外傾した口縁片で、口唇部は平らになでである。36は、34と同一体の体部片。35も LRL 原体による複節縄文を持つ口縁片であるが、口唇に真上から竹管による刺突を持つ。口唇全体にめぐっていたものと思われる。
- e、単節の斜行縄文のみのもの (38・39) 38は LR 原体によるものである。口縁は直立し口唇は丸い。39も同様だが、口縁端がわずかに内側に屈曲している。穿孔されている。
- f、口縁部に横走縄文を有するもの (40・41) R I - 0 段多条原体による斜行縄文を施したのち、口唇直下2.5cmの中で直前段反燃り (LLr) の原体によると思われる横走縄文がめぐらる。
- g、底部 底部片はほとんど出していないが、底部近くと思われる体部片から推定すると、ほとんど平底だったと思われる。尖底のものは1点のみ出土している (42)。

第IV群土器

IV群1類 (第137図・写真図版62)

完型品が1点のみ出土している。ひねった粘土帯による半管状の突起を4個持ち、連続する刺突を施した貼付隆帯と、それに併行する沈線により、口縁部区画・体部文様を成す。隆帯の要所変所に、ボタン状の貼付を持つ。

IV群2類 (第137・138図2~4・9・11・第142~144図43~63・写真図版62・65・66)

隆帯・刺突・ボタン状貼付・沈線などの文様を持つ土器群。2は連続刺突を持つ貼付隆帯が口縁部を四分割している。3は刻目を施した貼付隆帯が、胴部から口縁部を同じく四分割している。どちらも隆帯先端部は口唇上に伸び、上から刺突を受けている。2の地文は LR の斜行縄文、3も同じだが、口縁帯は無文としている。4は三角形を基調とした、又、9は楕円を基調とした文様を、平行沈線によって描かれている。

IV群3類 (第139図13・第144図65・写真図版66)

13は小型の甕である。口縁部を欠いているが、体部上半には斜位にのびる沈線による、三角形と渦巻の文様が施されている。65は鉢形土器の口縁部片だが、4本の平行沈線を弧状にしきり、S字状まではいかない文様を施している。平行沈線内にも、斜行縄文を施している。

IV群4類 (第144図67・68・写真図版66)

後期末葉の土器片が2点のみ出土している。

IV群5類 (第139図12・第144図64・66・写真図版62・66)

沈線や磨消し等の文様を持たない土器。12はゆるい波状口縁が複合となっており、頸部に無文帯を持つ。その下は帯縄文をめぐらせ、区画としている。64・66は、やはり波状口縁で頸部のくびれを持つ鉢型土器であるが、ともに斜行縄文の施文のみである。66は口縁頂部に刻みを持つ。後期最終末の土器群と思われる。

IV群6類 (第138図5・7・8・10・写真図版62)

ミニチュア土器である。5は紐帯突起を1対有する。7は片口状に大きく突出した口縁を持ち、その両側に小波状を1対有する。8は平口縄文。10は全体形不明の多少偏平な土器である。

第V群土器

V群1類 (第139図14・18・第152図70~73・写真図版63・71)

14・73はシュリツツの入る鉢形土器、18は口縁部に沈線による三叉文を有する注口土器、70・72は口縁部に連続する半円文を持つ鉢形土器である。14および72は、口唇部に細かな刻みがめぐる。

V群2類 (第139図15・19・写真図版63)

15は、頸部に5条の沈線と不定な刻みを持つ鉢形土器であり、口縁に4対と推定される小突起を持つ。19は壺形に磨消しを持つ浅鉢だが、残存が少ないため文様パターンはつかめない。

V群3類 (第140図20~23・第145図74~76・写真図版63・66)

21は変形工字文を施す高坏だが、他はいずれも沈線のみで、体部はいいにみがある。74は浅鉢もしくは高坏形の土器、75は壺形、76は浅鉢形の土器と思われる。

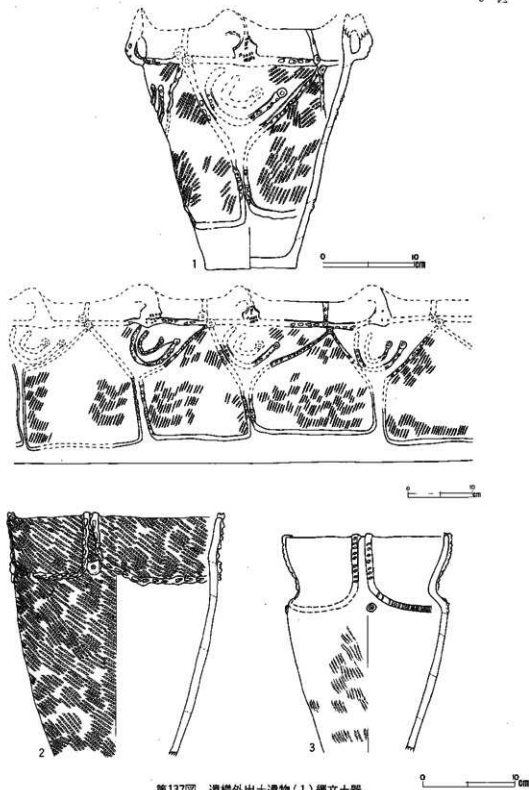
第VII群土器

VII群1類 (第149~151図・写真図版69・70)

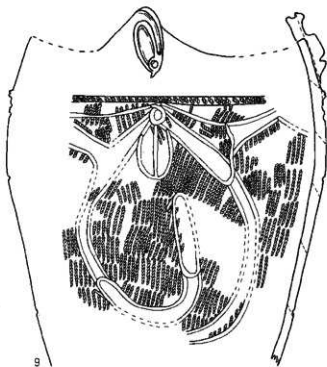
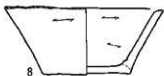
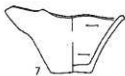
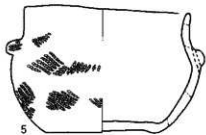
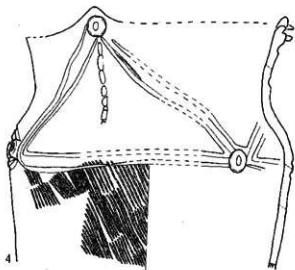
弥生時代中期前半のものと思われる土器群

a、壺形土器 (25~28・31~33)

25~27は、平行沈線をめぐらせた肩部から口縁部片。25・28とも大きな山形突起を持ち、28は体部にLR原体による横走縄文を施されている。31は肥厚した山形突起の口縁部を持ち、32は頸部沈線下に横走るLrの縞糸文を持つ。33は外面に沈線文様を持ち、器厚がごく薄い特異な形態を持つ。器種は明確には推定し得ず、底部とみなして掲載したが、蓋の可能性も

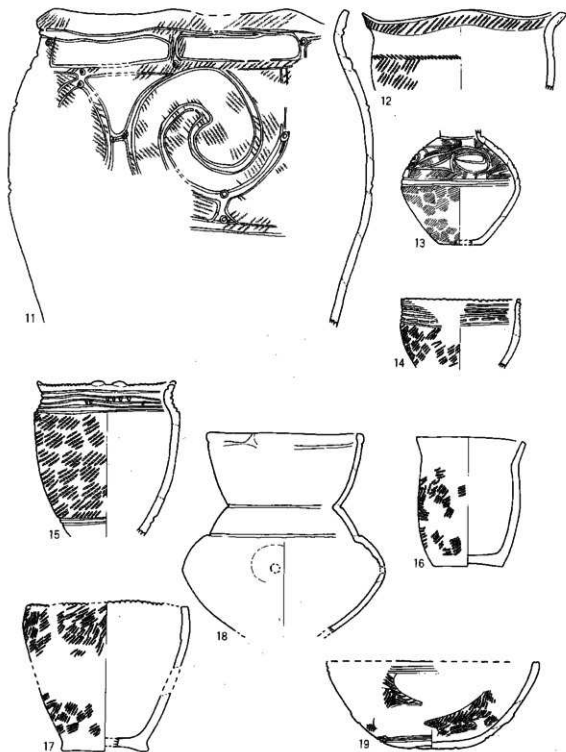


第137图 遺構外出土遺物(1) 縄文土器



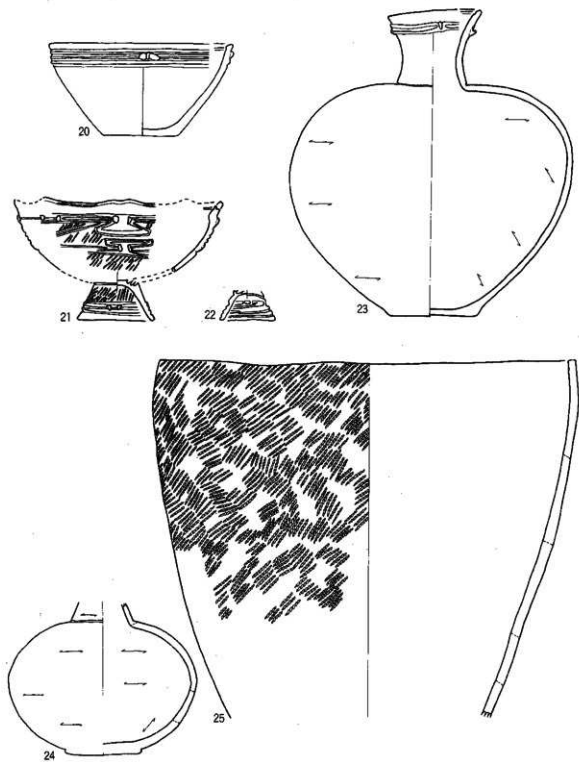
第138図 遺構外出土遺物(2) 縄文土器





第139図 遺構外出土遺物(3)縄文土器

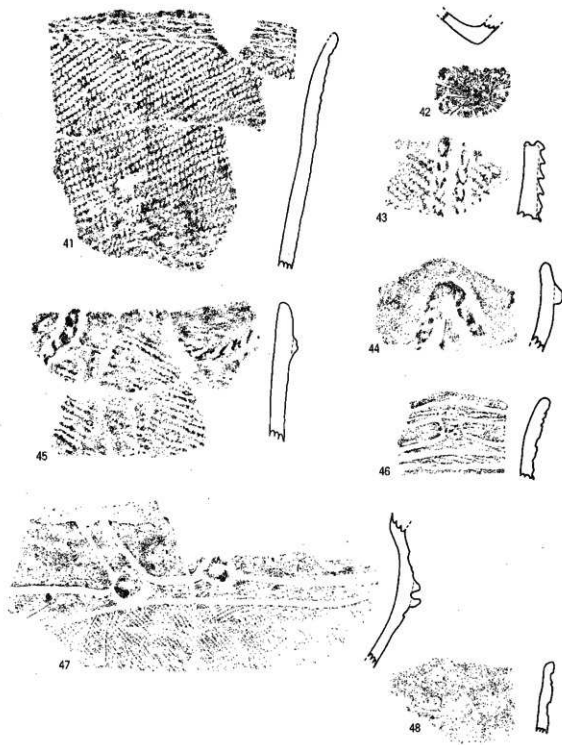
0 10
cm



第140図 遺構外出土遺物(4)縄文土器

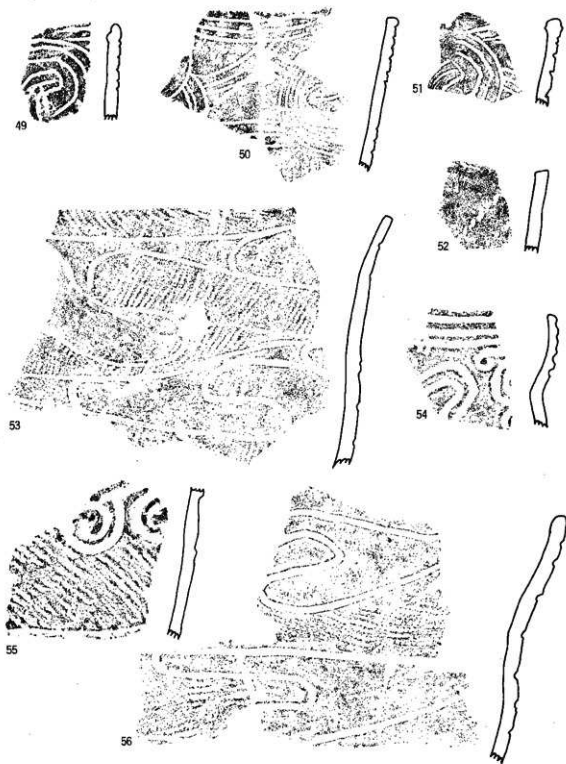


第141图 遺構外出土遺物(5)縄文土器



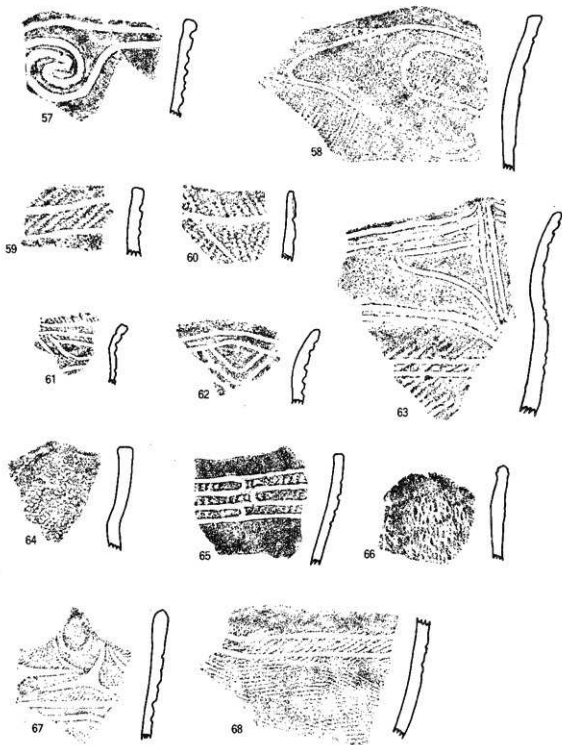
第142図 遺構外出土遺物(6) 縄文土器

0 5
cm



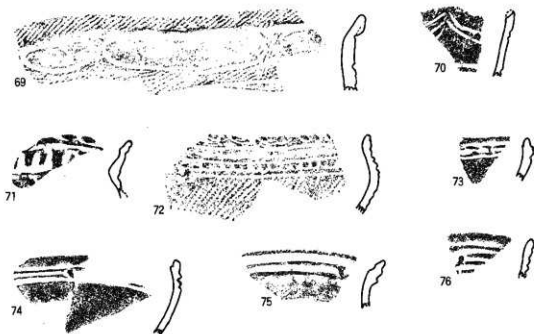
第143図 遠構外出土遺物(7)縄文土器



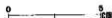


第144圖 遺構外出土遺物(8) 繩文土器





第145図 遺構外出土遺物(9)縄文土器



ある。28は朱彩。33以外は胎土に雲母片を含む。

b、鉢形土器 (11・29・30)

11は口縁部に3条の平行沈線をめぐらせ、体部にはLR原体の横走縄文を施している。29は平行沈線による変形工字文を施した体部片と思われる。朱彩を施され、胎土中に雲母片を含む。30は平行沈線の途中で小突起を持つ。

c、蓋形土器 (4・5・34~36)

倒碗形の蓋であり、多くはLR原体の斜行縄文を施している。35・36はナデ調整で無文とし、特に35は成形・調整が雑で色調も他と異なる。残存片からの推定口径、34は16cm・36は11cmである。

d、高坏形土器 (12~14・37~60)

高坏形土器と思われる土器片が数多く出土しているが、12のみ多少他と異なる文様を持つ。総数6と推定される口縁部突起は2ヶのみ残存しており、片方に刻目が入りもう片方には無い。又、口縁下に軽く段があり体部文様との区画となり、段には刺突列をめぐらせる。体部文様は刻目をともなう変形工字文で、沈線は細く深い。体部下半はLR斜行縄文。脚部の変形工字文は体部のそれと多少異なり、刻目が上にもみ付されている。朱塗が認められる。13・14および37~52は、いずれも変形工字文を有する高坏形土器である。13は平口縁、14は口唇

に細かく刻みを入れた波状口縁である。37～44は山形突起を有する。他は不明。46と52のみ地文にRL原体を用い磨り消している。53～59は脚部の破片である。いずれも平行沈線を用いて波状文が描かれている。色調は黄褐色からいり橙色が多い。38・40・45・46・47・49～52・54～56・58は朱彩。胎土中の雲母片は24片中10片に認められる。

e、壺形土器 (61・62)

61は平口縁、62は波状口縁の壺である。どちらも口縁を無文とし、体部に斜行および横走縄文を施す。原体はLRである。61は頸部に沈線を持つが、62には無い。62の外面に煤の付着が顕著にみられる。

Ⅶ群2類 (第146～148図・第152・153図・写真図版67・68・70・71)

弥生時代中期後半のものと思われる土器群

a、壺形土器 (1・2・63～66)

1は比較的大型。平行沈線を多用し、肩部には大きく鋸歯を描く。地文はLR二段単節の原体による横走縄文。黄灰～黒褐色を呈し、焼成は良い。砂粒や雲母片を多く含む。朱彩の痕跡が認められる。2は小型の壺の体部から上底風の底部である。LR原体による縦走縄文を施している。63～65はいずれもLR原体の斜行縄文を地文としている。63の沈線文は変形工字文と思われる。65を除き朱彩。

b、鉢形土器 (3・6・7～10・67～74)

3は特異な器形を持ち文様は細い沈線によって幾分歪んだ長矩を描く。口縁部は欠失していて不明。朱塗。6・7は小型の深鉢で、ともに体部にLR二段単節の縄文を地文に持つ。ともに口縁部は突起の上を軽くへこませた山形を呈するが、6は口唇に体部と同原体による縄文を転がしている。他に口縁から体部にかけての小片がある。67は口唇部に刺突列を持ち、一部に小突起を持つ。68・69は同一個体片。72は小さく山形突起を持つ口縁で、薄い沈線が2～3本めぐる。73は内傾する口縁である。70は体～底部片であるが、台が付いていたものと思われ、体部～上部の屈曲部に刺突列が一条めぐる。以上67～73はいずれも沈線による鋸歯、もしくは平行沈線を文様として持つ。地文はすべてLR斜行縄文である。74は口縁部がくの字に開いて肩部を形成し、5条の平行沈線がめぐる特異な形態を持つものである。

c、高環形土器 (15～17・75～83)

平口縁と思われるものが多いが、16は起伏のゆるい山形を示す。坏部・脚部とも文様は多様であり、王字文(15・16)の他に矩形の上辺が三角形にへこむもの(17・76)、縦の矢印に近い文様(75)など垂下文系統のものが多い。又、脚が細長くなるのともない、波状文も縦長になり(82)、波形も正弦波(80・82)だけでなく、矩形にパルス状になるもの(83)、

横に連続しなくなるもの(81)などこれらは垂下文の流れを思わせるが、総じて坏部も含め、デジタルな文様が現れている。技法的には磨消縄文が目立つ。18のみは器形・文様ともに特異であり、浅めの平行沈線めぐるせた上に、それとは別の工具を用いて鋸歯状の一部ととれる沈線をごく浅く下描き風に描いているが、図に示した3折のみで他にめぐるない。16・18・81以外はすべて朱彩の痕跡が見られた。又、胎土中に雲母を含むものは認められなかった。

d、壺形土器 (19~21・84~87)

19は平縁に数ヶ所の凹みをつけたもの。20・21は小波状口縁であり、86・87も含めいずれも口縁部を無文としている。特に20は平行沈線による鋸歯文を体部上半に有する。87は横走するが、他の地文はいずれも斜行している。21のみ原体にRL縄文を用いている。84は口縁がゆるく内湾する無文の土器片であり、鉢形を呈するものかとも思われる。19~21・86・87は口縁から体部外面に炭化物の付着がみられる。

遺構外出上遺物としたものでは、VII群2類とした土器群は1類に比し胎土中に雲母を含むものが減少している。

Ⅶ群3類 (第148・154・155図・写真図版68・72・73)

弥生時代後期のものと思われる土器群

a、壺形土器 (88~90)

88の体部片は、胴部上半に不整な変形工字文と小突起をともなう沈線がめぐっている。地文はRLの縦走縄文である。89は3本セットの平行沈線を多数めぐらせているが、1ヶのみある小突起は中央に5×3mmの小石を故意にめり込ませている。90も不整な変形工字文らしきものが細い沈線で描かれている。

b、鉢形もしくは壺形と思われる土器 (22・24・91~126・128~130)

22は全体器形は不明だが、24同様頸部の長い広口壺様のものか、もしくは鉢形になると思われる。山形突起を持つ口縁には体部と同じLrの撫糸を施文し、肥厚した交互刺突帯の上には平行沈線による菱形の文様を描く。24は口縁部に4~5条の平行沈線、その下に1条の刺突列、そして頸部にはやはり平行沈線により菱形文を描いていたものも思われる。底外面に1本対1本の刷代痕が認められる。91は内面に平行沈線と竹管刺突列を有する口縁部片であり、口唇上にも竹管刺突がめぐっている。92は上段の平行沈線の間に剣目状の斜め刺突が交互に入り、下段は同じく平行沈線がゆるい連弧状に描かれている。極度にくずれた変形工字文と思われる。93・94は細かい交互刺突と連弧文を持つ口縁部であり、刺突は上下からでは

なく、92と同様斜めに付されている。95～100は交互刺突と附加縄文。101～107は附加縄文を持つ口縁部片である。108・109は同一個体で縦の燃糸の口縁部片。110～112は口縁に燃糸圧痕がめぐるものだが、110はその下に斜位の燃糸、111は無数の竹管文が施されている。113～116は斜位と縦位の燃糸が交叉し、114のみは口唇上にも燃糸圧痕がめぐる。117～120は口縁を折り返して幾分肥厚させている。以上120までみられる燃糸はすべてLr原体を用いて施されている。121・122は交互刺突と無文帯を有し、頸部を形成していたものと思われる。124はRl原体による燃糸文を施す鉢形土器。125は内面に斜向、外面に縦走する縄文を施している。126は無数の平行する沈線を横位・斜位に無秩序に走らせている。128～130はLr原体の燃糸を施文している底部片だが、129は上げ底風にヘラ削り調整しており、130は底外面にも3条の短い燃糸圧痕がみとめられる。

c. 蓋形土器 (127)

外反気味に伸びて、先端がわずかに内湾する鑿形。Rl原体の斜行縄文を施す。推定径13.5cmである。前述1類で記述した蓋とは胎土・焼成等が明確に異なる。

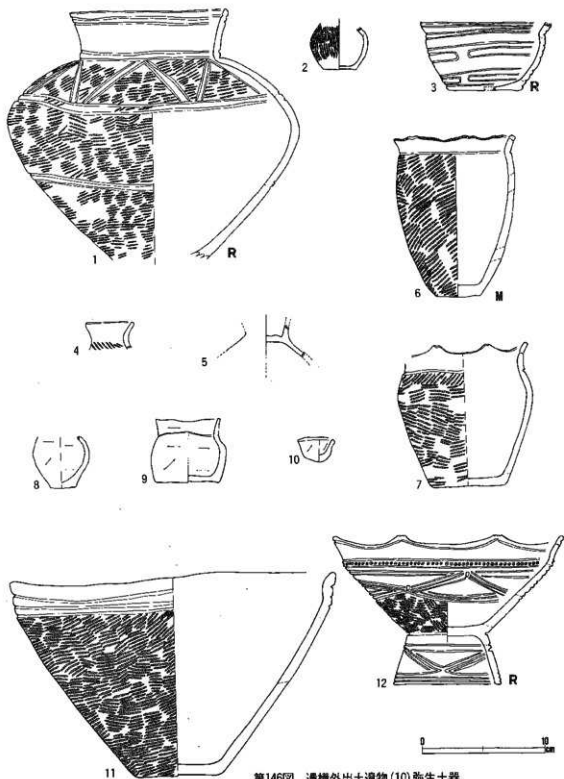
遺構外出土遺物からのみ判断すると、以上の3類土器群には、器面に朱彩をもつもの、胎土中に雲母片を含むものが、1・2類に比し、端的に減少している。

靱痕のある土器 (第146図6・第155図123・写真図版67)

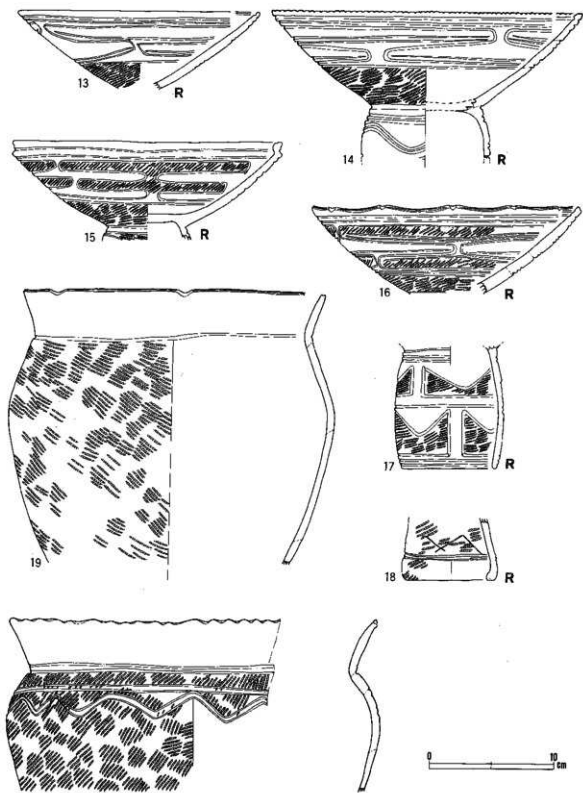
遺構外出土の遺物からは、靱付着の痕跡のある土器が2点発見されている。1点は、完形品の小型深鉢(6)である。起伏のゆるやかな山形を成す口縁は撫でて無文としてあり、口唇上にLR2段単節の原体による縄文を転がしてある。頸部はくびれて1条の沈線がめぐる。体部全面に、口唇部の文様と同じ原体による縄文が斜行する。器上半外面に炭化物多く付着。焼成は良く、黒褐色を呈す。胎土は粗く、雲母片を含む。VII群1類とした土器群に含まれるものと思われる。靱痕は、器内面下半部に1点ついていた。

もう1点(123)は、甕形土器の口縁部片である。平口縁と思われ、軽く肥厚している。内外面とも撫でて無文。焼成は良く、色調は黄褐色である。胎土は粗いが、こちらには雲母片は入っていない。胎土や調整等からは、これもVII群1類とした土器群に入るものと思われる。靱の付着痕は内面に1点みられた。

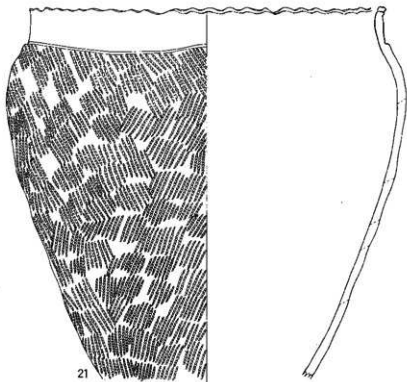
以上の2点については、住居址出土遺物など他の出土土器とともに、靱痕の詳しい鑑定分析結果を後載している。



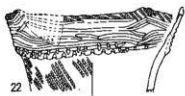
第146图 遺構外出土遺物 (10) 弥生土器



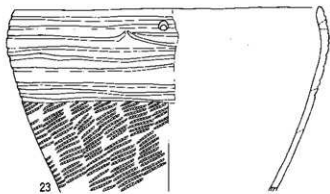
第147图 濠沟外出土遺物(11)弥生土器



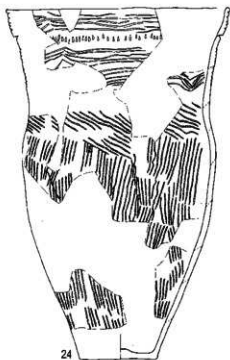
21



22



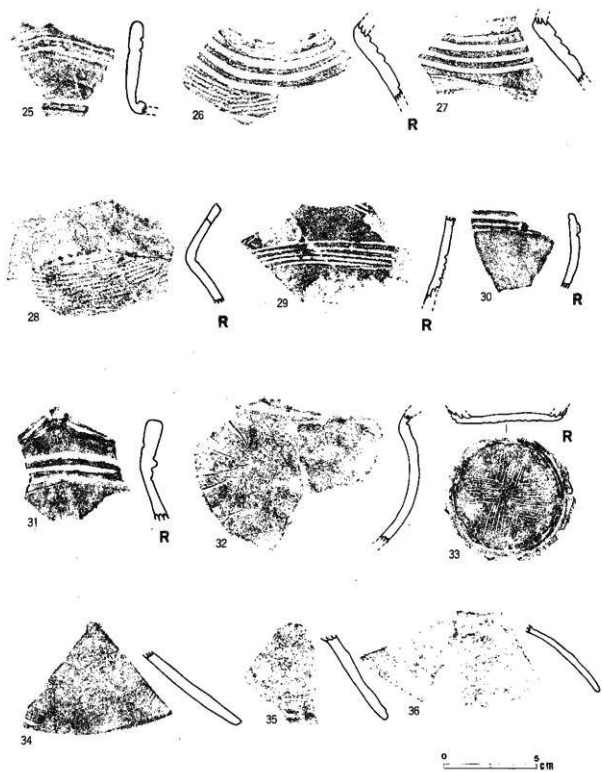
23



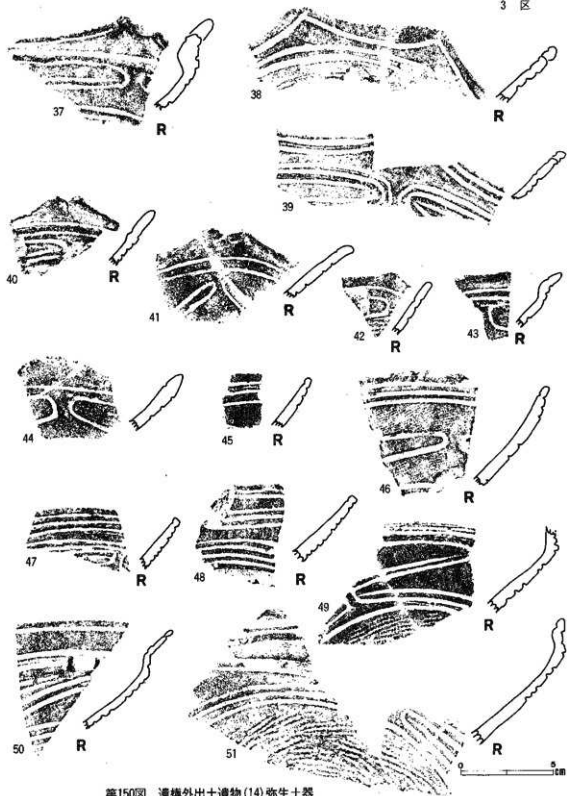
24

第148图 遺構外出土遺物(12)弥生土器

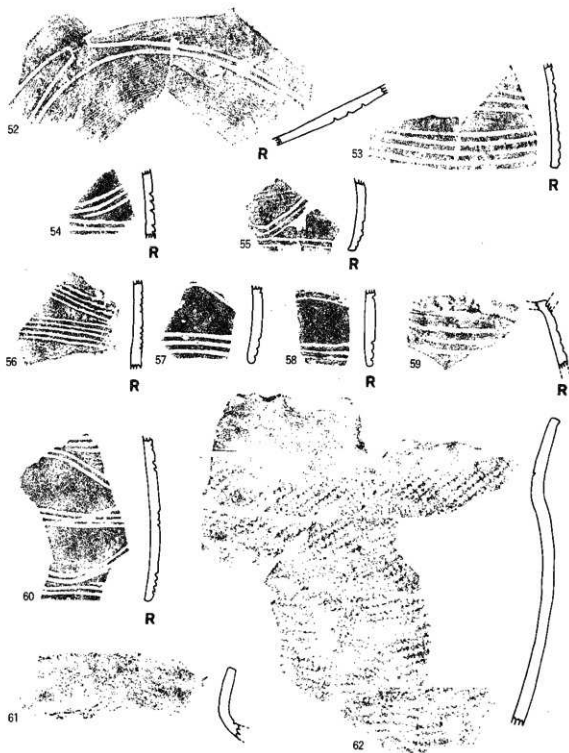




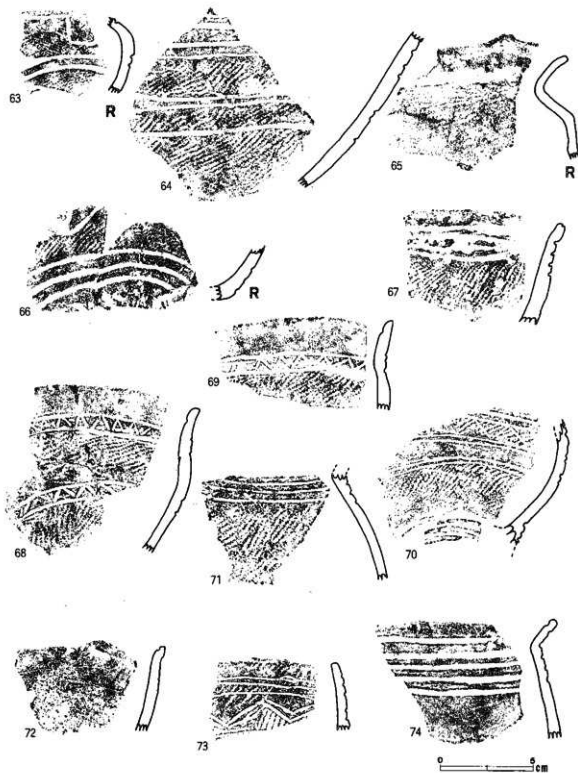
第149圖 遺構外出土遺物(13)弥生土器



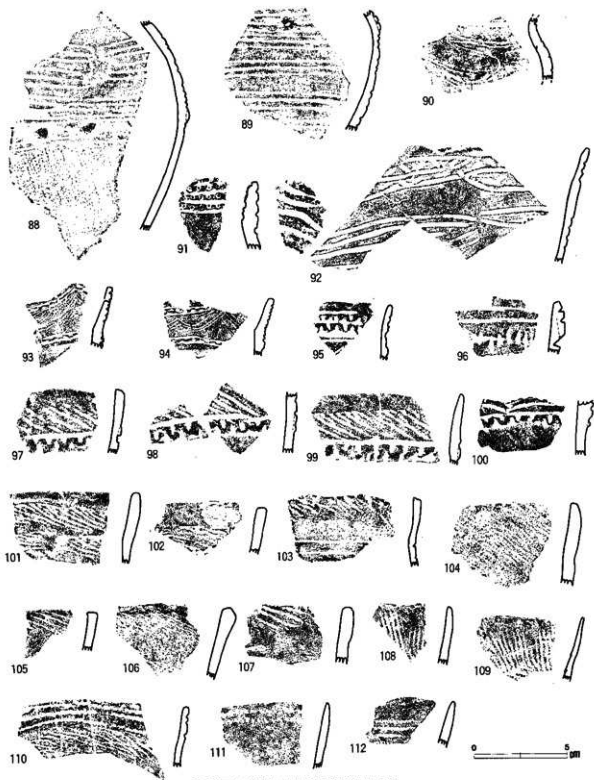
第150図 遺構外出土遺物(14)弥生土器



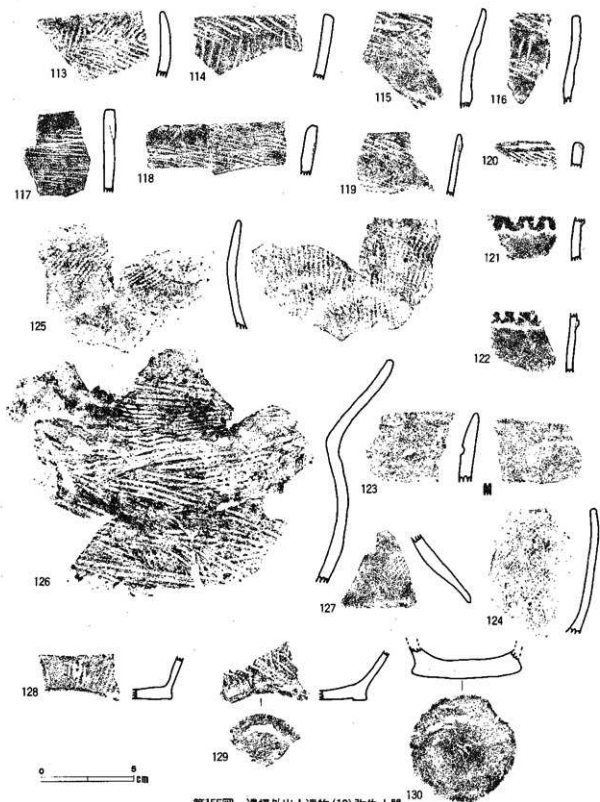
第151图 遺構外出土遺物(15)弥生土器



第152図 遺構外出土遺物 (16) 弥生土器



第154图 遺構外出土遺物(18)弥生土器



第155図 遺構外出土遺物(19)弥生土器